

## 翻 訳

## ジャン・マビヨン 『ヨーロッパ中世古文書学』

宮松 浩憲

## 目次

- 第1巻 古文書の古さ、材質、書体  
第2巻 古書体の文体、下署、印章、日付事項  
第3巻 反対者たちの見解が論駁される。略式文書と文書集が考察される。  
(以上、拙著『ヨーロッパ中世古文書学』(九州大学出版会、2000年、3-449頁)  
第4巻 国王文書が作成されたフランク諸王の宮殿と王領地 (本誌、本号)  
第5巻 古書体の複写見本が掲載され、解説が付される。(上掲拙著、450-681頁)  
第6巻 文書史料 (未刊行)  
四つの補説 (上掲拙著、683-707頁)

## 【解 題】

訳者は382年を古文書学にとって非常に重要な年と考える。この年、ローマ教皇ダマスス1世はローマで公会議を開き、当時使われていたギリシア語やヘブライ語などで書かれた聖書の一覧表を作成させ、それに基づいて信頼できる、矛盾のないラテン語版聖書の作成を聖ヒエロニムスに依頼した。この新版が『ヴルガータ版』聖書と呼ばれるもので、400年頃までには完成していたが、最終的には1546年のトリエント公会議において、ローマ・カトリック教会にとって唯一の真正な聖書と正式に認定された。4世紀の西ヨーロッパで使用されていた聖書はラテン語、ギリシア語、ヘブライ語などで書かれていたうえ、それぞれに異なる版が多数存在していた。今日、ラテン語版聖書だけでも約8,000種も伝存するとされている。信仰を確かなものにするため、教義を揺るぎなきものするためには、異本の存在は絶対に許されない。異端を撲滅し、激しい対立を生む論争を終わらせ、キリスト教世界の平和を確立する上から、統一された聖書の完成は急務であったに違いない<sup>1)</sup>。

この統一聖書の完成により、ローマ・カトリック教会公認の聖書は1つとなり、異本から発生する争いは起こらなくなった。この時から、真正史料は1つ、それ以外はすべて偽作と区別する考えが初めて生まれ、この考えがキリスト教徒の間で共有されることになる。しかし、『ヴルガータ版』聖書の唯一

無二性は個人の才能と最高権威によって作り出されたもので、その成立の経緯、つまり真正聖書がどのような過程を経て生まれたのかが不透明のままであった。このままであれば、同じことが繰り返されるだけで、判別方法の公明性は永遠に問題視されることはなかった。しかし、この出来事はローマ・カトリック教会にとっては諸刃の剣であった。教会によって公認された、書かれた物に関する真偽の区別を知った信者は、権威に頼ることなく、真偽判別の方法を自身で見つけ出そうとし始める。ここに、宗教的真理とは必ずしも両立しない科学的真理を探究する動きが始まったのである。こうして、古文書学は多くの無名の人々の苦悩や葛藤、後述される L. ヴァアラ、C. バロニウス、Ch. デュ・カンジュ、D. van パーペンブレイク、そして J. マビヨンと言った専門家たちの努力のお陰で、1300年の時を経て、真偽判別の科学的方法論を確立するに至ったのである。

J. マビヨンが1681年に刊行したフォリオ版の『ヨーロッパ中世古文書学』*De re diplomatica*の本文は664頁からなる<sup>2)</sup>。本文の前を、国王ルイ14世の財務総監コルベールへの献呈辞（6頁）、著者の序文（4頁）、総合目次（4頁）が占める。総合目次は1巻から3巻までは2欄組で、巻毎に巻、巻題、章、節題と続く。ここままで使用されている数字はすべてローマ数字で、巻の終わりを示す頁数のみがアラビア数字で示されている。但し、第4巻以降は、巻と巻題のみで、章、節、史料番号などの区別はない。本文（1頁54行。欄外両端にA, B, C…Fの記号が10行毎に付されている）から、アラビア数字による連続した頁記入（各頁の上部両隅、本文の1行上に置かれる）が始まり、第6巻の最終頁、648頁をもって終わる。従って、この後の総合索引には頁記入はない。本文に入り、各巻の章は、総合目次と同様の、章を構成する節の配列で始まる。第1巻は41頁、第2巻は176頁、第3巻は29頁、第4巻は99頁、第5巻は117頁、第6巻は187頁、補説は13頁、総合索引は30頁で構成される。第1巻と第2巻が古文書の真偽判別のための準則のために充てられ、第3巻では自説に加えられた批判・異論への反論が試みられ、本稿が対象とする第4巻はフランク諸王の宮殿を扱い、第5巻には銅板に彫られた各種の書体が印刷されて配列され、第6巻では証書、書簡、遺言書などの主要な史料211点が注記を付した上で、時代順に並べられている。最後に、2欄組の総合索引はアルファベット順に配列される。

以上、この本の構成・分量を概観したが、注目すべきは次の3点で、それらは何れも、近代歴史学を特徴づけるものでもある。第1点は、著書の最初に置かれている総合目次である。後述されるパーペンブレイクの古文書の研究にはこれがない<sup>3)</sup>。J. マビヨンの書よりも34年前に出版されたJ. ベリーのポワトゥーに関する著書には確かにあるが、章題と開始頁のみの表記で、たったの半頁で終わっている<sup>4)</sup>。上記の如く、本書は節まで細かく整然と分類されており、J. マビヨンの頭の中には本の全体像が構成の細部に至るまで完成されていたことを示している。第2点は、出典の明記である。J. マビヨンは、出典記載を欄外の側註として行っている。視線を乱すことなく見ることができる利点に対して、余白が限られ

ており、厳しい字数制限が難点となる。また、注記に本文周囲の余白が充てられることは、既にこの時代の慣習でもあったようである<sup>5)</sup>。J. マビヨンの出典記載の大半が著者、書名の略記と頁や地名のフランス語表記からなっているが、注目すべきは版による内容相違の認識である。『フランク王国編年記』に関しては、本文内ではあるが、必ずル・ティエ版、ピトー版など、4つの版を常に区別している<sup>6)</sup>。更に、初版、何々年版といった区別が欄外註で指示されている<sup>7)</sup>。しかし、残念ながら、出版年や所蔵場所が表記された、参考史料・文献の目録が見当たらない。今回、訳者はフランス国立図書館の総合カタログに依拠して復元したが、本書には出版年の記載がないため、著者が参考にした図書と一致しているかどうかは定かでない。但し、第6巻の史料編では各史料の出典が明記されている。また、J. ベリーは非常に簡単なものではあるが、最初に参考史料一覧を掲載している<sup>8)</sup>。第3は史料編の添付である。パーペンブレックの書では本文中に文書数通が挿入されているだけで、史料編を設けてはいない。これに関してJ. マビヨンが最初かという点、そうでもない。J. ベリーは本文を越える量の史料編を設けている<sup>9)</sup>。このような本書の構成は、目次の位置を除けば<sup>10)</sup>、今日のフランスにおける博士論文によって踏襲されていることは明らかである。後述される、近代歴史学を特徴づける発言者と証拠の至近距離が、フランスでは300年以上も前から確立されていたことになる。

以上3点に関して、J. マビヨンは必ずしも創始者ではなかったが、重要な位置を占めていたことは確かである。オランダのD. van パーペンブレック、フランスのJ. マビヨン、少し先輩のCh. デュ・カンジュの辞典<sup>11)</sup>からも明らかな如く、17世紀のヨーロッパにおいて、このような真正史料への関心が高まっていたことは間違いない。しかし、この傾向はいつから始まっていたのか。また、その理由は何であったのか。訳者は16世紀がカギを握っていると推測する。

この問題に関しては、別稿で詳しく論じることになるが、ここで1点だけ触れておくことにする。ヨーロッパにおける最初の史料批判者の1人としてよく知られているのが、イタリア人のロレンツォ・ヴァラで、彼の名著『偽書と考えられ、実際にも偽造されたコンスタンティヌス帝寄進状に関して』*De falso credita et ementita Constantini donatione*は1439-1440年に出版されている<sup>12)</sup>。今日では、L. ヴァラが参照した文献・史料はすべて復元されているが、初版では史料批判の科学的方法は披歴されていない。目次も章題もなく、文献・史料目録ももちろんない。従って、彼の主張を継承し、発展させる者が長い間出現することはなかった。16世紀末のC. バロニウス、17世紀後半のD. van パーペンブレックは「コンスタンティヌス大帝の寄進状」と呼ばれる文書の偽作を表明しているが<sup>13)</sup>、この時点でも方法論の確立はまだであった。これら2人に対して、J. マビヨンはこの文書の偽作性に言及はしているが、この史料に対する自身の見解を明らかにしていないし、L. ヴァラの名前を挙げていない<sup>14)</sup>。この違いを究明するには1本の論文が必要であろうが、論文の構成や形式の点から簡潔に述べれば、科学的形式

を十分に備えていないため、秀逸の評論ではあるが、研究論文とは見なしがたいということになる。また、コンスタンティヌス大帝の寄進文書の真偽に関しては、彼が確立した、史料の真偽判別の準則に従えば結論は自然と導き出されるので、J. マビヨンは態度を明確にする必要もないと判断したためと考えられる。C. ギンズブルグは本訳書でこの史料に対する J. マビヨンの見解が公表されていると述べているが<sup>15)</sup>、訳者は引用箇所への彼による解釈には同意できない。この引用箇所は本書の第 1 巻から採られている。著者が研究の冒頭で強調しているのが勤勉 *diligentia* と中庸 *moderatio* である<sup>16)</sup>。自説への反論・異論に応える形をとっている第 3 巻以外において、著者 J. マビヨンが自身を前面に出すことはない。

訳者は 20 年前に、本書の抄訳を出版している。なぜ第 4 巻と第 6 巻が割愛されてしまったのであろうか。第 6 巻に関しては、自説を補強するためはもちろん、未刊行のものも含まれており、その時代においては刊行は必要不可欠であったと考える。しかし、今日においては、それらはすべてあちこちで刊行されているうえ、写本も一部ではあるがインターネットで簡単に閲覧できるようになっており、言ってみれば、すべてが研究者の手の届く範囲内のもとなっている。これがこの巻を割愛した理由である。第 4 巻の邦訳を刊行しなかった理由はこうである。その時の興味は古文書学の確立過程にあり、その応用編に相当する、確立された後の行為には興味が湧かなかったからである。しかし、今考えると、最初から完訳すべきであった。抄訳は訳者の判断であって、作者望んでいたのは、当然のこと、完全なものとして刊行した著書の完全なる翻訳であったに違いない。加えて、この巻には今日の歴史研究の出発点を確認できることを知った。

この度、訳者はこの第 4 巻の邦訳をここに上梓する幸運に恵まれた。本巻の邦訳を終えたいま、著者をこれまでの古文書学の確立者と同時に、近代歴史学の確立者として捉えようとの気持ちが訳者に湧いてきた。第 4 巻では、それまでの巻とは違って、宮殿を主題とする歴史学研究が展開されている。しかし、今日でも宮殿の研究は継続されているが、どうしたことか、J. マビヨンのこの研究が取り上げられることはない<sup>17)</sup>。彼の死後、県別の地誌辞典、王文集や修道院文集などの刊行によって個々の宮殿の研究は著しく進み、立地に関して問題は殆ど起こらないまでに達している。立地の観点に立てば、それから 300 年以上も経過しており、このような状況下では、彼のこの研究が取り上げられることはないし、あったとしても無意味でしかない。研究は時と共に匿名化する。それは研究の宿命であるが、その価値がなくなったのではなくて、研究者や人類の共有財産となったことを意味する。

宮殿の立地解明の狭い視野に立てば、彼の研究は既にその役割を終えているかもしれない。しかし、ここで重要なのは何が彼をこの研究に駆り立てたのかである。彼はこの研究を中世の国制史研究の中に位置づけ、王権と宮殿の関係を長期にわたって追跡する。まず、著者が想定する国王の宮殿であるが、それは臨時の木造住宅の類ではなくて、王権に相応しい豪華な石造の建物群からなっていた。このよう

な宮殿はいつ誰によって建設されたのか、建物はいつまで存続していたのか、戦争や火災やノルマン侵攻に耐えたのか。国王の滞在時期、期間はどうなっていたのか。宮殿は森に隣接していたことから国王の狩猟期がカギを握る、また森林が隣接していない宮殿の立地は不安定で疑わしい。いつ王権の直接支配から離れたのか、その後宮宰が保持したが、それは一時的で、王権の脅威にはならなかったのか、地元の聖俗領主の手に移ったのか。宮殿の一部は王権が取り戻したが、封建化は一時的ではなくて、制度化した。こうして、著者は王政期における支配の実態を旅程表、滞在の時期、期間などから究明し、王政から封建制への移行を確かめたのである。このような視点に立てば、彼のこの宮殿の研究は無傷のまま、聳え立ち続けていることになる<sup>18)</sup>。

次に、論文の構成から、著者の研究の実証性を追ってみよう。それには先行研究との比較が最適であろう。D. van パーペンブレークの著作はフォリオ版の2欄組で52頁からなる。タイトルは『古文書入門－年月を経た羊皮紙での真偽判別に関して－』*Propylaeum antiquarium circa veri ac falsi discrimen in vestutis membranis*とある<sup>19)</sup>。そして、この書は3部で構成され、第1部(33頁)のタイトルは「古い時代の建立・寄進・特権に関する文書の真偽が判別される」*De veterum foundationum, donationum, privilegiorum instrumentis discernendis*、第2部(9頁)のそれは「主張されてきた一部のカルメル修道会の起源に関して」*De praetensa quorundam Carmeliticorum Conventuum antiquitate*、第3部(11頁)のそれは「サン・タフラ教会所蔵の名簿から増補された、『プレーシャ殉教者名簿』に関して」*De Martyrologio Brixiensi, aucto ex Catalogis ecclesiae S. Aefrae*となっている。タイトルからも理解される如く、厳密に言うと、古文書学を正面から扱っているのは第1部のみで、後の2つはそれぞれ独立した研究論文と言える。従って、J. マビオンは文書の真偽判別の準則のために220頁を割いたのに対して、D. van パーペンブレークはその1割強しか割いていなかったことになる。第1部において、著者は多くの史料を閲覧しているが、ごく一部を除いて、出典が明記されていない。ここでも傍注が採られているが、文献や史料への言及はない。後述される如く、発言者と証拠との距離が余りにも遠すぎ、準備不足の感を非常に強く感じる<sup>20)</sup>。当然のこと、このような結果は総合的な目次の欠如、3部間の関連性の欠如、出典の欠如からも容易に理解される。従って、著者は第1部の結論で、学問としての古文書学の確立に至らなかったことを自ら告白している<sup>21)</sup>。この著作を読んでいたJ. マビオンもこの事実を知っており<sup>22)</sup>、自身が企てる仕事に失敗が許されないことを覚悟したに違いない。

以上から、訳者はJ. マビオンを古文書学の父とする通説に加えて、近代歴史学、実証史学の確立者であったと考える。訳業を終えたいま、著者J. マビオンはこの巻を完成させるのに、かなり苦労したことが随所に現れていて、興味深かった。文献目録が示す如く、著者はフランス国内はもちろん、周辺諸国の史料や文献を広く閲覧している。そのみならず、本文にもある如く、著者は馬車で現地に赴き

自分の目で宮殿の立地を確かめ、地元の人々に直接尋ねることもしている。しかし、一部において立地の解明を放棄したり、その判断を読者に委ねたり、後の研究によって訂正されたりするケースが見られる。古文書学が確立された後でも、それを実践するに当たって、確立者 J. マビヨン自身もまだ解けない問題が幾つか残されていたことを知り、それが準則の修正の必要性を迫るものか、単なる実践に際して準則の適用を誤ったためなのかは、今後の研究によって明らかにされるであろう。

J. マビヨンは文書の真偽判別において古さを克服できたとしたが、第 4 巻ではその不安を覗かせている。D. van パーベンブレークとの差はどこにあったのか。出発点は同じであった。行けるところまで行こうとして出発した人と、ゴールまで到達しようとの固い決意で出発した人との違いが現れてしまったのであろうか。D. van パーベンブレークは真正文書も偽文書も併せて公刊する価値があると考え<sup>23)</sup>。J. マビヨンも史料を人類の宝と捉え、正しく真偽判別をする必要があると説く<sup>24)</sup>。結局、Th. ルイナルが言うように<sup>25)</sup>、両者は同一の目標に向かっていたのではなからうか。

最後に、上述した如く、実証主義史学における実証度は発言者（の場）と証拠との距離に比例すると訳者の見解に触れておこう。実証性の高い、または低い研究とは何を意味するのであろうか。見解の実証性は形式によって決まるといっても過言ではない。従って、註のない研究は実証性が高いとは言えない。想定される場は 2 つある。1 つはすべての証拠が揃った図書館で講義を行う場合である。確かに、講義者と受講者の双方にとって、証拠は近い所にある。難点は証拠が分類されていないこと、部屋の中であっても、手の届く範囲内にはない。これらに、講義者の話が終わるまでに時間がかかり過ぎるといふ別の難点加わる。他の 1 つは書物である。論文を例にとると、序論から始まって、主張が簡潔にまとめられている。参考文献・史料が明記される。目次が来て、論述の展開を構造的に把握することができる。最後に史料編が置かれる。J. マビヨンは巻末に、史料批判を加えたうえで 211 通の文書（史料）を掲載している。最近ではインターネットのお陰で、かなりの量の文献・史料の閲覧が書斎でできるようになり、時間の規制を受けなくなっている。証拠には史料と文献とがあるが、両者は性質が異なるので、区別して分類する必要がある。以上の条件が満たされた場合、自然科学の論文に近づくことにより、発言者と史料の距離がいろいろな意味で非常に近くなる。史料の所在が明らかなること。本の末尾に掲載しているのも一つ。実証度が高い研究とは発言者の周りに証拠が存在すること、1 冊の本の中にすべてが存在すること。孫引きはしてはならないとよく言われるが、距離が倍以上に伸びることからも勧められない。

今回の邦訳も訳者の能力からすると、簡単ではなかった。また、この巻には多くの地名と人名がラテン語表記で登場する。この特殊な記述から地図を復元することは容易ではなかった。更に、詳細な地図がないうえ、方角や距離の記載がない場合などは、特に大変であった。著者は現地踏査をしていて、地

形や地誌は知悉しているが、訳者にはそれが欠けていた。立地に関して、市町村名は追跡可能であるが、字名、小字名に至っては、地方地名辞典、地図を頼る以外にない。カシニーの地図を参照すべきであったが、今回はそこまではしていない。人名に関しても、名前がラテン語で書き直されており、地方で有名であっても、市販のものでは検索ができない。地図は市販のもので最も詳しい20,000の1の地図(Michelin, Carte A 1/20 000-1 cm pour 2 km)を活用したが、それでも十分ではなかった。著者の時代に使用されていた地名も300年以上経過すると、市町村の統廃合などによって、地図から消えているものも少なくない。引用の正しさについては、確認していない。出典の殆どが手元にないのはもちろん、図書館にも収蔵されていない場合は、確認の仕様がな。国王も名前だけで、同名の場合、親子関係、親族関係などの他の判別表記がないため、前後関係の確認に時間を取られた。地名に関しては、上記の地図とG.T. Grasse, F. Benedict, H. Plechl, *Orbis latinus. Lexikon lateinischer geographischer Namen*, Braunschweig, 1971; A. Dauzat et, Ch. Rostaing, *Dictionnaire des noms de lieux de France*, Paris, 1963; *Dictionnaire des communes*, Paris, 1976; J., Moreau, *Dictionnaire de géographie historique de la Gaule et de la France*, Paris, 1972; *Dix mille saints. Dictionnaire hagigraphique*, Turnhout, 1991を参照したほか、フランス県立文書館に直接問い合わせたりもした。引用されている研究者、著作に関しても、苦労した。クロード・ボトルー(Claudius Boterovius)は17世紀のフランスでは有名な学者であったに違いないが、彼のラテン語の名前をフランス国立図書館の総合カタログでも、またGoogleでも、また現代の中世貨幣の研究書においても発見できなかった。やっと19世紀の書物の中でその名前を見つけることができた。大半は、J-M. Pardessus, *Diplomata chartae, epistolae, leges*, t. 2, Paris, 1849, p. 483-496, MGH内の作者一覧、フランス国立図書館の総合カタログによって解決できたが、空欄がある如く、復元できなかったケースもある。本巻の内容をよりよく理解してもらうために、フランク諸王の宮殿所在地の地図と一覧表が作成され、それらは解題の最後に掲載されている。

次に、訳語に関して少し述べる必要がある。訳者はこれまでPalatiumを「宮廷」と訳していたが、本巻では「宮殿」と訳すことにした。本巻では少なくとも163もの宮殿所在地が検出されており、加えて、J. マピヨンがこれが全部ではないと言っている。そして、筆者はこれをすべて石造の壮麗な建物または建物群と見ている。これが真実ならば、フランク国家の国力の見直しが必要となってくるのではなからうか。また、著者は本文と引用文の両方において、注記することなく、同一の言葉villa, palatium, ager, pagus, vicus, civitasを使用している。本書で使用の地理区分、パグスpagusには「郡」、その下位区分のアゲル agerには「小郡」の訳語を当てることにした。それは中世フランス史の専門家でない読者諸賢にも問題なく理解してもらうためである。引用文と本文でこれらの2語が注釈なく使用されており、著者と同様、訳者もこれによって混乱は生じないと判断した。人名の後に付された( )

内の数字は在位年を表す。

場所の表記に関しては、フランスのAthies-sous-Laon (Aisne, ar. Laon, c. Laon-sud) を例にとると、最初の地名(地名はすべて訳者によって現行のものに書き換えている)に続く括弧内(訳者による挿入)は県名(département)、郡名(arrondissement)、小郡名(canton)で構成され、稀に市名(commune)が加わることもある。ch.-Iは県庁、郡庁・小郡庁の所在地を意味する。ドイツに関しては、ドイツと記した後、州名(Land)、県名(Regierungsbezirk)、郡名(Landkreis)、稀に市町村名(Gemeinde)が加わる。オランダに関しては、オランダと記した後、州名(provincie)、基礎自治体名(Gemeente)、ベルギーに関しては、ベルギーと記した後、州名(province)、基礎自治体名(commune)が続く。

本書はフォリオ版で出版されていて、註は、今日とは異なっている。文献に関しては、本文に小文字のアルファベットが付され、各ページの両端に出典が簡潔に記されている。そこには刷、版、出版年、出版地の記載はない。史料に関しては出版年などはなく、文書に関しては、煩雑になるためか、添付されている史料集での文書番号の記載はない。

これでJ. マビヨン、D. van パーペンブレック、L. ワラの書が邦訳された。実証主義歴史学の成立過程の解明に必要な書が一応邦訳されたことになる。訳者は、出来るだけ早い時期に、この問題に取り掛かることにする。

#### 註

- 1) Laymon, Ch. M., *The Interpreter's One-Volume Commentary on the Bible*, Nashville, 1971, p. 609-941. 片山寛「聖書翻訳がもたらした祝福と呪い-Vulgataを例として-」(『西南学院大学神学論集』77-1, 2020年, 1-31頁);石川・加藤鉄平「ヒエロニムス『ウルガータ聖書序文』翻訳と注解(1)-(4)」(『基督教研究』71-2 (2009年), 141-161頁, 72-1 (2010年), 51-70頁, 72-2 (2010年), 49-71頁, 73-1 (2011年), 87-107頁参照。
- 2) Mabillon, J., *De re diplomatia*, Paris, 1681, in-fol.
- 3) Papenbroeck, Daniel van, *Propylaeum antiquarium circa veri ac falsi discrimen in vetustis membranis*, AASS, April, 2, p. I-LII, Anvers et Bruxelles, 1675. この著作の拙訳は、ダニエル・ファン・パーペンブルック「古文書学入門-古文書の真偽判別の方法-」(『産業経済研究』49 (2), 2008年, 69-122頁, 49 (3), 2008年, 71-120頁, 50 (1), 2009年, 93-174頁, 50 (2), 2009年, 137-179頁, 50 (3), 2009年, 107-169頁) 参照。
- 4) Besly, J., *Histoire des comtes de Poitou et ducs de Guyenne*, Paris, 1647.
- 5) J. ベリーの上げ書と*Évesques de Poitiers, avec les pereuves*, Paris, 1647でも、同じ方法が採用されている。他方、イタリアの枢機卿C. バロニウスは12巻からなる『教会編年史』の出版を1588年から開始するが、本文は2欄組で、今日と同様、各欄の脚注の中で出典が簡潔に処理されている。Voir Baronius, C., *Annales ecclesiastici*, 12 vol., Roma, 1588-1607.
- 6) Mabillon, J., *De re diplomatica*, p. 276, 281, 329, 330.
- 7) *Ibid.*, p. 307, 334.
- 8) 前出註(3) 参照。頁が付されていない本文の前に掲載されている。
- 9) 本文146頁に対して、史料編には356頁が割かれている。なお、本書ではtable des matièresは今日のように目次ではなくて、「索引」の意味で使用されている。
- 10) フランスにおいては、19世紀初期から漸次、目次の位置が巻末へと移行する。

- 11) Du Cange, *Glossarium mediae et infimae latinitatis*, 10 vol., Niort, 1883-1886. これは本書の新版かつ完成版である。本書は *Glossarium ad scriptores mediae et infimae latinitatis* の表題で、3巻本として1678年バリで、著者自身によって出版された後、3回の改訂版を経て、この新版がL. Favreによって刊行されている。本文中ですべて処理されている出典記載は、現行のものと殆ど変わらない。但し、初版本に直接当たっていない訳者には、改訂版が初版を踏襲しているのか否かについては答えられない。また、辞書の構成が初版とそれ以降の版との間で異なっている。1点だけ指摘しておく、1733年から始まった、サン・モール会による第2版から2欄組から3欄組に変更され、参考文献と索引が最初から最後に移され、今日に至っている。Voir Géraud, H., *Historique du Glossaire de la basse latinité de Du Cange*, *Bibliothèque de l'école des chartes*, 1840, 1, p. 498-510.
- 12) Lorenzo Valla, *De falso credita et ementita Constantini donatione*, ed. par Setz, Wolfram, Weimar, 1976. 訳本に関しては、Lorenzo Valla, *La Donation de Constantin*, traduit. par Giard, J.-B., avec la préface de Carlo Ginzburg, Paris, 1993; Coleman, Ch. B., *The Treatise of Lorenzo Valla on the Donation of Constantine*, Toronto, 1922. この問題に関しては、少し古い、voir Coleman, Ch. B., *Constantine the Great and Christianity: Three phases: The Historical, the Legendary, and the Spurious*, New York, 1914. コンスタンティヌス大帝の寄進状の邦訳に関しては、拙稿「『コンスタンティヌス大帝の寄進状』『産業経済研究』(久留米大学), 48(1), 2007年, 95-116頁を参照。
- 13) Baronius, C., *Annales*, vol. 4, p. 68-70; Papenbroeck, D. van, *Propylaeum antiquum*, p. I (邦訳, 『産業経済研究』(久留米大学) 49(2), 82-83頁)
- 14) 本書 (p. 23頁, 邦訳, 86頁) におけるコンスタンティヌス大帝の寄進状への言及は « Nam ut ne quid de falso (uti etiam Baronius fatetur) edicto sub nomine Constantini Magni vulgato loquar; ut dissimulem Aegidii Remensis Episcopi factum insigne apud Gregorium Turonensem, Arigiso Beneventanorum Duce, id est post medium saeculum VIII Godefridus quidam Notarius propter multas chartulas falsas bonorum proscriptione multatus est » の中に出てくる。
- 15) Lorenzo Valla, *La Donation de Constantin*, traduit. par Giard, J.-B., p. XX. ロレンツォ・ヴァッラ『『コンスタンティヌスの寄進状』を論ず』(高橋薫訳, 水声社, 2014年)で現代語訳からの邦訳が収められている。
- 16) Mabillon, J., *De re diplomatica*, p. 23 (邦訳, 27-28頁)『中世ヨーロッパ古文書学』を出版した時, J. マビヨンは49歳であった。75歳で生涯を閉じているので、短命でなかったことは確かである。しかし、初版の結論で「衰弱していた」と告白しているし、第5巻の校正を同僚のM. ジェルマンに委ねたりもしていた。自身の健康に不安を抱いていたことは確かなようである。このような体質であったが、彼は仕事をするうえで2つの資質、即ち勤勉さ *diligentia* と中庸 *moderatio* を強調する。前者は説明する必要がなかろうが、後者は少し説明する必要がある。これが意味するところは、右でもない左でもないといった中途半端な立場ではもちろんない。それは科学者のあるべき姿であろう。有限の史料を前にして、更に時代と共に減少していく史料を前にして、史料を殺すのではなく、史料を生かす方に舵を切った。そのためには、一個所の間違いで偽書と言ってしまえば、中庸は決断よりも辛いことである。文中で述べられている如く、史料を人類の尊い遺産と考え、それに相応の敬意が払われねばならないとの考えに従って、重層的な証明方法が採用されている。
- 17) Voir Brühl, C., *Palatium und civitas*. Bd. I: *Gallien*, Köln, 1975; Bourgeois, L. et Boyer, J.-Fr., *Les palais carolingiens d'Aquitaine : genèse, implantation et destin*, dans Bourgeois, L. et Remy, Ch., *Demeurer, défendre et paraître*, Chauvigny, 2014, p. 67-118.
- 18) 中世ヨーロッパの王権の研究の名著として、類似の視点からカペー王権初期を扱っているJ.-Fr. ルマリニエの『カペー朝初期の国王統治』(Lemarignier, J.-Fr., *Le gouvernement royal aux premiers temps capétiens (987-1108)*, Paris, 1965) があるが、規模と精度において、このJ. マビヨンの研究を越えているとは思われない。
- 19) 前出註(3)参照。
- 20) Giry, A., *Manuel de diplomatique*, Paris, 1894, p. 61-62.
- 21) Papenbroeck, D. van, *Propylaeum antiquarium*, p. XXX-XXXIII (邦訳, 『産業経済研究』50(1), 160-174頁)
- 22) Mabillon, J., *De re diplomatica*, p. 2 (邦訳, 52頁)
- 23) Papenbroeck, D. van, *Propylaeum antiquarium*, p. 1 (邦訳, 『産業経済研究』49(2), 80頁)

- 24) Mabillon, J., *De re diplomatica*, p. 3 (邦訳, 4頁)  
25) *Ibid.*, p.23 (邦訳, 26頁)

参考文献・史料集目録

【文献】

1. Abelardus, Petrus, *Historia calamitatum ad amicum* (『不幸の記』と略記)
2. Aimoin de Fleury, *Historia Francorum*. (『フランク史』と略記)
3. *Annales Bertiniani* (『サン・ベルタン修道院編年史』と略記)
4. *Annales Fuldenses* ou *Annales d'Eginhard*, (『フルダ修道院編年記』と略記)
5. *Annales Viridunense* (『ヴェルダン編年記』と略記)
6. *Chronicon Mauriniacense* (『モリニー年代記』と略記)
7. *Chronicon Moissiacense* (『モワサック修道院年代記』と略記)
8. Dudon de Saint-Quentin, *Historia Nortmanorum ou De mortibus et actis primorum Normanniae ducum* (『ノルマン人の歴史』と略記)
9. Eginhard, *Epistolae*. (『書簡集』と略記)
10. Id., *Translatio sancti Marcellini et sancti Petri*. (『聖マルスラン・聖ピエール遺骸奉遷記』と略記)
11. Id., *Vita Caroli Magni* (『シャルルマーニュ伝』と略記)
12. Fortunat, *Carmina* (『詩歌集』と略記)
13. Frédégaire, *Chronicarum quae dicitur Fredegarii scholastici libri IV* (『年代記』と略記)
14. Flodoard, *Historia ecclesiae Remensis* (『ランス史』と略記)
15. Id., *Annales* (『編年記』と略記)
16. Gerbert d'Aullice, *Epistolae* (『書簡集』と略記)
17. *Gesta Episcoporum Autissiodorensium*. (『オーセル司教事績録』と略記)
18. *Gesta Francorum usque ad annum 1214* (『フランク事績録』と略記)
19. Grégoire de Tours, *Historiarum libri decem* (『歴史十卷』と略記)
20. Guibert de Nogent, *De vita sua* (『自伝』と略記)
21. Id., *Gesta Dei per Francos* (『十字軍記』と略記)
22. Guillaume de Heda, *Historia veterum episcoporum Utraectensium sedis et comitum Hollandiae, explicata Chronico Johannis de Beca,....* Francker,1612.in-4. (『ユトレヒト司教座教会史』と略記)
23. Guillaume de Nangis, *Chronicon et ses continuateurs* (『年代記』と略記)
24. Guillaume le Breton, *Philippide* (『フィリピド』と略記)
25. Hariulf, *Chronicon Centulense* (『サン・リキエ修道院年代記』)
26. Helgaud de Fleury, *Vita Roberti regis* (『王ロベール伝』と略記)
27. Herman de Laon, *Miracula S. Mariae Laununensis*, 3 vol. (『ランの聖マリア奇跡譚』と略記)
28. Hincmar, *Epistolae* (『書簡集』と略記)
29. Julius Caesar, *De Bello Gallico* (『ガリア戦記』と略記)
30. Loup de Ferrières, *Epistolae* (『書簡集』と略記)
31. Lucius Caecilius Firmianus Lactantius, *De mortibus persecutorum*, éd. par Baluze, Étienne, Utrecht,1693, in-8. (『迫害者たちの死』と略記)
32. Ordericus Vitalis, *Ecclesiasticae Historiae libri tredecim* (『教会史』と略記)
33. Ouen, *Gesta sancti Eligii episcopi* (『聖エロワ事績録』と略記)
34. Pierre le Vénéralbe, *Epistolae*. (『書簡集』と略記)
35. Id., *De miraculis libri duo* (『奇跡譚集』と略記)

36. Rigord, *Gesta Philippi Augusti* (『フィリプ尊厳王事績録』と略記)
37. Suger, *Vita Ludovici Grossi regis* (『ルイ肥満王伝』と略記)
38. Id., *De administratione sua in gestis* (『荘園管理記』と略記)

#### 史料集

1. Achery, Luc d', *Veterum aliquot scriptorum qui in Galliae bibliothecis, maxime Benedictinorum, latuerant, Spicilegium...*, 13 vol. Paris, 1655-1677. in-4° (『拾遺集』と略記)
2. Achery, Luc d'et Mabillon, Jean, *Acta sanctorum ordinis S. Benedicti, in saeculorum classes distributa*, 9 vol., Paris, 1668-1702, in-2 (『聖者記録集(べ)』と略記)
3. Bacchini, Benedictus, *Historia monasterii Padolironensis*, Parma, 1690 (『ポリローネ修道院史』と略記)
4. Baluze, Etienne, *Capitularia regum francorum in duos tomos distributa*. 2 vol., Paris, 1675. in-fol. (『勅令集』と略記)
5. Baluze, Etienne, *Miscellaneorum liber secundus*, Paris, 1679. in-8o (『雑録』と略記)
6. Bertauld, Placide, *Histoire civile, ecclésiastique, et monastique de la ville de Compiègne* (未刊行) (『コンピエーニュ史』と略記)
7. Besly, Jean, *Évêques de Poitiers. avec les preuves*, Paris, 1647, in-4° (『ポワティエ司教』と略記)
8. Id., Jean, *Histoire des comtes de Poitou et ducs de Guyenne...*, Paris, 1647. in-fol (『ポワトゥ伯史』と略記)
9. Bouteroue, Claude, *Recherches curieuses des monnoyes de France depuis le commencement de la monarchie*, Paris, 1666. In-fol (『フランス貨幣研究』と略記)
10. Breuil, Jacques Du, *Le Théâtre des antiquitez de Paris*, Paris, 1640 (1639) (『パリ古事図鑑』と略記)
11. Camuzat, N., *Promptuarium sacrarum antiquitatum Tricassinae dioecesis*, Troyes, 1610 (『トロワ司教管区古物の聖なる箱』と略記)
12. Caseneuve, Pierre de, *Le Franc-alleu de la province de Languedoc*, Toulouse, 1645, in-f.
13. Chifflet, Pierre-François, *Histoire de l'abbaye royale et de la ville de Tournus, avec les preuves*, Dijon, 1664 (『トゥールニュ史』と略記)
14. Doublet, Jacques, *Histoire de l'abbaye de S. Denys en France...*, Paris, 1625 (『サン・ドゥニ修道院史』と略記)
15. Du Breuil, Guillaume, *Stilus curie parlamenti domini nostri regis*, Paris, 1512, in-8.
16. Du Cange, Ch., *Glossarium ad scriptores mediae et infimae latinitatis*, 3 vol., Paris, 1678 (『中世ラテン語辞典』と略記)
17. Duchesne, André et François, *Historae Francorum scriptores coetanei...*, 5 vol., Paris, 1636-1649, in-f (『フランク史作家選集』と略記)
18. Duchesne, André, *Hist. Ghisn. Castell. et Montemor* (不詳)
19. *Gallia christiana* (『キリスト教ガリア』)
20. Germain, Michel, *Histoire de l'abbaye de Notre-Dame de Soissons*, Paris, 1675, in-4 (『ノートル・ダム・ドゥ・ソワソン修道院史』と略記)
21. Guichenon, Samuel, *Bibliotheca Sebusianasive variarum chartarm...*, Lyon, 1660, in-4 (『セブシアナ図書』と略記)
22. Id., *Histoire de Bresse et de Bugey, Gex et Valromay*, Lyon, 1650 (『ブレスの歴史』と略記)
23. Johannes Gerbrandus a Leydis, *Rerum Belgicarum annales chronici et historici*, 4 vol., Frankfurt, 1620. in-fol.
24. Labbe, Philippe, *Sacrosancta concilia, ad regiam editionem exacta*, 15 tomes en 18 vol. Paris, 1671-1672. in-fol (『公会議集成』と略記)
25. Id., *Chronologia historica*, 3 vol., Paris, 1670. in-fol (『年譜表』と略記)
26. Id., *Miscellanea curiosa* (『雑録』と略記)

27. Id., *Miscellaneorum liber secundus...*, Parisiis, 1679, In-8° (『古文書雑録』と略記)
28. Id., *Bibliotheca bibliothecarum curis secundis auctior*, 2 vol., Rouen, 1672, in-8 (『図書』と略記)
29. Id., *Nova bibliotheca manuscriptorum librorum*, 2 vol., Paris, 1657 (『新図書』と略記)
30. Le Masson, Jean-Papire, *Descriptio Fluminum Galliae, quae Francia est*, Paris, 1618 (『フランスの河川』と略記)
31. Le Mire, A., *Donationum belgicarum libri II, in quibus ecclesiarum et principatum Belgii origines, incrementa, mutationes... proponuntur notisque illustrantur*, Anvers, 1629 (『ベルギー寄進文書集』と略記)
32. Le Mire, Aubert, *Diplomatum belgicorum libri duo, in quibus litterae foundationum ac donationum piarum, testamenta, codicilli... ad Germaniam inferiorem vicinasque provincias spectantia continentur*. Bruxellis, 1627. in-4° (『ベルギー王文書集』と略記)
33. Id., *Notitia ecclesiarum Belgii in qua... sacra et politica Germaniae inferioris vicinarumque provinciarum historia...*, Antverpiae, 1630. in-4° (『ベルギー教会便覧』と略記)
34. Id., *Codex donationum piarum, in quo testamenta, codicilli, litterae foundationum, donationum, immunitatum, privilegiorum et alia piae liberalitatis monumenta... in favorem ecclesiarum praesertim belgicarum edita continentur*, Bruxelles, 1624, in-4° (『寄進文書集成』と略記)
35. Leyde, Jean de, *Chronicon Egmundanum seu Annales regaliium abbatum Egmundensium*, Lyon, 1692.
36. Loisel, A., *Histoire de Beauvais et du Beauvaisis*, Paris, 1617 (『ボーヴェ史』と略記)
37. Mabillon, Jean, *Veterum analectorum tomus I [-IV]*, Paris, 1675-1685 (『古史料選集』と略記)
38. Marca, Pierre de, *Marca hispanica, sive Limes hispanicus, hoc est, Geographica et historica descriptio Cataloniae, Ruscinonis, et circumjacentium populorum*, Paris, 1688. in-fol (『スペイン辺境伯領史』と略記)
39. Marlot, G., *Metropolis Remensis historia*, 2 vol., in-fol, Reims, 1666 (『ランス史』と略記)
40. Marrier, Martin, *Bibliotheca Cluniacensi*, Mâcon, 1614 (『クリュニー図書』と略記)
41. Paradin, Guillume, *Annales de Bourgogne*, Lyon, 1566, in-fol (『ブルゴーニュ編年記』と略記)
42. Pérard, Étienne, *Recueil de plusieurs pièces curieuses servant à l'histoire de Bourgogne*, Paris, 1654, in-fo (『ブルゴーニュ史料集』と略記)
43. Pistorius, Joannes, *Rerum Germani scriptores*, 6 vol., Frankfurt am Main, 1653, in-fol (『ゲルマニア記念物』と略記)
44. Puricelli, Giovanni Pietro, *Ambrosianae Mediolani basilicae ac monasterii hodie cisterciensis monumenta, quibus historia Mediolanensis... illustrata multis ab erroribus vindicatur...*, Milano, 1645 (『ミラノ司教座教会史料集』と略記)
45. Sirmond, Jacques, *Concilia antiqua Galliae tres in tomos ordine digesta...*, 3 vol., Paris, 1629, in-fol (『ガリア公会議録』と略記)
46. Ughelli, Ferdinando, *Italia sacra sive de episcopis Italiae, et insularum adjacentium*, 10 vol., Roma, 1644-1662 (『神聖イタリア』と略記)
47. Valois, Adrien de, *Notitia Galliarum, ordine litterarum digesta*, Paris, 1675, in-fol (『ガリア属州・都市総覧』と略記)
48. Id., *Rerum francicarum... libri*, 3 vol., Paris, 1646-1658, in-fol (『フランス記念物』と略記)
49. Vignier, Jérôme, *La Véritable origine des très illustres maisons d'Alsace, de Lorraine, d'Autriche, de Bade et de quantité d'autres, avec les tables généalogiques... des dites maisons... depuis l'an... 600 jusques à présent, le tout vérifié par tiltres, chartres, monuments et histoires authentiques*, Paris, 1649, in-fol (『アルザス, ロレーヌ, オーストリアの大領主たち』と略記)
50. Wiltheim, Alexandre, *Acta D. Dagoberti Francorum regis et martyris, et in ea notationes*, Troyes, 1653. in-4° (『ダゴベール王事績録』と略記)

フランク諸王の宮殿所在地



フランク諸王の宮殿所在地一覧

|    | 地名                    |    | 地名                  |     | 地名                   |     | 地名                            |
|----|-----------------------|----|---------------------|-----|----------------------|-----|-------------------------------|
| 1  | Aix-la-Chapelle       | 37 | Doué                | 73  | Malay-le-Grand       | 109 | Saint-Denis                   |
| 2  | Andernach             | 38 | Dourdan-sur-Orge    | 74  | Mantaille            | 110 | St-Germain-en-Laye            |
| 3  | Arches                | 39 | Douzy               | 75  | Marlenheim           | 111 | Saint-Médard près de Soissons |
| 4  | Arlaune               | 40 | Düren               | 76  | Meerssen             | 112 | Samoussy                      |
| 5  | Arles                 | 41 | Ebreuil             | 77  | Melun                | 113 | Sarcelles                     |
| 6  | Athies-sous-Laon      | 42 | Epinay-Champlatreux | 78  | Metz                 | 114 | Savonnières                   |
| 7  | Attigny               | 43 | Epoisses            | 79  | Montceaux            | 115 | Sélestat                      |
| 8  | Baizieux              | 44 | Estinnes-au-Val     | 80  | Montigny-sur-Aube    | 116 | Senlis                        |
| 9  | Beauté                | 45 | Etampes             | 81  | Montmacq             | 117 | Sens                          |
| 10 | Béthisy-St-Pierre     | 46 | Etrepagny           | 82  | Montreuil-sur-Mer    | 118 | Servais                       |
| 11 | Blois                 | 47 | Fontainebleau       | 83  | Morlay               | 119 | Sinzig                        |
| 12 | Bordeaux              | 48 | Frankfurt-am-Main   | 84  | Nanterre             | 120 | Soissons                      |
| 13 | Bourcheresse          | 49 | Gentilly            | 85  | Nanteuil-le-Haudouin | 121 | Speyer                        |
| 14 | Bourges               | 50 | Germigny-l'Évêque   | 86  | Narbonne             | 122 | Stenay                        |
| 15 | Braines               | 51 | Gondreville         | 87  | Nijmegen             | 123 | Strasbourg                    |
| 16 | Chalon-sur-Saône      | 52 | Herstal             | 88  | Noisy-le-Grand       | 124 | Thionville                    |
| 17 | Châlons-sur-Marne     | 53 | Höxter              | 89  | Noyon                | 125 | Toulouse                      |
| 18 | Chambly               | 54 | Ingelheim-am-Rhein  | 90  | Orléans              | 126 | Trier                         |
| 19 | Chambord              | 55 | Isenburg            | 91  | Orville              | 127 | Trosly-Breuil                 |
| 20 | Chamesson             | 56 | Isles-lès-Villnoy   | 92  | Palaiseau            | 128 | Tusey-sur-Meuse               |
| 21 | Chatou                | 57 | Issy-les-Moulineaux | 93  | Paris                | 129 | Valenciennes                  |
| 22 | Chelles               | 58 | Jouac               | 94  | Péronne              | 130 | Vandœuvre                     |
| 23 | Chèvremont-Fontenelle | 59 | Jupille-sur-Meuse   | 95  | Pierrefonds          | 131 | Venette                       |
| 24 | Chézy-sur-Marne       | 60 | Kirchheim           | 96  | Pîtres               | 132 | Verberie                      |
| 25 | Choisy-au-Bac         | 61 | Koblenz             | 97  | Poissy               | 133 | Vernantes                     |
| 26 | Clichy-la-Garenne     | 62 | Kostheim            | 98  | Poitiers             | 134 | Verneuil                      |
| 27 | Compiègne             | 63 | Lagny-le-Sec        | 99  | Pontailier           | 135 | Versailles                    |
| 28 | Corbeil-Essonnes      | 64 | Langres             | 100 | Ponthion             | 136 | Vienne                        |
| 29 | Corbeny               | 65 | Laon                | 101 | Quierzy              | 137 | Villeneuve-le-Roi             |
| 30 | Coucy-le-Château      | 66 | Litoy               | 102 | Reims                | 138 | Villeneuve-Saint-Germain      |
| 31 | Crécy-sur-Serre       | 67 | Longlier            | 103 | Remiremont           | 139 | Villers-Cotterêts             |
| 32 | Crécy-en-Ponthieu     | 68 | Loursain            | 104 | Reuilly-lès-Paris    | 140 | Vincennes                     |
| 33 | Crémieu               | 69 | Lurzarches          | 105 | Royallieu            | 141 | Vitry-aux-Loges               |
| 34 | Crouy                 | 70 | Lyon                | 106 | Ruel                 | 142 | Vitry-en-Artois               |
| 35 | Cuise-la-Motte        | 71 | Maastricht          | 107 | Ruffey-lès-Echirey   | 143 | Wesel                         |
| 36 | Dijon                 | 72 | Mainz               | 108 | Saint-Cloud          | 144 | Worms                         |

# ジャン・マビヨン『ヨーロッパ中世古文書学』

## 第4巻 国王文書が作成されたフランク諸王の宮殿と王領地

### 第1章 内容の開示

#### 第1節

国王文書が交付された場所の名前は、文書の最後の部分を占めることが非常に多い。フランク人の3つの王朝において、筆者が上述した<sup>1)</sup> 如く、交付された特権文書の交付地が記されたその書式は変化する。次のものは、本書の「見本」から取り出されたメロヴィング王朝の例で、そこには「余の王位の初年、12月13日、余のコンピエーニュの荘園において、上記の文書は作成され、上記の行為がなされた。神の名において、幸あれ」とある。非常に多くの国王文書では、荘園に「余のnostra」の語は付されていない。カロリング時代では、「行われたActum」と「交付されたDatum」を区別する習慣があった。加えて、多くの文書では、荘園を意味するヴィラvillaの語が省略されている。そして、カロリング時代の人々は年号を記載するため、または場所を明示するために、大抵の場合、「10月20日、余の王位の5年に交付された。以上の行為は、エルスタルの宮殿にて公開で行われた。神の名において、幸あれ」との書式を充てている。この書式に、時々ではあるが、「アーメンamen」が加えられている。第3王朝（カペー王朝）に入ると、状況は少し変化する。つまり、証人たちの下署の前後に、「パリの国王宮殿にて主の化肉の何年、上記の行為が公開でなされた」、または「上記の文書が交付された」などのような書式が見られる。ドゥブレの書に掲載された国王フィリップ（1世、1060-1106年）の文書<sup>2)</sup>にある如く、確かに、「行われたActum」、「交付されたDatumまたはData」は維持されている。しかし、「神の名において、幸あれin Dei nomine, feliciter」の文言が時々加えられている<sup>3)</sup>が、メロヴィング王朝やカロリング王朝の慣習に反して、それを省略することが非常に多くなる。

#### 註

- 1) 本書、2巻、25章、2項参照。
- 2) 『サン・ドニ修道院史』、839頁（正しくは838頁）。
- 3) 同上、825、833、859頁。

## 第2節

第1王朝（メロヴィング王朝）下、「交付されたDatum」に続く文章に、「宮殿Palatium」の文言が登場することは非常に稀であった<sup>1)</sup>が、第2王朝（カロリング王朝）、第3王朝（カペー王朝）下で、一般化する。従って、この文言は世俗の君侯には決して見られなかったが、諸司教は、(本書の出版から)500年前に時々ではあるが、文書で使用することになる<sup>2)</sup>。シャルルマーニュ（768-814年）以前では、(イタリア南部,)ベネヴェントのサンタ・ソフィア修道院の文書集で確認される如く<sup>3)</sup>、まず、ランゴバルド諸王が文書の末尾で、彼らの宮殿を「いと祝福された宮殿」、「聖なる宮殿」と呼んでいる。『カサウリア年代記』によると、ルイ2世（カロリング王、877-879年）治下、ヘリバルドゥスが「聖なる宮殿の伯」と呼ばれている<sup>4)</sup>。11世紀のこととして、プリチェッリの書において「聖なる宮殿の書記と判事」と言う文言が頻繁に登場する<sup>5)</sup>。しかし、それは下署者リストでのことで、今ここで筆者が考察している、国王文書が交付された場所の記載とは関係しない。

### 註

- 1) 本書、1巻、27章、10項参照。
- 2) 『ミラノ司教座教会史料集』、692、704、1086頁参照。
- 3) 『神聖イタリア』8巻、col. 581、569 続参照。
- 4) 本書、2巻、12章、13項参照。
- 5) 『ミラノ司教座教会史料集』、372、416、430頁等参照。

## 第3節

この地名記載は歴史学と非常に深く関係している。第1に、国王が文書を交付した時、彼がいた場所の知見がそこから得られる。第2に、国益のために諸王が辿った道順の情報がここから得られ、君主の巡幸の確かな道程がそれによって復元されうる。それ故、いと著名な人、ジャック・ゴドフロワはテオドシウス法典に関する書（Godefroy, Jacques, *Codex Theodosianus*, Lyon, 1665）で、各法律のこれら双方に注意を払っている。

## 第4節

しかし、碩学バリューズはテオドシウス法典に含まれる諸法律の下署リストからは、皇帝がその時滞在していた場所を明示するものとしては、如何なるものも取り出せないと反論、そしてそのことを幾つかの例を挙げて立証しようとしている<sup>1)</sup>。ともあれ、テオドシウス法典に関してはどうであったにして

も、我々の諸王の文書からは、文書をある者に交付することが明記されている場合、その時彼らが滞在していた場所に関する確かな知見が引き出される。そして、そのことは上記諸王の旅程を注記している歴史書を参照することによって、順序に従って簡単に明らかにすることができる。

註

1) 『迫害者たちの死』, 452頁続参照。

第5節

現時点で、我々の諸王の宮殿に関して、何かをする必要があると感じなかったならば、ここではこれ以上議論すべきではなかったであろう。しかし、古い史料を探索することによって、諸王の宮殿に関して多様な考察が我々に可能になったいま、本書の「補遺」を気に入ってもらった碩学たちの薦めもあって、筆者はそれらをここに集めてみようとの気持ちに至った。それは、正確には、同輩のミシェル・ジェルマンがこの問題に関する自身の研究を批評してもらった碩学たちの意見であった。ここで、批評してもらったのがジェルマン氏の研究であって、筆者のではなかったというのは、次の事情からである。つまり、思わしくない健康状態または何らかの事情から、筆者は自身の研究全般の協力者として、この考察（4巻）を彼の研究の中に移していたのである。彼は全く躊躇することなくこれを受け入れ、筆者が別の機会に時々明示していたシェジー（の宮殿）とセルヴェ（の宮殿）の立地を除き、すべてにわたって精力的に探究してくれた。しかし、この経緯に関しては、いずれ彼が自分の言葉で詳しく説明するであろう。

フランク諸王の宮殿

キリスト教の信仰がとくに篤い諸王の文書において、宮殿または国王の荘園、または王国の荘園、そして勿論王領地—これと前3者とは、大昔のフランク人の間ではほぼ同一の意味を持っていた—の記憶が称揚されていないものが全くか殆ど見出されない時、帝国の宮殿はフランス人の威信にとってと同様、古文書学の公明正大さにとっても重要である。実際、これに関しては、特に次のことが挙げられる。往時のフランク諸王が王国の境界を守るか広げること、異なる民族の精神を従順な状態に保つことに絶えず気を遣い、まるで曲馬師のような生活を送りながら、非常に多くの荘園を彼らの使用に供していたこと。そして諸王は国王の尊厳の広大さのためには好都合なことに、そして臣民の重大な負担なしという点では素晴らしいことに、状況が許す限りにおいて、そこに滞在していたこと。このような荘園が足り

なくなると、少なくない場所で司教または教会、または他の誰かが請け負うことを義務づけられていた食事提供でそれを補ったこと。そして、フォルテユナ（文筆家、530-609年）の証言によれば、国王テオドベール2世（595-612年）の家令コンドンに宛てた歌の中で、メロヴィング王朝初期の諸王によって、「同様に、尊敬すべき宮殿が華やいでいた」とある。それらは実際に数も少なくなく、またお互いに大して異なることなく存在していた一方、諸王が狩猟を行っていた非常に広大な森にも隣接していた。これらの場所において、大半の王文書が作成されていた。

それらの文書は通常「特権文書Praecepta」と呼ばれているが、筆者は「裁可文書Sanctiones」と呼ぶことにしている。換言すれば、それらは諸王のプラキトゥス、つまり法廷において発給され、それらは王国の定例集会へ送付されていた。しかし、これらのプラキトゥスは同じ名称のもとに、国王の荘園においても開かれていた。もっとも、諸王、諸司教、諸侯からなるあの全体集会は宮殿内、宮殿近くのシャン・ドゥ・マルス（「練兵場」の意）、または国家荘園においても開催されていたのであるが。更に、それぞれの都市、特に比較的大きな都市には国王宮殿が存在していて、それらの、刊行された国王文書、または一部の研究によって我々にとって貴重と思えるものを、筆者が可能な限り言及することにする。

実際、筆者は諸王の古い宮殿と関連した古史料、とりわけ真に重要性の高い史料の緻密な考察に取り組んだが、非常に簡単な言い方をすると、それは次のようになる。最初に、それらの宮殿をアルファベット順に並べ、続いて、許される限りにおいて、それらを年代順に配列することを意図した。もし、そこからフランスの文学界に役立つものが1つでも生まれれば、筆者には望外の喜びである。

そして、筆者は単に公的な史料、または私的な史料の精読で守りを固め、この厳しい仕事に備えただけではない。これ以外に、我が同僚プラシド・ベルトーのフランス語の労作、コンピエーニュ史の未刊行本も利用した<sup>1)</sup>。その中で、彼はフランス国内の少なくない宮殿を40前後丹念に収集している。加えて、いと著名なアンリ・ヴァロワの『ガリア属州・都市総覧』から多くを教えられたことを告白する<sup>2)</sup>。それが役立ったことを公言することを自らに課さないならば、それを丹念に読んだことにはならないであろう。これらに加えて、傑出したデュ・カンジュ卿の『中世ラテン語辞典』が、既出の著書と同様、筆者には助けになった<sup>3)</sup>。そこには非常に多くの諸王やその他の君侯の古い宮殿が示され、明らかにされている。筆者はこれらすべてが称賛に値し、それぞれに榮譽が付与されるべきと公言する。それは他人の業績から借用したものを、それが何であれ、自分のものだとして咎められないためである。

#### 註

1) 『コンピエーニュ史』

2) 『ガリア属州・都市総覧』

3) 『中世ラテン語辞典』

## I. 王妃アデライードの宮殿，またはコンピエーニュ近郊のヴィルヌーヴ・サン・ジェルマン<sup>1)</sup>

ルイ6世（フランス王，1108-1137年）は妃にして妻，アデライードを，他のフランク諸王がそうであったよりも，敬愛していたと思われる。同王はそれまで少数の諸王には見られたことであるが，彼女の名前を併記させていたのみならず，一部の習慣を別にして，彼女の統治年を自身の名前と統治年に追記することを習慣にしていた。夫が亡くなると，王妃はコンピエーニュを周辺の幾つかの森や荘園と共に，寡婦資産として受け取る。その中から王館のあるキューーズ<sup>2)</sup> 荘をベネディクトゥス派の修道士たちに寄進し，そこに聖ヨハネの誉れにおいて神に捧げられた修道院を建立した。その後アデライードはキューーズの王宮荘園を去り，サン・ジェルマン村が隣接する，新たな荘園を造成した。そこは嘗て「アデライードの荘園」または「アデライードの宮殿」があった所で，現在はヴィルヌーヴ・サン・ジェルマン，そして地元ではフランク・ヴィル，フランシュヴィル・プレ・ドゥ・コンピエーニュと呼ばれている。

その新規造成に関する文書は，本書後半で刊行されているが，その最初と最後の部分は次のようになっている。（最初の部分は）「聖にして不可分の三位一体の名において。神の恩寵による王妃，余アデライードは現在の人々と同時に将来の人々に次のことを告知する。キューーズの森とコンピエーニュの集落の間にある，余の王ルイの息子の命令と意図に従って，ヴィルヌーヴが造成されることを命じた（後略）」と。（最後の部分は）「1153年コンピエーニュにて公開で行われた。主膳長ルイ，王妃の料理人ルノー，献酌人ジャン。礼拝堂付き司祭エプロワンの手を介して」とある。その荘園の造成とその領民に付与された諸特権を，ルイ7世が1177年と1179年に安堵している。他方，この王妃アデライードの新しい宮殿は，サン・ジェルマン小教区教会とオワーズ川の間に設置されていた。その遺跡はこれまで目視されてことはなく，筆者が生きている世紀（18世紀）の初頭には更地化していた。なお，そこでは，1650年に身体を洗うのに適した，大きな石の水盤が，王宮や容器からなる多くの断片と共に，発掘されている。

### 註

1) Villeneuve-Saint-Germain (Aisne, ar. Soissons, c. Soissons-nord).

2) Cuise-la-Motte (Oise, ar. Compiègne, c. Attichy).

## II. アンディアクム<sup>1)</sup>

アキテーヌ地方のアンディアクムAndiacumの宮殿は，天文史家の言によると，796年アキテーヌ王—後に皇帝になる—ルイ（敬虔帝）が，父シャルルマーニュの命を受けて，冬季を過ごした4つの王宮のうちの1つであった。一部の人たちはアンディアクムをアンジュー地方のアンジェに比定する。彼ら

は名前の類似性から生まれたに過ぎない自分たちの見解が、アキテーヌ人とアンジュー人とが隣人同士であることによって補強されることを望んでいる。他方、別の人たちはトゥール近郊に位置し、地元でアンジューと呼ばれている、小さくない集落がアンディアクムと関係していると記しているが、それも地名の類似性によるものに過ぎない。加えて、アンディアクムをアンダイ川沿いの、ガスコーニュの海岸地域にある、バイヨヌとフエンテラビアとの間（今日のアンダイ）に押し込む人たちもいる。しかし、如何なる論拠に立とうとも、彼ら自身はもちろん他の如何なる者もこれまで説明することができなかった。アンディアクムの立地を特定しようとする者にとって、いと著名なアドリアン・ヴァロワが『ガリア属州・都市総覧』の中で教えていること<sup>2)</sup> 以上によく配慮されたものはなかろう。つまり、この宮殿は—即ち、上記の天文史家の言に依拠して—、地名の綴りが崩れるか切断されるかして、アンディアクムと呼ばれる場所に立地していたこと。しかし、832年の出来事の中で、より正確には、「リモージュ地方に置かれたジョクンディアクムJocundiacumの宮殿」と言われていること。筆者は手稿本によって最高に位置する人のこの推論を確かめたり、出版された著書を安全に校正したりして、多くのものに当たってみた。しかし、コルベール・コレクションに含まれる2冊の非常に古い写本はJucundiacumではなくて、すべての出版物と同様に、Andiacumを優先させている。まず、我が同僚、ミシェル・ジェルマンがAndiacumはサント司教管区内に位置したと推論した。しかし、その後で、筆者は、Jocundiacumの個所で述べられている如く、『フォントネル年代記』に依拠して、アングレーム司教管区内に同定すべきであったとの認識を示した。

#### 註

1) Andiacum (不詳).

2) 『ガリア属州・都市総覧』, 184頁参照。

### III. アンダーナハ<sup>1)</sup>

ライン河畔、マインウエルト郡内、コブレンツとボンの間に位置する、AntonacumまたはAntunnacum, Anternacum, Andrenacumと表記されるアンダーナハは『フルダ修道院編年記』と『サン・ベルタン修道院編年記』ではアントレナクムとアンドレナクムとして登場し、『メス年代記』においては、「皇帝によって寄進された王領地」として列挙されている。フレデゲールの言によると、同地で(ヌストリー王)クロテール2世(584-622年)がティエリー(2世)の死後、ウォルムスに滞在していたブルンヒルド(オストラジー王シジューバールの妻、上記ティエリー2世の祖母)からの使節を迎えたとある。筆者はこの地が一部の書においてカプトナクムCamptonacumと呼ばれているのを知って

いる。しかし、このカンプトナクムがオストラジー（王国）ではなくてヌストリー（王国）に位置していたことは、この先で立証されるであろう。フォルテユナは彼の詩の中で、アンダーナハの城の囲壁と諸王が王宮の玉座—それはその宮殿の古さと高貴さを十分に保証している—に座している場所に言及している。

註

- 1) Andernach (ドイツ, l. Rheinland-Pfalz, r. Mayen-Koblenz).
- 2) 『年代記』, 4 卷, 40 章。
- 3) 『詩歌集』, 10 卷, 詩歌 12 番。

IV. アーヘン, またはエクス・ラ・シャペル<sup>1)</sup>

Aquisgranumと表記されるアーヘン（またはエクス・ラ・シャペル）にあった宮殿の起源は、作家たちが言及している限りでは、国王ペパン（1世）が765年「アキスAquis（アーヘン）で復活祭<sup>2)</sup>」を祝した、更に「アキスグラヌム（アーヘン）で冬季を過ごした<sup>3)</sup>」、そして「そこで、クリスマスと復活祭を祝した」と述べているフランク人の古い編年記<sup>4)</sup>によって、躊躇することなく、シャルルマーニュ（上記ペパン1世の息子、カロリング王 768-814, 西ローマ皇帝 800-814年）に求められている。更に、上掲書において、ザンクト・ガレン修道院の修道士の言に従って、まだそこには「ローマ式の浴場が建設されていなかったので<sup>5)</sup>」、同王は浴室で体を温めていた。シャルルマーニュは戴冠式が終わるや、「アキス（アーヘン）と呼ばれる荘園で<sup>6)</sup>」同じく、クリスマスを祝った。ル・ミルは『ベルギー教会便覧』の中で、曾祖父ペパン（2世）によって寄進された、「ヌフシャトーに建立されたノートル・ダム教会の」財産を安堵している、シャルルマーニュの文書を公表している<sup>7)</sup>。同編者はこのヌフシャトーという名称によってアーヘンの町が表されていると考え、そこからアーヘンにある王宮の誕生は、更に遡ってメロヴィング諸王によって要求されるべきと判断する。しかし、宮宰ペパン（短軀、シャルル・マルテルの息子、カロリング王, 751-768年）によって創建されたあと、所領を寄進されたヌフ・シャテル<sup>8)</sup>のノートル・ダム教会はアルデンヌの森の近くに位置し、フランク人の君主カルロマン（上記ペパンの弟）が統治の変革を企てようとしていた弟グリフォン（上記カルロマンの異母弟）を謹慎させたこともある、ヌフ・シャテル教会以外には考えられない。上記の文言から、アーヘンのノートル・ダム教会に比定することが明らかに許されないことは、ル・ミルの同書に収められた皇帝ロテール（1世, 840-855年）の文書からも明らかである。そこでは、シャルルマーニュが自身の特権文書で、ヌフ・シャテルの寄進済み財産を列挙しうえ、それらの財産が修道院長ロテールのために安堵されたとあるが、皇帝ロテールの

言によると、「我々は託された使命を正しく導くために、神の聖なる母マリアのために、ヌフ・シャテルと呼ばれる場所に建てて完成させた修道院を所有している」とある。従って、アーヘンの教会がその当時壮麗さと大きさにおいてどの教会にも劣らなかったこと、またこのヌフ・シャテルといった曖昧な呼称はアーヘンの宮殿には全く似つかわしくなかったことから、ロテールがアーヘンの王宮の非常に有名な教会を、ヌフ・シャテルに建立された修道院と呼ぶことはなかったであろう。

実際、シャルルマーニュはアーヘンの宮殿の起工者ではなかったかもしれないが、竣工者であったことには間違いない。そこに、彼は広く「ラテラノLaterano」と呼ばれていた<sup>9)</sup> - 王宮、教会と侍従棟を斬新で見事な技法で基礎から建立した。エジナルの言葉に従えば、「彼はアーヘンにも王宮を建て、晩年を死ぬまでそこで暮らした<sup>10)</sup>」とのことである。同じことを、キリストとその聖母マリアに捧げられた、シャルルマーニュを創建者とする教会を他のものと一緒称賛している詩人、サクソヌスが証言している<sup>11)</sup>。グンテルスは『リルリヌス』第1巻において、シャルルマーニュによって同地に設置された「王国の揺籃」に言及し、同シャルルマーニュを記念した聖なる詩の中では、「アーヘンの町、国王の都、王国の首都、諸王の第1の法廷curia」となっている。アーヘンを「フランク王国の首座」と呼んでいるニタールが、これと関わってくる<sup>12)</sup>。この王法廷に関して、嘗て石に刻まれた詩では、「シャルルマーニュは帰国するとこの見事な都市を建設した。彼はローマの次に位置すべく、この都を解放した。町全体、そしてガリア全体がこの頭を敬愛している」ようになっていた。確かに、アルキュアン、またはシャルルマーニュの同時代人で、カシニウスによって出版された書の匿名の作者は、ローマに次ぐ都と呼んでいる。エジナルの証言<sup>13)</sup>によると、アーヘンの壮麗な教会が時に礼拝堂capella（フランス語では「シャベル」）と呼ばれることもあったようである。そこからエクス・ラ・シャベルという一般的な名称が派生していることは間違いない。シャルルマーニュは、この地の墓地に埋葬されている。

アーヘンであった、フランク諸王の法行為、または法廷のすべてを列挙してお見せすると言えば、それは大法螺でしかない。このテーマに関しては、デュシェーヌの出版物に登場する、フランスの出来事に関する古い作家たち、公会議録、諸王の勅令集、ル・ミルの『ベルギーの王文書集』、ドゥブレの『サン・ドゥニ修道院史』、シフレ、その他大勢が参照されねばならない。これらすべてに、筆者はアーヘンで交付された、そしてそれらの原本から転写されたものとして、本書で初めて刊行されるであろう、諸王の文書数通を追加することにする。それらの中で、シャルルマーニュの妹ジゼールがサン・ドゥニ修道院に多くの所領を寄進している文書には、「我が主人の御世の26年、6月13日、アーヘンの宮殿で行われた（後略）」、「我が主人の御世の31年、6月13日、アーヘンの宮殿で行われた（後略）」とある。筆者によって本書で刊行されている文書にある如く、同シャルルマーニュの帝位の12年、アーヘンで、アラクスとティングルフスとの間の係争のために法廷が開かれている。その翌年、シャルルマーニュは

領地のボホニアの森をサクソン人貴族の息子、アシグ某に贈与している。2葉の後掲文書から、シャルルマーニュの息子ルイ敬虔帝は帝位の6年、アーヘンに滞在していた。また同様に、同帝は息子ロテールと共に、サン・ドゥニ修道院の院長イルドワンとの間でなされた所領の交換をこの地で安堵している。その3年後、同帝は（南フランス、）ヴィエンヌ近郊のサン・タンドレ修道院を司教座聖堂に返還している。シャルル単純王（893-923年）は、嘗て妻フリデリユヌに婚資として譲渡されていたポンシオンの荘園を、同妻の求めに応じて、コンピエーニュの教会に、在位の25年に下付しているが、更にこれと同じ頃、同王はアーヘンにおいて多くの所領を同教会のために安堵している。

非常に古い写本や史料において、「アキス」の名称が如何なる語も付加されずに、特にペパン（1世）の治世、更に帝位に就く前の彼の息子、シャルルマーニュの治世に頻繁に現れる。勿論、「アキスグラヌム」という正式名称が、前の巻<sup>14)</sup>で示されたその時期以前に限って、シャルルマーニュの真正文書の一部に現れているのも確かであるが。続いて、ルイ敬虔帝がその位にあった時、「アキスグラヌム」の名称のみが至る所で姿を見せている。しかし、「アキス」の語が変化を受け入れたのに対して、「グラヌム」の語は変化することはなかった。今日、エクス・ラ・シャペルの町は、それまでと同様、ケルン司教管区、リンブルク公領内に位置し、その近くのコルネリミュンスターには、ルイ敬虔王がアニアンヌのブノワ（修道院改革者、821年没）のために建立した、ザンクト・コルネリ修道院がある。

#### 註

- 1) Aix-la-Chapelle または Aachen（ドイツ、l. Nordrhein-Westfalen, r. Köln）.
- 2) 『フランク史作家選集』、2巻、13、27頁。
- 3) 『フルダ編年記』
- 4) 同上、236頁。
- 5) 『フランク史作家選集』、2巻、13、27頁参照。
- 6) 同上、131頁参照。
- 7) Neuf-Châtel. 最新の研究では、Vaux-sous-Chèvremont（ベルギー、ar. Liège, c<sup>ne</sup> Chaudfontaine）に比定されている。Voir MGH,DDK,1, p. 525.
- 8) 『フランク史作家選集』、2巻、13、27頁参照。
- 9) 『ベルギー教会便覧』、33章参照。
- 9) 『モワサク修道院編年記』、796年の項参照。
- 10) 『シャルルマーニュ伝』、2巻、102頁参照。
- 11) 同上、152頁参照。
- 12) 同上、376頁参照。
- 13) 『フルダ編年記』、829年の項参照。
- 14) 本書、2巻、27、28章参照。

## V. アルシュ<sup>1)</sup>

『サン・ベルタン修道院編年記』は859年の出来事の中で、Archae Remorumと表記されるアルシュの宮殿を「ロテールは叔父シャルル禿頭王の許に急行し、四旬節の最初の日曜日、アルシュの宮殿にて公開で、互いに誓約を交わし、再度確認し合った」のように記している。アルシュはムーズ河畔の、メジエール<sup>2)</sup>と、嘗ての王領地で、今日では公爵の在所として有名なシャルルヴィルの間に位置する。そして後者はマントヴァのゴンザーグ公爵家に帰属し、アルシュの領地にそれまでなかったほど非常に美しい町としてシャルルヴィルを蘇らせた。フロドアールが『ランス史』の中で、「933年、(ベルギーの) トンヘレン司教リシェ (920-945年) は、伯バルナールがポルシアン郡内、アルシュに築いたある城を破壊した<sup>2)</sup>」のような言葉で想起させている。この城の痕跡は全く残っていない。加えて、今日では通り名が(アルシュの)古い名前を留めているに過ぎない。

### 註

- 1) Arches または Arques (Ardennes, ar. Charleville- Mézières, c. Charleville- Mézières, c<sup>m</sup> Charleville- Mézières). ムーズ川を挟んで対峙する Mézièresと後出のCharlevilleとが合体して、アルデンヌArdennes県の県庁所在地になっている。ArchesはMézièresの市街地に吸収されてしまっている。
- 2) 『ランス史』, 2巻, 18章参照。

## VI. アルル<sup>1)</sup>

Arelatenseと表記されるアルルには古代ローマ人の非常に古い宮殿があつて、エウメニウスがコンスタンティヌス大帝(ローマ皇帝, 306-337年)への頌詞で証言している如く、ここはマキシミアヌス・ヘウクリウス(ローマ皇帝, 286-305年, 306年, 310年)が3度目に帝位を奪取した地でもある。また、シプリアンの手になる伝記<sup>2)</sup>で語られている如く、同地の司教カエサリウス(502-542年)が、アルル攻囲の際、「非常に狭い牢獄」に閉じ込められたのも、この宮殿であつた。

### 註

- 1) Arles (Bouches-du-Rhone, ch.-l, ar.).
- 2) 『聖者記録集(ベ)』, 1巻, 663頁参照。

## VII. アルローヌ<sup>1)</sup>

Arelaunumと表記される非常に古いアルローヌの森への言及は『フランク人の事績録』の中に登場し、

そこにはロテール大王（メロヴィング王，511-561年）が「アルローヌの森に逃げ込み，コンブロスーつまり木の柵—を造った」とある。同地はブルグンド人の王，ティエリー（2世）と反りが合わない，シルペリク（1世）の息子ロテール（2世，613-629年）の避難所にもなっている。隠修士聖コンデの伝記の作者によると，この森に近接して，「アルローヌの王領地」<sup>2)</sup>と呼ばれている，王宮莊園があった。リヨン司教聖ランベール（678-684年）の文書数通は「快適なアルローヌの宮殿」に言及し<sup>3)</sup>，そこで国王シルペリク（2世，メロヴィング王，662-675年）がオストラジー王位の11年，ヌストリー王位の初年，ある所領をフォントネル修道院に寄進している。我が同僚ダシェリーによって出版された，『フォントネル修道院年代記』が教えているのであるが，その後，宮宰テオドバルの助言を受け，ダゴベール2世（メロヴィング王，676-679年）がアルローヌの森の4分の1を同修道院に譲渡している。アルローヌの宮殿の名称は，早くから廃れてしまっていた。この森を，オルデリク・ヴィタリスが「ヴァトヴィル城の近くにある，プロトナの森」つまり，現在のプロトンヌの森と呼んでいる。加えて，このプロトンヌの森の近くには，フォントネル修道院から1マイル半（2キロ強）離れた，セヌ川に浮かぶベルキナカと呼ばれる中島があった<sup>4)</sup>。海水面の上昇によって長い間海中に吸い込まれ，それから数年後に再び姿を現し始める。

註

- 1) Arlaune. Brotonneの古名。Seine-et-Maritime県とEure県に跨り，Caudebec-en-Cauxの南に広がる森の名称。
- 2) 『聖者記録集（ベ）』，2巻，863頁参照。
- 3) 同上，3巻下，464頁参照。
- 4) 同上，2巻，853頁参照。

### VIII. ストラスブール<sup>1)</sup>

オストラジー王ダゴベール（2世，675-679年）は，エディウス・ステファヌス—今日では，ステイーヴン・オブ・リボンと呼ばれている—の言によると<sup>2)</sup>，Argentoratumと表記される「ストラスブールの町に所属する最大の司教管区」をヨーク司教ウィルフレドに下付した。これに対して，かの教会法の擁護者は激しく抗議したとのことである。この地にフランスの諸王は宮殿を持つようになるが，最初に，ジェローム・ヴィニエの『アルザス領主家系』の史料編に収められた，王ロテールの文書が「王ロテール陛下の治世の4年，10月15日，インディクティオの7年，慈悲深いキリストのもとで下付された。ストラスブールの宮殿で，神の名において行われた<sup>3)</sup>」のような言葉でそれを証明している。加えて，ボヘミア公ズアントボルが頻繁にここを訪れており，そのことは同公自身の書簡—それらの抜粋は筆者に

知らされている—から、筆者が理解したことである。筆者はロテール1世（817-855年）の、同帝の在位26年、「ストラスブールの王宮にて交付された」、同町の聖エティエンヌ司教座教会への別の真正文書も閲覧した。同じく、同教会のためにドイツ王ルードヴィヒ（843-876年）の、同王の在位の23年、「ストラスブールの宮殿にて」交付された文書も閲覧した。ヨハン・シルターはこのフランク諸王の古い宮殿はローマ人の伯の古い城、またはブルグス・ロマヌス、または今日「司教の邸宅」と呼ばれている、ケーニヒスホーフ（「国王の宮殿」の意）の時代にあった、古い王宮の場所とも関係していない。嘗てサン・マルタン礼拝堂があった、今日の王宮との関係も尚更ない。そうではなくて、名称としては正しく王宮荘園、国王宮殿に由来し、1282年に建立された後、建物が壊されて、今日墓地に姿を変えているザンクト・ガレン礼拝堂に推定する。

註

- 1) Strasbourg (Bas-Rhin, ch.-l. dép.).
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 4巻下, 691頁参照。
- 3) 『アルザス, ロレーヌ, オーストリアの大領主たち』, 77頁参照。
- 4) Johann Schilter (1632-1705) .ドイツの法学者, 著書に *Scriptores rerum Germanicarum a Carolo M. usque ad Fridericum III*, Strasbourg, 1702などがある。

## IX. アティー<sup>1)</sup>

研究者すべてがラドゴンドの娘の教育と修道生活のために有名なAteia Veromanduorumと表記されるアティーの王領地をヴェルマンドワ郡内、そして非常に多くがソンム川沿い—しかし、今日では同川との隔たりは殆どない—に立地させる。確かに、アティーは、今日ドミニオン川と呼ばれているダルマニオ川—この川はアティーを出て、2マイル（約3キロ）ほどでソンム川に合流する—沿い、ペロンヌとアンのほぼ中間に位置する。しかし、ソンム川に隣接する程であったことから、この町の囲壁内区は昔はそれなりに広がったと思われる。今日、その所在地は忘れ去られている。

註

- 1) Athies-sous-Laon (Aisne, ar. Laon, c. Laon-sud).

## X. アティニー<sup>1)</sup>

オルレアン<sup>1)</sup>のサン・テニャン修道院のいと敬虔な院長レオドボルは、フランク人の王クローヴィス（2世, 639-657年）の承諾をえて、Attiniacumと表記されるアティニーの所領をフルーリの王領地と交

換する<sup>2)</sup>。同王は最初にアティニーに王領地、つまり宮殿を設置したと考えられる。アティニーはエーヌ川の岸辺、ヴォンジョワとレーテルの間、ブル渓谷の中にあつて、同宮殿の一部またはより確実に付属物として、後述される如く、今日では聖ワルビュルジュの荘園として広く知られている、ディオオン荘がそれに従属していた。ティエリー（1世）の息子、王シルドベール（2世、634-656年）は高官たちと共にアティニーに滞在し、在位の15年、サリカ法とリブアリア法に、相続または封土に関する法令と、教会から許されない状態で妻を奪い取ることを禁じた、幾つかの条令を追加した。つまり、クリノシスの領民は結婚に際して、近親相姦の罪を犯してはならないと。明らかに、フランク人の非常に古い編年記においてダニエル、またはシルベリクやシルデリクの孫、クローヴィス2世（635-656年）は「アティニーで死去した」と伝えられている。ドゥブレは『サン・ドゥニ修道院史』の中でシルデリク3世（743-751年）が在位の8年、アティニーで「神の名において」交付した文書の一部を公開している<sup>3)</sup>。そこには、「世俗の高官や聖界の高官である司教、または高貴な人々である諸公と諸伯と共に、アティニー荘の余の宮殿で、万人の訴えを聞くために滞在していた（後略）」とある。次の年、同じく、ペパンが同王シルデリク（3世）の許で、法廷を開いている。そこで、本書で真正文書から公表されている文書が明らかにしている如く、（ノルマンディーの）クルボリウス村が、セット・ムール修道院長ラガニスまたはラガナナとの係争を経て、サン・ドゥニ修道院長フルラドの手に渡っている。この地はその快適さと両方の王国、つまりオストラジーとヌストリーの境界近くに位置することから、ペパンに気に入られていたと考えられる。フランク人の事績録の中で一度ならず、「クリスマスの日を、アティニーと呼ばれる荘園で祝った」、「エルスタルで四旬節を祝った」との文言と出会う。また、同じ事績録の中で765年、ペパン（3世）はアキテーヌの人々を扇動した、公ワイファリウスを攻撃することを決めている。また、ワンデルベールの言によると、「アティニーと呼ばれる宮殿にいたペパンは彼の妻ベルトラードに懇願され、修道院長アスエルスが人民の全体集会と一緒に来ていたので」、サン・ゴール修道院を監督すべく、彼に委ねたとのことである。

ペパンの息子、カルロマン（768-771年）は在位の初年、サン・ドゥニ修道院をすべての通行税から解放し、同修道院に交付されていた歴代諸王の不輸不入特権の文書を、アティニーで安堵している。808年に公布された勅令では、「あの雑木林からアティニーの余の宮殿まで」といった表現が出てくる。シャルルマーニュ治下、聖なる洗礼によって既に清められていた、ザクセン族の公ウィディキントとアルピオがキリストに名前を委ねたのもここである。また、ルイ敬虔王治下、2つの、1つは同ルイが公開で改悛を行った822年、他の1つは833年かその翌年、公会議または法廷がアティニーで開催されている。それに関しては、アルセニウスの墓碑銘とベネディクト派に所属した諸聖者の伝記集成に収められた、コルビー修道院長ワラの伝記をご参照あれ。また、ルイは帝位の26年、サン・ドゥニ修道院長イル

デュアンと女子修道院長エルマントリユードの間での所領交換の確認のために、アティニーで文書を発給している。そこから、その当時追放の身を解かれ、院内任務を司っていたイルデュアンとルイとの間で、和解が成立していたことが明らかとなる。

加えて、アティニーではその他のことも行われているが、それらはシャルル禿頭王とその弟ルイよりも、この地を他の誰よりも愛していたと思われるシャルル単純王（893-923年）に帰せられるべきと、筆者は考える。と言うのも、すべての国王文書—その非常に多くが公刊されている—の中で非常に重要なものはアティニーで発給されているのを、読者諸賢は知るであろうから。何よりも、聖ワルビュルジュの聖遺物が同上王によって、アティニー宮殿のあるディオオン荘に安置されたことを伝える文書が特記されねばならない。ランスのサン・レミ修道院の修道士、ジャン・スパニョルが聖ワルビュルジュの伝記と奇蹟譚、彼の後オベール・ル・ミル、そしてマルロがランス史の中で、この出来事をシャルル禿頭王に間違っただけで帰している。この間違いの原因は、この出来事について書かれた史料の不完全な状態にあった。上記3人はシャルルという名前に騙されてしまっていた。実際のところ、コンピエーニュの史料館で原本が発見されると、本書の末尾に掲載されている如く、聖ワルビュルジュの遺骸のガリアへの奉還と同聖者に捧げられた教会へのディオオン荘の帰属が、シャルル単純王に帰せられることが判明した。そして、それは確かに918年に起きている。同シャルル（単純王）の統治の26年とあるが、自身で新しい文書を発給して、「修道士身分の14名の男子を駐在させた同礼拝堂は、コンピエーニュの修道院に服属すべし。但し、コンピエーニュのプレヴォと主席司祭が仲間の中からプレヴォと宝物役を選出して、上記の礼拝堂に配属させるとの条件下で（後略）」と命じている。

しかし、ランス小教区がノルマン人によって焼き払われると、アティニーからもその輝きが失われた。そして間もなくして、国王フィリップ（1世、1060-1108年）の娘で、シャンパーニュ伯ユグの妻、コンスタンスの手に付属物と共に婚資として渡った。マルロがランス史の中で寄進文書に依拠して言及している如く、ディオオン荘にサント・ワルビュルジュ教会が上記のユグによって1102年、モレーム修道院に従属する分院として創建されている。アティニーと聖ワルビュルジュの名前からしか知られていない、そして人々が大勢頻繁に集まって祝福しているディオオンの荘園に関しては、以上で十分であろう。アティニーの町はランス司教座教会に従属して、今日でも存在している。

#### 註

- 1) Attigny (Ardennes, ar. Vouziers, ch.-l. c.).
- 2) 『王ロベール伝』、序言参照。
- 3) 『サン・ドゥニ修道院史』、691頁参照。
- 4) 『聖者記録集（ベ）』、2巻、298頁参照。

5) 同上, 4 卷上, 508頁参照。

6) 『ランス史』, 2 卷, 229, 230頁参照。

## XI. オルレアン<sup>1)</sup>

クロドメール (クローヴィス1世の息子, 511-524年) の4王国の都, ジュネーヴ, シャルトル, そしてAurelianenseと表記されるオルレアンは嘗て有名な宮殿を持っていた。そこでは更に, (カペー朝の) ユグ (987-996年), ロベール (2世, 996-1031年), アンリ (1世, 1031-1060年) といったフランス国王たちが頻繁に滞在し, 楽しい時を過ごしていたと, 彼らの事績を文字に委ねた同時代の作家たちによって記されている。オルレアンの近くには, この後で考察されることになる, オルレアンの森の中に位置する, ヴィトリイー・オ・ロジュの宮殿があった。

### 註

1) Orléans (Loiret, ch.-l. dép.).

## XII. ベジウ<sup>1)</sup>

いと博識のアドリアン・ヴァロワが言うには, ラン郡内, ノジャン・ラルトの公営荘園とポンティユ郡内, クレシー・アン・ポンティユの王領地の間に位置するBasiuまたはBaisium, Bacium, Basium, Bacivumと表記されるベジウの宮殿に関して, これまで誰も明らかにしてこなかったことは確かである。この場所をノワイヨンとオワーズ河畔のコンピエーニュとの間に比定した研究者たちは, BacまたはBac-à-Beriという通り名に騙されてしまったのであり, 彼らが間違っていたことは古い作家たちからも明らかである。また, 修道院長サムソンの荘園-彼の生まれ故郷である-としてのAbaciumを提案したとしても, それは間違っているであろう。ヴァロワは『ガリア属州・都市総覧』の中で, この荘園をコルビーとアミアンの間を流れる小さな (アリユ) 川沿いにある, ビュシー・レス・ダウール村と同定した<sup>2)</sup> 時, ベシウの本来の場所に近づいたことになり, やがて喝采を浴びることになるであろう。つまり, Basiumは, 本当の所, コルビーからもビュシーからも, 大西洋岸に向かって2里 (8キロ) の, ベジウと呼ばれている所である。この村は, 加えて, 城と広大な領地で有名で, 近くには大きな森があるが, この森は向かい側のヘリアケンシスの城と村から名前を貰ってもある。更に, 街道, または公共の道路は隆起しているのみならずあちこちで一直線に延びており, これら古代の素晴らしい建造物のすべてに, 筆者はしばしば圧倒された。

フランク諸王の事績録はベジウBaciumの荘園に言及していて, フレデゲールの『年代記』の付録の

中では、筆写生の誤記からAbacivumとなつてはいる<sup>3)</sup>が、エブロワンがボン・サント・マクサンス荘から王ティエリー（3世、675-691年）と宮宰レウデシウスを追い払い、同荘園にあった「王の宝物を奪い取った」とある。しかしその後、シャルル禿頭王の時代に至るまで、ベジウへの言及はない。同王は847年ベシウに滞在して、マンギルス・ル・ブルトンの横死を伝える按察使を迎えている。また、同王は統治の15年、ウェニロにある所領を譲渡しているが、本書後半で公開されている文書から明らかな如く、譲渡文書がベシウの宮殿から発給されていることは明らかである。856年シャルル禿頭王は「フランク人とアキテーヌ人に向けた」勅令を、「ベジウからハダブラヌスとベトを介して」公布している。ランス大司教アंकマールが同王に教会の自由が守られるべく書簡を記した時、まだラン司教アंकマールは盲目になっていなかったし、また王ロテールも死去していなかった。その書簡の中で同大司教は「今、リウドはピートルーそこで恐らく861年宗教会議が開かれていた<sup>4)</sup>」にいるが、そこから彼をベジウに送り届けることを私は願っていた」と述べている。ベジウの宮殿広間 (salas) において、サン・ピエール司教座教会に宛てて、シャルル禿頭王の文書2葉、ボーヴェのサン・リュシアン修道院に宛てて、彼の在位の30年に文書が発給されている<sup>5)</sup>。筆者は少し前まで、ここでの「サラスsalas」は「宮殿」と置き換えることができると考えた。しかし、サン・リュシアン修道院の文書を見て、精査することによって「サラス」はそのまましておくべきと判断した。その名称によってバジウの国王の主室atriumが意味されているかもしれないからである。その意味に従えば、サン・リキエ修道院年代記の中にある文言も、「修道院長の主室sala abbatis」となる<sup>6)</sup>。そして、筆者の友人、元モンテ・カシーノ修道院長、ベネデット・バッキオの『ポリノーネ修道院史』の史料編の中に登場する、皇帝オットー1世(936-973年)の使者エルメナールが諸々の訴えを聞くために滞在していたレゲンス教会の「sala domus」もこの意味である<sup>7)</sup>。これに関しては、本書補遺、11章を参照せよ。ルアンのサン・トゥアン修道院の文書集は「ゴズランに代わって書記オダシェが承認した。皇帝シャルル(禿頭)がフランスにおいて統治する36年、帝位の初年、インディクティオの9年、5月26日に発給された。ベジウの皇帝の宮殿において行われた」とある、別の文書を公開している。これと同じ頃の別の文書が、シフレの書において刊行されているが、著者は誤ってシャルルマーニュに帰している<sup>8)</sup>。この文書がシャルル禿頭王と関係していることは、「聖にして不可分の三位一体の名において」の開始書式のみならず、特によく知られた次の文言「ゴズランに代わって書記オダシェが承認し下署した。5月17日、インディクティオの9年、皇帝シャルル殿がフランスで統治する36年、帝位の初年に発給された。ベジウにある余の宮殿で行われた(後略)」によっても立証される。オダシェがシャルル禿頭王の書記であったことは確かで、ゴズランもシャルルマーニュの孫の文書官であって、その祖父の文書官ではなかった。

ベジウの森はノルマン人の事績録の中で、「886年、カルロマンは狩猟のためベジウの森にやってきた。

猪を射抜こうとした時、従者の1人、ベルトールが彼を喜ばそうと思って、誤って国王の脛骨を傷つけてしまった。負傷してから7日間生き延びたが、国王はこの地で亡くなった」のように言及されている。この少し後、宮殿はソム川流域を占拠していたノルマン人によって破壊されたと思われる。その後、この地は国王の手を離れて、ベジウの有名な家系の家長の手に渡る。多くの人々がAbacivumの綴りに騙されてきたことを、ここに記しておくことが適切であろう。確かに、デュシェーヌの書にはそうあるのだが<sup>9)</sup>、それは完全に間違っていたのである。即ち、「そして、Avaciavum 荘を脱して逃げ去った *atque Abacivo villa evadens aufugit*」とする代わりに、「そしてBacivum 荘を脱して*atque a Bacivo villa* (後略)」と書くべきだった。加えて、ラブはアブヴィルの地理に関する書で、サムソンについて異論を唱えているが、それも筆者の言に従ったに過ぎない。本書で初めて公刊された文書で、王クローヴィス2世または3世はサン・ドゥニ修道院の所領としてと、殆ど同じ名称を持つ村、つまり上ベシウと下ベシウを挙げている。ドゥブレの書においてペパン、本書で付加された書簡の中で同じくシャルルマーニュはヴェクサン郡内にこの村を比定している<sup>10)</sup>。加えて、今や、ヴェクサン地方のエプト川からそう遠くないところに、2つのベジウが存在するのが判明している。1つは、ゲールネ・アン・ブレ近郊の、地元でベジウ・ラ・フォレと呼ばれる村で、これが上ベジウに相当する。他の1つは、ジゾール近郊、ベジウ・ル・ロン(今日のベジウ・サン・テロワ)と呼ばれ、これが下ベジウに当たっていた<sup>11)</sup>。

#### 註

- 1) Baizieux (Sommes, ar. Amiens, c. Corbie).
- 2) 『ガリア属州・都市総覧』, 73頁参照。
- 3) MGH, SS. r. M., 2, p. 529では, Baizieux (Sommes, ar. Amiens, c. Corbie) に比定されている。
- 4) 『拾遺集』, 2巻, 824頁参照。
- 5) 『ポーヴェ史』, 243, 245頁参照。
- 6) 『拾遺集』, 4巻, 470頁参照。
- 7) 『ポリローネ修道院史』, 史料編, 8頁参照。
- 8) 『トゥールニュ史』, 190頁参照。
- 9) 『フランク史作家選集』, 1巻, 768頁参照。
- 10) 『サン・ドゥニ修道院史』, 693頁参照。
- 11) その後は, この地に比定する見解が通説となっている。Cf. MGH, DD, *Diplomatum karolinorum*.1, 1906, Hannover, p. 502; Giry, A. et al., *Recueil des actes de Charles II le Chauve*, Paris, 1955, 3, p. 272ではベジウ・ル・ロンが下ベジウに比定されている。

### XIII. マルヌ河畔のベリタス<sup>1)</sup>

マルヌ河畔のヴァンセンヌの森の近くに、筆者がその地の快適さから「ベリタス」Bellitas (フラン

ス語で「美」の意）と呼ばれているのを知った、城が存在していた。ジャン・フロワサル（Jean Froissart, フランスの年代記作家, 1337-1405年）は同地、ボテをヴァンセンヌの森の只中に比定している。しかし、（神聖ローマ）皇帝カール4世（1346-1378年）とフランス国王シャルル5世（1364-1380年）の会談に関して、公刊された小著は、マルヌ河畔のボテをヴァンセンヌから離し、それを「国王の館 domum Regiam」と呼んでいる。2人の君主カールとシャルルのどちらかに関して、ニコル・ジル（Gilles, N., *Les Annales et les Chroniques de France, de l'origine des François...*, Paris, 1492）はほぼ同じことを次のように記している。「国王は彼をヴァンセンヌの森、ボテ、その他の地へ連れて行き、歓待した」と。その後、シャルル7世（1422-1461年）の伝記の中でも、「ヴァンセンヌの森の近くの、ボテの地と城館」とある。後述されるシャルル5世（「賢者」とあだ名される）は1380年、ヴァンセンヌの森の館の傍にある、ボテ・シュル・マルヌの館で死去したと伝えられている。加えて、ボテの城の廃墟が今日でも見られるが、そこには明らかに国王のものではない、何か非常に古い建物があったとの噂を聞いたことがある。

註

1) Beauté (Val-de-Marne, ar. Nogent-sur-Marne, c. Nogent-sur-Marne).

#### XIV. ベロワ・アン・フランス<sup>1)</sup>

ラントフリデスはルイ敬虔王（814-840年）の治世の15年、パリ郡内、つまりビドレンシスの領域内にある幾つかの最高の所領をサン・ドゥニ修道院長イルドゥアンとの間で交換している。同者は上記皇帝の在位27年、妻テウトギルドと息子クンラドスとラントフリデスの同意を得て、パリ郡内、ビドリニ村Bidolidi-villaと呼ばれる場所にある、彼らの財産を譲渡している。所で、本書に掲載された文書にある如く、この譲渡は殉教者ジョルジュの教会の近くの、ビドリドゥムBidolidumの公設村で行われている。この2年後、修道院長イルドゥアンによって行われた修道院所領の分割に際してのみならず、862年の重要な宗教会議においても、ビドリドゥムが列記されている。ドゥブレの書において<sup>2)</sup>、宗教会議に関する文書の中で、テウトギルドがこの荘園をプレカリア契約で修道士たちから保有している事実が語られているが、その下署リストは本書で原本から採取されたまま印刷されている。ビドリドゥムまたはベドリトゥムBedolitu[m]は、イルドゥアンが文書で記している如く、地元でベロワ・アン・フランスまたは単にビスイーユと言われている村で、サン・ドニ修道院に一部が従属した荘園であった。しかし、この公営荘園の中に、ある時期宮殿が存在していたことに固執する気はない。

註

- 1) 本書では不詳となっているが, Dauzat, A. et Rostaing, Ch., *Dictionnaire étymologique des noms de lieux en France*, Paris, 1963, p. 69では, Belloy-en-France (Val d'Oise, ar. Montmorency, c. Viarmes) に比定されている。  
 2) 『サン・ドゥニ修道院史』, 795頁参照。

XV. ビガルギウム<sup>1)</sup>

王ダゴバール(1世, 623-638年)が人民全体集会を開いた, パリ小郡内のビガルギウムBigargiumと表記される土地の宮殿について, 同ダゴバールの事績録と同じくエモワンが言及している。しかし, その場所については, 全く触れられていない。パリ郡にはガルジュまたはガルギアエという地名が2つある。いと著名なアドリアン・ヴァロワによると, 古いカタログに出てくるもう1つはクルー川からあまり遠くなく, 王宮荘園でもあったボヌイユ・シュル・マルヌと呼ばれている。同名の他の1つはパリ地方にあるが, セーヌ川の対岸のロカンクールとヴェルサイユの近くに位置する。ビガルギウムの宮殿をどちらに定めるべきか, それとも別の場所に想定すべきか, この問いはその儘にしておくことにする。

註

- 1) 今日でも比定されていない。Cf. MGH. SSRM., 2, p. 416, note 2.

XVI. ベティシー<sup>1)</sup>

オタンネット川-ヴェルベリ近郊でオワーズ川に注ぐ一沿い, BistisiacumまたはBestisiacumと表記されるベティシーは同ヴェルベリとコンピエーニュの森の間に位置する。嘗てこの場所に宮殿があったことを, 見事な出来栄の遺跡が証明している。その建設者はフランス王ロバール(2世, 996-1031年), またはそれよりも彼の妻コンスタンスであったと言われている。デュシェーヌの国王アンリ(1世)の歴史書<sup>2)</sup>には, 彼女はロバールが亡くなると, 「夫の死後, 王国の最大部分, 即ちサンリスとサンスの町, 更にベティシーの城とドンマルタン, ピュイゾーとムラン, 更にはボワシーとクシー・ル・シャトーを自身の支配下に取り込んだ」とある。1155年と1161年にサン・ジャン・オ・ボワ修道院に宛てて発給された2葉の命令文書の中で, 国王ルイ7世はベティシーの宮殿に言及していて, 一時期彼がここで生活していたことをはっきりと示している。加えて, フィリップ(2世)尊厳王は彼の父のこの文書を1183年, 統治の4年, ベティシーで安堵している。同王はこれより少し前, 城を攻囲してフランドル伯フィリップを敗走させているが, これに関して, ギヨーム・ル・ブルトンは『フィリポド』の中で, 「ベティシーの城壁を再度の攻囲によって四方八方から攻め立て, 伯は強い力で短時間に城を制圧することの余

計な祈願を立てている一方、国王は大部隊を率いてサンリスの町を出た」のように記している。そしてそのすぐ後に、「しかし、慌てた伯は攻囲を途中で止め、大恥をかきながらキュイーズの森を通過して退却した」と続いている<sup>3)</sup>。ベティシー城の攻囲を解いて2年、つまり1185年国王フィリップ（2世）は再びベティシーに滞在している間に、礼拝堂をそこに建立する。次に、1189年コンピエーニュの施療院に文書を下付しているが、そこには「ベティシーの宮殿にて行われた」とある。これらの文書に続いて、1193年別の文書数通も同地で発給されている。その後、ベティシー城は城主家に渡り、彼らは教会や修道院の文書の中で王国の貴顕者に屢々数えられている。ピカルディーにおいても、ベティシー城が存在していて、サン・リキエ修道院長アンジルベールの奇蹟譚の中で言及されている。

註

- 1) Béthisy-Saint-Pierre (Oise, ar. Senlis, c. Crèpy-en-Valois).
- 2) 『フランク史作家選集』, 4巻, 148頁参照。
- 3) 『フィリビド』, 第2歌参照。

## XVII. ブールジュ<sup>1)</sup>

ベリー地方の都で、Bituricenseと表記されるブールジュに古代ローマ人が造った宮殿が存在していたことを、正当に否定する者はいないであろう。しかし、古いフランク人の編年記が767年の出来事として、「ロワール川を渡り、ブールジュに到着した」、「同地に宮殿が建設されるよう命じた」、「ブールジュで冬季を通じて、王妃バルトラードと一緒に宮殿で過ごした」と伝えているペパン（短軀）王の治世に、それが既に倒壊していたかどうかについては、筆者には分からない。同じ宮殿への言及は、シュジェールの書にも見られる<sup>2)</sup>。そして、一部の者はそれが、ベリー公ジャン（1世, 1360-1416年）によってより良い状態に改修され、いと有名な国王の弁護士（ニコラウス・）カテリノティウス（1688年没）が優雅に叙述している、それと同じであったことを願っている。

註

- 1) Bourges (Cher, ch.-l. dép.).
- 2) Suger, *Vita Ludovici grossi regis*, dans *Œuvres complètes*, éd. par Lecoy de la Marche, A., Paris, 1867, p. 96, 122, 262.

XVIII. ブロワ<sup>1)</sup>とシャンボール<sup>2)</sup>

嘗てブロワ伯の居所であったし、その後はフランク諸王の宮殿そして地域の書籍の所蔵館となった、Blesenseと表記されるブロワの城を見落とすことは、筆者はしないであろう。その場所はロワール河畔の、オルレアンとトゥールを結ぶ街道の中程に位置する。トゥール司教グレゴワールはブロワに言及している<sup>2)</sup>。アドルヴァルドがこの地で生まれたと伝えている、レランス修道院長聖エギルフ(630-676年)の伝記<sup>3)</sup>の中でブロワ城について、「ブロワ城はその側面に小山を持ち、それはロワール川の河原と接していた。そして同ロワール川は変わることなく流れ続けているが、どこよりもここで頻繁に見られる大量の魚は別である。また、幾つかの果実、ブドウと穀物類、その他人間の生活に欠かせないものに大いなる感謝を表している」と述べている。同様に、ルイ敬虔王の伝記には「ブロワ城」、『サン・ベルタン修道院編年記』には「ブロワ」が出てくる。同地で、伯ティボー1世(943-975年)は聖ロメールの聖遺物を受け取ると、国王の名称を篡奪したラウールがそれを承認している<sup>4)</sup>。同地にブロワ伯の宮殿があったことを、1073年に「ブロワ城で」、「宮殿の裏で」、「塔の傍で」、「同宮殿の暖炉のある部屋の間の中庭で」作成された、伯ティボー3世(1037-1089年)の多くの承認文書が教えてくれている<sup>5)</sup>。ブロワ伯領が国王の所有に移ると、ブロワの宮殿もまた国王の手に渡る。時々、アンリ3世(1574-1589年)は他のどこよりもそこに滞在していた。幸せな思い出と共に、この地を特に愛したのが、ブロワを自分のために取っておいた大王ルイ(14世、1643-1715年)の叔父、(オルレアン公)ガストン・ブルボンであった。

ブロワから3里(12キロ半)ほど離れたところに、フランソワ1世(1515-1547年)が「マドリッド城」と呼ばれる城と共に建てた、国王の安在所として有名な、Camborinumと表記されるシャンボールがある<sup>6)</sup>。同町から(南に)ほぼ同じ距離に、モン・プレ・シャンボールとよばれる土地が確認される。そこには、嘗て宮殿があったと聞いているし、堆積物と崩れた壁がそこで目撃される。更に、シャンボールには今日、国王から派遣された貴族の役人が駐在して、周囲に広がる平原を管理している。シャンボールはロワール川沿いにあり、ジャン・パピール・ル・マソン(1544-1611年)の証言によれば、ブーヴロン川とキュソン川がロワール川と組み合わせられて作られた島の中に位置している<sup>7)</sup>。

## 註

- 1) Blois (Loir-et-Cher, ch.-l. dép.).
- 2) 『歴史十卷』, 7巻, 2章と21章参照。
- 3) 『聖者記録集(ベ)』, 2巻, 657頁参照。
- 4) 同上, 4巻下, 246頁参照。
- 5) 同上, 4巻上, 761頁参照。
- 6) Chambord (Loir-et-Cher, ar. Blois, c. Bracieux).
- 7) 『フランスの河川』, 1巻, 80頁参照。

## XIX. ボヌイーユ<sup>1)</sup>

読者諸賢は、パリ郡に別の同名の村があることから、Bonogilusまたは Bonogilumと表記されるボヌイーユの宮殿、または王領地の場所を特定するのに苦勞するであろう。それらは、イル・ド・フランス地方、クルー河畔のゴネスに近いボヌイーユと、同じく、シェル修道院からそう遠くない、ブリー地方のマルヌ河畔にあるボヌイーユである。これら2つの場所に宮殿があったとしても、古い史料の中で、それを完全に立証するものはどこにもない。但し、ルイ敬虔王（814-840年）の伝記の中で、「伯ワリヌスと伯ベルナル、そしてブルゴーニュ地方から集められた非常に多くの仲間たちはマルヌ川に到達し、そしてそこで、つまりボヌイーユの荘園とその周辺にあった所領に数日間滞在した」との文章を読むならば、ここではボヌイーユ・シュル・マルヌが問題になっていると解釈すべきであろう。しかし、そこに国王の館が建てられていたとするならば、このボヌイーユがシェルの宮殿に非常に近いことが障害になるであろう。次いで、パリ地方の古村一覧の中で、ガルジュ村がクルー川、そしてボヌイーユの王宮荘園から遠くない所に位置づけられている。ここからボヌイーユの宮殿はブリー地方やシェル地方ではなくて、実際のところパリ小郡内に立地していたと推量することが許される。以上の諸説に、諸王によってサン・ドゥニ修道院に寄進されたパリ小郡内の、同じく以前王領地に属していたボヌイーユが加えられる。このボヌイーユは、この後から掲載される文書にある如く、同修道院の院長イルドゥアンがルイ敬虔王の統治の19年に国王と宗教会議の権威を後ろ盾に承認している所領の分割においても列記されている。両方のボヌイーユに国王の宮殿、そして国王の館があったかもしれない。856年ボヌイーユ荘において司教たちの公会議が開かれており、アंकマールと（フェリエール修道院長）ルーとがそのことに言及している。一部の人たちがどう判断しようが、高名なエティエンヌ・バリューズが勅令集に関する説明文の中で、この種の集会は一回限りであったことをはっきりと証明している。バリューズはこの個所の少し前で、伯エティエンヌの文書を引用しているが、そこには「(同伯は) パリにある聖母マリアと聖エティエンヌ、そしてジェルマン様の教会の長、インカドゥス（パリ司教、811-831年）に」、彼の財産のすべてを譲渡している。そして、そこには「ボヌイーユ荘で、皇帝シャルルの統治の11年に行われた」とある。ボヌイーユはマルヌ川の右岸、シェジー・シュル・マルヌの近くにもあって、シャルル禿頭王（843-877年）が統治の15年、そこに滞在していたことが、後で言及される文書で取り上げられている。同シャルル禿頭王が統治の8年、ポワティエ司教エプロワンにグランフィユ修道院を下付した時に滞在していた、ジャン・ベリーのポワティエ司教に関する書の中で名前が挙がっている、Bonogesilumと表記されるボヌイーユと同一であったかどうかについては、筆者には分からない。同じく、筆者はアミアンの近郊でも、ボヌイーユ村を発見している。

註

- 1) Bonneuil-sur-Marne (Val-de-Marne, ar. Créteil, ch.-l. c.), またはBonneuil-en-France (Val-de-Oise, ar. Montmorency, c. Garges-lès-Gonesse).
- 2) 『勅令集』, 2巻, 1062欄参照。
- 3) 『ボワティエ司教』, 17頁参照。

XX. ブレーヌ<sup>1)</sup>

ヴェール河畔の町, Brennacumまたは Brainaと表記されるブレーヌはソワソンからランスに向かう途中で出会い, ソワソン郡またはソワソン小王国内に位置し, クロテール1世(511-561年)が開設したと伝えられている王宮荘園であった。この考えは, ブレーヌ城が, ローマ人に敵対してガリア人の集会が持たれたとジュリウス・カエサルが伝えているその地Bibracemであると一部の人たちが夢想していることよりも, 遥かに真実に近い。確かに, クロテール1世はブレーヌに財宝を隠し監視していた。トゥール司教グレゴワールが言及している如く, 父が亡くなるとシルペリク(1世, 561-584年)はそれを受け取り, そこから他所へ移したようである。同グレゴワール自身もブレーヌの法廷に呼び出され, 裁判官たちから有利な判決を勝ち取っている。その後間もなくして, シルペリク(1世)の2人の息子, ダゴバール(580年没)とクロドバール(580年没)はこの地で流行病に襲われている。その後直ぐ, (先妻)アウドヴェラとの間にできたシルペリクのもう1人の息子, クローヴィス(580年没)は「王妃が亡くなると, 自身も彼女の死によって滅びるべく, この世を去った」とある。更に, フォルテユナ, フレダゲール, フランク諸王事績録などがブレーヌ荘に言及している。フロドアールは年代記の中でこの場所の災難と凋落について記している。『拾遺集』1巻<sup>2)</sup>において, 10世紀における修道士たちの父, つまり俗人修道院長下での副院長, サン・メダールのジェラルがこの場所に言及しているように見える。他方, その頃, 同上ジェラルとフロドアールの証言によれば, ブレーヌ荘はルアン司教座教会の権利下に従属していた。その後, この荘園は世俗の君侯の手に渡り, そこからブレーヌにおいて非常に有名な領主家系に付けられた格式の高い名前と王家との非常に親密な関係が生まれている。また, 同地はブレモントレ修道会の, 聖エヴォドに捧げられた修道院によっても有名である。

註

- 1) Braine (Aisne, ar. Soissons, ch.-l. c.).
- 2) 『古史料選集』, 1巻, 109頁参照。

## XXI. ブールシュレス<sup>1)</sup>.

ジョナスは聖コロンバン（615年没）伝の中で、あるいと聖なる人がBrocaria villaまたはBrucariusと表記されるブールシュレスに滞在しているブリュニシルドの許を訪れ、そしてティエリー（1世）の甥の放蕩について彼女を非難したと語っている。フレデゲールは年代記の中で、同妃がこの荘園をブルカリアクスBrucariacumと呼んだと伝えている。地元でブールシュレスと呼ばれている地は、シャロン・シュル・ソーヌとオータンの間に位置する。

### 註

1) Bourcheresse (Essonne, ar. Palaiseau, c. Arpajon, c<sup>ne</sup> Bruyères-le Châtel).

2) 『年代記』, 4巻, 36章参照。但し、版によって綴りがBrucaria, Brucariacum, Brocariacamと異なっていたようである。Voir MGH.SSRM, 2, p.135.

## XXII. ボルドー<sup>1)</sup>

Burdigalenseと表記されるボルドーの都市壁の外に、嘗て半円形の劇場があって、「ゴール人の宮殿Palatium Gallieni」と呼ばれていた。また、都市壁の外には別の宮殿もあったが、今では新しい囲壁の中に取り込まれている。それは「トゥテラエTutelae」と呼ばれる他の建物とは区別されている。フランス王ルイ7世（1137-1180年）の文書を読むと、そこには「言葉の化肉の1137年、余の統治の4年、ボルドーの余の宮殿にて公開で行われた（後略）」とある。

### 註

1) Bordeaux (Gironde, ch.-l. dép).

## XXIII. シャロン・シュル・ソーヌ<sup>1)</sup>

Cabilonenseと表記されるシャロン（・シュル・ソーヌ）はゴントランやティエリーといったブルゴーニュ王国やフランク王国の王たちの安在所で、宮殿を持っていた。フランク諸王の事績録の中で頻繁に見られる如く、彼らはそこによく滞在していた。シャロンで作成された彼ら自身や他の王たちの文書に関しては、ペラルールの書、同じくシフレのトゥールニュ修道院史の中のブルゴーニュ関係の史料を参照せよ。

### 註

1) Chalon-sur-Saône (Chalon-et-Loire, ch.-l. ar.).

XXIV. カドリウス・モンズ<sup>1)</sup>

9世紀に修道院長コンヴォワンとルアンの諸教父の事績録を著した古い作家はカドリウス・モンズ Cadrius monsまたは同地の宮殿について、「コンヴォワンは皇帝ルイの宮殿に到着した。その時同皇帝は属州アキテーヌ、リモージュ郡へ軍隊を率いていた。そして彼はその時カドリウス・モンズの宮殿に滞在していた<sup>2)</sup>」のように記している。ここ、カドリウス・モンズに置かれた宮殿は、これまで多くの碩学たちと意見を交わしてきた限りでは、リモージュ小郡の、ルイ（敬虔王）が訪れたと天文学史家が伝えている、Jocundiacumと表記され、地元でジュアクと呼ばれる、王の安在所以外のどこでもないと筆者は考える。しかし、この問題を詮索しすぎる同人には、リモージュ小郡内の、リモージュから精々3里（12キロ半）しか離れていない、今日レ・カールと呼ばれている、誠に高貴な城が障害になるであろう。何故なら、その立地と呼称が上記のカドリウス・モンズとその宮殿に合致しているのです。ジュアクについては、後述されるであろう。

## 註

1) Cadrius Mons（不詳）。

2) 『聖者記録集（ベ）』、4巻下、200頁参照。

XXV. シェル<sup>1)</sup>

CalaまたはKalaと表記されるシェルの宮殿は、王妃聖バルティルド（クローヴィス2世の妻、680年没）の小伝から、クローヴィス1世（509-511年）の時代と関係していると推量される。同書には、「クロティルドと呼ばれている、同クローヴィス（2世）の妻はシェルに最初に、聖ジョルジュに捧げられた聖なる処女たちの修道院を創建した」とある。実際、このいと敬虔な王妃が修道院を建立するに際して、この地を指示した理由は何であったのか。それが王領地でなかったとすれば、恐らく婚資として彼女に下付されていたのであろう。トゥール司教グレゴワールは、「国王（シルベリク1世、561-584年）自身がパリ都市管区のシェルに到着した」のような言葉で、シェルに言及している。そして間もなく、獄舎に入れられた息子クローヴィスを、殺害する目的で継母フレデゴンドに委ねた。そして彼女は「マルヌ河畔のノワジー<sup>2)</sup>の荘園で」その殺害を終えたとのことである<sup>3)</sup>。シルベリク（1世）自身もシェルで殺されると、同じくグレゴワールの言によれば、「彼の財務係たちもパリ都市管区のシェル荘から連れ去られ、モー-そこには、シルドベール2世がいた-に運ばれた」。幸いなことに、王妃バルティルドはシェルを去ると、サン・ジョルジュ礼拝堂を壊して、少女たちの修道院を建立し、そこでいよいよ自らも修道女になり、いと神聖なうちに生涯を閉じた。同地でバルティルドの息子、王クロテール（3世、654-

673年)が埋葬に供せられたことを、500年前に建てられた彼の墓に依拠して、地元の人たちが証言している。そして、彼の兄シルデリク(2世, 650-675年)もシェルの森の中で、妻と息子ダゴベールと一緒に死んだと伝えている。ダゴベール3世(711-715年)の息子、王ティエリー(4世, 720-737年)は「シェルの人」と呼ばれているが、恐らくそれは彼がそこで幼少期を過ごしたからであろう。

カロリング初期諸王によっても、彼らがそこで時を過ごすことが少なかったにしても、シェルの宮殿は同じように威厳をもって見られていた。何故なら、804年シャルルマーニュはシェルに来て、寝ている妹ジゼールをじっと眺めていたし、ルイ敬虔帝は統治の20年、帝妃ジュディットの生母である、尊き院長ハイルヴィヒが修道女の大集団を統括していた、シェルの修道院を訪れたと、同ルイも立ち合った、聖バルティルドの遺骸奉遷を記した作家が述べている<sup>4)</sup>。加えて、シャルル禿頭王(843-877年)は統治の21年、自身に代わって妻エルムントリユードに同修道院の監督職を委ねている。彼はシェルで作成された文書を修道院長ルイとシジウムンドとの間で行われ、シャンブリー郡内に住む非自由人の交換のために発給している。シャルル単純王(893-929年)がシェル修道院長ロティルドに加えた悪行、つまり彼女がこの地を助言者であるハガノの手に譲り渡したとして、彼女からこの地を取り上げた行為を、ここに記しておくことにする。

カペー諸王にも、カロリング初期諸王と同様の愛着が認められる。何故なら、彼らは王国の首座をパリに定めたが、シェルの宮殿にも往時の威光を蘇らせた。それ故、王ロベール(2世, 996-1031)はここで諸司教の宗教会議を開催しているが、そのことをサン・ドゥニ修道院に発給された命令文書の中で、「5月17日、余の安在所、シェルの宮殿にて」と自ら証言している<sup>5)</sup>。この公会議は1008年にシェルで開催されていて、それに関する史料はラブ編纂の書にある<sup>6)</sup>。ロベール(2世)は別の法廷、または公会議を既にシェルで開いていて、それらに関してはジェルベール(11世紀の代表的知識人、後の教皇シルヴェステル2世, 999-1003年)がトゥールのサン・マルタン参事会教会に宛てた書簡の中で言及している。同王は「同教会の参事会員たちが法廷を開くべく」、他の司教たちと「シェルに」来るよう命じた。王ロベール(2世)の時代のある風刺詩には、「シェルからヴォルジュ<sup>7)</sup>へ、ヴォルジュからパリへ行け」とある<sup>8)</sup>。聖ジェルマンは、同聖者の史料の中で読むように、サンス郡内にある、自身がアゴヌの諸聖人のためにオーセルに建立した教会にワルシアクを派遣している<sup>9)</sup>。また、それらの史料には、「見事な宮殿が含まれる」ヴェルジェをサン・テティエンヌ母教会に譲渡したと記されている。今日、シェルの宮殿の遺跡は殆ど残っていない。その地は農村の土地に変わり果てているが、シェルの教会の裏にある宮殿の跡地は今日でも地域では有名である。この宮殿の敷地内にあった聖マルタンに捧げられた聖なる教会は、今日でもその遺構が確認できるが、それには2つの礼拝堂、1つは聖セゼール、1つは聖レジェに捧げられたものが併設されていたと言われている。

註

- 1) Chelles (Oise, ar. Compiègne, c. Attichy).
- 2) Noisy-le-Grand (Seine-Saint-Denis, ar. Le Raincy, ch.-l. de c.). Voir Giry, A., *Manuel de diplomatie*, Paris, 1894, p. 61-62.
- 3) 『歴史十卷』, 5巻, 39章参照。
- 4) 『聖者記録集(ベ)』, 4巻上, 450頁参照。
- 5) 『サン・ドゥニ修道院史』, 826頁参照。
- 6) 『公会議集成』, 9巻, 787欄参照。
- 7) Vorges (Aisne, ar. Laon, c. Laon-sud).
- 8) 『古史料選集』, 3巻, 533頁参照。
- 9) 『新図書』, 1巻, 415頁参照。

## XXVI. シャメソン

Cambisonumまたは Cambissonumと表記されるシャメソンにはプロヴァンス王シャルル(855-863年)の宮殿があったと、同王がヴィエンウ大司教アジルマルに下付した文書が教えている。同文書には「我々の栄光に満ちた王シャルル様が統治する2年, 5月18日に発給された。シャメソンの宮殿にて行われた。神の名において, 幸あれ」とある。しかし, 同文書は「永遠の神である, 我が主イエス・キリストの名において, シャルルは神の摂理に命じられたる国王, 嘗ていと敬虔で尊厳者であったロテールの息子」といった文章で始まっている。将来この地の場所を探查する人に対して, デイジョンの上院議員, フィリベール・ド・マラは, セーヌ河畔の多くの人が住む村を提示する。この村は同じく, セーヌ河畔のシャティオン・シュル・セーヌから1里(4キロ)離れた, 地元の人によってシャメソンと呼ばれている<sup>1)</sup>。そこでこの地の知事, いと高名なメスグリニウスが, その古さと大きさにおいて人々を圧倒している城を所有している。しかし, この地はシャメソンの宮殿があったプロヴァンス王国には属していなかった。多分, ヴァランス司教管内のコンボヴァン<sup>2)</sup>ではなかろうか。

註

- 1) Chamesson (Côte d'Or, ar. Montbard, c. Châtillon-sur-Seine).
- 2) Combovin (Drôme, ar. Valence, c. Chabeuil).

## XXVII. シャンブリー<sup>1)</sup>

1千年前にある高官のヴァンデミルに帰属した, 公的法廷または公的集会が開かれていた, CamliacumまたはCameliacumと表記されるシャンブリーの公営村vicusは, 嘗てはボーヴェ地方における有名な郡庁所在地で, その頃まで2つの隣接教会が存在していた。地元の人々によってシャンブリー

と呼ばれているこの地は、オワーズ川から1里（4キロ）離れたリル・アダンとボモン・シュル・オワーズと等距離で対峙している。ドゥブレの書に収められたプロドゥルフスの娘、母テオディラナまたはテオデトルドの文書の中に、シャンブリー郡に関する最も古い記述がある<sup>2)</sup>。即ち、同母は「クロテール2世の統治の43年」、つまり625年「シャンブリー郡、マガキンセの領地にあるマトリウスの荘園を家屋、非自由人、ブドウ畑と共に」譲渡している。その少し後、「テオディラと名乗るある修道院長が王」ダゴベール「に譲渡していた、シャンブリー郡内のシャンパーニュ・シュル・オワーズ荘を、同王は同じ修道院に戻した」と、王ダゴベール（1世）の伝記が伝えている。シャンブリー郡内の同上の荘園はシャルル禿頭王（843-877年）の、統治の21年に交付された命令文書と修道院長バボルの小伝の中でも言及されている。

クローヴィス2世（635-656年）の樹皮で作られた、殆どバラバラの状態で伝存する文書を参照せよ。それによると、王ダゴベール（1世、623-638年）がサン・ドゥニ修道院に寄進していた、「シャンブリー郡内、オワーズ河畔のクルーイ荘」が同国王に戻されている。上記クローヴィス（2世）の息子、ティエリー（3世）は、ドゥブレの書に収められた真正文書の中で、エルメンテウス某がサン・ドゥニ修道院長ゴドバルにシャンブリー郡内、「オワーズ河畔のバウドリヌム」荘を売却したことを認証している<sup>3)</sup>。ある高官のヴァンデミルは妻エルカンベルトの同意を得て、遺言によって幾つかの教会に対して行った自身の財産の大規模な寄進の中で、同上郡内のノヴィリアクスとガンドルフォルクティスの荘園を数え上げている。そして、この寄進は「王ティエリー（3世）の統治の17年、シャンブリーの公営村にて行われた」となっている。ティエリー（3世）の息子、王クローヴィス（3世、691-695年）の統治の2年、「シャンブリー・ロベルジェ郡内にある、オワーズ河畔の」ノワジー・シュル・オワーズ荘が、リュザルシェの大法廷での判決によって、アンガントルドからサン・ドゥニ修道院長カイノの手に渡っている。また、シルドベール3世の、統治の2年にノジャン・シュル・オワーズで発給された有名な命令文書が本書で公開されているが、それによると、シャンブリー郡内にあるテュソンヴァル修道院がその時の院長で、後に司教となるシャルデリクによって、聖なる戒律の下に創建され寄進を受けたことが、修道院長マグノアルドとシャルデリクの孫たちのために確認されている。上記王シルドベール（3世）は統治の3年、同テュソンヴァル修道院にシャンブリー郡内にあるノワジー・シュル・オワーズ荘を再度下付している。

王位に就く前、宮宰バパン（751-768年）は、ドゥブレの書によると、サン・ドゥニ修道院の財産の中に、シャンブリー・ロベルジェ郡内にあるボルネルの所領を列挙している。彼は、同じく、統治の初年、同郡をボーヴェ地方とヴェクサン地方の間に位置づけている<sup>4)</sup>。本書で公開されているシャルルマーニュ（768-814年）の、統治の9年にサン・ドゥニ修道院の財産を安堵している文書には、シャンブリー郡内のボルネルとニアラが取り上げられていて、加えて、同ニアラはシャルル禿頭王の別の文書にも出

てくる。他方、ルイ敬虔帝（814-840年）は帝位の7年、サン・ドゥニ修道院長イルドゥアンとハイラルドスとの間で締結された、シャンブリー郡内にあるバゲルナ荘の交換を確認している。

以上に加えて、シャルル禿頭王（843-877年）は本書で公刊されている種々の文書で、同シャンブリー郡内の所領を次の順序で言及している。統治の5年、オワーズ河畔のモランシー荘とクルーイ・アン・テル（荘）。統治の12年、ブリュエール・シュル・オワーズ荘、サン・ヴィヴィアン教会、ニアラ。統治の21年、ブリュエール・シュル・オワーズ荘、レ・ゾバン、クルケラス。これらの後に、アスニエール・シュル・オワーズ、ロンクロール、フラメレイアス、ヴェテリナス、コルニアクス荘、フランコルム・コンキデス、ビヒネイアス、森の中にあるアングルス・ヒドラダナエなど、交換によってサン・ドゥニ修道院に譲渡された、シャンブリー・ロベルジュ郡内の幾つかの荘園を確認している。これらすべてはシャンブリー郡が真に高貴で、広大で豊かであったことを見事に証明している。

しかし実際には、ずっと以前から、シャンブリー王宮荘園は王領地でなくなっていた。即ち、シュジェールはルイ肥満王（1108-1137年）の伝記の中で、シャンブリー城をボーモン伯マティユの所領として列記している<sup>5)</sup>。この時から、この地はCamiliacumと綴られるようになり、以後この綴りがこの地の著名な領主家系の名を広めることになる。それらの1人、ガンドウリュ領主、ウダール・ドゥ・シャンブリーは1292年、ソワソンのノートル・ダム修道院にクブリュにあった沢山の領地を売却し、またその他の領地を同修道院で修道女になったマリーとニコルのために譲渡している<sup>6)</sup>。また、前者マリーは同修道院の製パン係になり、その気前の良さで名を知られた。後者ニコルはカン・ラ・トリニテ修道院の監督のために呼ばれた。上記ウダールは、一般に言われているところの、会計院の国王帳簿で頻繁に言及されていて、その中で国王との間で領地の交換が何回も行われているし、別の領地を丸ごとまたは部分的に売却したと一度ならず記されている。今でも、この有名なシャンブリー領主家は繁栄しているが、多くの分家に分かれていて、往時の財産の少なくない部分を失ってしまっている。

#### 註

- 1) Chambly (Oise, ar. Senlis, c. Neuilly-en-Telle).
- 2) 『サン・ドゥニ修道院史』, 653頁参照。
- 3) 同上, 687頁参照。
- 4) 同上, 693頁参照。
- 5) 『ルイ肥満王伝』, 第4章参照。
- 6) 『ノートル・ダム・ドゥ・ソワソン修道院史』, 200, 328頁参照。

## XXVIII. シェーヴルモン<sup>1)</sup>

シャルル単純王(893-923年)が公ジリバールにその他の所領と共に引き渡した、ロテールの王国に帰属した、Capra-monsと表記されるシェーヴルモンの王宮莊園を、フロドアールはラン司教管内のムーズ河畔に措定している<sup>2)</sup>。『聖ルマクル奇蹟譚』の匿名の作者は、「その頃、我々はノルマン人の狂気から避難しようとして追い込まれていた、シェーヴルモン城から急いで引き返すことにした」との文章で、シェーヴルモンに触れている。ジェルバール(後に教皇シルヴェステル2世、999-1003年)は書簡の中で何度かこの地をCapri-monsと呼んでいる<sup>3)</sup>。980年、この地はリエージュ司教ノトジェールの手に渡っていたのであるが、ずっと以前に根底から朽ち果てていた。

### 註

1) Chèvremont-Fontenelle (Territoire de Belfort, ar. Belfort, c. Danjoutin).

2) 出典不明。

3) 『書簡集』, 102, 103番参照。

## XXIX. シャトゥー<sup>1)</sup>

CaputunacumまたはCaptonacumと表記されるシャトゥーの宮殿の起源をシルドバール(1世、511-558年)の、少なくとも晩年—もしそれ以前ではないとすれば—にまで遡らせることができることを、まずシルドバール自身の2通の命令文書が立証している。その1つにおいて、ハレガリウスとその妻トルダナによる寄進が、院長テネスティナが司る修道院のために、ル・マン司教イノサンに対してなされているが、古い文書断片においては、「余の統治の7年、シャトゥー Opatinacoにて批准された。神の名において、幸あれ。アーメン」となっている。他の1つには、聖カレに対する同司教のプレカリア契約による寄進とサン・カレ修道院の建立を確認したあと、そこには「余の統治の15年、6月8日、シャトゥー Opatinacoにおいて。神の名において、幸あれ」とある。この名前が記された、第1王朝の諸王の真正文書を検査した者であれば、両方において、OpatinacoがCaptunacoに置き換えられるべきであることを容易に認めるであろう。何故なら、この後本書で公刊されるクローヴィス3世(691-695年)の命令文書の原本において、それを見てもらいたかった経験豊かな人たちは、一画一画を見比べることによって、Caputunacoと記されているのを知るであろうから。筆者自身を含め、最初に見た時は、殆ど全員がEpatunacoと読んでいた。この地に、フランク王テオドバール1世または2世が統治の2年に滞在していた。その時、ル・マンに聖マルタンのための礼拝堂が建立され、同王は司教の権利下に置かれることを認可している。これに関して文書が交付されているが、それらの古い写本に関して、当初筆者はその

古さを認めていなかった。また、クロテール2世もシャトゥーの宮殿に滞在していたことをアミアン司教ベルテフリドの、コルビーで発給された見事な特権文書が教えてくれている。ここには16名の司教が下署している。この文書の末尾は「この特権文書はクロテール王の統治の7年、9月6日、シャトゥーの宮殿にて作成された。神の名において、助祭シゴがこの特権文書を記し下署した」のようになっている。この同じ場所で、シャルトル司教アジラルは王シルドバール3世の統治の2年、「都市壁の傍の」、ロワール川沿いに建てられた「ノートル・ダム修道院のために」、特権文書を発給している。この修道院は同司教の前任者アデオグトの母が建立したもので、クロトカリウスと名乗る院長がその当時修道院を監督していた。加えて、本書で公刊されている通り、この特権文書の真正の写しが伝存する。確かに、端っこが切り取られてはいるが、それが見せている特権文書としての間違いのない書式、そして特に、17名の司教とその他の人々の人目を引く、残された下署—この年、シャトゥーで司教たちの宗教会議が開かれたことを明らかにしてくれている—によって、最高の敬意が払われるに値するものである。この特権文書では、「我々の主人、いと栄光に満ちた王シルドバールの統治の2年、シャトゥーにて公開で」の統治年の記載が前置され、それに「3月6日に作成され交付された」との文言が続いている。

サン・ドゥニ修道院の文書庫から探し出されて、本書で公開されている交付文書においては、王クローヴィス（2世、635-656年）が上記アジラルよりも先行している。そこには「貴顕の人、宮中伯アンソアルは」キュネバールに対して、幾つかの荘園がクロトカリウスに帰属していることを「証言した」。そして、キュネバールは「同宮中伯が藁しべによって約束し実践するのを見た」。「タブタド」—筆者はこの読みをとりたい—は判決を「承認した」。「文書は交付された。これは8月12日、余の統治の初年、シャトゥーにて、幸あれ」とある。クローヴィス（2世）のこれらの文書と、ヌストリーの高位聖職者たちの2回の会合が、シャトゥーの荘園が非常に有名であったことを十分に立証している。しかし、その場所を探求する者たちにとってはまだ十分でない。CaptoniacumをAntonacum またはAutunacum、ライン河畔の城所在地Andrenakと解する人たちは誤りを犯している。加えて、デュシェーヌ編のフレデゲールの（『年代記』）第40章の劈頭で、一部の人たちはAntonacumをCaptoncumと読むべきだと考えている。他のことは割愛するとして、何故にオストラジーにおけるクロテール3世（656-670年）の統治の7年となっているのか。彼自身ではなくて、シルデリクがオストラジーを統治していたのである。また、何故にヌストリーの司教たちが。彼らは同王が相続した王国の境界の外で宗教会議を開いたのである。従って、シャトゥーの所在地がヌストリー内にあったとすれば、それを一層明確に特定しようとする人は、筆者に大きな感謝をすることになる。Antonacumは我が国の諸王の貨幣でも確認される。一部の人たちは、いと著名なアドリアン・ヴァロワの言によれば、アルジャントイユからそう遠くない、セーヌ河畔の村、シャトゥーと考えているようである。貨幣銘で文字pが省略されることはよくあることである。

また、文書における同じ文字の余分な追加に至っては、もっと多かつたであろう。ここがシャトゥーの宮殿の真にして実際の場所であることに、筆者は喜んで同意する。

註

1) Chatou (Yvelines, ar. Saint-Germain-en-Laye, ch.-l. c.).

### XXX. 第2ベルジカの王宮荘園, キエルジー<sup>1)</sup> に関して

#### 議 論

ある時から、碩学たちの間で、嘗ては非常に著名で周知の国王安在所であったが、今では知られなくなり、記憶からも消え去ろうとしている、Carisiacumと表記されるキエルジーの王宮荘園の場所を巡って論争が起きている。第1王朝の諸王がそこを頻繁に訪れ、第2王朝の諸王がそこで会議をもち、非常に多くの司教たちの集会在そこで開かれ、その他よく知られた出来事がそこで起きていた。これらの話題は特に教会や社会の歴史に大いに役立っている。しかし、就中キエルジーの場所に関する、ある人はオワーズ川沿いの、今日キエルジーと呼ばれている集落に比定し、ある人はラ・セーレ河畔に求め、それをCreciacum (と表記されるクレシー・シュル・セール) の町と関係すると考える。まず、最初の見解を著名なアドリアン・ヴァロワが擁護する<sup>2)</sup>。後者のそれはフィリップ・ラブが公会議開催地一覧の中で支持し、近年多くの人々がそれに従っている。

そして、筆者はこれらの見解に、原則論では、賛同する。しかし、少なくない論拠が疑うべき機会を筆者に提供している現在、これに関する筆者の論考が公論に裨益することと判断し、その立地を確かな理由から探究することに決めた。そこで、少し前第2ベルジカに赴いた時、キエルジーの地名が最近の研究者たちによって帰せられてきた2つの場所を入念に踏査した。そして、地元の人々から、これに関して重要と考えられることすべてについて、聞き取りを行った。そして、キエルジーの場所に関する情報を我々に提供している最も信頼できる、そして思い込みが筆者を誤らせないために、碩学たちをも納得させられる史料が発掘されたことによって、ついに筆者は自身の願望に終止符を打ったのである。

I. キエルジーで起きた出来事から始めることにする。それらの予備知識によって、この地の品位と名声、それ故その場所が一層容易に理解されうるのである。

筆者の手元には、キエルジーに関する証拠として、シティユ(サン・ベルタン)修道院の修道士フォルカンの文書集の中にあるものよりも古いものはない。そこにはクローヴィス2世の息子、王ティエリー(3世、670-691年)の、院長ベルタンに下付された文書がある。その中でシティユ修道院の院長ベルタ

ンがキエルジー荘の宮殿にやっつき、そして「アマルフリドと彼の母シルデベルタナが聖母マリアと聖ポリヌのために、エスコー河畔のオンヌクールと呼ばれる地に建立した」修道院の自身への譲渡を「確認するよう」要求したとある。そして国王はそれを行っているが、「彼の統治の14年、4月1日、キエルジーの宮殿で」文書は発給されている。これが、当時諸王がこの荘園を頻繁に訪れていたこと、そして宮殿がそこに存在していたことの論拠となっている。

同ティエリー（3世）の息子シルドベール3世（695-711年）もこの場所の利用を快く思っていたことは、筆者によって刊行された、リムール修道院に関する同王の法廷文書が証明している。そこで同シルドベール（3世）は、彼の在位の7年、「キエルジーにおいてCarraciaco」、同修道院をパリのサン・ジェルマン修道院の修道士たちの権利に服させたとある。その少し後、つまり741年、キエルジーはシャルル・マルテルの死去によって有名になる。これに関して、フレデゲールの『年代記』補遺の中で、「パリの君主、シャルル（・マルテル）は殉教者聖ドゥニの教会を多くの贈り物で富ませた。そしてオワーズ河畔にある宮殿の荘園キエルジーを訪れるが、高熱に冒され、平和の裡にこの世を去った」のように語られている。同じ記事は、後代の年代記作家の書においても読むことができる。しかし、シャルル（・マルテル）の遺骸は同地からサン・ドゥニの教会に移送されている。何故なら、王宮荘園においても宮殿においても、我々の諸王の遺骸が埋葬される習慣はなかったから。しかし、エクス・ラ・シャペルで死去し、そこに埋葬されているシャルルマーニュは除外される。但し、筆者がサン・ドゥニ修道院の文書庫で手書きされたものを読んだ文書で、自ら証言している如く、彼は自身の墓をサン・ドゥニの教会に用意していたのである。同文書庫には、「キエルジー荘の宮殿において、王ティエリー（4世）の死から5年、9月17日」に下付された、シャルル・マルテルの文書も存在する。この文書を、シャルル・マルテルは、彼の死の少し前に発給している。

753年、つまりローマ教皇ステファヌス2世がランゴバルド族に対する援軍を要請するために、フランク人のペパン（短軀）王の許に避難した時、「尊敬すべき教皇の催促と祈念に応えるべく、ペパンはキエルジーと呼ばれる地に急行し、そしてそこで自己の王権下にあるすべての高位高官を招集し、彼らに教父のかくもの要請を知らしめ、キリストのご加護を得て、同教皇と共にそれを確認し、一丸となってこの要請に応えることを決意した」と、教皇ステファヌス（2世）の伝記の中で、広く知られたアナスタシウスが伝えている。エジナルはこれに加えて、国王の弟で、既に修道院に入っていたカルロマンは、これに反対していて嫌がっていたが、自身が所属するモンテ・カシーノ修道院の院長、即ちオプタスの命令に従って、それを承認したと伝えている。

加えて、その時、教皇ステファヌス（2世）はこの地に連れてこられているが、アナスタシウスが教皇ハドリアヌス1世（772-795年）の事績録の中で証言しているところによれば、そこでペパン（短軀王）

とその息子シャルル（マーニュ）とカルロマンによって、ランゴバルド人に略奪されていた財産をローマ教皇に戻すという約束が彼に対してなされている。しかし、教皇ステファヌス（2世）は種々の決議に対して、請われて返事を出しているが、それらは「フランクシアのキエルジーの荘園に滞在していた時、問われた種々の決議に関して、ブレティニー修道院に与えた教皇ステファヌス2世の返答」と言った表題を掲げている。これと関係するのが、非常に古いフランク人の編年記の中で、764年王ペパン（短軀王）がフランク人と「大集会」をキエルジーで持ったという記事である。加えて、同王はこの宮殿で760年と764年に、復活祭とクリスマスをお祝っている。

シャルルマーニュもこの地を同様に輝かせている。781年「バイエルンのレーゲンスブルク司教スイドベールはバイエルン公タシロからの人質をキエルジーの国王の面前に連れてきた。国王は同荘園で冬季を過ごしており、クリスマスと復活祭をお祝った」と、エジナルその他が、以上のように伝えている。加えて、このキリスト教のこの上ない信仰者である君主は2つの祝祭をこの地で、775年と782年にも行っている。

他方、804年シャルルマーニュはローマ教皇レオ3世がクリスマスと共に祝うことを望んでいるとの報告を受けると、早速、自分の息子シャルルにサン・モリスの町で会うことを通達し、自身はランスに向かって教皇を出迎えた。「そこで迎えられると、まずキエルジー荘でクリスマスをお祝い、次にエクス・ラ・シャペルへと誘った」とある。このようにして、最高の敬意をもって復活祭と同様に、クリスマスがフランク人の諸王によって古くから祝われるのが習慣であった。そこで毎年誰かが祝祭日を祝っていたことが、エジナルやその他の作家たちによって編年記に記される程であった。

以上に加えて、シャルルマーニュの文書数通がキエルジーで交付されているのを見いだす。それらの中の2通はサン・ドゥニ修道院に宛てたもので、彼の「統治の7年」、つまり774年、「3月14日」に発給されている。

シャルルマーニュが死ぬと、エジナルによれば、尊厳者ルイは820年キエルジーで集会を開き、そこで、慣習に従って、秋の狩猟を実施し、そこからエクス・ラ・シャペルに戻っている。続いて、827年、同じ作者の言によると、「コンピエーニュとキエルジー、そしてそこから近くにある他の宮殿を、冬季の開始まで巡回した」。同皇帝の伝記では、「コンピエーニュとキエルジーの間の森で狩猟に夢中になった」となっている。更に、834年、サン・ドゥニ修道院で玉座に再び座した後、そこからナントウイユを経由して、キエルジーの王宮荘園を訪れている。そこに滞在して、自身の息子たちと彼らの従者たちを待っていた。3年後、この地で息子シャルルを王冠で飾り立て、彼にヌストリーを付与した。この記述はニータルに基づくが、ルイ（敬虔王）の伝記も彼の言に従っている。

ルイ（敬虔王）の死後、彼の息子シャルル（2世、禿頭王）は「キエルジーの宮殿を訪れ、伯アダル

ハルトの姪を妻に迎え、そしてクリスマスと御公現の祝祭日を祝うために、殉教者聖カンタンを記念して作られたサン・カンタンへ向かった」と、『サン・バルタン修道院編年記』にある。この後、843年ガリアの司教たちはオルレアン小郡のジェルミニー・デ・プレに集まり、コルビー修道院に対して、ルイ敬虔王と彼の息子シャルル（2世）が同修道院に贈与していたものすべてを安堵した。同じく、シャルル（2世）は「彼の統治の4年、10月14日、インディクティオの7年」司教たちの確認文書を自身の命令文書で強めた。そして、この文書は「キエルジーにあるサン・ソヴール荘で」発給されている。2つの出来事、即ち、これまで知られていなかったガリアの司教たちの公会議とコルビー修道院に宛てた国王の権威に関する文書は、『聖者記録集（ベ）』4巻で刊行されている。

同じく、シャルル（2世）の治世において、同じ場所で種々の宗教会議が開催されている。最初の会議はオルブ修道院の修士ゴテスカルクスに対するもので、彼は「キエルジーの宮殿における宗教会議で」再尋問されて有罪を宣告され、加えて司祭職を剥奪されたうえ、849年鞭打ちの刑に処せられ、獄舎に収容されている。同様に、4年後、『サン・バルタン修道院編年記』によると、キエルジーでシャルル（2世）禿頭王の臨席のもと、司教たちによって4通の勅令が批准されている。

3番目の宗教会議は857年に同地で開かれており、そこで司教たち全員とその他の高位者たちの決議により、国王シャルル（2世）によって、王国内で蔓延していた略奪と拉致行為を罰する法令が発布された。

この翌年にランスとルアンの両大司教管区の司教たちによって決定された第4の宗教会議において、彼らが集まっていたキエルジーの宮殿から、ルアン司教ウエニロとシャロン・シュル・マルヌ司教エルチャンラド（857-868）を介して、アティニーに滞在していた国王ルドヴィヒの許に催促状が届けられる。『ランス史』の中で、フロドアールがキエルジーでの出来事として伝えていることは、これらのうちの1つと関係している。

最後が10年後の第5の宗教会議で、ランス大司教管区の司教たちがその他の者たちとキエルジーのサン・何々教会に、シャロン・シュル・マルヌ司教になる予定の司祭ウィリパール（868-878年）の審議のために集まっている。彼の司教叙任は3日後、即ち12月5日、ランス司教管内、ノワイヨン小教区、ブレティニー修道院において実施されている。つまり、ブレティニーは当時はノワイヨン司教管区に帰属していたが、今日ではソワソン司教管区に含まれる。

870年王シャルル（禿頭王）はレスティエヌから「サン・カンタン修道院を通り、そこからキエルジーを経てコンピエーニュに到着、秋季の狩猟をキューイズの森で実施した」。最後に、877年ヴェルジニー荘にいた時、同王は重病に襲われて床に臥す。「回復すると、キエルジーを経由してコンピエーニュに到着する」。その後、イタリアに旅立ちたいとのことで、直ぐキエルジーに戻り、そこからコンピエーニュ、

続いてソワソン、ランスへの旅程を組んだ。

以上に加えて、同王はキエルジーで種々の勅令を發布している。即ち、1通は856年にフランク人とアキテーヌ人に宛てて出されたもの、1通は翌年に按察使と伯に宛てたもの、そして858年の封臣たちの誓約と同王自身の誓約に関するもの、続いて、861年に出されたもの。同じく、873年に最高法廷で出された勅令、最後に王位と帝位の最後の年に当たっていた877年の同王の勅令。これらの勅令の中で、同シャルル（禿頭王）の息子、ルイ2世（吃音王）の狩猟地から、「キエルジーが彼の森林と共に」「同様に、サン・セルヴェがラン全域と共に」排除されている。これらに、シャルル（2世）がこの地で発給した種々の文書を加えよう。そのうちの2通については、アリユルフが『サン・リキエ修道院史』の中で言及している。

ルイ吃音王は彼の父、シャルル禿頭王の死の報告をオリ・ラ・ヴィル荘で受け取ると、埋葬されることになるサン・ドゥニ修道院へ急行することになる。『サン・ベルタン修道院編年記』では、「キエルジーとコンピエーニュを經由して」、ヴェールまでの道を進んだとなっている。

シャルル禿頭王の孫、ルイ（吃音王）が死去すると、ルイの弟カルロマンは882年王位を継承し、司教たちに教会の権利と特権を尊重する約束をキエルジーで行っている。

以上から、200年に亘ってキエルジーが如何に知れ渡っていたかを理解しない者はいないであろう。つまり、7世紀から9世紀の末まで。その間、恐らく、キエルジーの宮殿は、その他の宮殿と同様に、ノルマン人による放火によって倒壊したのであろう。そして以後、この後で立証される如く、同地が他の支配者たちの手に渡って、忘れ去られるようになった。今や、オワーズ河畔のキエルジーとラ・セーレ河畔のクレシーのどちらに、上記の出来事が帰せられるべきかを検討する時が来た。

II. 解決を迫られている問題の最初の論拠を、筆者は嘗てオワーズ河畔のKirisiacum、またはChirisiacumを指していたことが明らかな言葉Carisiacus、またはCarisiacumから選び出すことにする。最初に、フランス王フィリップ1世（1060-1108年）がノワイヨン司教ラドボ2世に宛てた書簡の中でそれを証言している。それらの表題は、同司教座教会の文書集では「王フィリップ（1世）によって司教へなされた、ソワソン郡内、キエルジー城の寄進」となっている。この城がその場所にあったことをこれらの書簡数通がよりはっきりと教えてくれている。そこでは、「ソワソン郡内にあるキエルジーと呼ばれる城が、ノワイヨン司教座教会によって永遠に所有されるべく譲渡した」とある如く、ラドボ2世が国王からそうするよう求められたとある。ここで理由が明かされているが、それは「彼の司教管区に非常に近く、頻繁に苦しめられていた近隣の敵対者たちの陰謀を警戒するうえで、彼の教会を必要としていた」からである。この事情は、実際のところ、ノワイヨンから10里（40キロ）以上も離れていて、ラン郡内のセール河畔にある小さな町、クレシー・シュル・セールCreciacoよりも、ソワソン司教

管区に帰属する、ノワイヨンから3里（12キロ）も離れていないオワーズ河畔のキエルジーの町に著しく適合している。その上、その地の城はノワイヨン司教座教会と敵対する勢力を撃退するに好位置にある。更に、同地は、その立地から、ソワソン郡をノワイヨン郡から分かち、両郡の人たちに対して城を保護しているオワーズ川の流れによって守られている。

もう1つの論拠は、ノジャン修道院長ギベール（1124年没）によって提供されている。彼は自伝の第3巻でキエルジーとクレシー・シュル・セールをはっきりと区別している。即ち、第5章でジェラルド・ド・「キエルジー」が「そう呼ばれているのは、彼がその城の主人であるからである」と述べている。他方、第13章では、「人々がクレシーと呼ぶ」城が問題になっている。そこからほんの少しの所に、「ノワイヨン、しかし地元の人々によってヌヴィオン・ラバスと呼ばれる町」があった。この町はクレシー・シュル・セールの近くに今でも位置する。加えて、彼はクレシー・シュル・セールが「ランのサン・ジャン修道院の荘園」であったと言っている。その時まで、同荘園はこの修道院の所有下にあった。同修道院の文書集の随所でも、このように言われている。キエルジーの名前はどこにでもあったのではない。従って、ジェラルド・ドゥ・キエルジーはクレシーとは別の城の主であったことになる。つまり、後述される如く、最初国王、続いてノワイヨン司教から封として受領していたキエルジー城の主人であったのである。

しかし、10世紀初頭に『聖ベルタン奇蹟譚』の第2巻を著している匿名の作家が証言している如く、この地はKirisiacum - Carisiacumではない - と呼ばれることもあったことを、筆者は否定しない。確かに、この作家はノルマン人のノワイヨン襲撃に関して、「彼らはオワーズ川を上った。騎馬と船でノワイヨンの町の傍まで迫り、南側が自然の力、つまり水と森で防御された、キエルジー - Kyrisiacus（またはChirisiacus） - と呼ばれる村の周辺に囲いを巡らす一方、短時間で不可能であれば、連続した波状攻撃で、大きくないと思われた町を奪取することができると確信して」と述べている。修道士ニコルがアミアン司教聖ジュオフロワの伝記の中で、ソワソンの修道女ヴェヴェトへの賛辞を編んでいて、この地に同じ名称を付している。彼女がソワソンからドイツ人の地方に向かった時、当時ノワイヨンの修道院長であったジュオフロワに挨拶をした後、「キエルジー Cirisiacusとサン・ポールの上に横たわる森の中へと入って行った。同森はその頃略奪と窃盗によって非常に評判が悪かった」とある。確かに、サン・ポール村はベネディクトゥス派の分院 - 今はオラトリオ会の修道士たちと一緒に活動している - がある所としてよく知られていて、ノワイヨンとキエルジーの中間に位置し、そしてキエルジーから優に1里半（6キロ）離れていた。それ故、こうしてChrisiacusとKirisiacusは土地の言葉を重視する人たちによって使われる一方、Carisiacusは昔の言い回しに執着する人たちによってそう呼ばれてきたことになる。

そして、筆者はノワイヨンの文書集の中で、王フィリップ（1世）によってCarisiacumと呼ばれているのを上で確認したその地が、ある文書ではCherisiacum、またある文書ではChirisiacumと綴られているのを発見したのであるが、それには理由があったと考えられる。確かに、この地はある時はCherisi—Cherisiのグループが名前と起源をここから引き出している—と呼ばれ、またある時はこれまで広められたKiersi またはQuiersi、崩れた形でThiersiと言われている。こういう次第で、クリュニー修道院蔵書の中で「ピカルディー地方、ソワソン司教管区、ノワイヨンから3里（12キロ）、キエルジー Quirisiacoのサン・マルタン主任司祭区」が言及されている。これが正しく、筆者が今問題にしているキエルジー Kirisiacumそのものである。最後に、ノジャン修道院の院長ギベールがああジェラルをキエルジー Carisiacumの領主と呼んでいる。修道士エルマンはこのジェラルをキエルジー Cyrisiacumのジェラルと呼んでいる。読者諸賢も理解している通り、1つの同じ場所を表すために Carisiacumや Kirisiacumや Cyrisiacumが嘗ては使用されていたのである。実際、筆者は尊厳者ルイが帝位の22年に、「キエルジー Circiacumの宮殿で」フルーリ修道院に発給した上掲の文書を発見している。このCirciacoが Carisiacumと共にキエルジーを表していたことを、筆者は疑っていない。

III. Carisiacumの名称から、その立地に進むことにする。フレデゲールの書の補遺はその立地を、「君主シャルルはオワーズ河畔の宮殿の荘園Carisiacumに来たが、高熱に冒され安らかに永眠した」のような言葉でオワーズ河畔に設定している。殆ど同じ文章を、古い写本から取ってきたものであるが、デュシェヌヌ編纂の『メス編年記』の中でも読むことができる。しかし、ジャック・シルモンが所有するこの写本の中で、この土地に手が加えられていること、つまりキエルジー Carisiacumがセーレ河畔に置かれるべきと感じていたある有識者によって、オワーズ川Issaraがセーレ川Saraに少し前に書き換えられていることを、アドリアン・ヴァロワが注記している。実際、この訂正、否むしる改竄を一部の年代記作家、つまりサン・ヴァンドリーユ修道院の修道士たち、エモワン、アデマール、ギイ・ドゥ・バゾーシュ（シャロン司教座教会の聖歌隊員、文筆家、1203年没）が論破している。彼らは全員シャルルの死を想起させるために、彼をオワーズ—UsaraまたはIsera—河畔のキエルジー Crisiacumの荘園を訪問したことを全員一致で伝えている。そしてそれ故、彼らはCarisiacumの立地を、明らかにKirisiacumに求めているのである。

Carisiacumの近くには王営林があり、そこでフランク諸王は狩猟で身体を鍛えることをその頃習慣にしていた。そして、優に400ユゲラ（100ヘクタール）も占める大きな森はChirisiacumに非常に近かったのであるが、この森は上掲の『聖ベルタン奇蹟譚』に出てきている。更に、Carisiacumが隣接するこの森を、ラン郡から切り離している。877年に発布されたシャルル禿頭王の勅令は、息子ルイ（吃音王）に王国の一部を狩猟として委ねるために、キエルジーをその森林と共に、同じくサン・セルヴェをラン

全域と共に除外しているからである。ここではキエルジーがラン郡に含まれていないことを見てほしい。クレシー・シュル・セールは、勿論、この郡内に含まれている。

加えて、キエルジーがブレティニー修道院の傍にあったことは、「(教皇ステファヌス2世が) フランキアのキエルジーの荘園にいた時、尋ねられた諸々のことを検討してブレティニー修道院に付与した」同教皇の返書からも明らかである。シルモンはこの書簡はキエルジーにおいて私的にブレティニーの修道士たちに発給されたと見ている。嘗ては筆者も同意見であった。しかし、再度深く考えると、この箇所は次のように解すべきと確信した。つまり、教皇ステファヌス(2世)がキエルジーの荘園に滞在していた時、そして正確にはブレティニー修道院においてであるが、上記の返書をこの種の書簡が不釣り合いな修道士たちではなく、諸司教または教会の監督者たちに宛てて発信したと。筆者が言いたいことは、同教皇が「ブレティニー修道院にて」この返書を発信しているのは、キエルジーの王宮荘園が国王の事情と権利に結びついていたからだと言うことである。

確かに、当時の状況としては、王宮荘園は単一の集落、または村とは定義できず、互いに余り隔たっていない、複数の荘園から成っていた。従って、パリ地方、クリシー・ラ・ガレンヌの王宮荘園は今日サン・トワンと呼ばれる村と、その時までClipiacusの名称を保持し、地元ではクリシー Clichyと呼ばれる村を内包していた。また、レステューヌは2つの村、つまり「上の村」と「下の村」から成っていて、教会も同数あり、1つはサン・マルタン教会、1つはサン・レミ教会と呼ばれていた。最後に、フランク王シャルル単純王によって、アティニーから約半里(2キロ)、ディオナの荘園内に建設された、サント・ワルビュルジュ教会はアティニーの宮殿内に建立されたと、同国王の文書の中で言われている。こういう具合に、周辺に散在していた村の幾つか、例えば、キエルジーから半里も隔たっていなかったブレティニーがキエルジーに帰属させられていた。要するに、キエルジーのサン・ソヴール荘、つまりキエルジーの名称と権利が及んでいた荘園の1つで発給されたシャルル禿頭王のコルビー修道院に宛てた文書から、キエルジーには複数の荘園が従属していた、そしてそれらはキエルジーの名称で表されるのが習慣であったと、筆者は理解する。

そして、実際にBrittaniacum、または Britennacumと表記されるブレティニーがキエルジーに近かったことは、シャロン・シュル・マルヌ司教に叙任されることになるウィリベールの審問に関する史料が立証している。確かに、ランス大司教アंकマールは、「ウィリベールの審問のために」、属司教や他の大司教管区の司教たちと「キエルジー、聖何々の教会に」、即ち、「主の化肉の868年、インディクティオの2年、12月3日集まった」。審問が行われた後、叙任の日時が「12月5日、ブレティニーと呼ばれる修道院において」となっている。それ故、ウィリベールの審問から彼の叙任までは1日しか空いていなかったことになる。もしキエルジーとブレティニーの距離が、少なくとも8里(32キロ)開いていたク

レシーと同等に開いていたならば、この時間の幅はもっと短くなっていたのだろうか。従って、1日で司教団がキエルジーからブレティニーに容易に移動できる程であったので、キエルジーはブレティニーの荘園に近かったことになる。もしウィリベールの司教叙任が行われた教会が捧げられている聖人の名前を記していたならば、この昔の作家は我々にこの場所に関して少なくない光明をもたらしたことであろう。確かに、シルモンがこの史料を抜き出してきたランの写本の中には、その名称は表記されていない。唯あるのは、シルモン版にある如く、「聖何々の教会に」だけである。だがしかし、ピエール・ラランはこのランの写本から抜き出した、未刊行と言われているこの史料を、シルモンの後に自ら調査した時、この個所を「サン・レミ教会に」と補足しているのである。

オワーズ河畔のキエルジーには教会は1つしかないが、祭壇は2つあり、1つは聖マルタンのそれで分院のため、1つは聖母に捧げられていて、小教区のためのものである。以上に加えて、この地の城の中には、聖フィルマンに捧げられた礼拝堂がある。他方、クレシー・シュル・セールには、聖レミの名で奉献された教会がある。次に、ラランはキエルジーをセール河畔に定め、クレシーと同一との意見を表明している。彼の推論に従って、サン・レミの名称を上記の空欄に加えるべきか否かの判断は、他の人たちに委ねたい。明らかに、シルモンが、そしてラランが利用しているランの写本にはこの名称は、シルモン版が証明しているように、現れていない。古いキエルジー教会の守護聖人がどうであれ、この個所がブレティニーと関係していたことは上述されたことから明らかである。従って、キエルジーからも切り離すことはできない。

最後に、キエルジー Carisiacensisの森がコンピエーニュに近かったことは、827年、「コンピエーニュとキエルジー Carisiacoに隣接する森に」狩猟のために足を踏み入れた、と記しているエジナルの書とルイ尊厳王の伝記から考えられる。そして、キエルジー Kirisiacensisの森はレーグとコンピエーニュとにほぼ接している。それがキエルジー Carisiacensisの森以外のものではないことは間違いない。

IV. 公表された見解によって同様に支持されている、この地に関する別の問題に、今すぐ移ろう。最初にくるのが、古い城に関する記録であろう。一時シャルルマーニュが所有し、彼からの贈与としてロランに譲渡されたと、この村に関する地元の言い伝えが語っている。そして、実際、4年前に「ロランの塔」と呼ばれていた古い塔が倒壊したとの話を、筆者は住民から聞いている。これらが古老の話のように聞こえるとしても、我々の見解に小さくない力を与えてくれる。加えて、古老たちによって受け継がれた、昔の諸王の宮殿に関する確かな記憶は、この種の言い伝えに依存している。更に、確かに、クレシーには古い城の廃墟が残っている。しかし、それは地方長官の財産であって、キエルジーのような国王の権利に属していなかったことは、この後で立証されるであろう。

キエルジーに関するこの見解を、嘗てサン・カンタンからキエルジーに延びていた公道の遺構が更に

補強してくれる。シャルル禿頭王が870年、サン・カンタンの町を出て、妻と一緒にコンピエーニュに向かうために、サン・セルヴェを経由してキエルジーに到着した時、別の道を通ったかどうかは、筆者には分からない。嘗ては王宮荘園であったサン・セルヴェの立地に関しても、近年では意見が分かれている。ある人はラン地方の、地元でル・ソヴォワと呼ばれている土地、ある人はセルヴの中にある荘園、つまりヴィルセルヴに比定している。これに対して、筆者はオワーズ川の対岸に位置するラ・フェールの町からそう遠くない、ヴォワVoidの森の中に位置するセルヴェに比定すべきであると、この後で示すであろう。しかし、これらの見解についてどう考えようとも、キエルジーとクレシーとは区別する必要がある。何故なら、もしSilvacumがル・ソヴォワに同定されるとすると、ル・ソヴォワよりもクレシーに先に到達していなければならなかった。ラン地方の山の麓にあるル・ソヴォワはクレシー・ラ・セールとの間に7里（約28キロ）もある、サン・カンタンの町から10里も離れていて、（コンピエーニュではなくて）ランの都に向かう道中に位置づけられる。また、もしセルヴェをヴィルセルヴに置き換えたとすると、後ろ向きに歩かない限り、シャルル（禿頭王）はセルヴェからクレシーに着くことができなくなる。この荘園はサン・カンタンの町とノワイヨンをつなぐ道のほぼ中間、と同時にノワイヨンに比較的近い場所に比定される。要するに、セルヴェをヴォワの森の近くに置くと、この地はサン・カンタンの町を出てクレシーに向かう人にとって、前方ではなくて後方に位置することになる。従って、サン・カンタンの町を出て、セルヴェを経由して、コンピエーニュに向かうシャルル禿頭王に起こりうるならば、オワーズ河畔のキエルジーはノワイヨンより更に先に比定する必要がある。

しかし、この問題に関するすべての疑念を、フランク諸王が、オワーズ河畔、キエルジーの城所在地をノワイヨン司教ラトボに譲渡した王フィリップに至るまで保持していた、キエルジーの直接所有権が取り払ってくれる。他方、嘗て国王の権利に属していたことを如何なる論拠によっても証明することができないクレシーに関しては、同様のことを言うことはできない。反対に、この地の直接所有権はクシー・ル・シャトー領主家に所属していたことを、筆者はこの後で明らかにする。

それ故、キエルジーの名称、立地、所有権、そしてその他の状況証拠すべてがクレシー・ラ・セールではなくて、キエルジー・シュル・オワーズに適合している。今後、如何なる者もキエルジーの王宮荘園の真の立地に疑念を挟もうとして意見を述べることはなからう。これから、如何にして城所在地、キエルジーの所有権が国王の手からノワイヨン司教に移ったかを見ていくことにする。

V. 公、伯、侯の称号が世襲権として特に強力な者たちの手に渡るや、この事態はシャルル禿頭王(843-877年)の治世から浸透し始める。こうして交戦の自由がフランク人の間で広まることになり、貴族であれば誰でも私的な権限により自身の同属者たちに対して戦いを挑むようになった。そのため、貴族はその殆どが軍隊を持つようになる。そして、貴族は彼らに忠誠を誓った者たち、つまり従士団の中

で服従度が強い者たちを呼び集める権力を有していた。加えて、国王自身はその権力を行使することも少なくなかった。

他方、司教たちもこのような武器による騒動から免れてはいなかった。従って、対立する側から頻繁に侮辱を受けていた、ノワイヨン司教ラドボ（2世、1068-1098年）は、敵の攻撃から自分を守るために、キエルジーにあった国王の城を王フィリップ（1世）から手に入れていた。その経緯を伝える王フィリップ（1世）の史料が、ノワイヨン教会の文書集に残されている。博識で尊敬に値するノワイヨンの参事会員で助祭、ニコル・デが親切にも筆者に伝えてきた。筆者はキエルジーの疑問を解決するための支援が、彼から多く齎されたことを告白する。

王フィリップの文書は次のようになっている。「聖にして不可分の三位一体、父と子と聖霊の御名において、神の恩寵によりフランク人の王フィリップ。神の子、キリストが自身の尊い血の流出によって贖った聖なる母教会の潔白なる願いによって我々が再生されたことを知り、そして同教会の司牧の任務の中で、主の同意のもと、我々が大きい世話を受けてきたことを知ったいま、それだけ一層のこととして、国王の誠実さの広大さに促され、国王の増すべき名誉の中にあってその恩恵を受ける者として我々が存在していると信じている。従って、神の聖なる教会の現在及び将来のすべての信者の勤勉さは次のことを知るべし。ノワイヨン教会の尊敬すべき司教ラドボが余の高見を訪れ、余の数名の高官たちを前にして、ソワソン郡内に位置する、キエルジーと呼ばれる余の城をノワイヨン司教座教会が永遠に所有すべく譲渡するよう身を低くして懇願した。この城は彼の司教管区に非常に近く、頻繁に苦しめられていた近隣の敵たちの陰謀から身を守るために、彼の教会には必要不可欠なものであった。彼の懇願は拒否できないと思われたので、当然のこととして、余はそれに賛意を表した。そして余の臣下たちの一致した助言によって、前記の城と、その城の所有者が余から直領地として保有していたすべてを、ノワイヨン司教座教会とラドボ司教自身と彼の後継者たちに永遠に所有すべく、余の魂の救済のために譲渡した。実際、この譲渡による引き渡しは永遠に不可侵で安定し続けるために、その命令文書を国王の権威でもって強め、自身の手でそれを固め、余の印璽を上から押し当てさせた。そして余の忠臣たちの相応しい証言によって補強されるよう命じた」と。

司教ラドボの在位は2つある。つまり、早い方（1世）は10世紀末、遅い方（2世）は1068年から1098年の間で、後者が王フィリップ1世によるこの寄進が行われたその人である。

VI. キエルジーの所有権を手にする、ラドボは同地の城をラン地方の城主ジェラルルに封として与えた、または寧ろその事実を確認した。同ジェラルルはそれを祖先から相続していて、国王から保有という形で所有していたと言う。キエルジー家の有名な名前の起源に関しては、よく知られていない。ジェラルルより前のストラボに関する言及は、古い史料のどこにもない。明らかに、ジェラルルはキエ

ルジーという姓を1083年以来、自分のものとしている。何故なら、この年王フィリップ（1世）がラ・ソーヴ・マジュール修道院に宛てた文書で、キエルジーのジェラル・ストラボが王国の他の有力者たちと一緒に下署している。また、このことから、彼が君侯の間で目立った地位を占めていたことは明らかである。彼こそが、ギヨーム・ドゥ・ティル（ティール大司教、『エルサレム王国史』等を遺す。1186年没）が伝えている如く、十字軍士、ゴドフロワ・ドゥ・ブイヨンと共に貴族の第2階級、つまり伯身分になかった有力者に数えられる、ジェラル・ドゥ・キエルジー、またはキエルジー城主ジェラルである。同ギヨームとアルベール・ドゥ・レクス・ラ・シャペル（エクス・ラ・シャペル教会参事会員、第1回十字軍記等を遺す。生没年不詳）が語っている如く、彼は数々の輝かしい手柄を立てた後、故郷に戻っている。

この人物は、ノジャン修道院長ギベールによって取り上げられているランの「城主」ジェラルその人でもある。但し、ここの「城主」はソワソン地方、ラン地方、ノワイヨン地方で広く勢力を行使させている、ラン在、サン・ジャン女子修道院の俗権代行者を指す。彼は城の主人であることから「キエルジーの」と呼ばれたが、1100年ランの教会において、司教ガルドリクの兄弟ロリコンによって殺害されたと言われている。エルマンは彼を「高貴な君侯にしてランの城主、ジェラル・ドゥ・キエルジー」と呼んでいる。そして、誰も彼がランの「城主」にしてキエルジー城の主人であることを疑わない。彼の孫、ジェラル・ドゥ・キエルジーはキエルジー城をノワイヨン司教から封として保有していたのであるが、下で引用されるローマ教皇アレクサンデル3世（1159-1181年）の文書が証言している如く、ノワイヨン司教との間で交わした取り決めで、ラン城管区を「担保に入れたin plegium assignavit」とのことである。従って、ジェラル3世はランの「城守」であったうえ、ノワイヨン司教からキエルジー城を保有していたことになる。彼の祖父も、全く同じ資格で、キエルジーの領主と呼ばれるべきである。

ジェラル・ストラボにはジェラルという同名の息子がいた。甥、つまり次男の息子も同じくジェラルと名乗った。この名前前で2番目となるジェラル（2世）には2人の息子、騎士のジェラル3世・エヴェラルドゥスとソワソン司教となるニヴロン（1世）がいた。ジェラル2世の死はソワソンのノートル・ダム修道院の物故者名簿の中で「5月19日ジェラル・ドゥ・キエルジーが死去。ロンボンにて修道士として迎え入れられるべく、彼は我々に1ミュイの小麦を寄進した（後略）」のように記されている。更に、ジェラル3世は妻ペトロニルとの間に、同じソワソン在、ノートル・ダム修道院の院長に順次就任するエルヴィドとベアトリ、同地の女子修道院長アニエスの父となるゴベール—ここからキエルジー領主家が派生している—を儲ける。同ジェラル3世はノワイヨン司教ルノーとキエルジーを巡って争いを起こすが、それに関して、ローマ教皇アレクサンデル3世は次のように記している。

「神の下僕の下僕にして司教、アレクサンデル（3世）は彼の尊敬すべき兄弟、ノワイヨン司教ルノーへ永遠の挨拶と祝福を（送る）。吾はキリストにおいて最も愛された吾の有名な息子であるフランク人の王の書簡を拝見して、その内容から、次のことを吾は知るに至った。良き思い出の汝の前任者ボ（ドワン3世）とジェラル・ドゥ・キエルジーとの間の審問が上記国王の御前に提出され、結局同国王の臨席の許、彼自身と上記ジ（エラル）との間で、大勢の陪席者を前にして、次のような示談が成立した。上記ジ（エラル）はノワイヨン司教にキエルジー城に関して臣従礼を行うが、それは次のような協約を前提とするものであった。ノワイヨン司教が上記の城に関して下されねばならなかつた破門を理由に、彼を召喚する時、言われている如く、同ジ（エラル）はノワイヨン司教法廷において、同司教の封臣で彼と同等者を介して下された判決に従う。そしてもしその破門が実行されたことが証明されるならば、同ジ（エラル）は上記の城を、それを使えなくするか完全に破壊するために、または司教の意図が実現されるために、司教の手に返すことになる。しかし、もし破門の実行が証明されないならば、上記ジ（エラル）とその後継者たちはノワイヨン司教から臣従礼を通して城を保有することになる。加えて、上記ジ（エラル）は、彼がノワイヨン司教に行った封臣礼の中に、自身または彼の後継者たちが、もし彼がそれを望み、司教がそのために彼を召喚させるならば、40日間2名の騎士と共に、自身の費用で、ノワイヨン伯領内においてノワイヨン司教に奉仕する。加えて、同ジ（エラル）は次のことを保証する。つまり、ボンレヴェクの通過権と城定住地におけるその他の通行権と渡橋税に関して、ノワイヨン司教に対して如何なる損害も生じさせないし、ブドウを運搬する如何なる4輪車も、どの市場に向かう如何なる商品も城の中を通ることはない。またこれがもし発生するならば、司教が通行者の通過税と罰金を持つであろう。同ジ（エラル）とその後継者たちはこれからの損害を司教に補償するであろう。同ジ（エラル）の父がノワイヨン司教からボンレヴェクにおいて自分のものだと要求していた、そしてあなたの前任者シモンが法廷で勝訴した10リブラを、同ジ（エラル）は前述の司教と彼の後継者たちに、安全なりブラとして永遠に放棄した。そして彼は、もしノワイヨン司教に戦争が迫ってきた場合、如何なる反対なしに和平を回復して、放棄すべく城を彼に引き渡すことを約束した。これらすべてを遵守することを上記フランク王の御前で、忠誠を誓って、確認した。そしてこれらのことの上に、同国王自身を法に従って保証人に据えた。そして同国王に、彼がこれらのことすべてに関して、より大きな保証となってもらうために、ラン城管区を保証として同国王に委ねていた。こうして、上記国王を間に挟んでここで決められたことが永遠の不変さの堅固さを持つことを望み、これまでに述べた如く、吾はこの取り決めがなされ、有効で確かなものと見なす。そして、それを使徒の権威でもって確認し、提出された書類の保証に与り、如何なる者も吾が確認したこの文書を侵害するか、それに少しでも違反することが許されないと定めた。しかし、もし誰かがこれを損なおうと企てるならば、全能の神

と神の使徒である聖パウロと聖ペテロの怒りを浴びることを知るであろう。9月26日、ヴェネツィア、リアルトにて発給された」と。

司教とキエルジー領主との間の揉め事は上記の如く解決されると、この地は上記の取り決めに従って、平和裏にジェラルの手に渡った。この時から12世紀末に至るまで騒動らしきものは誰からも起こされていないし、嫌がる司教の前で、キエルジー城内の橋を通る四輪車や商品を巡って、ジェラルの息子ゴバールと司教エティエンヌとの間で訴訟沙汰が起きたことを、筆者は知らない。しかし、下に掲げるゴバールの文書にある如く、次のような不和が発生している。

「余、キエルジーの主、ゴバールは現在および将来のすべての者たちに次のことを永遠に知らしめたい。余の主人で、余がその人からキエルジー城を封として保有しているノワイヨン司教エティエンヌが同封の拡大のために、余にそれを所有すべく平和裏に譲渡した。鉄製の4輪車と2輪車、そして他の荷車が商品を積んでキエルジーの橋を通過するためである。これに対して、余は彼にすべてから免れた領民1人を彼の見張り役として譲渡する。この男は彼の権利に十全において帰属することになる。即ち、ポンレヴェクにおいて所有していると認められる者と同様の慣習に従って。加えて、余は余の側に属する者がキエルジー城を守備する場合、前記の領民と余の主人であるノワイヨン司教の諸権利を忠実に守りかつ維持することの誓約を行う。言葉の化肉の1196年に行われた」と。

13世紀初期、クシー・ル・シャトー城主アンジェルランは私人の一般的財産を上回る富と権力で傲慢になっていて、ノワイヨン伯領内でベネフィキウムの権利として司教たちから多くの所領を保有していたのであるが、それらのために彼自身のみならず、1208年8月に発給された、アンジェルランの文書が証言している如く、「彼の父も、エルサレムに出立する際、ノワイヨン司教にプレティニー近郊の砂地で臣従礼を行っていた」。しかし、アンジェルラン自身も戦時に際してのキエルジー城における最高権を自分の物として要求していた。このようなことはノワイヨン司教には、筆者が考えるに、容認できることではなかった。フランス王ルイ8世(1223-1226年)の許に、両者から訴えが起こされた。王権によって、両告訴者の同意を得て仲裁者が選出され、最終的にこの係争は次のような決着を見る。

「クシー領主アンジェルランは本文書を見るすべての人々に挨拶を送る。すべての者は次のことを知るべし。一方において余、他方においてノワイヨン司教ジ(ェラル)との間でキエルジーの防塞化に関して不和が発生した。何故なら、余は余が望めば何時でもその城塞が余にのみ与えられるべきである。反対する者がいれば、あらゆる努力をするが、それをしない場合は、大小の武力を用いてでもそうすると言ってきた。実際、ノワイヨン司教殿は、即ちクシー領主アンジェルランがその砦を要求する前に、同領主が上記の砦が自身に返還されるべきと言っていた上記の防塞権がどのような方法であれ、自分自身に返還されるべきであったと言っていた。実際、この件に関して、有名なフランク人の王ルイの御前

に審問が提出されると、結局、国王陛下の御意向によって、ノワイヨン司教と我々の側、そしてゴベール・ドゥ・キエルジー殿の意向によって、領主の防塞権に関する不和の解決が、ノワイヨン司教の側から選ばれた、神の恩寵によるソワソン司教ジャック、余の側から選ばれた余の兄弟トマ・ド・クシーに委ねられた。これに対して、国王殿は第3者として、フランス王国の主馬長、モンモランシー領主マティユを選出した。余はこれら3名またはそのうちの2名が言ったことすべてを、上記の双方によってこれに関して如何なる審査が行われようとも、固く守ることを約束した。これに対して、審判者たちは彼らの発言を共同で一致して次のような言葉で表明した。余は余の審判者を通して、司教自身に関わる戦争と司教管区に帰属するものに関して、キエルジーの防塞権がノワイヨン司教及びその継承者に返還されるべきと言った。但し、クシー領主に対する戦争の場合は除く。何故なら、クシー領主が自身の財産と自身の封土に帰属するもののために同司教に対して起こした戦争に関して、ノワイヨン司教は当該防塞権の支援を頼むことは許されない。同様に、当該防塞権はクシー領主とその継承者たちにも、領主に関わる戦争と彼の所有権に帰属するすべてのもののために、返還される。但し、ノワイヨン司教に対する戦争の場合は除く。何故なら、ノワイヨン司教が彼自身の財産と彼の封土に帰属するもののために彼に対して企てる戦争において、クシー領主が当該防塞権の支援を得ることは許されていない。そして、こうして上記領主の誰かが誰かに対して戦争をもつならば、上記の言葉で言われている如く、キエルジー領主の手中にある上記の砦と防塞権は、戦争が続く間、誰からも受け入れられないし支援を受けることもない。そして、それ以外の他のどの戦争に関しても、自身の財産のためとノワイヨンとクシーの自身の封土の領民の財産のために、ノワイヨン司教もクシー領主もキエルジーの上記の防塞権から支援を受けねばならない。堅固で不可侵であり続けるために、本文書を余の印璽でもって強めた。主の御年1226年4月に行われた」と。

キエルジー領主家と、今は有名なブリュラル・ドゥ・シレリー家が所有するキエルジー城の主人に関して言うべきことは、ここまでにしておこう。残るは論証の締めとして、クレシーの城とその所有がキエルジーとは別であることを立証することである。

VII. 作家たちが無理やりキエルジーをクレシーに同定しようとしているが、彼らの見解の基本には主として2つのこと、つまり国王の仕事として建造され、嘗て国王の権利に属していたと彼らが考えていること、クレシー城の廃墟と、肥満王とあだ名されたルイ6世(1108-1137年)からランのサン・ジャン女子修道院の手に移ったことを信じてもらおうとしていることである。しかし、両方とも真実でないことは明らかである。

何故なら、クレシー城は、シュジェールが「不実極まりない男」と評すトマ・ド・マルルが建造した城以外のなにものでもないから。この男はラン、ランス、アミアンの各地域に侵入して、手当たり次第

に破壊したうえ、「ランのサン・ジャン女子修道院から彼女たちの2つの最高の荘園を奪い取った。クレシーとヌーヴィオンを最強の城、驚くほどの防壁、更に高い塔でもって自分の物の如く、囲い込んだ」。これやあれやの悪行で周辺地域を疲弊させたため、「フランスの教会が全体集会をボーヴェで開催し、彼に破門を宣告、その場に不在の彼に対して騎士の剣帯を解き、恰も極悪で悪名高く、キリストの名の敵として、全員一致の判決によって、彼からすべての名誉を剥奪した」とある。国王ルイ（6世）は判決の共同体に加わり、トマに対して軍を招集し、難攻不落のクレシー城を破壊し、ヌーヴィオン城もそのようにした。そして、2つの荘園をサン・ジャン女子修道院に返還した。上記の事情をシュジェールがルイ（6世）肥満王の伝記の中で詳述している。この著者に、ノジャン修道院長ギベールが明らかに賛意を示している。この2人の記述から明白なことは、クレシー城の建設者がトマ・ドゥ・マルルであったこと、そしてクレシー荘が王ルイ（6世）のベネフィキウムとしてサン・ジャン女子修道院に返還されたのであって、この時初めて譲渡されたのではなかつたことである。

女子修道院所有の荘園と言われている、そして最初は女子修道士のものであったサン・ジャン修道院に帰属していた、ヌーヴィオンへの言及があったことから、1164年ヌーヴィオンに関して、同修道院長に宛てたラン司教ゴティエの文書の中で、筆者が閲覧したことにここでちょっと注意を払うとしても、それは本題から外れることにはならないであろう。そこには同荘園で行われた裁判集会和決闘について、「もし同荘園で裁判集会が開かれたならば、同集会に担保が納められる。修道院長はその集会を自身の部屋、または上記荘園で開かせる。そして、もし審問が棒を与える段階まで来ると、荘官がそれらを裁判官に渡し、そして両当事者から良貨5スーを受け取る。しかし、示談や決闘の罰金として何かを受け取るならば、それは修道院長と裁判官の間で折半される」と定められている。

クレシーに戻ろう。そこでクシー・ル・シャトー城主ラウルが1190年エルサレムに出発するため、自分の財産を遺言書で子供たちに残し、そして勿論娘アニエスにも「マルルとクレシーからの共通収入からアラス貨幣で1,600リーブルを受け取るべく分配した」とある。これに対して、長子アンゲルランにはマルル、ラ・フェール、サン・ゴバン、「ラン地方のクレシー」、そしてその他の所領を譲渡したことが語られている。クシー・ル・シャトー領主家がクレシーで獲得したもののすべてが結局、シャティヨン領主家の手に渡ったことはサン・ポール伯ユグ・ドゥ・シャティヨンなどの文書から明らかで、後者はクシー領主トマとその相続人に、クレシーの貢租地収入から、毎年受け取るべく600リーブルを指定している。これらすべてについて、F. ドゥ・ラルーエトによって出版されたクシー領主家の歴史の中で、詳しく語られているのを発見するであろう<sup>18)</sup>。

筆者が思うに、以上から、クレシーの城とその所有権がキエルジーとは全く関係ないことに疑念が少しでも残ることはあり得ない。その当時、これらの土地が色々な主人たち、同じく2つの城が異なる創

建者, 更には色々な名前を持っていた。創建時には常にCreciacumと呼ばれていても, ランのサン・ジャン修道院の文書集で屢々, 更に特にローマ教皇イノケンティウス2世(1130-1143年)とフランス王ルイ肥満王の文書にはCriciacumとある。しかし筆者はラブの書において「その当時内膳頭であった, ユグ・ド・クレシー Creceio」が, 1106年に王フィリップの文書に下署しているのを発見する。これに対して, 何の目的で-つまり, 我々の間では同一の地名でも, 場所が異なることから-, ユグにCreceioという家名が与えられているのかを特定することは, 今の筆者には準備不足である。

- 1) Quierzy (Aisne, ar. Laon, c. Cousy-le-Château-Auffrique).
- 2) 『フランス記念物』, 25巻と『ガリア属州・都市総覧』参照。
- 3) 『サン・ドゥニ修道院史』, 704頁参照。
- 4) 『聖者記録集(ベ)』, 4巻下, 249頁続参照。
- 5) 『ランス史』, 3巻, 24, 28章参照。
- 6) 『サン・ベルタン修道院編年記』, 870年の項参照。
- 7) 『サン・リキエ修道院年代記』, 3巻, 15, 17章と『拾遺集』4巻参照。
- 8) *Hist. Norman. An.* 881, 参照。
- 9) 『自伝』, 3巻, 5章参照。
- 10) 『ランの聖マリア奇跡譚』, 1巻, 1章参照。
- 11) 『ガリア属州・都市総覧』参照。
- 12) 『十字軍記』, 205, 275, 287, 674, 706頁参照。
- 13) 『自伝』, 3巻, 5章参照。
- 14) 『ランの聖マリア奇跡譚』, 1巻, 1章参照。
- 15) 『拾遺集』, 12巻, 441頁参照。
- 16) 『自伝』, 3巻, 13章参照。
- 17) 『雑録』, 586頁参照。
- 18) L'Alouette, F. de, *Traité des Nobles et des vertus dont ils sont formes ... avec une histoire de la Maison de Couci, et de ses alliances*, Paris, 1577 (訳者追加)。

### XXXI. シェジー<sup>1)</sup>

Casiacumまたは Caziacumと表記されるシェジー(・シュル・マルヌ)の宮殿の起源について語っている古い史料はない。しかし, その地に関する情報で, 管見の限りであるが, ルイ敬虔王(814-840年)の帝位の22年に発給された, 同王がソンシャンの荘園とその他の荘園をフルーリ修道院に返還している文書より古いものを知らない。筆者は統治の15年, マルヌ川を挟んではいるが, シェジーに非常に近い, ボヌイーユ・シュル・マルヌの荘園で発給された, シャルル禿頭王(843-877年)の真正文書を閲覧したことがある。その文書でシャルルはプロギルスと呼ばれる, 聖ペテロの誉れのために建立された, シェジーの修道院の院長に対して, 24マンスと半分を安堵している。ルイに代わって, アエネアがこの

命令文書に下署している。加えて、ヌヴェールの文書集には、統治の3年に（ヌヴェール）司教アボン2世（864-886年）に宛てたルイ吃音王の文書があり、そこで同王はロワール河畔の荘園が聖シールと同司教に返還されるよう命じている。上記のルイ尊厳者の命令文書で王宮荘園の名前としてCusiacumの文言、フルーリ修道院文書集、ルイ吃音王の文書の中にCaciacumの文言と出会う。しかし、両方ともCasiacumに置き換えることができる。原本がCauciacumを優先させていたのであれば、それはマルヌ川の傍ではなくて、ノワイヨン郡内の、エンヌ川の傍に位置する別の宮殿になる。イングランド、メネヴィア司教管区出身のアサーがエルフレド伝の中で、887年の出来事として、シェジーの宮殿を「異教徒たちが方向を変えてマルヌ河口に入ってきて、シェジーと呼ばれる土地、つまり王宮荘園に到達すると、そこで丸1年間野営した」のように記している。ノルマン人の事績からなる年代記は同じこと、つまり嘗てシェジーの宮殿には聖ペテロに捧げられた修道院が併設されていてと伝えていが、この修道院が同名の小村に建立されていたと、地元の人たちは語っている。今日、この地は西を雑木林、または森が占める区画に面し、蛇行するマルヌ川に並行、確かに傾斜してはいるが、楽しくて心地よい眺望の中に位置している。書簡の中でクレルヴォ修道院長聖ベルナル、そして同聖者の伝記を書いた者たちが、シェジー修道院について記している。同じく、モーの町の郊外を流れるマルヌ川沿いには、Cagiacumが存在する。そこにはアウグスティヌス会派の律修参事会修道院があるが、この地は地元でシャズと呼ばれている。これに対して、我々が問題にしているシェジーはソワソン司教管区、シャトー・ティエリの南2里（8キロ）に位置する。

註

1) Chézy-sur-Marne (départ. Aisne, ar. Château-Thierry, c. Charly).

XXXII. カスヌイユ<sup>1)</sup>

Cassinogilumまたは Cassanogilumと表記されるカスヌイユの宮殿はルイ敬虔王（814-840年）の生誕地として知られているが、それが最初に誰によって創建されたかは、誰によってもこれまで明らかされていない。エモワンが君主シャルルマーニュの宮殿と呼ぶが、同君主によって建設されたものではなく、居住のために改修されたに過ぎない。つまり、その起源は遥かに古かったことで、碩学たちの意見は一致している。しかし、カスヌイユの起源と同様、その立地も長い間不詳となっている。『ポワトゥ伯史』の中で、J. ベリーはF.ドゥ・バルフォレストを、彼はルイ敬虔王の伝記の中で、カスヌイユ同王が生誕した地—をポワティエ郡内にある王宮荘園に比定しているとして批判している<sup>2)</sup>。これはポワティ

エ司教フィリップが1226年に言及している、地元でジャズヌイユと呼ばれているGazenoliomの荘園から間違っ導き出されたものであると<sup>3)</sup>。この地では、前世紀においてよく知られた「ジャルナクの悲劇」の前奏が始まっていることを付記しておこう。フルーリ修道院の修道士エモワンは聖ベネディクトゥスの奇蹟譚、同じく同修道院の院長聖アボンの伝記の中で、カスヌイユをガロンヌ河畔に比定し、「その立地は次のようになる。ここでコドロ川が大きなガロンヌ川に流れ込む。その川の脇に建てられたレンガ造りの塔からは敵の接近を予見でき、敵の船の侵入を防ぐことができる。また敵の妨害を受けることなく小さな川で建造された国王の船隊がより大きな川の流れへと引導される。他方、大きな教会には、煉瓦で見事に作られた円天井をもった別の教会が併設されていた<sup>4)</sup>」のように述べている。ラブが『新図書』の中で出版している匿名作家による『アンジュー年代記』が、このエモワンの見解を支持している<sup>5)</sup>。この作家は11世紀初期に活躍していたようで、「1004年修道院長アボンがアキテーヌの、嘗て国王宮殿があったカスヌイユの近く、ラ・レオル修道院において殉教した」と記している。

我が同僚で非常に博識のクロード・エティノがこの地を非常に丹念に調査していて、シャスヌイユの立地に関する碩学たちの見解が一致していないこと、即ち、一部の人はカスヌイユの宮殿を、レー川がLodimまたはOltumと呼ばれているロット川と合流する地点、一部の人はガロンヌ川沿いに比定していることを、最初に確認している。前者のCassinogilumの土地は、確かに、今日でも、地元の人々によってカスヌイユCasseneuilと呼ばれている。他方、後者のCassoliumの土地はカスヌイユ Casseuilと呼ばれ、エモワン以降人々は殆どこのようにフランス語で表現している。カスヌイユの立地はとても魅力的で、確かにカスヌイユのそれよりも遙かに勝っている。即ち、そこは川の正常な流れを邪魔するかの如くガロンヌ川の中に張り出した、土地の角の突出部分に相当している。北側に2乃至3里（8乃至12キロ）にわたってブドウ畑が広がっている。他方、南側には程よい広さの平地あって、その外縁の所々に藪林となだらかな丘が花輪の如く美しく点在している。静かに流れる小川が美しくそれを取り巻いている。満潮時に嵩を増した海水がこの地点まで激しく逆流して、そしてここで勢いが止められている。カスヌイユには、境を接してはいないが、カプドナクまたはカディヤク（の領地）が付属している。実際、ここには古い宮殿の廃墟は何も残っていない。しかし、コンドン教会の古い資料箱から、11世紀においても国王の館の残骸の一部が残されていたことを、筆者は発見している。このことから、シャルマーニュのカスヌイユをここに比定したくなるような状況下にある。

この問題の筆者の見解を明らかにする前に、一方でアジャン郡内の幾つかの場所、他方でエモワンによって言及された地点、つまり何れもドロト川がガロンヌ川に合流する地点に比定する人たちの見解が成立しえないことを述べておくのが適切であろう。この地点、地元でル・クドロ、またはコドロ、「ドロト川の頭」乃至「ドロト川の終点」、つまりドロト川がガロンヌ川に流れ込む最後の地点、そこには

昔からサン・クリストフ教会が存在する。理由の1つは、後者の場合アジャン郡またはアジャン司教管区ではなくて、バザス郡に属している。他方、アジャン郡内、レー川がロット川に合流する地点に位置するカスヌイユには、決して少なくない重要な証拠が揃っている。昔の人たちがカスヌイユ Cassinogilum をアエティクスが旅行記の中で言及しているエキスキスス、つまりエスに近いと言っていることが、まず注意を引く。次に、もし天文学史家の「これらが済むと、シャルル（マーニュ）は双子を身籠っていた、いと高貴で敬虔な王妃イルドガルドをカスヌイユと呼ばれる王宮荘園に残した。そして、アキテーヌとガスコーニュを分かちガロンヌ川を渡った<sup>6)</sup>」との文言が慎重に吟味されるならば、バザス郡内のカスヌイユ Cassogilum よりも、アジャン郡内のカスヌイユ Cassinogilum がより適していることは自明のことである。実際、後者の土地はガロンヌ川から約16マイル（24キロ）も離れており、天文学史家がカスヌイユを後にして、シャルル（マーニュ）はこの川を渡ったと記していることには、それなりの理由があった。他方、この王宮荘園がエモワンの Cassolium の如くガロンヌ河畔に比定されるならば、つまるところ、シャルル（マーニュ）はカスヌイユからスペインに向い、ガロンヌ川を渡ったと言えは十分であったであろう。加えて、この時軍隊の大部分がこの川を既に通過していたであろうことから、その渡河に固執する必要はなかったと思われる。彼らの主張の理由、それは、彼らが地元でサント・リヴラドと呼ばれているサンタ・リベラータ修道院の起源に言及していて、それがカスヌイユの宮殿の立地を特定することと関係してくるからである。確かに、彼らはシャルルマーニュによって、王妃イルドガルドの幸福な出産を永遠に記憶させるために、聖リヴラドに捧げられたこの修道院—実際、それはこの地の近くにある—がカスヌイユ近郊に建立されたことを望んでいる。しかし、作者が実際に目撃したであろう建物は、その古さに関しては何も語ってくれていない。

以上は些末なことかもしれないが、約500年前にアルビー史を執筆した修士ピエールの発言は、非常に重要度の高いものである。彼は第79章において、カスヌイユの宮殿をアジャン郡内に比定して、「他方、高貴で最強のカスヌイユ城はアジャン郡内にあった。確かに、山の麓のこの上なく魅力的な平地にあった。しかし、川が周囲を流れ、天然の断崖によって取り巻かれていた（後略）」のように述べている。この個所は既に既出のエティエノによってフランス語に訳されているが、内容には全く異なるところがない。彼が言うには、カスヌイユはある小さな川がロット川に合流する地点に位置し、これらの川からの水が周囲を流れ、それによって護られると同時に美的景観を生み出している。それは一面に広がるこの上なく快適な平原を見下ろし、南側の空間にかなり大きな森が広がっている。諸王が自身の最高の保養地をここに置いたとしても、誰も疑わない程のものであった。そして、他は割愛するとして、シャルルマーニュ治下の帝国領内のフランスの地事情を地図に記しているピエール・ベリティウス（1565-1629年）の見解も、同じものであった。何故なら、彼はカスヌイユ—ここでルイ敬虔帝が生まれている

—をアジャン郡内、レー川がロット川—嘗てはオルトゥム川と呼ばれていた—に合流する地点に比定している。筆者は彼の見解に喜んで同意する。最後に、エモワンはアンジュー年代記やその他で、ガロンヌ川沿いにカスヌイユを指定した張本人となっているが、カスーイイの立地を必要以上に目立たせ過ぎたようである。彼はカスーイイが半壊状態で、更に異教徒—彼らは、シャルル単純王（893-923年）の時代、カスヌイユも破壊したと、デュシェーヌの書に収められた匿名作家が伝えている—の略奪を被ったことを認識していて、この地をカスヌイユと取り違えてしまったのである。彼はその真にして間違いない立地を、多分問題の土地が遠方にあることから、知らなかったに違いない。そして、エモワンの地理学の知見に、非常に著名なアドリアン・ヴァロワによって屢々加えられた修正に関しては何も言わないが、筆者は彼による決して十分には調べられていないカスーイイの立地—彼はここで「ドロト川沿いのクドロ村」を「ドロト川」と言い換えている—を容易に信じたであろう。イルデガルドの双子の出産で広く知られたカスヌイユの宮殿はアジャン地方に位置づけられるべきであろうが、それを王宮荘園、または宮殿として有名な、ガロンヌ河畔のカスーイイと比定することには、筆者は同意できない。

バリューズの『勅令集』補遺に、ルイ敬虔王がアキテーヌ王であった時代、「サン・ポール（修道院）の船舶に関する」命令文書が掲載されている<sup>7)</sup>。これによってコルメリー修道士たちにガリアのすべての河川をあらゆる通行税から免れた船2隻の航行が許可されている。この文書は「余の統治の27年4月7日に発給された。カスヌイユ宮殿で行われた（後略）」とある。このルイの統治の27年は西暦807年と合致する。最後に、ラブはルイの息子、ペパンの「ルイ陛下の帝位の14年、余の統治の13年、1月11日に発給された。カスヌイユの宮殿で行われた」のように摺筆している文書を公開している<sup>8)</sup>。以上が、筆者が究明したすべてである。

#### 註

- 1) Casseneuil (Lot-et-Garonne, ar. Villeneuve-sur-Lot, c. Cancon) : Casseuil (Gironde, ar. Langon, c. La Réole). 現在では、不詳となっている。
- 2) 『ボワトゥ伯史』, 147頁（欄外註）参照。
- 3) 『ボワティエ司教』, 80, 135頁参照。
- 4) Supplem. Cap. 11参照。
- 5) 『新図書』, 1巻, 286頁参照。
- 6) 『フランク史作家選集』, 2巻, 187頁参照。
- 7) 『勅令集』, 2巻, 1402頁参照。
- 8) 『雑録』, 102頁参照。

### XXXIII. シャロン<sup>1)</sup>

フランス王ルイ7世はパリのサン・ヴィクトール修道院建立のために発給した文書を「1113年、余の統治の5年、シャロンの宮殿にて公開で行われた（後略）」のように結んでいる。このCatalaunenseと表記される、シャロン（・シュル・マルヌ）の宮殿に関して、我々はあまり多くの記念物を発見していない。

#### 註

1) Châlons-sur-Marne (Marne, ch.-l. dép.).

### XXXIV. ショワジー<sup>1)</sup>

Cauciacumと表記されるショワジーはノワイヨン郡内ではあるが、ソワソン司教管区に所属し、非常に魅力的な場所に位置する。キューイズの森とレーグの森との間に位置し、エンヌ川が両者を分け、それがオワーズ川と合流する地点から遠くなく、コンピエーニュの東方に位置する王宮荘園で、今から1000年程前に修道院長ベトレンが篤い敬神の下に監督していた修道院によっても有名であった。この地には元々原初殉教者エティエンヌに捧げられた教会があり、フランスでの出来事を記述している昔の作家たちが伝えている如く、711年フランク王シルドベール3世の遺体を迎え入れている。後世の多くの作家たちはここでの被埋葬者として、シルドベール（3世）に彼の兄弟クローヴィスと息子ダゴベール（3世）を加えている。しかし、古い作家たちはこれに関して、完全黙秘を貫いている。また、シャルルマーニュの母、ベルトは783年に他界し、「ショワジーで埋葬される。しかし、後にそこからパリに移され、サン・ドゥニ教会の夫の傍に埋葬されている」と、『メス編年記』は伝えている。『聖者記録集（ベ）』の中に、ルイ敬虔王の素晴らしい文書が収録され、それによって「ノワイヨン郡内、エンヌ川沿いに位置する、ショワジーと呼ばれる修道院がすべての宝物と什器と共に」、ソワソンのサン・メダール修道院に委ねられている<sup>2)</sup>。この出来事を、ローマ教皇エウゲニウス（2世）が822年に発給した文書とサン・メダール修道院の匿名の修道士が聖セバ스티アンの遺骸奉遷と奇蹟に関する書の中で、「700人の修友が所属すると語られている原初殉教者エティエンヌの修道院を、寺院の建物を拡張するために寄進した」との言葉で記している。そして、シャルル禿頭王（843-877年）は別の文書で、ルイ敬虔王によって起工された教会の献堂式が祝されるその日に、同修道院に沢山の所領を贈与している。サン・メダール修道院に、統治の32年、ショワジーで下付された、同シャルル（禿頭王）の別の命令文書が伝存する。同シャルル（禿頭王）はショワジー（Causia）荘を、息子ルイが滞在したり援助を受けたりすることがで

きない荘園の1つに数えている。しかし、このCausiaの名称によって、Cauciacum荘またはキューイズ Cotia荘と理解するとすれば、それは十分に考察されたものとは言い難い。筆者はベラルールの書において、統治の3年、「Cauciacumの荘園」でラングル司教ジロン（880-891年）に下付された王カルロマンの命令文書を閲覧している<sup>3)</sup>。また、ラブは尊厳者ルイの文書を引用しているが、それは「Cusiicumの国王の宮殿で行われた」で擱筆している<sup>4)</sup>。同書に掲載されたシャルル単純王（893-923年）の別の文書にも、同様に「Cauciacumの荘園で行われて」、またその少し後には「Caugiacco」とある<sup>5)</sup>。国王ウード（888-898年）の、サン・メダール修道院に下付された格式ある文書でも、つまり、「また、上記の修道院に余は余のCusiicumと呼ばれる王領地をすべての領民と付属物と共に譲渡した」との文章の中で、Cusiicumという地名と出会う。これらの個所において、もし文書集から抜き出された文書の写しが間違っていないとすれば、Cauciacumの地名は既に綴りが崩れ始めており、その後も一度ならず変化を被っている。例にもれず、ノルマン人はこの地を略奪しており、895年彼らは「オワーズ川に進入し、誰も抵抗する者がいなかったため、Causiacum に陣を構え」、囲壁と非常に堅牢な城を築くと、その直ぐ後に種々雑多な騎士たちが配置されたとのことである。

ここからは、主として、ショワジー Cauciacumの地名、または城主家の起源が問題になる。それらの後者に関して、最初に来るのがクシー Codiciicum<sup>6)</sup> 城主、ロベールで、彼の強情さはソワソンのサン・メダール修道院の院長ルノーによって打ち砕かれている。1047年「同ロベールは、クシーと呼ばれる所のサン・テティエンヌ修道院に滞在し、王国の多くの有力者たちと公式の宗教会議を開催しようとする、国王アンリの許を訪れた」。そこでロベールの乱暴狼藉が処罰されたのであるが、アシュリーの書の中でサン・メダール修道院の年代記作家は、本書で公表されているこの宗教会議の決議文に言及している<sup>7)</sup>。しかし、そこでは上記のロベールは、上掲の文書にあるCodiciacensisではなくて、「de Cociaco」と呼ばれている。恐らく、このクシーの人Codiciacensisとされるロベールはラン地方の領主であったと考えられる。しかし、Cauciacensisに関して、解決されねばならない障害は決して小さくない。サン・メダール修道院においてはCauciacensisの問題がまるで自分たちの問題として処理されているので、以下の史料から問題の核心が解明されねばならないであろう。ここでも同様に、同ロベールの息子、または相続人であるCociacensisのオブリーが対象になる。彼に対して、王フィリップ（1世）の摂政、フランドル伯ボードワンによって判決が言い渡された。王フィリップが1066年に文書を出して、この判決を確認しているが、そこには、「不正な俗権代行と慣習によって、サン・メダール修道院と彼の城へ行く途中にあるヴィク・シュル・エンヌの農民と村民に対して、自身の法廷に来よう強制した（中略）。罪を犯して15日以内に罪を認めて、罰金を支払わない場合、サンリスにおいて身柄を拘束されるとの内容の協定に基づいて（後略）」のようにある。これやあれやの言葉を十分に参照すれば、それらは正し

くCauciacensisの城管区内における修道院の俗権代行者としての資格を終わらせることを意味している。今日ヴィク・シュル・エンヌと呼ばれるVicus-castrumは（ソワソンの）サン・メダール修道院とショワジーとの間の距離を丁度二分しており、それはクシーには適合しない。そしてショワジーの地がコンピエーニュと同様に、サンリスの裁判管轄に属しているのに対して、クシーの地はそうではなくて、いつもランまたはヴェルマンドワ行政区に属していた。それ故、以上から、Codiciaci, Cociaci, 同じくCuciaci, Cusiaci, Coceii, Choisiaci—この語をギヨーム・ル・ブルトンが『フィリッド』の中で使用している—はラン郡内のクシー—Codiciacumまたは Couciacum castrum—を常に表しているとは限らず、ショワジー—Cauciacum—を表すこともあったと結論づけられる。とは言うものの、更に、オブリーがラン郡内に位置するクシー—Codiciacum—の城主であったことが、次のことから推論される。つまり、ラン司教エリナン（1052-1095年）が彼の妻アデルと母マティルド、そして彼の有力封臣たちと共に、同オブリーと共同で行うヌヴィオン修道院の建立に関して、1070年にこの地にやって来たと言われている。オブリーはその後暫くして、ヌヴィオン修道院に帰属していたクシー荘の10分の1税を侵害した廉で、同司教によって破門に処せられている。

このクシー—Cociacensis—のオブリーが同時代の色々な文書、即ち、1067年、1070年、1079年の文書によって言及されている。『ギヌヌ史』の中では一度だけではなく、国王フィリップ（1世）のソワソンのサン・ジャン・デ・ヴィーニュ修道院に宛てた、1076年の文書でも言及されている<sup>8)</sup>。クリュニー修道院文書でも、彼はAlbricus de Cuciacoと呼ばれ<sup>9)</sup>、ボーヴェ近郊のサン・カンタン教会の建立に関する文書でも、Albricus de Cociacoとある。同じく、このオブリーと彼の姉妹エルマンギヤルド—この上なく敬虔な女性で、ギー・シャティヨンと結婚していた—について、スリウスの書に収められた、ソワソン司教リジアルが彼の前任者、聖アルヌールの伝記の中で敬意をもって言及している。オブリーには、彼に似つかわしくない妻、アヴリーヌがいた。彼女は卑劣にも姦夫にして侵略者に、クシー—Cociacum—またはCauciacumの城を夫の身と一緒に引き渡したのだ。夫は引き続きそこで拘束されることになる。（司教）リジアルは「侵略者」という言葉を使用していない。しかし、この男がテコで、その後ショワジー—Cauciacensis—の城主になったことには、全く疑問の余地は残されていない。このテコは直ぐその後犯した罪を懺悔し、ソワソンで修道生活に入る。最後に、ラブの書に掲載された、国王フィリップ（1世）の1083年のラ・ソーヴ・マジュール修道院の院長ジェラルドに下付した文書から、次のことが明らかになる。そこには「当該寄進の証人は、この寄進物件を余の手から受け取っていた、ショワジー—Cocheio—の城主であった修道士テコ、前記テコの息子、ルノー・ドゥ・ショワジー（後略）」とある<sup>10)</sup>。

1101年のノワイヨン司教ボードワンの文書で名前が上がっているノルマン・ドゥ・ショワジーがルノーを匿っている。カンタン・ド・ショワジーがコンピエーニュの1138年の文書で確認される。同じく、ル

イ・ドゥ・ショワジーが1153年の文書で、王妃アデライードの高官貴族の1人として、同じく、レゲの森にあるサン・レジェ分院のための王ルイの翌年の文書で、そして最後に、1158年サン・メダール修道院の修道士たちの間で査定された院長イングラヴィオの文書で記名されている。その後、ショワジーの地名が付されたジャン、ウェリク—またはゲリク—、ユグ、ピエール、バルトラン、ロベールがサン・メダール修道院の院長アンゲランによって、確かに特徴のない、しかし、1153年—アンゲランの最期の年に当たっていた—以前に発給された、年代順に配列された文書で言及されている。フランドル伯フィリップ・ダルザスも1180年とその他の年の文書で、彼らの名前を列記している。ショワジーの地名が付された者たちの中には、ロンポン修道院の修道士ウェリクもいた。同修道院の年代記作家が、「ソワソン司教ニヴロン（1世）は、ここで修道士または無品級修道士になっていたショワジーのゲリク、またはウェリクによってロンポン教会で行われた、毎年ポミエでの受領を条件とする、葡萄酒2ミュイの贈与を承認した」のような言葉で証言している。そして、ショワジー城管区をアデル・ド・モンモランシーの夫、ジャンが獲得している。1175年に発給されたコルビー修道院の文書と、デュシェーヌの書に収められたモンモレンシー家の史書がそのことを伝えている。ジャンはアデルとの間に息子ギーを儲けるが、後者はヴィラルドワンの書で言及されているほか、1190年、1197年、1199年、1200年、1201年、1203年の文書で「ショワジーの城主」と呼ばれている。ゴティエが父ギーを相続し、少なくともショワジーの領主になっている。つまり、ウルスカンのノートル・ダム修道院の1204年発給の文書に「ショワジーの女城主マティルド—ゴティエの姉妹—、マニーの女領主、ルノー・ドゥ・マニーの妻」と出てくる。恐らく、ゴティエがエルサレムに出発するに際して、ショワジーの代官職を手放したか売ったと考えられる。確かに、以後、ルノーは至る所でショワジー—Chosiacum 或いはCocείο—の城主と名乗っている。

ほぼ同じ頃、ショワジーの騎士の中に、エムラン、ギョーム、ボードワンの名前が文書に頻繁に登場する。これらから、15世紀初頭においてもショワジー Cauciacumまたは Choisiacumの有名な領主家が存続していたことは明らかである。そして、この領主家がクシー Codiciacensis またはCouciacensisの貴族家系から完全に区別されるべきであることも明らかである。家系図において両家を明記したことで十分であろう。フィリップ尊厳王は1185年、フランドル伯の追放後は、1187年、1197年、1211年、1214年にショワジー Cauciacumに滞在している。そして同王はショワジー分院と森の中のサン・ジャン女子修道院に文書を発給している。そのうちの最も象徴的な1通を本書後半で公開するであろう。筆者がこれらの原本から知見したことであるが、同ショワジー Cauciacensisの王領地の通過税の4分の1を、聖ルイ王はコンピーニュの施療院、フィリップ4世はロワイオリユ修道院に譲渡している。

註

- 1) Choisy-au-Bac (Oise, ar. Compiègne, c. Compiègne-nord).
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 4巻上, 「序論」に続く。
- 3) 『ブルゴーニュ史料集』, 158頁参照。
- 4) 『雑録』, 460頁参照。
- 5) 同上, 126, 502頁参照。
- 6) Coucy-le-Château (Aisne, ar. Laon, ch.-l. c.). ショワジーの北東33キロ。
- 7) 『拾遺集』, 2巻, 706頁参照。
- 8) 『ギヌヌ史』は最後の2つに関しては, 見解を異にしている。
- 9) 『クリュニー図書』, 527欄参照。
- 10) 『雑録』, 581頁参照。
- 11) ヴィルアルドワンGeoffroy de Villehardouin (c.1160-c.1213). 第四回十字軍に関する『コンスタンティノープル征服記』などを遺す。

### XXXV. サルセル<sup>1)</sup>

パリの古い土地台帳でSarcellaとも呼ばれているが, Cersillaと表記されるサルセルを, 国王ウード(888-898年)は統治の7年, 「余の王領地」, 即ち国王領地と呼んでいる。サルセルはサン・ドゥニ修道院からそう遠くないところで, クル川と交わるローヌ川沿いにある。

註

- 1) Sarcelles (Val-d'Oise, ar. Montmorency, ch.-l. c.).

### XXXVI. クリシー<sup>1)</sup>

クロテール2世(584-629年)以前の古い史料において, ClippiacumまたはClipiacumと表記される, クリシーの宮殿の記憶は, 管見の限りでは, どこにもない。従って, 同王に明確な起源を帰することはできない。クリシーの立地がパリ小郡のセヌ川沿いであることは, 確実に近い。そこは古くはCuniculosumと言われ, 地元ではクリシー・ラ・ガレンヌと呼ばれている。そして, 同地はパリ郡内にある別のクリシー(今日のサン・トゥアン・シュル・セヌ)<sup>2)</sup>と区別されねばならない。(上記のクリシーは)ダゴバール(1世, 623-638年)事績録の中で上クリシー, 別の史料にはリブリの森の丘の向こう側, アルネットにあるとある。また, 別のクリシーはシャルトル司教管区の外れ, レイの森の中, サン・ジェルマン・アン・レイからそう遠くないところにもある<sup>3)</sup>。オストラジー王ダゴバール(1世)は, フレデゲールの言によれば, 統治の42年, 「パリから遠くないクリシーの父クロテール(2世)の許を訪れ」, そしてそこで「ゴマトルドを妻として迎えた」。その2年後, 「彼の王国の高位聖職者とすべ

ての高位高官たちが国王の幸福と祖国の安寧を願って、オストラジーからとブルゴーニュからクリシーのクロテール（2世）の許に集まった」。同じ頃、高貴なアエギナ・サクソが、クロテール（2世）の命令に従って、メルコル山または殉教者の山に滞在していた。この宮殿は王ダゴベール（1世）にとって非常に快適であったと思われる、ここで少なくない文書を発給している。それらはドゥブレの書に収められているので、参照あれ。この宮殿は注目に値する。何故なら、今日においても樹皮に書かれた文書が伝存するので。しかし、非常に大きな割合で文字が消えており、本書で初めて公開される文書も例外でない。そこで同王はドドによる寄進を受けて、パリ郡内にあるエクアンの荘園をサン・ドゥニ教会に委ねていて、文書には「余の統治の10年、15日、神の名において、クリシーにて発給された」とある。

同じ頃、トロワ司教アマンは、サン・タマン修道院の修道士で同時代の作家、ボドモンが彼の伝記の中で書いている如く、「その頃、クリシーと呼ばれる荘園に滞在していた国王の許を訪れ」、そしてそこで同王の息子に洗礼を授け、シジュベール（3世、632-656年）という名前を授けた。『聖エロワ伝』の中でオドワンが言及しているように、非常に敬虔な司教エロワがクリシーからブルトン人の王ジュディカエルの許に派遣された後、後者を統治の14年、クリシーに滞在していたダゴベール（1世）の許に連れて行き、フレデゲールの言によると、「そこでブルトン人の王ジュディカエルは自身とブルターニュ王国をフランク人の王に従属させることを約束した」。その頃、同オドワンはこの地に滞在して、王ジュディカエルを宴会に誘い、そして『聖アイユール伝』の中で語られている如く、「5月1日クリシーで開催された司教会議」において、ダゴベール（1世）と大勢の高位聖職者たちから、その時竣工をみたルベ修道院のための特権文書を受け取っている。続いて、王ダゴベール（1世）の統治の15年、「かの地のガスコーニュ人の長老たちが全員クリシーのダゴベール（1世）の許を訪れ、そしてそのサン・ドゥニ教会に避難した」と、フレデゲールの年代記は伝えている<sup>4)</sup>。ダゴベール（1世）の息子クローヴィス（2世、635-656年）は屢々王国の都をクリシーに定めた。「彼の統治の3年」、宮宰「アエガはクリシー荘で熱に冒され亡くなった」とある。クリシーで発給された非常に多くの文書を割愛するが、彼の統治の16年、公的宗教会議で発給された、格別な文書または特権文書の内容を参照あれ。確かに、ドゥブレがこの文書を刊行しているが、それは損傷を被っている。従って、本書で真にして正しいものを作り直した。原本の字体を銅板に彫りこみ、樹皮に書かれた真の原本が見せているものをそのままお見せしようと思っている。

フランク人の事績録と『聖ウアン伝』によると、いと敬虔な司教ウアンは、オストラジーへの派遣使節からクリシーの王宮荘園の国王ティエリー（3世、670-691年）と宮宰ワラトの許に戻ると、熱に冒されこの地で最期を迎えた。やがて、彼の後継者にフォントネル修道院長アンスペールが任じられた。ティエリー（3世）は彼と会って承認すると、リヨン司教ランベールがクリシーで彼の聖別を司った。3年

が経つと、同アンスペールは聖ウアンの聖遺物をクリシーの宮殿の聖所に移した。その場所はその後同聖者の名前に因んで、「サン・トゥアン礼拝堂」と呼ばれ、クリシーから少し離れた村で栄えた。

一部の人は最初からこの地が宮殿によって美化され続けたであろう王宮荘園で、実際のクリシーとは別の場所であったと主張する。しかし、実際に広大な敷地をもっていた宮殿に、クリシー荘の一部が含まれていたとの結論は、聖ウアンがクリシーの宮殿で死去したことを揃って異口同音に伝えている、フランス史の昔の作家たちや上述された『聖ウアン伝』の作者からも支持されている。シャルル・マルテルが「王ティエリー（・ドゥ・シェル、720-737年）没後5年、パリ郡内に置かれたクリシーの荘園を土地、家屋、建物、同荘園に付帯するまたは付属していると思われるすべてのものと共に、一切合切」をサン・ドゥニ修道院に譲渡している。この格式ある文書はドゥブレの書に収められている<sup>5)</sup>が、ラブの書で公表されたものが最高である。その後、少なくとも120年間は「サン・トゥアン礼拝堂」への言及は見いだせない。従って、サン・ドゥニ修道院に譲渡されたクリシーが王宮荘園ではなくなった後も、より狭くなったかもしれないが、囲い地内に含まれていたとしても不思議ではない。埋葬によって（聖）ウアンの地が有名になり、その埋葬地から離れて、村に発展したと推測されるからである。実際、次のことが殆どすべての王宮荘園で起きていたことは明らかである。つまり、国王によって好まれている間、彼らはこの上なく広大な囲い地に満足していた。しかし、興味がなくなるか、敵によって追い出されたりすると、囲壁は倒壊していったであろう。そして、その領地内に1つ、または時として複数の村が出現したであろう。例えば、レスティーヌには上レスティーヌと下レスティーヌの2つがある<sup>6)</sup>。同じく、キエルジーには複数の教会があったと言われている。従って、862年ソワソンに送付されてきた、ピートル宗教会議の文書はサン・トゥアン礼拝堂をクリシーに付属させ、それをサン・ドゥニ修道院の修道士取り分として残された所領の中に、クリシーと一緒に加えていることは、何ら不思議ではない。この事実から、修道院は最初からこの地を所有していたこと、また、その時クリシーはサン・ドゥニ修道院の権利には属していなかったことにはならない。事実、同修道院の所有する荘園のすべてがこの財産分割の中に含まれてはいなかった。しかし、厳密に言うならば、それらは修道士取り分として譲渡された荘園のすべて、または修道士が一定の収穫物乃至利益を受け取ることになる荘園のすべてであった。以上で、クリシーの宮殿と、嘗てはこの宮殿に帰属していたが、今では数ユゲルム（1ユゲルム=25アール）ほど離れてしまっている、サン・トゥアン礼拝堂に関する考察は終わる。

註

- 1) Clichy-la-Garenne (Hauts-de-Seine, ar. Nanterre, ch.-l. c.).
- 2) Saint-Ouen-sur-Seine (Seine-Saint-Denis, ar. Bobigny, ch.-l. c.).
- 3) Clichy (筆者未確認).

4) 『フランク史作家選集』, 1巻, 763頁参照。

5) 『サン・ドゥニ修道院史』, 690頁参照。

6) 本巻, 第79章参照。

### XXXVII. クシー<sup>1)</sup>

ラン郡内の, Codiciacum, または Cociacumと表記されるクシーの城は王宮荘園であったと, フランス人の使徒レミが遺言書の中で, 「しかし, 彼(クローヴィス)の洗礼の後, 私はクシーとルーイイ<sup>2)</sup>の荘園しか受け取りたくなかった。既述のいと信仰深く私と心が通い合った子供, クロドアルと, 沢山の貢ぎ物に苦しめられていた上記荘園の領民が私の許を訪れ, 国王に負っていたものを私の教会に納めることを許可してもらうよう私に熱心に切願した。同いと敬虔な国王は喜んでそれを承諾し, 素早い決定で譲渡した。同いと敬虔な贈与者の命令に従って, 私のいと聖なる後継者であるあなたたちの使用に供されるために, 私は司教の権威でそれを強固にした」のように述べている。920年ランス司教エルヴェは, フロドアルの言によると, 「また, クシーにおいて, その地を壁で囲み, 城砦化した<sup>3)</sup>」。同じく, フロドアルの言によると, 司教スールフ(922-925年)の死後, ヴェルマンドワ伯エルベールは息子ユグー5歳の子供に司教の頭飾りを被せた一の名代としてサン・レミ修道院所有のクシーの町を王ラウールの弟ボソンの臣下アンセルに譲渡し, その後トゥール・シャルトル伯ティボーがこの地を獲得する。再び, フロドアルの言に従うと, 「司教オドルリクはある有力者ティボーを, クシー城と, 彼が不正に獲得し, 執拗に手放そうとはしなかったサン・レミ修道院の所領の件で破門に付した」。その際, 「オドルリクはエルベールからエペルネ, ティボーからクシーを受け取り, 後者を破門の頸木から解放した」とある。

その後, この城は色々な主人, 城主を迎えている。彼らはサン・レミ修道院から封臣の資格でその城を保有していた。その1人, アンジェルラン1世は, ラン司教バルテルミーが1118年に発給した文書によると, 彼の同時代人であった。文書の一部をここに紹介する。「神の恩寵により, ラン司教バルテルミーが(中略)。聖レミは自身の神聖さの対価として, クシー城が位置するメージュと呼ばれる土地をフランキアの諸侯から獲得し, 生涯それを保有した。この人の栄光に満ちた生涯の後, 彼の名で聖別された教会が長い間同地を平穩のうちに所有していた。しかしその後, 教会の勢力が弱まり, クシーを確保していた騎士たちがサン・レミ修道院の修道士に対して, クシー城を60スーの年貢租の支払いによって入手したいと要求してきた。そして, この貢租を修道士たちはアンジェルランの時代まで持ち続けた(後略)」と。しかし, アンジェルランはこの貢租に殆ど反対していなかった修道士たちに対して, それを支払うのを拒否したうえ, サン・レミ修道院の領民たちに何らかの損害を与えていた。結局, 司教バル

テルミーとノジャン修道院の院長ギベールの懇願乃至脅しに屈し、アンジェルランはサン・レミ修道院の院長アズネールに賠償を行った。アンジェルランの後を継いだのは彼の息子、トマ・ド・マルヌまたはマルルであった。この彼に対して、シュジェールによると、国王ルイ6世（1108-1137年）は戦争を仕かけ、トマが籠城していたクシー城を攻略した。それにも拘らず、同王はトマの子孫、もっと広くはアンジェルランの子孫にクシー城を譲渡した。この状態はアンジェルランから7代目の娘マリーが王家、つまりオルレアン公との婚姻の願望に誘惑され、その所有権をシャルル6世の弟ルイ・オルレアン公に売却した、1400年まで続く。こうして、この城は再び王家の所有に戻された。

デュドンが『ノルマン人の歴史』の中で伝えているところによれば、ノルマンディー公リシャールは国王ロテールの手から救出された後、ランの城主オスモンによってクシーに連れて行かれ、その城主に引き渡されて、拘束される<sup>6)</sup>。ここでデュドンによって言及されているクシーを、両地の共通した名称Cauciacumを理由に、王営荘園のショワジーに置き換えている人たちがいる。これに関しては、上記のショワジーの項（第34章）で、筆者は言及している。実際の所、これに関しては別の人たちの判断に委ねたい。アエティクスがヴェルヴァンとの間に比定しているCatusiacumは、恐らく、ショワジー荘ではなくて、クシー荘と解さねばならないであろう<sup>7)</sup>。

#### 註

- 1) Coucy-le-Château-Auffrique (Aisne, ar. Laon, ch.-l. c.).
- 2) Leuilly-sous-Coucy (Aisne, ar. Laon, c. Coucy-le-Château-Auffrique).
- 3) 『ランス史』, 4巻, 13章参照。
- 4) 同上。
- 5) 同上, 964年の記述とその続き参照。
- 6) 『ノルマン人の歴史』 Dudon de Saint-Quentin, *Historia Normannorum* (訳者追加)。
- 7) Aethicus Ister, *Cosmographia*.

### XXXVIII. コンピエーニュ<sup>1)</sup>

フランク人の君主の安在所として、Compendiumと表記されるコンピエーニュの宮殿ほど多くの栄光に満ちた装飾で際立たせられたものはどこにもなかった。その起源は古代ローマ人の仕事と思われる。つまり、初期の諸王によって装飾が施されてはいるが、彼らによって創建されたものではない。そこで、クローヴィス1世（481-511年）の息子、シルドベール（1世）はサン・マルクフ・ドゥ・リル修道院長マルクフに不輸不入権を付与している。シルドベールの弟、クロテール（1世, 497-561年）はこの地で最期を迎えている。次に、コンピエーニュにおいて王国の公式集会を持たなかった、使節を迎えな

かった、文書を発給しなかった、更には司教たちの宗教会議に参加しなかったフランク人の王を見いだすことはなからう。これらすべてについて、既出の筆者の同僚ブラシド・ベルトーが未刊行の『コンピエーニュ史』において、自国語で広くかつ深く考察している<sup>2)</sup>。また、このテーマに関する彼の史料集成は、今では筆者の所で保管されている。

より古いコンピエーニュの宮殿は、最初にサン・ジェルマン・ドーセル教会がそれまでであった、サン・コルネイユ教会からそう遠くない、郊外のその場所—今では、都市壁内に組み込まれている—にあったと伝えられている。宮殿の教会が、創建者であるシャルル禿頭王(843-877年)の時代から加わる。彼の息子ルイ吃音王とルイ5世(986-987年)、そしてユグ2世(カペー朝王、ロベール2世の長子、1025年没)、更に、ジャン・ドファン(ヴァロワ朝王、シャルル6世の四男、1417年没)の墓によってよく知られている。コンピエーニュの王宮荘園とその宮殿への言及を、ウアンが司教聖エロワ事績録の第2巻で行っている<sup>3)</sup>。「同聖者がコンピエーニュの王宮荘園に頻繁に客として滞在することを常としていた時、オワーズ川の対岸にある宿泊所を用意してくれていた」とある。同聖者(660年没)の死後、ボーヴェ司教クレマンの在職中、そこに教会が建立された。その直後から奇蹟で有名になったが、今では消滅してしまっている。国王クロテール(3世、656-670年)とティエリー(3世、670-691年)の兄弟は「祈りのために宮殿から外に出て、その教会に向かったと伝えられている」とある。

コンピエーニュで発給された、諸王の古い文書の非常に多くを、文書原本から本書で公開することにする。それらの中には、クローヴィス2世の息子、ティエリー(3世)が統治の16年、モー郡内、ラニー荘をサン・ドゥニ修道院に譲渡している。彼の息子、シルドベール(3世、695-711年)は統治の初年、12月、コンピエーニュで裁判集会を開き、そこで同月の13日、ブルジュ郡内の、それまでリヨン司教ゴダンに託していたナシニー荘を幾つかの財産との交換に、サン・ドゥニ修道院に引き渡している。他方、5月23日、ボーヴェ郡内、ホスディニウムが、武装してオストラジーまで王ティエリー(3世)を追跡することを望まなかったイボの意に反して、上記修道院に譲り渡されている。2年後の3月14日、同シルドベール(3世)は司教と諸侯からなる別の裁判集会をコンピエーニュで開催し、そこでシャンブリー郡のノワジー・シュル・オワーズ荘をテュソンヴァル修道院の院長マグノアルに、宮宰ペパンの息子、嘗て同じく宮宰であったベルシャルの娘婿、ドロゴ—後者の娘アダルトルタ、またはアダルトルドと婚約していた—の意に逆らって、与えた。国王ペパン(3世、751-768年)の時代、別の裁判集会が彼の統治の8年、10月23日、コンピエーニュで開催され、そこで聖ドゥニの祝日に開かれる大市—文書は「聖ドゥニのミサ」Missa sancti Dionysiiと呼んでいる—で徴収されるのが慣例となっていたすべての通過税を、パリ伯ジェラルルの意に反して、同上修道院に譲渡している。ルイ敬虔帝(814-840年)は統治の7年、同じくシャルル禿頭王(843-877年)は統治の23年、コンピエーニュに滞在していたこ

とが、彼らの発給文書から証明されている。最後に、ユグ・カペー（987-996年）は統治の6年、9月26日コンピエーニュに滞在して、ランのサン・ヴァンサン修道院にその財産すべてを安堵している。

註

- 1) Compiègne (Oise, ch.-l. ar.).
- 2) コンピエーニュ史』（訳者追加）参照。
- 3) 『フランク史』, 2巻, 73, 74章参照。

### XXXIX. コブレンツ<sup>1)</sup>

『メス編年記』は885年、Confluentes ad Rhenumと表記されるコブレンツを皇帝領地の中に数えているが、更に、この地名は古代ローマ時代にまで遡及させることができ、ジュリウス・カエサルの書の解説書、大昔の地図、アミアヌス・マルケリヌスの書、『帝国官位録』で伝えられている如く、この地は非常に有名であった。加えて、トゥール司教グレゴワル<sup>2)</sup> やヴナン・フォルテユナ<sup>3)</sup> の書から、フランク諸王はこの地を頻繁に訪れていた、と筆者は考える。天文学史家はルイ敬虔王の伝記で、一度ならず、ニタールは書の第3巻の末尾で、ワンドルバールは『聖ガオル奇蹟譚』第11章で、そして『フルダ修道院編年記』と『サン・ベルタン修道院編年記』が、上記2名の記述を補強している。この地、つまりモーゼル川がライン川に交わる場所に、メトラッハ修道院の院長からトリーア大司教になったヘットによって修道院が建立された。「彼は面前で聖マルテルンから催促され、ルイ帝の統治の23年、聖カストールの遺骸をカルデナからコブレンツの、自身が建立した修道院に移した。そして12月12日聖カストールとすべての証聖者の誉れにおいて聖別した。聖別式の後、聖なる遺骸を教会の中に安置した。そしてその際ルイ（敬虔）帝は多くの贈り物を提供した<sup>4)</sup>」とのことである。この教会では修道士たちは参事会員によって取って代わられることになる。865年同教会の「内陣で」宗教会議が開かれ、「国王ルドヴィヒと弟シャルル（禿頭王）、両者の甥、ロテールが高位高官たちと集まり、相互間の平和と忠誠を各自の誓約によって確たるものにした<sup>5)</sup>」。そこには、古い宮殿の痕跡が今でも残っているとのことである。

註

- 1) Koblenz (l. Rheinland-Pfalz, r. Mainz).
- 2) 『歴史十巻』, 8巻, 13章参照。
- 3) 『詩歌集』, 10巻, 第12歌参照。
- 4) 『聖者記録集（ベ）』, 3巻下, 613頁参照。
- 5) 『サン・ベルタン修道院編年記』など参照。

## **XL. コストハイム<sup>1)</sup>**

ここで発給されたシャルルマーニュの真正文書が我々に教えている、Copsistaniumと表記される、コストハイムの王宮荘園の立地調査のために、筆者は長い間苦労を重ねたが、徒労に終わっていた。この地はアレマニア公領内、またはライン河畔にあったとの推論が、伯フロダールによるブレイスガウにあった所領の売却に際して、シャルル（敬虔王）が統治の22年、サン・ドゥニ修道院の院長マジネール（789-793年）に下付した文書から出されている。同王は同じ年の同じ頃に、サン・マルタン参事会教会に別の文書を下付しているが、そこには「コストハイムで行われた」とある。この地がマインツ郊外にあるコストハイムであることは間違いなからう。『ザクセン編年記』は795年シャルルマーニュとの関連で、この荘園について、「国王はマインツにやって来た。その時、同市の郊外にあるコストハイムと呼ばれる荘園で全体集会を持った」と記している。デュシェーヌの書に収められたロワゼル版『フランク王国編年記』ではCussinatangと呼ばれている。

### 註

- 1) Kostheim (l. Rheinhessen, r. Mainz).
- 2) 本書, p. 502参照。
- 3) 『フランク史作家選集』, 2巻, 39頁参照。

## **XLI. コルビエール<sup>1)</sup>**

宮殿でよく知られ、シャルル・マルテル（686-741年）がサラセン人から獲得した勝利によって有名になった、Corbariaと表記されるコルビエールの溪谷に、ベール川が流れ込んでいる。フレデゲールはこのコルビエールをナルボンヌ郡内に比定している<sup>2)</sup>が、コルビエール山地に関しては、あちこちで語られているにも拘わらず、それを取り囲む山々には一言も触れていない。ナルボンヌ司教管区ではコルビエールには副司教区資格が付与されている。そして、ここには少なくとも領地が存在するが、それらは9世紀、コース・ミネルヴォワのサン・ピエール教会に帰属していたと、その地にあった建築物から推測される。コルビエールの宮殿は消滅して実に久しく、今ではその痕跡を見ることさえできない。

### 註

- 1) Les Corbières (Aude, ar. Narbonne). ナルボンヌの南にLézignan-Corbières, Durban-Corbièresなどの地名が残っている（訳者追記）。
- 2) 『年代記』続編, 20章（訳者追記）参照。

XLII. コルブニー<sup>1)</sup>

Corbiniacumまたは Corbanacum と表記されるコルブニーには10世紀初頭からランスのサン・レミ修道院に従属する分院があり、ラン郡内、アンヌ川の港から1里（4キロ）離れた所に位置する王宮荘園があった。シャルルマーニュは、776年弟カルロマンが死去すると、この地においてオストラジーのフランク人たちによって国王と認められ、同じく868年末または翌年の初め、シャルル禿頭王がそこに滞在するが、それはランス司教アंकマールが、ギリシア人のラテン人からの離反に関して送られてきた教皇ニコラウス（1世）の書簡を受け取った時期でもある。更に、同教皇はシャルル（禿頭王）の息子、ルイへの書簡の中で、コルブニーへの言及を行っている。この荘園を、シャルル単純王（893-929年）は彼の妻、フレデリユヌに婚資として与えている。これに関する同王の文書を、ラブは『雑録』－ここでは、幾つかの誤字が修正されている－、非常に高名なエティエンヌ・バリューズは『勅令集』第2巻で刊行しているが、筆者はその原本を閲覧している。その後、同シャルルは妻フレデリユヌの勧めによって、サン・レミ修道院にこの荘園を寄進する。彼女はランスのサン・レミ教会で王妃に叙任されているので、感謝の気持ちからこの素晴らしい建物を聖レミに奉納したのである。フレデリユヌの寄進は、今日でも原本が保管されている。彼女の文書によって立証されている。ルイ海外王（936-954年）は、フロドアルの言によると、「彼の父がサン・レミ修道院に譲渡した後、同修道院の修道士たちが彼に委託していたコルブニーの城をエリバール・ヴェルマンドワ・シャンパーニュ伯の臣下たちから戦争によって取り戻した」。しかし、死期が近づくと、同ルイは王妃ジェルベルジュと王国の高官たちを前に、サン・レミ修道院の院長アंकマールにコルブニー荘を返還したと、王ロテールの「統治の元年、1月1日に」発給された文書は証言している。

ノルマン人に対する恐怖から、修道院長聖マルクの遺骸が掠奪されたナントウイユ修道院からここに移送され、この地でこれまで各地から参集する信者の敬虔な信仰心によって崇敬されている。この出来事が9世紀末、または10世紀初頭に起きたことを、シャルル単純王の「栄光に満ちたシャルル陛下の統治の14年、インディクティオの8年、復位の9年、2月22日に」発給された文書が伝えてくれている。これは「コルブニーの宮殿で行われ」、発給年は西暦905年に対応している。この文書及びこれに関する原本から転写された諸王のその他の文書は、ウダール・ブルジョワの『コルブニーの人々のための弁明<sup>3)</sup>』、マルロの『ランス史』第1巻を参照あれ。この時からコルブニーにおける聖遺物信仰が、特に「国王の病」と言われている甲状腺腫、または瘰癧を治すことで高まった。そして、我々の諸王も塗油の後、祈願のためにそこを訪れることを習慣としていた。

一部の人たちはコルブニー宮殿の立地をランス司教管区の外れにある、シェルボンヌと呼ばれる小さな村に間違っただけで比定している。この村は、実際には、彼らが望む如く、アンヌ河畔にはなく、アティニー

の北半里（2キロ）、アティニーでアンヌ川に合流する小川に沿って位置する。彼らは名称の成果、つまりCorniniacum, Carbonacum, Cartonacum, Corbanacumといった名称の発音、または確かに事実そのものからではなくて、古写本の劣化から派生した異なる読みに戻ってきた。我が諸王の文書原本－これまで少なくない数が伝存する－はCorbiniaci Palatiiの名称とラン郡内のその立地を、どの場合でも、同等にして差異のない方法で優先させている。しかし、もし彼らが古い地名のCarbonacoがそこにあつたことを望むならば、特にそれが地元の人々が言うCorbenyに対応していること以外にも、シャルルマーニュの時代に普及していたフランク人の編年記においてもそう読めることから、筆者はそれに反対はしないであろう。シャルルマーニュの時代、恐らくCorbanaciという名称が普及していて、シャルル単純王の治世にそれからCorbioniacumへと逸脱したのでであろう。

#### 註

- 1) Corbeny (Aisne, ar. Laon, c. Craonne).
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 4巻下, 314頁続参照。
- 3) Dom Oudart-Bourgeois, *Apologie pour le pèlerinage de nos roys à Corbeny, au tombeau de S. Marcouil, abbé de Nanteuil*, Reims, 1638.

### XLIII. コルフィンティスカ

ここでコルフィンティスカCorfintiscaと呼ばれる虚偽の荘園の宮殿に言及しても、読者諸賢を不快にさせることはなかろう。何故なら、永遠の闇に包まれることを望んだり、この地の記憶が後世の想像力に委ねられるためではなくて、聖職者によって書かれた、フランク人の編年記から、それが即刻排除されることが求められるからである。この空想に満ちた荘園の誕生は、以下の如くである。ドゥブレは『サン・ドゥニ修道院史』の中で、シルドベール3世(695-711年)の文書を公刊しているが、そこで同王はソレーム郡内、ファマールの荘園をサン・ドゥニ修道院に寄進している。この文書を今度はル・ミルが『ベルギー文書集』に不完全な形で収録し、そしてラブが『雑録』の中で引用している。実際、両方ともその文書は、「王シルドベールのサイン。尚書官ブラマノが国王陛下の命令を受けて下署した。Corfintisceにて、3月12日、余の統治の12年に下付された。神の名において、ママルクタスが承認した。幸あれ。アーメン」のように終わっている。この文書はいと学識あるル・コワントに気に入られ、彼は『フランス教会編年史』第4巻でそれを新しい活字で公開したのみならず、同書のいとキリスト教的な国王に宛てた献辞の中で、シルドベールに気前の良さからか、または精力的な生き方の偽らざる証拠として祝辞を述べるためにか、それを良心的に利用している<sup>2)</sup>。他方、ドゥブレの間違いの原因は、非常に古い文書の読解に慣れていな

かったことにあった。加えて、その未熟さは他の点でも障害になっていた。何故なら、彼は王シルドベール（3世）のあのゲルマン語とラテン語が混在する、解読が実際に非常に困難な真正な特権文書と出会った時、この真正文書を拒否して、誤りに満ちた、200年ほど前に書かれた見本に飛びついたのである。そのため、彼は、自らの兵力に非常に多くの欠陥が更に加わって、それらの中に自身の歴史書を押し込んだことになる。この事実は、新しい版の史料編からも明らかになるであろう。まず注意深く調べられた真正の見本を先に掲載し、その後に彼の版を持ってくることとする。しかし、兎も角、特権文書の末尾は刊本では、「余の統治の12年、3月12日、Corfintisceで発給された。神の名において、ママルクタスが承認した。幸あれ。アーメン」とある。それは「余の統治の12年、3月12日、マママカスが作成し、発給された。神の名において、アーメン」<sup>3)</sup>に修正されねばならない。他方、刊本では「幸あれ」の前に移されている文言「承認した」は、「ブラトカリウスは命じられて下署したBlatcarius jussus subscripsit」の如く、尚書官の名前の後のいつもの場所に戻さねばならない。但し、編集者と一緒にママルクタスを男の名前として使用しないように。何故なら、その頃王シルドベールが滞在していた王宮荘園にママカがあるからである。この荘園の立地と諸王による同地での頻繁な滞在に関しては、この後の適所で詳しく述べられるであろう。

註

1) 『サン・ドゥニ修道院史』、688頁参照。

2) Le Cointe, Charles, *Annales ecclesiastici Francorum*, 8 vol., Paris, 1665-1683, in -fol.

3) 2つの文章のラテン語版は次のようになっている。「Datum Corsintisce Martii die 12 anno vero 12 regni nostri. Mamarctas in Dei nomine recognovit feliciter. Amen」  
 « Datum quod fecit minsis Marcus dies XII annum XII regni nostri. Mamaccas in Dei nomine feliciter ».

XLIV. キュイーズ<sup>1)</sup>

Cotiaまたは Causia, 後世では Cuisiaと表記されるキュイーズの森—今日のコンピエーニュの森を指す—については、誰もが知っている。しかし、その荘園についての言及は、非常に少ない。そこは、『サン・ベルタン修道院編年記』によると、877年王国の有力者たちが集まった国王の安在所ではない。何故なら、この集会はキュイーズの宮殿ではなくて、キュイーズの森の中のCasinum—やがて森の外に位置することになる—、地元ではカーヌまたはシェヌ・エルブロと言われていて、ピエールフォンの近くに位置する。キュイーズには国王宮殿があって、その後フィリップ・オーギュスト（1180-1223年）がそれを「ピエールフォンの自分の館」と呼んでいる。877年シャルル禿頭王は息子ルイ（吃音王）に委ねた荘園に関する取り決めの中で、その地をCausiamと言いつけている。但し、この地名によって荘園を意味しているのか森を意味しているのか、または両者が合わさったものを指しているのかは不明で

あるが。一部の人たちはキュイーズの荘園を地元の人々がキュイズと呼ぶ、コンピエーニュの森の外、エンヌ川左岸、アティシーと向かい合った地に比定する。しかし、その立地はキュイーズの森の、コンピエーニュから少なくとも2里（8キロ）離れた場所に比定されねばならない。そこにルイ6世（1108-1137年）の寡婦アデルが、聖ジャンに捧げられたベネディクトゥス派の女子修道院を創設している。この地は「アデルの古い宮殿」と言われているかもしれないが、恰も最初から王妃アデルが創設を勧めたように思われるので、このような表現は避けた方がよい。むしろ、この表現は彼女が婚資として自身に残されたものを、神への信仰に捧げた荘園での長きにわたる滞在に拠るものと考えるべきであろう。

ソワソン司教ユグは1173年に発給された、ピエールフォン領主コノと彼の妻アガトが修道女たちに譲渡した、「キュイーズにある国王の館」近くにある財産の一部を確認するための文書の中で、この修道院の住人たちを「キュイーズにある国王館の修道女たち」と呼んでいる。この件に関しては、確かにルイ（7世）若王がコノに先行していて、彼の母アデルによって、キュイーズの森にある国王の館に創設された、この上なく貧しい女子たちの修道院のために、1155年と1161年に2通の命令文書を作成している。しかし、母が「彼女たちと生活していた間、同王は物質的援助をしなかった」ようである。実際には、いと敬虔な国王は「彼女たちの窮状を知ると、コンピエーニュ、ヴェルブリー、ベティシー・サン・ピエール、更には森の中に滞在する度毎に、パンと葡萄酒の10分の1を与えて」支援した。また、これに続いて、同王は妻アデルと共同で、キュイーズのこれらの乙女たちに別の財産を譲与していて、これらの財産はフィリップ・オーギュストが1183年に承諾した文書で列挙され確認されている。加えて、これらの財産の中には、「余がピエールフォンの余の宮殿を訪れた際、そこで消費するパンと葡萄酒の10分の1」が追加されている。加えて、キュイーズのサン・ジャン修道院の修道女たちに、ルイ10世強情王はショワジー（第34章参照）の城のパンと葡萄酒の10分の1のすべてを譲渡しているが、それを記した命令文書には「主の年、1315年11月、コリ・レストイの荘園にて行われた」とある。更に、同王は同文書において、同修道院の聖なる処女たちのために諸特権を安堵している。従って、それらはエンヌ河畔のCotiaまたはCuisiaの村ではなくて、森の真只中の、筆者によって示された場所にあり、Cotiaの昔の安在所があったことを如何なる権利によっても否定できないであろう。しかし、やがて戦争が襲いかかり、この修道院の修道女たちはヴァル・デ・ゼコリエ修道会の律修参事会員と共にコンピエーニュ近郊のロワイオリュに拠点を移した。そこで乙女たちの群れにはより安心して避難所が用意されていて、男たちは森の中深く入って、神への奉仕により安全かつ自由に従事した。

註

1) Cuisse-la-Motte (Oise, ar. Compiègne, c. Attichy).

#### XLV. クレキアクムまたはクレケイウム・アド・サラム<sup>1)</sup>

これまでキエルジーの宮殿に比定してきた、CreciacumまたはCreceium ad Saramと表記されるクレシー・シュル・セールが少なくとも国王の荘園であったことを、人々は多くの矛盾し合った見解によって納得させてきた。結局、今までの所、言われている如く、ティエリー（3世、673-691年）がそこに滞在していたが、オストラジーの軍勢を伴ったエプロイヌスの不意の到着によって打ち負かされ、アミアン方面へ逃走したこと以外に、先人たちの書には如何なる根拠も存在しない。読者諸賢はオワーズ河畔のキエルジー Carisiacumに関する論文の中で、クレシーに関する非常に多くの出来事と出会うであろう。このキエルジーはフランク諸王の安在所として特段に有名で、セール河畔のクルシーからも、またポンティユ地方の王領地、クレシー（・アン・ポンティユ）（第46章参照）からも区別されねばならない。そして、もう1つのクレシー（・ラ・シャペル）はモー郡内にあって、グラン・モラン川に沿った同名の森林と聖ベネディクトゥス修道会に属する小さな女子修道院とがある。

#### 註

1) Crécy-sur-Serre (Aisne, arr. Laon, ch.-l. c.).

#### XLVI. クレシー<sup>1)</sup>

Crisciacumまたは Creciacum in Pontivoと表記されるクレシーの王領地は、一部の人にはそう思われているように、ポンティユ地方のオティ河畔ではなくて、マイユ (Maye) 河畔にあって、同名の森林が付属している。この森林の中で「貴族で国王に帰属する土地と森林の管理人、マルロントゥスがダゴバール1世（623-638年）の治世に司祭の聖リキエにそこで生活することを認めた。そして、その後マルロントゥス自身も世俗の衣服を脱ぎ、同修道院で修道士になった」と、アルキュアンは自身が改編した『聖リキエ伝』の中で述べている。この地は国王ティエリー（3世、670-691年）と宮宰レウデシウスの遁走地としても有名である。エプロイヌスは彼らの1人をここで屈服させて迎え入れたのに対して、他の一人は約束を裏切られたうえ、命を奪った。ティエリー（1世）の息子、シルドバール（3世、695-711年）は統治の15年「クレシーの余の宮殿において」裁判集会を持ち、そこではバルトアルドゥスが宮中伯職に就いたことが、本書で公刊された文書で語られている。そこはオワーズ河畔のキエルジーよりもCrisciacumの名前から、ポンティユ地方のクレシーと解されるべきと見る。息子ルイの好意によって与えられた荘園と森林に関するシャルル禿頭王（843-877年）の勅令—ここでは「キエルジーと森林と共に」、 「森林をラン全域—ここにクレシー・シュル・セールが位置する—と共に」、そしてCrisiacus

またはCrisiacumが確認される—の中で確かに判断されることである。1346年、この地(「クレシーの戦い」)でイギリス軍によって打ち負かされたヴァロワ朝のフランス王フィリップ(6世)は最大の不幸を経験することになる。

註

1) Crècy-en-Ponthieu (Somme, arr. Abbeville, ch.-l. c.).

#### XLVII. クルイ<sup>1)</sup>

フォルテユナは、ノワイヨン司教聖メダールの伝記の中で、ソワソン地峡の傍で、同町の東側にある、Crovium またはCroiciacumと表記されるクルイがクロテール大王(1世, 511-561年)の荘園であったことを教えてくれている。いと敬虔な同王はこの荘園を自らが定礎した修道院に最初是一部、その後全部を寄進した。そのことを諸王や諸司教のいろいろな文書が教えてくれているが、そのうちの一部は今本書で初めて公刊されている。王クロテール(1世)、そして彼の後数名の王が同地に王の安在所を持っていたことに一部の人々は懐疑的であるが、彼らはクロテール大王の古い宮殿をサン・メダール修道院の境内にあつて、クルイの王領地の大半を含んでいたその場所に比定してきたからである。しかし、この問題がどうであったかは、筆者がこの後から考察する。国王の安在所はソワソンの町中に散在しており、それら及びサン・メダールに関しては、この後で述べられる機会があるであろう。

註

1) Crouy (Aisne, arr. Soissons, c. Soissons-nord).

#### XLVIII. クセ<sup>1)</sup>

尊厳者ルイ(814-840年)がフルーリ修道院にソンシャンとその他の所領を返還している、彼の帝位の22年に、「Cusiacusの宮殿で」発給された文書に関しては既に述べておいたが、ここでの宮殿は、既述のシヨワジーCauciacensis<sup>1)</sup>以外には考えられない。また、筆者はカルロマン2世(879-884年)がCuciacumと表記される、クセの荘園をヌヴェール司教アボンに返還している、彼の王位の3年に発給された、別の命令文書も既に紹介している。この荘園はオーヴェルニュ地方に位置し、アボンの後継者、ヌヴェール司教ウメヌがシャルル肥満王(876-887年)の治世に、聖ベネディクトゥス修道会に属する女子修道院をそこに建立している。この修道院は今も存在していて、ヌヴェール司教座教会に従属す

る。この荘園はフランク諸王の宮殿に加えられるべきではなく、ヌヴェール司教座教会の財産の中に数えられるべきである。モー郡にも、Cuciacumと表記される荘園が存在するが、それに関しては525頁で述べられるであろう。

註

1) 本巻, 第34章参照。

**XLIX. ディオーヌ<sup>1)</sup>**

Dionaと表記されるディオーヌが、一部の人たちによって間違っ宮殿の所在地と考えられている。マルロの書に一部が刊行されているシャルル単純王（893-929年）の文書で、荘園としてのDionaが2度確認され、そこにある数マンススを同シャルルが数え上げている。確かに、今日サント・ワルビュルジュの名前が付けられているこの地の位置が示している如く、Dionaはアッティニー宮殿<sup>1)</sup>の一部か、その境内の中に含まれるか、その付属物に過ぎなかったかもしれない。国王宮殿にとっては、1つだけの荘園のみならず、しばしば複数の荘園をその縁石内に取り込むことはよく見かけることでもあった。このことは既に一度ならず筆者が確認したことでもある。一部の人たちは間違っDionaをD'Ionaeと2つに分けている。ディオーヌにある聖ワルビュルジュに捧げられた幾つかの教会に関しては、アッティニーの宮殿に関する記述を参照せよ。

註

1) 本巻, 第10章参照。

**L. サン・ドゥニ<sup>1)</sup>**

Dionysianumと表記されるサン・ドゥニ教会の傍にあったダゴバールの宮殿には、同王の文書が一度ならず言及し、同じくドゥブレもいろんな箇所に取り上げているし、他の国王がそこを利用していたことも、彼は記している。彼の書では、これに関する国王ロバール（2世, 996-1031年）の文書を見よ。確かに、キリスト教の信仰に篤い諸王がサン・ドゥニ修道院に度々逗留したこと、さらに、その中の数名はそこで学んだことは、フランク人の出来事の書物を著した作家たちや諸王の大切な記録—その一部が、本書で刊行されている—によって確かである。しかし、彼らが諸侯と滞在した国王の安在所が、同修道院の所在地とは別であったかどうかは分からない。同修道院の一部は国王を宿泊させるためのもの

であったか、そのために使用されていた。それはともあれ、そこには宮殿の痕跡は残されていない。

註

1) Saint-Denis (Seine-Saint-Denis, ar. Bobigny, ch.-l. c.).

## LI. デイジョン<sup>1)</sup>

Divionenseと表記されるデイジョンの城は古代ローマ人にも非常に有名で、トゥール司教グレゴワールによって正確に記述されている<sup>2)</sup>が、エモワンもその歴史書においてそれと一致している<sup>3)</sup>。ここはブルゴーニュ公の居所で、『ヴェズレイ年代記』の著者がそこを彼らの宮殿と呼んでいる<sup>4)</sup>。ペラルールの書の中で、デイジョンで発給された多数の文書を筆者は閲覧した。しかし、如何なる文書にも国王の荘園、または宮殿という名称がデイジョンに付されたのを確認できなかった。『クリュニー図書』には王位の5年、インディクティオの3年、11月23日に発給されたルイ海外王の息子、王ロテール(954-986年)の命令文書が収められている。そこには「デイジョンの宮殿で行われた。幸あれ。アーメン」とある。これは間違いなくブルゴーニュ公領内の安在所で、昔の諸王によって住まわれていて、国王の宮殿としてこの上なく適していたことは誰の目にも明らかである。サミュエル・ギシュノンの『ブレスの歴史』を参照せよ<sup>5)</sup>。

註

1) Dijon (Côte d'Or, ch.-l. dép).

2) 『歴史十卷』, 3巻, 19章参照。

3) 『フランク史』, 2巻, 24章参照。

4) *Chronicon Vizeliacense* (1-1168, contin. jusqu'à 1324) (訳者追記)。

5) 『ブレスの歴史』, 216頁参照。

## LII. ドゥールダン<sup>1)</sup>

『モリニー年代記』の中で、Dordingusと表記されるドゥールダンまたはDordinchus ad Uriamと表記されるドゥールダン・シュル・オルジュは「国王の町」と記されていて<sup>2)</sup>、ジェルベール(後の教皇シルヴェステル2世, 999-1003年)の言によると、「リヨン司教・・・は」そこに滞在する「公ユグを訪問した<sup>3)</sup>」とのことである。このユグはユグ・カペ(フランス王, 987-996年)のことで、彼の父ユグ・ル・グランは956年にそこで不慮の死を遂げたと、フランク人の出来事の作家たちによって語

られている。この王宮莊園が宮殿を持っていたか否かについては知らないことを、筆者ここに告白する。

註

- 1) Dourdan-sur-Orge (Essone, ar. Etampes, ch-l. c.).
- 2) 『モリニー年代記』, 2巻参照。
- 3) 『書簡集』, 94番参照。

### LIII. ドリピオ<sup>1)</sup>

Dripioと表記されるドリピオの王宮莊園はシャルルマーニュがムーズ河畔のサン・ミシェル修道院に発給した文書には、「余の統治の3年, 5月に発給された。ドリピオの公立宮殿にて、公開で行われた（後略）」のように記されている。この同じ年, シャールマーニュはオストラジー王国の兄弟取り分を相続しているが, この宮殿はオストラジー王国内の修道院に宛てた文書で言及されていて, オストラジー王国内に位置していたと考えられる。しかし, どの地に比定するかはまだ許されていない。多分, それはサリカ法典（第44章）にあるデュピウムDupiumかもしれない<sup>2)</sup>。他方, このデュピウムはゴドフロワ・ウェンドランの書においては, ベルギーの高貴な町, デュセルであると考えられている<sup>3)</sup>。

註

- 1) Diedenhofen (Thionville, Moselle, ch-l. ar.) に比定する説がある。Voir MGH, DDK.1, p. 510.
- 2) サリカ法典の第44章に, Dupiomの語は出てこない（訳者追記）。
- 3) Godefroy Wendelin (1580-1667年), ベルギーの天文学者, 著書に, *Leges salicae illustrate*, Anvers, 1649などがある（訳者追記）。

### LIV. デューレン<sup>1)</sup>

昔の人たちはDuraまたは Duriaと表記されるデューレンをオルジュ郡内, マルコドゥルムMarcodurum村と呼んでいた。フレデゲールの『年代記』付録はそれをリブアリア郡内に位置づけ, ケルンからアーヘンに行くほぼ中間に置いている。ここで, 王ベパンと彼の息子シャルルマーニュの時代に, 何度も宗教会議が開かれていた。これらに関しては, デュシェーヌの書の註を参照せよ<sup>2)</sup>。シャルルマーニュの2通の素晴らしい文書を, ドゥブレが引用している。1通では, アルザスのレーベラウ (Leberau) 修道院がサン・ドゥニ修道院に委ねられていて, そこには「余の栄光に満ちた国王シャルル（マーニュ）が統治する6年, 9月14日, デューレンの宮殿にて公開で行われた」とある。他の1通は, 同王の統治の11年, 9月7日, サン・ヴェラン修道院<sup>3)</sup>に数個の所領が譲渡されている。これら2通の文書は, 上記の宗教会議で

発給されている。しかし、このような古い文書の中で、シャルルマーニュの真正文書として本書で最初に言及されるもの以上に有名なものがあるかどうかは分からない。パリ司教の老いたエルシェンラドとサン・ドゥニ修道院長フルラドとの間でプレジール修道院<sup>4)</sup>を巡って、非常に大きな係争が勃発する。一方は自分の教会に、他方は自分の修道院に帰属しているとして対立した。双方から寄進文書が提出されたが、問題を解決する光は現れなかった。神の審判、つまり十字架審に進むことになった。それ故、荘厳ミサが進行する中、双方から彼らの代表者が選出された。司教エルシェンラド側からはコレルス某、サン・ドゥニ修道院側からはアデラムヌスが選出され、「国王礼拜堂において、ミサが進行する中、司祭ハルナルドゥスが彼らの前に立っているのが見られた」。見よ、コレルスが「神の審判、十字架の前でふらついて負けてしまったのだ」。これを見た司教エルシェンラドは宮中伯アンセルムス、同じく10名の伯、「そしてその他大勢を前にして、自身のみならず自身の教会側の誰もプレジール修道院を所有することができた如何なる権利も有していなかったことを認め、再び着席した」。この裁判を「テウトガリウスが承認した。余の王位の7年、7月29日に発給された。デューレン荘の宮殿にて公開で行われた。神の名において、幸あれ」とある。この出来事は本書後半で公刊される文書において、非常に多くの人たちに閲覽されるであろう。シフレの書において、尊厳者ロテールガリヨン郡で、彼の権利に属していたマンスス数個をイモン某に譲渡している。「イタリアにおける帝位の24年、フランキアにおける王位の4年、インディクティオの6年、慈悲深いキリストの年の12月15日、デューレンの宮殿にて行われた」とある。これまで何も言われていない、オルジュ郡のマルコドゥルムについて、古い道程表はマルコマグヌムMarcomagumの村と呼んでいるが、碩学アドリアン・ヴァロワが注目し付記している<sup>3)</sup>如く、村から町に発展していて、そして名称も綴りがMarcoduri Durenに崩れてしまい、Durumへと繋がることになる。

#### 註

- 1) Düren (l. Nordrhein-Westfalen, r. Köln).
- 2) 『フランク史作家選集』, 1, 2 卷参照。
- 3) 『ガリア属州・都市総覧』, 315, 316頁参照。

#### LV. ドゥジー<sup>1)</sup>

DuziacumまたはDuodeciacumと表記されるこのドゥジーは、昔の人々によって多様に表現されている。まず、シエール川がムーズ川と合流する地点、スダンとムゾンのほぼ中間に位置する境界石には、Dusiicumとある。確かに、アंकマールは『聖レミ伝』の中でDuziacumの荘園と言い、国王クロドミール(495-524年)の息子クロドアルが聖レミとランスの教会にその荘園をその付属物と共に譲渡している。

ティエ版『フランク王国編年記』ではDociacumとなっている。同編年記、ロワゼル版『フランク王国編年記』、『サン・バルタン修道院編年記』から、777年同地でシャルルマーニュが主の生誕を祝ったことが知られている。864年王ルードヴィヒと王シャルル（3世）の兄弟はドゥジー Duciacaの荘園に9月逗留していたと、『フルダ修道院編年記』は伝えている。エルヌ（Pyrenées-Orientales, ar. Perpignan）司教管区内にあるサン・タンダレ修道院の創建に関する、同シャルルの文書がダシェリーの書に収められている<sup>2)</sup>が、そこには「いと栄光にみちが国王シャルル（3世）の統治の32年、インディクティオの4年、8月5日に発給された。ドゥジーの宮殿にて行われた（後略）」とある。この時期、ランス司教管区内のドゥジーと呼ばれる場所で開かれた公会議は、まず、そこに集まった高位聖職者によって、871年に同意されたサン・メダール修道院の不輸不入権を承認する。その史料は『ソワソン司教座教会史』の中で見ることができる<sup>3)</sup>。ドゥジーで開かれたこの公会議と、874年の諸司教の宗教会議に関しては、シルモンの『ガリア公会議録』の中で確かめることができる<sup>4)</sup>。加えて、ランス司祭フロドアルはランス教会のドゥジー荘園が司教フルクに返還されたことを、『ランス史』の中で教えてくれている<sup>5)</sup>。そして『年代記』では、「947年国王ルイ（4世、936-954年）と国王オットー（1世、936-973年）の裁判集会が8月に入って、シエール河畔で開催された。君主ユグがムゾン城またはドゥジー城のあたりで野営した<sup>6)</sup>」とある。更に、『クリュニー文書集』は939年に発給された文書の中で、「シエール河畔のドゥジーの荘園の傍にある、ケノワ・シュル・ドゥールにおいて、王ルイの統治の4年、インディクティオの12年、6月19日」のように、このドゥジーの荘園に言及している。最後に、ランス大司教エブル1世がムゾン修道院長ボソンの求めに応じて、ノートル・ダム修道院に「ドゥジーの荘園にあると言われている教会」を返還した。「ランスで、国王ロベール（2世、996-1031年）の統治の38年、大司教エブル1世殿の在位の2年、インディクティオの8年、尚書オドルリクスがこれを確認して、行われた」と続いている。一部の人はサン・バル（Basle）修道院からあまり遠くない、そしてランスから3里（12キロ）離れた、ヴェール河畔のTusiicum ad Vidulamと表記されるテュイシーをドゥジーに比定しているが、彼らが碩学たちによって軽蔑されたとしても、それは間違ったことではない。加えて、トゥル小郡のTusiicumと表記されるテュセイの王領地をドゥジー Dusiicumと混同する人たちも間違っている。これらの場所は、ともに約30里（120キロ）も離れている。ムーズ河畔のTuscicumと表記されるテュセイは、広く読まれたフロドアルの年代記において、938年の出来事の中で記されているが、このテュセイに関しては、後述されるであろう<sup>7)</sup>。

註

- 1) Douzy (Ardennes, ar. Sedan, c. Mouzon).
- 2) 『拾遺集』, 8巻, 352頁参照。
- 3) 『ノートル・ダム・ドゥ・ソワソン修道院史』, 432頁参照。
- 4) 『ガリア公会議録』, 1巻参照。
- 5) 『ランス史』, 4巻, 2章参照。
- 6) 『年代記』(不詳)。
- 7) 本巻, 第147章参照。

LVI. エブルイユ<sup>1)</sup>

オーヴェルニュのシウル河畔に, EbrogilumまたはEvrogilumと表記されるエブルイユの城がある。嘗ては宮殿で有名で, 今では聖ベネディクトゥス派の修道院でその名が知られている。アキテーヌ王ルイ(781-814年)が, その後皇帝になったが, 父シャルル(マーニュ)の決定に従って, 4年毎に冬季を同地で過ごしていた。碩学アドリアン・ヴァロワはエブルイユが, シドニウスがヒパティウスに宛てた書簡<sup>2)</sup>で言及しているEborolacumと同じであると見なしている。確かに, シドニウスのその箇所にはEborolacumの立地を示すものは何もない。しかし, この上なく深い洞察力の持ち主の推量に, 筆者は喜んで賛同する。加えて, フランス語のEbreuilとの近親関係がそれを補強している。

註

- 1) Ebreuil (Allier, ar. Monluçon, ch.-l. c.).
- 2) 『書簡集』参照。

LVII. エシェリー<sup>1)</sup>

我が同僚, ダシェリーによって出版されたフォントネル修道院の年代記は, メス司教アルヌルフの息子フロドルフまたはクロドルフが, 宮宰エプロワンによって, ErcherecusまたはErchariacusと表記されるエシェリーの宮殿で殺害された(伯)マルタンの親族であったと伝えている<sup>2)</sup>。フレデゲールの年代記の続編の作者はこの殺害がエシェリーの荘園で行われたと言っている<sup>3)</sup>。フランク人の事績録はこの荘園をランからそう遠く離れていないエシェリー—ErcherecumまたはErchariacum—と呼んでいる<sup>4)</sup>。深い洞察力のヴァロワにとって, この荘園はリブモンとラ・フェールの間に位置する, アシェリーの村であると考えられている<sup>5)</sup>。オルデリクス・ヴィタリスの書においては, 土地の人によってアシェリー—Acheri またはAcherisと表記される—と呼ばれている<sup>6)</sup>。しかし, 筆者には, ランにさらにもっと近いエシェリ・ロノワ—Escheri-Launoy—と呼ばれる, 小さな町の方がラテン語の地名により近

いと思われる<sup>7)</sup>。この町とランとのほぼ中間にロワクシ-Lucosausまたは Lucosagus—という小さな町があるが、多分そこは血まみれのヌストリー軍がオストラジー軍に対して勝利を収めた地であったと思われる。そうでなければ、Ercherecumはエンヌ河畔のエクリー Ecryという荘園であったと言うこともできよう<sup>8)</sup>。修道士エリクの手紙においては、トゥル郡のLufausが記されている<sup>9)</sup>。しかし、この戦いはこの町の傍で行われたとある以上、この地は都市ランから余りにも遠すぎることになる。

註

- 1) Eschery (未確定)。
- 2) 『拾遺集』, 3巻, 185頁参照。最新版ではこの地名は拾われていない。Voir MGH, SS, 2, p. 815 ; *Chronique des abbés de Fontenelle*, éd. et trad. par Pradié, P., Paris, 1999.
- 3) 『年代記』, 98章参照。
- 4) 『フランク事績録』, 47章参照。
- 5) 『ガリア属州・都市総覧』, 189頁参照。
- 6) 『教会史』, 723頁参照。Achery (Aisne, ar. Laon, c. La Fère) .Voir Grasse/Benedict/Pplechl, *Orbis latinus*, Braunschweig, 1971, p.135.
- 7) Matton, A., *Dictionnaire topographique du département de l'Aisne*, Paris, 1871はこの地名を拾っていない。
- 8) Asfeld (旧名Ecry) (Ardenne, ar. Rethel, ch.-l. c.), dans MGH, SS. r. M., 2, p. 536.
- 9) 『オーセル司教事績録』, 『新図書』, 1巻, 430頁参照。

## LVIII. エソンヌ<sup>1)</sup>

パリ小郡内のコルベイユ近郊にある、ジュイーヌ河畔またはエソンヌ河畔の Exona または Essonaと表記されるエソンヌは嘗て王領地に付設されていて、作家フォルテユナによれば、王領地の領民が住んでいた公営荘園であった<sup>2)</sup>。メロヴィング諸王の時代、そこで貨幣が造られていたとある。造幣は司教座都市、公的または国王の荘園以外においては殆ど行われることはなかった。その後、この地は王クロテール(2世, 584-629年)が譲渡し、クローヴィス(2世, 635-656年)が確認して、サン・ドゥニ修道院の手に移った。このことはドゥブレの書の随所から、同じく本書で初めて公開されたシャルルマーニュの文書<sup>2)</sup>から、そして最後に修道院長ルイとフランク人のエルカンフレドとガビオンとの間での交換文書から明らかにされている。最後の文書には、「修道院長ルイはサン・ドゥニ修道院の財産の中から、パリ郡内(中略)、クルティリス・エト・インストラと呼ばれる荘園に所属する、エソンヌ河畔のエソンヌと呼ばれる荘園(中略)。シャンプリーの公設法廷で行われた(後略)」とある。加えて、シュジェールが『統治においてなしたる事ども』17章で、エソンヌに言及している<sup>3)</sup>し、すべてはパリ司教座教会のカタログの中にある。

註

- 1) Corbeil-Essonnes (Essonne, ar. Évry, ch.-l. c.).
- 2) 『詩歌集』参照。
- 3) Suger, *De rebus in administratone sua gestis*, chap. 17, dans Lecoy de la Marche, A., *Œuvres complètes de Suger*, Paris, 1867, p.177.

LIX. フォンテーヌブロー<sup>1)</sup>

ガティネ郡のビエール (Bièvre) の森に位置する, Fona-Blaudiまたは Bliaudiと表記されるフォンテーヌブローはそこで湧き出る泉と, 森に隣接する町, または平原の所有者から名前を取っている。そこにこの上なく高貴な宮殿が確認されるが, ガティネ史の作者はルイ若王 (7世, 1137-1180年) 時代にその発祥を帰している。そして, 彼はその状況—それが1137年に行われたことを望んでいるが—に関する証拠として, 同王ルイのいろいろな史料を表示している。その後, 同王ルイはこの王宮荘園の傍に, 聖母マリアと殉教者サテウルナンのための教会を建立し, そこに1人の聖職者—礼拝堂付き司祭—を王領地からの収入の一部を付帯して任命したことが, 1169年に発給された文書から読み取ることができる。そのすぐ後, 同教会がカンタベリー司教にして殉教者の聖トマスの名において叙任されたことを, 同王ルイの主導のもとで, 1259年に発給された聖ルイ王の文書の中で, 筆者は閲覧している。同王はさらにフォンテーヌブロー宮殿の境内に, サント・トリニテ修道会に属する修道院を建立し, 多くの所領と贈り物で富ませた。加えて, 前記のルイ7世がバルボの修道士に宛てて「統治の1165年, フォンテーヌブローで発給された」命令文書が伝存する。この地が同王にとってお気に入りであったことを証言する, 他の史料も存在する。同地にフィリップ尊厳王がしばしば逗留したことを, 同地で1180年にシャトー・ランondonの住民に発給した彼の文書が証明している。同じく, ヌムールの病院—ドムス・デー—に宛てた1186年の文書。そして最後に, 『サン・ドゥニ修道院史』に収録されている1190年の文書と, フィリップ豪胆王の1273年の文書などが伝存する。この宮殿は, 名前の有名さと威容から栄えた。国王フランソワ1世 (1515-1547年) とアンリ4世 (1589-1610年) はこの上なく大きな建物でこれを飾り立てた。続いて, ルイ大王 (14世, 1643-1671年) の息子, いと晴朗なドーファンが喜ばしいことにここで生を受けた。同地には, 『拾遺集』2巻で刊行されている修道士クラリウスが年代記の中で証言している<sup>2)</sup> 如く, フランス王アンリ1世 (1031-1060年) が死去した「ビエールの勝利の城」があったと考えられている。今日, フォンテーヌブローの森と呼ばれている「ビエールの森」には, Victoriacum (「勝利」の意) の地名は残っていないが, 「勝利の十字架Cruix -Victoriaci」と呼ばれる十字架が辛うじて残っているに過ぎない。

註

1) Fontainebleau (Seine-et-Marne, ch.-l. dép).

2) *Chronique de Saint-Pierre-le-Vif, dite de Clarius*, pub. et trad. par Bautier, R.-H., Paris, 1979, p.126 (訳者追記).

LX. フランクフルト・アン・マイン<sup>1)</sup>

Francofurtum ad Moenumと表記されるフランクフルト・アン・マインがフランク諸王の最も古い宮殿の1つと筆者は考えているが、我々の出来事に関する古い作家たちの書においては、それへの言及は794年まで一切ない。この時この地でフェリクスとエリバンドゥスを糾弾する有名な司教たちの宗教会議が開かれている。シャルルマーニュがこの会議に出席していたのであるが、彼は本書で刊行されている文書、統治の26年、エクストルゲウム=オブリガギウムにあるサン・ジャン=サン・ロラン修道院の院長アニアンに対して、コーヌの荘園を修道院に転換することを確認している。同王はフランクフルトとレーゲンスブルクに新しい教会を見事な手法で建立したと、ザンクト・ガレンの修道士によって伝えられている。ルイ敬虔王は815年, 822年, 832年, 835年にフランクフルトに滞在したことが、デュシェーヌの書に収められた、同王のいろいろな文書によって明らかにされている。更に、彼の息子でドイツ王ルードヴィヒは、ル・ミルの『ベルギー教会便覧』によると、統治の29年、ユトレヒト司教フンゲルスに幾つの特権をこの地で付与し、そしてアルザス、アインジーデルンのノートル・ダム修道院の年代記が伝えるところによると、ついに876年8月28日に当地で亡くなっている。フェリエールの修道士ルーは彼の修道院長オドンと一緒に、地元でフランクフルトと呼ばれている宮殿に赴く途中、重い病に冒されたと、聖ファロ伝の中で、ハリトガリウスが言及している<sup>2)</sup>。同じ宮殿において、王アルヌールが889年、国王ズエンボルド、そして彼の後ルイが909年サン・ミシェル=サン・ミエル・シュル・ムーズ修道院に宛てた数通の文書を発給している。それらは今も、原本がそこに保管されている。

註

1) Frankfurt am Main (ドイツ, l. Hessen, r. Darmstadt).

2) 『聖者記録集 (べ)』, 2巻, 622頁参照。

LXI. ジャンティイ<sup>1)</sup>

パリ小郡の, Gentiliacumと表記されるジャンティイの荘園が王領地に加えられた時期と、同荘園が宮廷人で、後にノワイヨン司教になったエロワ(588-660年)の手に渡ったあと、彼がダゴベール王の宮廷に参内していて、自身でパリ市内に建立した修道院に同荘園を寄進した時期のどちらが早かったか

は不明である。シャルル・マルテルの治世に、同荘園はこの修道院から引き離されたと考えられる。シャルル・マルテルの息子ペパンが「762年にジャンティイの荘園に冬営し、そこでクリスマスと復活祭を荘厳に祝った」と、古い編年記に記されている。更に、エジナルが『年代記』で証言している如く、同ペパンは「766年、クリスマスをサムシー、他方復活祭をジャンティイで祝った。しかし、三位一体と聖者の像に関する問題が勃発すると、ジャンティイの荘園で集会が開かれ、この問題に関する大規模な宗教会議が持たれた（後略）」とのことである。このことや類似のことと、アドン、レギノン、その他の人たちの証言はその当時、ジャンティイが国王の荘園の仲間に入っていたことを立証している。しかし、同荘園はエロワの下であった最初の状態に、ルイ吃音王（2世、877-879年）の時代に、戻っていたと見るのが妥当であろう。何故なら、同王のパリ司教座教会に宛てた文書に「サン・テロワ修道院に帰属する、ジャンティイと呼ばれる小さな荘園」と記されているので<sup>2)</sup>。今日、町はピエーヴル河畔に位置しているが、地元では、ジャンティイ川からその名前を獲得しているとする。

註

- 1) Gentilly (Val-de-Marne, ar. La Hay des Roses, c. Arcueil).
- 2) 『勅令集』, 2巻, 1501欄参照。

## LXII. サン・ジェルマン・アン・レイユ<sup>1)</sup>

フランク諸王のお気に入りの中に入っていた、Sancti Germani castrum in Ledia silvaと表記されるサン・ジェルマン・アン・レイユ-レイユの森のサン・ジェルマン城-の創建者は、国王ロベール（2世、996-1031年）であったと見られている。彼は王営荘園に付設の、パリ司教聖ジェルマンに捧げられた修道院を建立している。国王ロベールの息子アンリ（1世、1031-1060年）はこの小修道院を「レイユと呼ばれる森に、彼の親によって建立された」と言っている。コルビー修道院に宛てて、1189年にサン・ジェルマン・アン・レイユで発給された文書が伝えている如く、フィリップ尊厳王は1189年同地に滞在している。パレスティナから戻った同フィリップは1192年3月28日、フォンテーヌブローでキリストの生誕を厳かに祝ったあと、再び当該荘園に向かっている。ブレで瀆神行為を行っていたユダヤ人と対決すべく、やがてそこを立ち去ると、リゴールの証言によれば、キリスト教徒の名を冒瀆する敵を火刑に処した。『サン・ドゥニ修道院史』は、同王が主の化肉の1207年サン・ジェルマン・アン・レイユに滞在したことを教えている。聖ルイは1227年、フィリップ豪胆王は1272年、両王のよく知られた命令文書において、それが模倣されたことが語られている<sup>2)</sup>。しかし、現在幸運のうちに統治しているルイ大王（14世）の出生地として以上に、この宮殿が後世の人々によって祝福されることはなからう。

註

- 1) Saint-Germain-en-Laye (Yvelines, ch.-l. ar.).  
 2) 『キリスト教ガリア』, 4巻, 62頁参照。

LXIII. ジェルミニー・シュル・ロワール<sup>1)</sup>

Germiniacumと表記されるジェルミニーという地名は、フランスには非常に多い。1つは、ランス地方のヴェスル河畔のそれ。クローヴィス大王の息子でオストラジー王、ティエリー（1世, 511-534年）が修道院長ティエリーに譲渡したと、同聖者の伝記の中で語られている。他の1つはモーの北約2里（8キロ）のマルヌ河畔に位置する。他方、ブルボン郡にも、シュジュールによって言及されているジェルミニーの城がある。更に、オルレアン郡にも、フルーリからそう遠く離れていないジェルミニーがある。ここには、シャルルマーニュによって、アーヘンに建立されたもの<sup>2)</sup>と同様の、見事な造りの教会をオルレアン司教テオデュルフが創建している。彼はやがて、国王に対する謀反の罪に問われ、追放の刑に処せられる。シャルル禿頭王は854年ジェルミニーに滞在し、マラストまたはモントリウ修道院を自身の保護下に置き、その財産を列挙し、統治の15年、インディクティオの2年、ジェルミニーで発給された文書においてそれを安堵している。『聖者記録集（ベ）』4巻下で、843年にフルーリ近郊のジェルミニーに宗教会議のために集まったガリアの非常に多くの司教たちによって、コルビー修道院に発給された、見事な特権文書が公刊されている<sup>3)</sup>。読者諸賢は、(841年の) フォントノワの戦い以後のフランク王国の惨状、または教会内、そして特に修道院内における諸司教の惨状を言い表すのに、この特権文書以上に詳しい研究を切望することはないであろう。856年同じくシャルル禿頭王はサン・リキエ修道院長ロドルフ同王は彼を自分の叔父と言っている—に命令文書を付与している。それは「書記アネアヌスがルイに代わって承認し下署した。栄光に満ちた王シャルルの統治の16年、インディクティオの3年, 2月28年に交付された。ジェルミニーの宮殿で行われた（後略）」とある。また筆者は別の文書、つまり聖ルイ王が1253年、フィリップ美王が1319年にジェルミニーで交付した命令文書も発見している。しかし、このジェルミニーはマルヌ河畔にあるようで、そこには今日モー司教の所有する、有名な建物、特に手入れの行き届いた庭園と噴水で魅力に満ちた田園屋敷が見いだされる。

註

- 1) Germigny-l'Évêque (Seine-et-Marne, ar. Meaux, c. Meaux-nord)  
 2) 『聖者記録集（ベ）』, 1巻, 601頁参照。  
 3) 同上, 4巻下, 249頁参照。

#### LXIV. ゴディンガ・ヴィラ<sup>1)</sup>

Goddinga-villaと表記されるこの荘園の名称、位置、荘園自体が、誰もがこれらすべてを真剣に探究したとしても、完全には解明できなかったとも告白するであろう。即ち、もし名前を考慮するならば、筆者が知る限りでは、シャロン・シュル・ソーヌ地方のプレス・シュル・グローヌ内に比定される荘園よりも適した場所はどこにもない。ディジョンの上院議員で、非常に有名なフィリベール・ドゥ・マラが指摘するそれはVille GaudinまたはVille Godinと表記されるヴィル・ゴダンと言われている、嘗てディジョン上院議会の議長であった、非常に有名なフィオ氏の相続財産に属していた。しかし、筆者はヴィル・ゴダンのVilla Gaudini またはVilla Godiniというラテン語表記とGoddinga-villaとの間には少なくとも相違が存在していると考え。他方、同荘園の立地に関しては、何か確かなことを提示できるのだろうか。サン・ドゥニ修道院の文書庫に収納された、修道院の主要な権利を保護するための、シャルルマーニュが文書で次のように示しているものが、闇の中からの1つの救済案として残っているに過ぎない。そこには「余の統治の11年と5年、10月に発給された。Goddinga-villaにて行われた。神の名において、幸あれ」とある。この場所に関しては、筆者の手に多くの史料は残されていない。

#### 註

1) 現在も不詳。MGH, DD,DK, 1, p. 514.

#### LXV. ゴンドルヴィル<sup>1)</sup>

Gundulfi-villaと表記されるゴンドルヴィルと前項のゴディンガ・ヴィラとは同じであるとするのが、名前の類似性からと、特にシルモンの『ガリア公会議』の中でフロタリウスがゴンドルヴィルをGundum-villa またはGondo-villaと同一視していることから、一時期少なからずの人たちの見解であった。実際は、後から揭示されるフロタリウスやその他の人物の真正文書によって、別物であることが判明している。ロレーヌ旅行の最中に、筆者は1通以上の文書を発見した。碩学ヴァロワはゴンドルヴィルの名称がオストラジー王テオドベール2世(586-612年)の宮宰グンドルフスから引き出されたものと、正当にも見抜いた。しかし、その場所に関しては、碩学の間では一致に至っていない。ダヴィド・ブロンデル(1590-)はグンドルフス・ヴィラをアンヌ川から2里(8キロ)、サント・メネオ(オクシュエーヌ)の町から4里、ランス市から14里離れた町、ゴンドルヴィルと見なす。グンドルフス・ヴィラをトゥール司教管区内の、加えてトゥールTullo-Lucorumの近くに位置していたと仄めかしている、直ぐ後で引用されるフロタリウスの文章がこの人—勿論、経験の浅い人ではない—の文章を完全に無効にしている。

更に、不快にもルイ・セロ（1588-1658年）はドゥジー公会議に関する叙述の中で、グンドルフス・ヴィラをHouldicourt—それがどこにあるか、筆者には分からない—と解釈する。実際、そこにおいて名前のみならず、その他すべてが反論している。トゥル司教管内に、グンドルクールという町は存在する。それはアドリアン・ヴァロワにはグンドルフス・クルティス、つまりグンドルフス・ヴィラに十分似ていると見られている。しかし、ずっと以前にロレーヌを踏査したときはそうではなかったが、今回筆者はいと高貴なグンドルフス・ヴィラの真の場所をモーゼル川沿いに探った。そこはトゥルの東1里、魅力的な場所で、古い宮殿の古めかしい光輝を放っている。加えて、そこには今日広くグンドルヴィルと呼ばれる、ロレーヌ公に帰属していた城下町が残っている。

カスパー・ブルシュ（1518-1559年）は『ドイツ修道院年代記』の中で、ティエリー（4世、721-737年）がミュールバッハ修道院の創建に関して、シェル修道院に宛てた、「グンドルフス・ヴィラで発給された」文書に言及しているが、同荘が王宮荘園として言及されているもので、これよりも古いものは存在しない。グンドルフス・ヴィラに関しては、この時期からルイ敬虔王の時代に至るまで、古い作家の書には現れない。同王は「この年グンドルフス・ヴィラの宮殿<sup>2)</sup>に滞在していた時、同宮殿のテラスの正面に、礼拝堂に通じる建物を建設するように命じられた」と、フロタリウスはイルドワンに宛てた書簡で述べている。これらの言葉から、この荘園は司教管内の中に含まれていたことを十分に明言している。この場所にフロタリウス自身も滞在していたのであるが、彼はサン・テーヴル修道院に宛てた、本書で原本から我々が公刊する文書において、関連する情報を提供している。この場所にとって真正の名前であったことが確かであると見なされるべきであることから、ジャック・シルモンが何と言おうが、グンドム・ヴィラではなくて、グンドルフス・ヴィラとそこには書かれている。この地に滞在して、そこから発給された皇帝ロテールの種々の命令文書が、同じことを優先させている。1つはジャン・コランビ（1592-1679年）の『ヴィヴィエ司教事績録』、他の1つはクロード・ティルーの『オータン伯史』においてである<sup>3)</sup>。ムーズ河畔のサン・ミエール修道院が所蔵するものの中から、2通が本書で公刊されている。それらは「慈悲深いキリストの年、ルイ敬虔帝殿が帝位にあることイタリアで21年、フランスで1年（中略）、グンドルフス・ヴィラの宮殿で行われた（後略）」と記されている。これらは『拾遺集』12巻に収められた、同帝の息子ロテールの文書、ルイ吃音王が統治の1年に付与したオータン司教座教会宛ての文書と一致する。シャルル肥満王は884年のトゥルにあるサン・テーヴル修道院への修道士の復帰のための命令文書において、「余がグンドルフス・ヴィラの余の宮殿にいた時（後略）」と言っている。そして最後に、シフレの書に収められた、915年に書かれたシャルル単純王の文書<sup>4)</sup>、同じように、ドゥジー公会議の記録と883年のシャルル禿頭王の勅令、『サン・バルタン修道院編年記』は869年に関する記述の中、アンクマール<sup>5)</sup>とフロドアルドは双方ともランス関係の著作において、レギノン<sup>6)</sup>は884年とその

翌年に関する記述、エモワン、そして教皇ハドリアヌス4世は、非常に著名なエティエンヌ・バリューズの書に収められた、ロレーヌ公マティウに宛てた1155年の文書において<sup>6)</sup>、この荘園に言及している。これらすべては、『フルダ修道院編年史』と随所において一致している。以上すべてから、グンドルフス・ヴィラが広く知られていたことが結論づけられる。筆者は諸司教と諸国王によって非常に多くのことがそこでなされたことを知っている。以上の人々にこの地がかくも好まれていたことには、それなりの理由があったと考えられる。

註

- 1) Gondreville (Meurthe-et-Moselle, ar. Toul, c. Toul-nord).
- 2) シルモンはこれをGondo-villaeと読む。シルモンとデュシェーヌが使用している古い写本では、Gondoとvillaeの間の数文字が擦り取られている。
- 4) 『トゥールニュー史』, 275頁参照。
- 5) 『書簡集』, 1巻, 613頁参照。
- 6) 『勅令集』, 補遺, 1559頁参照。

LXVI. エルスタル<sup>1)</sup>

ムーズ河畔の、Haristalliumまたは Heristaliumと表記されるエルスタルは今日ブラバンの領域内にあり、リエージュから最初の里程標がある所で、宮宰ペパン（2世、「エルスタルのペパン」とも呼ばれる。714年没）が生まれ育ったところと伝えられている。その後、少なくない人たちがHeristaliumとも呼んでいる。一部の人は彼をエルスタル宮殿の創始者と考えたがっている。フランキアの作家たちは、確かに、彼が同地にしばしば滞在したことを教えてくれている。彼らは彼自身と、彼の後継者であるカロリング諸王によって、エルスタルで行われたことを詳しく調べている。それらすべてに関わりあう気はないが、ただ、我々の諸王の真正文書から確かのものだけを取り上げることにする。筆者は君主シャルル（マルテル）の文書を、ル・ミルの書において閲覧した<sup>2)</sup>。そこには「王ティエリー4世（ドゥ・シェール, 737年没）の統治の2年1月1日、エルスタルの公的荘園で発給された」とある。国王ペパン（751-768年）は統治の1年、ル・マンのサン・カレ修道院に発給した文書で、この地をArestaliumと呼んでいる。他方、パピール・ル・マソンの『ブラバン・ロレーヌ公系譜』の中では、この地はHarstallumとある。筆者はシャルルマーニュのいろいろな文書を閲覧した。それらの一部は原本で、自身がしばしばこの地で法廷を開いていたことを教えている。確かに、『キリスト教ガリア』に収められている如く、同王は統治の2年、3月1日にアンジェの教会に文書を付与している<sup>3)</sup>。パリにある我が修道院サン・ジェルマン修道院に統治の5年と11年、10月20日、相応の贈り物を与えている。同じ年、エクス・ラ・シャペ

ルのノートル・ダム教会に宛てた文書がある。統治の14年、サン・ドゥニ修道院長フルラドとメスのサン・ピエール女子修道院長エウフェミナとの間で行われた、メス郡内の幾つかの所領の交換を、本書で初めて公刊された文書で確認している。『キリスト教ガリア』に収められた、サン・マルセル・レス・シャロン・シュル・ソヌ修道院に宛てた文書。バルデリクスとヴィルヘルム・キリアンダーの『トリーア史』で、読者諸賢は類似の文書を閲覧するであろう。それらはすべて「エルスタルHaristalliumの公的宮殿で」、「エルスタルAristalloの宮殿で」付与されている。ルイ敬虔王はウォルムスで、839年に制定した帝国分割の中で、エルスタルを皇帝ロテールの分け前に帰している。更に、855年尊厳者ロテール（1世）自身がそれを息子ロテールに遺贈している。869年、亡くなったロテールの王国をシャルル（2世）が獲得する。この件に関して、（翌年の）8月同シャルルとドイツ王ルードヴィヒとの間で、エルスタルとメルセンとの中間地点にて会見が持たれ、ここで当該エルスタルが国王シャルルの手に渡る。877年同シャルル（2世）は息子ルイ（2世）にその森での狩猟を禁じている。また、シャルル単純王も921年までエルスタルを所有していたが、その年から、同エルスタルは、東フランク全体と同様に、王国であることを終了すると法律によって、ハインリヒ捕鳥王（1世、ドイツ王、919-936年）の手に移り、彼によって新設された公の支配下に置かれた。ル・ミルはこの協約に関する文書を『ベルギー寄進文書集』の中で公表している。更に、同書では、同シャルル（単純王、893-923年）のいろいろな命令文書を読むことができる。それらは彼が少なくとも、エルスタルに滞在したことを証明している。実際、その少し後、ノルマン人の恐ろしい襲撃によってこの宮殿は蹂躪され、その後国王安在所としての輝きと大きさに再度復帰することは叶わなかった。

註

- 1) Herstal (ベルギー, pr. Liège, ar. Liège, ch.-l. c.).
- 2) 『ベルギー寄進文書集』, 2巻, 3章参照。
- 3) 『キリスト教ガリア』, 2巻, アンジェ司教管区参照。

LXVII. ヘクスター<sup>1)</sup>

パーダーボルン司教管区内に位置する、ウーザー河畔のHuxoriumまたは Huxoriと表記されるヘクスターが、新コルビー（コルバイ）修道院に従属させられる以前、王宮荘園であったことを、本書で原本から公刊されているルイ敬虔王（1世、814-840年）の素晴らしい文書が教えてくれている。それは彼が帝位の10年、親族で、両方の修道院のいと聖なる院長であったアダルハルドに付与されている。同じく、筆者が『聖者記録集（ベ）』4巻上で公刊しているドイツ王ルードヴィヒ（843-876年）の文書がそ

れを確認している。

註

1) Höxter (ドイツ, l. Nordrhein-Westfalen, r. Detmold).

### LXVIII. インゲルハイム<sup>1)</sup>

最近のドイツ人たちは、ライン河畔のビンゲンとマインツのほぼ中間に位置する、IngelheimまたはEngelheimiumと表記されるインゲルハイムの宮殿がシャルルマーニュの生誕地だと言い触らしているが、実際、彼らは途方もない大間違いを犯している。シャルルマーニュは王領地としてのインゲルハイムの父にして創設者と見なすべきである。エジナルは彼の伝記の中で、「彼は立派な宮殿の建築にも着手した。1つはマインツの町からあまり遠くないインゲルハイムと呼ばれる荘園の横、もう1つはバタヴィ族が居住する島の南側に接して流れるワアル河畔のニメグに建てた」と述べている。インゲルハイムに関する同様の実情を、ワンデルベールが『聖ゴアール奇跡譚』の中で伝えている<sup>2)</sup>。そこで彼は、「この上なく卓越した思い出の皇帝にして尊厳者であるシャルル（マーニュ）は自らが創建した、ライン河畔のインゲルハイムと呼ばれる宮殿から船で出発した（後略）」と証言している。これに、騎士から聖職者になった、ルイ敬虔王の同時代人であるエルモールの言葉が一致している。彼はこの宮殿が100本の円柱を付け加えて拡張され、その教会の扉が銅製で戸口が金製であったことに言及している。この後、古い作家の著作においては、この宮殿への言及は西暦774年またはその翌年まで、つまりシャルル（マーニュ）の統治の7年まで見られない。この年、シャルル（マーニュ）はインゲルハイムに到着し、ザクセンに4組の戦士団を派遣する。続いて、787年シャルル（マーニュ）は反逆者タシロを息子テウトと共にインゲルハイムに軟禁し、剃髪を強いて、2人をルアン地方のジュミエージュ修道院に移送させている。次に、シャルル（マーニュ）は少年期をゲルマニアで過ごしたと誰かがどこかで伝えているのだろうか。その人は、150年前に嘘を言ったのだろうか。確かに、シャルルマーニュの治世にパリ司教（聖ジェルマン）の遺骸奉遷記を著している、パリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院の修道士に信を置くならば、シャルル（マーニュ）はこの奉遷の荘厳な儀式に参列していた。「その時7歳の子供が、そこで見たことを素晴らしい記憶に留めており、そして見事な弁舌で語っていた」とある。それ故、筆者と同国のフランス人がシャルル（マーニュ）はパリかその近くの宮殿で生まれて育てられたと主張するならば、それはより正当性をもっていたことになる。実際、この問題に関しては、本書補遺9章において論じられている。インゲルハイムに戻ると、791年アキテーヌ王ルイー後に皇帝

になる－は、そこで父シャルル（マーニュ）に会って喜んでいる。そして、そこには「すでに剣を催促し、青年期の準備をしていた」とある。同じくルイ帝は、エジナルの言によると、819年伯ヴェルフの娘ジュディットを妻に迎えた。そして再び、インゲルハイム宮殿で7月会合を持った。本書で初めて公開される同ルイの真正文書はザクセンのコルバイ修道院のために、帝位の10年、インゲルハイムで交付され、不輸不入の特権とその他の恩典を同修道院に付与している。その3年後、6月に諸司教と諸侯による宗教会議がインゲルハイムで開かれている。そこでルイ（帝）は「ローマの聖なる座からの使節とモンテ・オリヴェルト修道院からの使節－院長自身－を歓迎し、意見を聞き、放免した」とある。同じ年、「10月1日頃」同帝は別の会合で、「アボドリト人の公ケアドラグスとテツングロンから意見を聞いた」。この後すぐに悲しみが待っているのに、この宗教会議に時間を使い過ぎてしまった。悲劇がこの後に続いた。ルイ（帝）が人事から引き離されると、皇帝ロテールがランス司教座を追われていたエボンを、次の司教会議で復位させた。それは「インゲルハイムの公的宮殿において、6月24日、カエサルカエサルのロテールが国王と皇帝として統治していた時、彼の復位の1年、フランスにおいて父の後継者となる。インディクティオの3年」のことであった。直ぐその後、この地の所有権がドイツ皇帝に移り、そこにおいて間もなく2つの宗教会議が開かれているのを、筆者は確認している。1つは948年、パリ伯ユグの件で、ルイ海外王とドイツ王オットーが参列する。教皇庁からの使節マルタンも、フロドアールの証言によると、参加していた。もう1つは、『聖ウダルリク伝』の作者が伝えている、972年の宗教会議で、いと有名な枢機卿バロニウスがそれに言及している。

註

- 1) Ingelheim am Rhein（ドイツ, l. Rheinland-Pfalz, r. Mainz-Bingen）.
- 2) 『聖者記録集（ベ）』, 2巻, 292頁参照。

LXIX. イル・シュル・マルヌ<sup>1)</sup>

王宮莊園や国王宮殿を生み出してきた要因として、非常に多くの場合、土地の魅力、私有地、時々起きる不慮の災難、侵入する敵の攻撃に対応するための防塞化の契機が考えられる。これらのことが後にピートルの町で起きたことを、筆者は後述するであろう。加えて、このことは、Insula super Matronamと表記されるイル・シュル・マルヌでも同じ頃起きていたことを、確かな証拠でこれから立証する。この地はノルマン人のガリアへの侵攻以前において、殆ど誰にも知られていなかったが、マルヌ河畔のモー市の西1里（4キロ）に位置し、トリエまたはトリジェの港から派生してトラジェと嘗ては呼ばれていたTrejectumからもそう遠くない。このTrejectumはモーの東（5キロ）にあつて、地元

でトリポールまたはトリルポールと呼ばれる Trejectum とは別である。この Trejectum はその土地の所有者の名前から Trejectum-Bertulfi と呼ばれ始める。この地はやがて13世紀に入り、Tria-Bardoli- または Bardulfi-, Triebardou, 最後は全く変形して Trillebardou (モーの西5キロ, トリルバルドー) と呼ばれるようになる。イル・シュル・マルヌには嘗て橋があったことを、『サン・バルタン修道院編年記』は次のような言葉で教えている。「シャルル(禿頭王, 843-877年)は人々が彼の許にやって来るのを待っていると、各川、つまりオワーズ川、マルヌ川、セヌ川の両岸に軍隊を配置し、ノルマン人が領地に入ってくないように防備した。彼は使者を迎え入れたが、それはサン・モール・デ・フォッセに滞在していたデーン人の中から選ばれた者たちが小さな船に乗ってモーの町に到着したからである。しかし、彼自身は周りにいた者たちと一緒に急いでそこを発った。そして、ノルマン人によって橋が破壊され、船が占領されていたので、彼らに近づくことができなかった。必要な助言を得て、トリバルドーの近くの中島にある橋を修繕した。そしてノルマン人に対して、上陸を阻止した」と。騎士たちが橋の修理に当たっている間、シャルル(禿頭王)はこの荘園で宗教会議または法廷を開いた。上記の編年記が次の言葉でそれらを表現している。「このことによってノルマン人は外に出られなくなると、人質を選んでシャルル(禿頭王)に次のような条件で送ってきた。つまり、法廷開催日にセヌ川を下り、海を目指す(後略)」と。シャルル(禿頭王)はこの法廷が敵の追討中に開かれたと言っている。本書で刊行されている、彼の真正の命令文書がこのことを証明している。彼がそれを戦闘の合間にジュミエージュ修道院長ゴズランに宛てたもので、「栄光に満ちた国王シャルルの統治の22年、インディクティの10年、1月31日に交付された。激しい遠征の合間に、マルヌ河畔の中島において行われた(後略)」と。そしてこの場所には橋のみならず、法廷を開くに相応しい建物をシャルル(禿頭王)は建てたまたは自身に相応しいものにしたことを、筆者は決して疑わない。それらの建物にランスやサンス大司教管区の司教たちの集団が集まったと思われる。フロドールが年代記の中で、962年の出来事として次のように記している。「つまり、ランスとサンスの両大司教管区の司教13名からなる宗教会議がモー地方のマルヌ河畔で開催された。サンス大司教が主宰し(後略)」と。同会議は、子供であるにも関わらず、父に促されて5年間もランス司教座に就いていた、ヴェルマンドワ伯エリバールの息子ユグに対してであった。また、マルヌ河畔で開かれたこの宗教会議に関して、フラヴィニー修道院の修道士ユグが年代記で、同年の出来事として言及している。しかし、モー司教管内のマルヌ河畔の別のある場所よりも、筆者はこの司教たちの会議を「マルヌ川の中島」に帰したい。そうするのは、まず、両(大)司教管区の境界とは全く無関係な立地によって、この荘園が宗教会議の運営に適していると思われるからである。しかし、実際、「マルヌ川の中島」には橋らしきものも、公的建築物の痕跡も残っていない。荷を積んで川を渡る小舟のための港があるに過ぎない。

## 註

1) Isles-lès-Villnoy (Seine-et-Marne ar. Meaux, c. Meaux-sud).

LXX. モンジュイ<sup>1)</sup>

Jocundiacum, Jocuntiacum, Jogentiacum, Jucundiacumという名称で最も古い荘園は、ガリアにおいては1つではない。シェール川を挟んでトゥールの対岸にあるジュイは、トゥール司教グレゴワールが『歴史十卷』の中で言及している。Mons-Jucundiacusと表記され、後にMons-Gaiusと改名されるモンジョワはレイの森のサン・ジェルマン近郊にあって、862年ソワソン宗教会議の記録がサン・ドゥニ修道院の財産として挙げている。しかし、この名称の最も高貴な宮殿は、リモージュ地方に位置する。その伝記の中で天文史家とテガンが言及している如く、ルイ敬虔帝は822年、息子ペパンが父と行動を共にすることを望んでいると聞いて、自身の「隊商と共にやってきた」。ルドン修道院長コンヴォワン事績録の作者は、ルイ（敬虔帝）によって「軍隊がアキテーヌ地方のリモージュ方面に引率された」と述べている。この時ルイ（敬虔帝）は「全体集会をリモージュ地方のジュアックの宮殿で開いた」。他は割愛して、『年代記』の中でアデマール、そして『リモージュ司教事績録』が「(ルイは) 10月、大いなる栄光をもって、サン・ソヴール国王教会を献堂することを命じた」、「聖マルシアルの遺骸が持ち上げられ」、「同じ月に、同皇帝の列席の下、大きな飾り窓のある地下礼拝所の救世主の祭壇の後ろに安置された」と伝えている。リモージュ地方では、多くの人がJocundiacumをジョイアク (Joiac) と呼んでいる。しかし、そこに国王宮殿があったと言っているが、それを見た人は誰もいない。筆者は、リモージュ近くのJucundiacumの宮殿を今日モンジュイ le Mont-Jouisと呼ばれる場所に置く、リモージュ地方の非常に優秀な人の推論に喜んで賛成する。その地はサン・シュルピス修道院に帰属し、同修道院の文書にはGaudium やGaudiacumとして出てくる。上述のサン・シュルピス修道院の献堂式の記録がこれに言及していて、聖マルシアルの遺骸の引き上げは皇帝がJucundiacumで法廷を開いていた時で、「彼の列席の下で」行われている。皇帝ルイの宮殿で有名な、リモージュ地方にあるこの地は、コンヴォワン事績録の作者によっても「カドリア山において」と言われている<sup>2)</sup>。この山はリモージュから3, 4里離れていることも障害にならない。ルドン修道院長コンヴォワンが懇願のために彼の許を訪れた時、ルイが退避していた国王の安在所がそこにあったことを何が拒否しているのか。また、Jocuntiacumの宮殿にはレストレl'Estrée修道院の創建者ヴィフレドが訪れていて、そこでアキテーヌ王ペパンから特権文書を獲得している<sup>3)</sup>。「永遠に毀損されない状態に留まるために、彼の書記たちに文書に書き記し、自分の印を書かれたものに押すよう命じた。貴族たちの会合で、Joguntiacumの宮殿にて、いと清澄な

尊厳者ルイ陛下の帝位の17年、彼の王位の17年」と、『聖ジュヌー奇跡譚』の匿名の作者が記している。

JocundiacumとAndiacumが同一であるかどうか上で考察され、そして写本原本とその他から同一でないことが明らかにされている。筆者は、同僚たちとの話から、サント地方におけるAndiacum<sup>4)</sup>の立地を決めていた。しかし、800年前に書かれた『フォントネル修道院年代記』の権威が、今ここで意見を変えることを強いている。その第7章において院長ベニーニュ（710-724年）がフォントネル修道院に所領を譲渡したことが記されている。そこには、「アングレーム郡内に位置するAgannagum, Bonneuil, Andiacum」とその他の所領とある。それ故、ジャルナク（Juriniacensis）主席司祭区にある、多分アンジュアクと思われるAndiagum, Andiacumがそれに比定されるべきであろう。

#### 註

1) Jouac (Haute-Vienne, ar. Bellac, c. Saint-Sulpice-les-Feuilles).

2) 『聖者記録集（ベ）』, 4巻下, 200頁参照。

3) 同上, 227頁参照。

4) 最近の研究では、不詳となっている。Voir *Chronique des abbés de Fontenelle*, édit. et trad. par Pradié, P., Paris, 1999, p. 232.

#### LXXI. ジュピル<sup>1)</sup>

リエージュ近郊のエルスタル地方に属し、ムーズ河畔にあるJopila, Jopilum, Jobii-villa と表記されるジュピルの宮殿の創建者は知られていない。この場所は宮宰ペパン（2世）のお気に入りであった。そこで重い病に冒されていた時、息子グリモアルが殉教者聖ランベールの教会でラントガリウスによって殺害されたことを知る。それから余り遠くない時期、715年にペパンは悲嘆に暮れてこの世を去る。同ペパンの甥で、もう1人のペパン（3世）が759年、ジュピルで復活祭の日曜日を祝ったと、フランク人の編年記すべてで言われている。この時からシャルル単純王（893-923年）に至るまで、ジュピルに関する言及はない。同王はこの莊園を他の莊園と一緒に、伯ジスルベールから奪い取っている。そして間もなくして、ドイツ王ハインリヒの忠告を受けて返還したと、ウルスベルク修道院長コンラドの書に収められた、ガリアの作家の断片によって伝えられている。

#### 註

1) Jupille-sur-Meuse (ベルギー, pr. Liège, ar. Liège, c. Liège).

#### LXXXII. イーゼンブルク<sup>1)</sup>

ライン川の右岸に位置するIsemburgumと表記されるイーゼンブルクはコブレンツから6乃至7ドイ

ツ・マイル離れている。そこに宮殿があったことを「イーゼンブルクの宮殿において」発給された、マルセイユのサン・ヴィクトール修道院宛てのシャルルマーニュの徴税権に関する文書が教えている。マルセイユ港の同修道院の脇で錨を下ろして停泊している船舶がそれを支払っていたのであるが、『キリスト教ガリア』の著者がマルセイユ司教の項で、司教テオドベールまたはテウトペールの時代の出来事の中で言及している。イーゼンブルクをヒセンチアクムまたはセンテギアクムの宮殿と混同している人は間違っている。何故なら、後者はライン川の左岸、前者はその右岸に位置していることが明白なので。

註

1) Isenburg (ドイツ, l. Rheinland-Pfalz, r. Neuwied).

### LXXIII. イシー<sup>1)</sup>

王領地の荘園であったIssiacumまたは Isciacumと表記されるイシー（・レ・ムリノー）は、嘗てパリ地方の西側で、非常に広大な面積を占めていた。クロヴィス1世の息子、フランク人の王シルドベール（1世, 511-558年）は司教座都市パリに非常に近かったイシーのこの部分に、国王の建物を持っていて、そしてそれらを我々のサン・ヴァンサン修道院、今のサン・ジェルマン・デ・プレ修道院に委譲したと伝えられている。やがて、イシーの名称は古い王領地のごく一部を占めるに過ぎず、その集落はサン・ジェルマンの郊外から少し離れていて、ヴォジラールに隣接している。

註

1) Issy-les-Moulineaux (Hauts-de-Seine, ar. Boulogne-Billancourt, ch.-l de c.).

### LXXIV. キルヒハイム<sup>1)</sup>

ドゥブレは『サン・ドゥニ修道院史』の中で、オストラジー王国の、嘗てダゴベールによって飾り立てられた、Kircheimumと表記されるキルヒハイムの宮殿に言及している。筆者は同王の記録に、それが公的なものであれ私的なものであれ、このことに関して何も書かれていなかったことを覚えている。しかし、この荘園は空想の産物ではなく、それへの言及をシフレの『トゥールニュ史』で見るとであろう。そこでシャルル肥満王が887年に滞在していて、トゥールニュ修道院長ブリトジュールと修道士たちに避難と食料のために、ドンゼールDonzère修道院を譲渡している。「東フランキアにおける統治の6年、

イタリアにおける統治の5年、ガリアにおける統治の2年、神の名において安寧にキルヒハイム－刊行文書では間違っ「Kyrien」となっている－において行われた」とある。同じ年、同帝はトゥール、サン・マルタン修道院の院長オドンの願いに応えて、同院長から参事会員に対して行われた、イタリアにあるいくつかの所領の寄進を安堵している。そこには「主の化肉の887年、6月16年、インディクティオの5年、皇帝シャルルのイタリアにおける統治の6年、東フランキアにおける5年、フランスにおける2年に発給された。キルヒハイムChirich-heimで行われた」とある。この場所は下アルザスのライン川からそう遠くない、ストラスブールとサヴェリヌを結ぶ線の南側、マルレンハイムの近くに位置し、更にその名称は今日でも地元で維持されている。

註

1) Kirchheim (Bas-Rhin, ar. Molsheim, c.Wasselonne, c<sup>ne</sup> Marlenheim).

LXXV. ラニー<sup>1)</sup>

古い文書はラニー Latiniacumと呼ばれる3つの所領がサン・ドゥニ修道院に寄進されていることを教えてくれている。最初はダゴバール1世(623-638年)の事績録が教えていて、ここでは「それはモー地方に位置し、王自身が公バボンと宮中伯タシロと共に自分の所領の中から交換した」とある。他の1つ-2番目であるとすれば-は同事績録の中の少し先で、「国王ダゴバール(1世)と自身の息子ルイが付与した荘園に関するナンティルドの遺言状。同時に、彼女はそれらが諸聖人の相応しい場所に供されるよう命じた。更に、ブリーに位置するラニーの荘園をサン・ドゥニ修道院に引き渡すべく、それらの中に加えるよう命じた」のような言葉で言及している。3番目のラニーは、同じくサン・ドゥニ修道院の所有下にあったことを、王シルドベールの重要な文書が確かに証明している。その中で、ラニーはヴェルヌイユ・シュル・オワーズ地方に位置するヴェルンの宮殿(本巻第152章参照)とシャイイ・アン・ピエールの荘園の近くにあると言われている。この最後のラニーの荘園はブリー川がオワーズ川と合流する地点に近く、多分ダゴバール王からサン・ドゥニ修道院に寄進されたものと、事績録の作者は理解している。そして彼は言葉の誤解に陥って、「ブリー地方」の語をラニーと結びつけてしまっている。それはそれとして、上記2つ-筆者は当面は2つと考えている-のうちの1つに関して、それが国王寄進によって譲渡されたことを上記の立地と同様に、本書で公刊されている、モー郡のラニー荘がサン・ドゥニ修道院に寄進されたことを記しているクローヴィス(2世)とバティルドの息子、王ティエリー(3世, 675-691年)の重要な文書も立証していない。その命令文書の文章は、「フランク人の王で、

著名な人ティエリー（3世）は（中略）汝らの精励さを知った。余は余の魂の救済のために、余の聖俗界の高位高官たちの助言を得て、モー郡内にあるラニーの荘園を（譲渡する）。同荘園は嘗て余の宮宰であった著名な人たち、エプロワン、ガラタン、ジスルマルの所有下にあったが、ガラタンの死後は王領地に戻されていた。余は王領地に編入された同荘園を余のいと高処の王妃クロティルドと余の宮宰、著名な人ベルシャルの提案を受け、サン・ドゥニ修道院に譲渡する（後略）」となっている。同名の2つの場所はブリー地方に含まれていて、その1つはマルヌ河畔のラニーで、貴族のエルシノアルがクローヴィス王の承認を得て建立した古い修道院で有名である。他の1つはゴエル郡内のモー寄りにあって、地元ではラニー・ル・セク *Latiniacum-siccum*（「乾いたラニー」の意）と言われている。これは前者の、水が進るように流れているラニーとは別であることを容易に識別させる。著名なアドリアン・ヴァロワはラニー・ル・セク、つまりいつもは水が流れていないラニーの方が、ダゴベール（1世、623-639年）とナンティルドによってサン・ドゥニ修道院に寄進されたと判断する。もしダゴベールがその前にこの地を別の修道院に委譲していたとするならば、フルセウスまたはエルシノアルドによって水が流れる中に修道院が建立されることはあり得なかったとするのがその理由である。しかし、同様の不都合はティエリー（3世）にも生じてくる。彼はモー郡内のラニー—ダゴベール（1世）の伝記でサン・ドゥニ修道院に寄進されたとある—が宮宰のエプロワン、ワラトン、ジスルマルによって再度所有され、やがて王領地に編入され、結局王妃クロティルドが提案し、彼女と宮宰ベルカリウスによってサン・ドゥニ修道院に譲渡されたことを知っていたのである。その後、モー地方のゴエル郡に位置するラニーは、水が枯れたため、ラニー・ル・セクと言われている。しかし、実際は、ティエリー（3世）所有下のラニーは土地、建物、非自由人、領民、ブドウ畑、森林、野原、放牧地、採草地、製粉所、水、水流等（この3文字が、著者によって大文字に書き換えられている）と共にサン・ドゥニ修道院に譲渡されている。ましてやこれらすべてがその後の自然の変化によって、乾燥した状態になってしまったとは誰も認めないであろう。もしそうでなければ、これらの言葉は実態を表しているのではなくて、定式化された文書書式に過ぎなかったことになる。

フランス王ロベールは本書で公刊されている1018年に発給の文書で、伯エティエンヌが次のことを「自身に知らせてきた」と述べている。それは「ある修道院があった。その建物はパリ伯領内の、ラニーと言われる地に創建された。その修道院は嘗て非常に広大な土地と広い所領が並んでいることで有名であったが、その後異民族の襲撃によって破壊され、殆ど放棄されてしまった。彼の父、伯エルベールがそれを復興し、自身の臣下たちにビール醸造所収益と共に、修道院が所有する土地の大半を返還した」と伝えている。実際、これらすべてはラニー修道院に、破壊される前に確かに帰属していたことを証明している。しかし、創建時からそれらが与えられていたことを、(王)ロベールも聖フルセウスの伝記

も他の如何なるものも記していない。この荘園が交換として、サン・ドゥニ修道院から、それが帰属していたラニー修道院へ支障なく渡ったことはあり得る。こう言うことが他の荘園でも起きていたことを、本書その他で一度となく筆者は発見している。さて、ダゴベール（1世）と（妃）ナンティルド、そして彼らの孫ティエリー（3世）によってラニーの荘園は寄進されたと、筆者は見ている。このことは承認されるべきである。と言うのも、ダゴベール（1世）と（妃）ナンティルドは少なくともその荘園の一部、そしてティエリー（3世）はその全部を、彼自身が述べている如く、荘園の中に含まれる「一切合切omnia ex omnibus」を引き渡したであろうから。また、確かに、ダゴベール（1世）と彼の妻によって最初に譲渡したのは、国王の名においてそれを自分たちの使用に供していた上記の諸宮宰によって占拠されていたのであろう。このことは、ヴェルノの宮殿でも起きていたことは後述されるであろう。他所でもしばしば指摘されていることでもあるが、つまりフランク諸王は横領したものを返還したり、前諸王などによって寄進されたものを安堵したり、嘗て他者によって譲渡されたものを自ら新しい法律で固めたり、それまでの状態に戻したりしている。自身を托身するとか、修道院を富ますと言うのが彼らの常套句で、以前に他者によって付与されていたベネフィスを新たな法で安堵したり、以前の状態に戻したりもしていた。

ブリー郡内またはモー郡内のただ1つのラニーの荘園がサン・ドゥニ修道院に寄進されたと判断するに当たって、筆者の心はあれやこれやで定まっていない。サン・ドゥニ修道院の財産分割—近々刊行されるべきである—の際に、（宮宰）イルドワンはこの荘園とヴェルノ近郊のラニー荘に言及している。つまり、そこでは2つのラニーが挙げられている。それに対して、862年に開かれたソワソン宗教会議記録は、修道院長ルイの時に再び行われた財産の分割に際して、ただ1つのラニーを挙げているに過ぎない。しかし、王ティエリー（3世）の命令文書は水を湛えたラニーと関係していると思われたとしても、この王宮荘園はマルヌ河畔のラニー、またはラニー・ル・セクと解釈されるべきどうかに関しては、筆者が決定するよりも他者に委ねたほうが良いであろう。他方、ブリー地方に比定された、地元ではラーニュヴィルLagne-villeと呼ばれているラニーの荘園に関しては、それがアエティクス（7、8世紀の世界地図作成者）によって引用されているLatinobrigaまたはLatinabrigaと同一であったことは、この後のヴェルノの宮殿が語られる個所で十分に論じられるであろう。

註

1) Lagny-le-Sec (Oise, ar. Senlis, c. Nanteuil-le-Haudouin). MGH, DM,1, p. 226とJ.-M. Pardessus, *Diplomata, chartae, epistolae*, 2 vol., Paris, 1849, 2, p. 516がこの説を取る。

LXXVI. ラン<sup>1)</sup>

Laudunenseと表記される司教座都市ランはランス地方の外れの山間に位置し、ランス司教聖レミ(533年頃没)の時代に公認され、その美しさと発展を広く知らしめた。同聖者はこの地に司教座を設置し、ノートル・ダム大聖堂に豊かな収穫をもたらす荘園を付与した。加えて、第1王朝の諸王によってこの地は大事にされ、同地のサント・サラベルジュ修道院に多くの所領が寄進された。シャルル単純王(893-923年)の時代以前において、ランの宮殿に言及した記録を筆者は発見していない。この王の時代から、この都はノジャン修道院長ギベールが伝えている如く、「王国の頭」、「国王精神の部屋」、「当代唯一の砦」であった。ランでは、シャルル単純王自身と彼の後継者たちによって、多くの文書が作成されている。それらの数通は本書で取り上げられている。本書で初めて公開された文書で、統治の13年、数人の非自由人たちが助祭にして尚書エルヌストスによって寄進されている。コンピエーニュの文書集には、サン・クレマン教会の建立のための同王の命令文書の原本が収録されている。それは彼の統治の26年、ランの城で発給されている。この3年後、ヘンネガウのマルヴィル修道院に宛てた2通の特権文書がある。その1通には「6月6日ランの宮殿にて行われた」、他の1通では「1月6日、インディクティオ9年、ランの宮殿で譲与した」とある。ラウール-本書に掲載された彼の重要な文書は、サン・ヴァンサン修道院に付与されたものある-の死後、シャルル単純王の息子、ルイ(海外王)はイングランドから戻り、936年6月20日にランで父祖の玉座に座らされたが、そこに滞在していたのは2月1日まででしかなかった。『キリスト教ガリア』の中で語られている如く、その日バリのサン・メリー教会に命令文書を発給している。フロドアールが年代記の中で記している如く、この時から943年に至るまで、ルイ(海外王)はしばしばランに滞在し、サン・レミ修道院の諸権利をここで安堵している。

彼の息子ロテール(954-986年)も、フロドアールとエモワンが指摘している如く、父に劣らずランに逗留している。ル・ミルの書で、筆者は同王の文書を閲覧した<sup>2)</sup>。それによって同王は、伯アルヌルフと息子ボードワンによって建立されたヘントのサン・バヴォン修道院を、「ラン宮殿のサン・ジャン修道院において、栄光に満ちた王ロテールの統治の1年に」、国王の権威で安堵している。これらの言葉によって、国王宮殿-確かに、この地はランの都から区別されている-がサン・ジャン修道院の境内に存在したとは確かである。「国王宮殿」の文言はランスのサン・レミ修道院に、「王ロテールの統治の1年、1月1日、インディクティオの14年に発給された。ランの国王宮殿にて公開で行われた」とある、同ロテールの別の命令文書でも言われている。「国王都市ラン」の文言は、ベリーの書に挙げられた同王の別の文書で、「国王都市ランで行われた」として使われている。それら以外では、ロテールがコルビー修道院とサン・ピエール・オ・モン・ブランダン修道院に宛てた2通の命令文書では、「主の化肉の963年、インディクティオの6年、統治の10年、ラン(Lugdum)で行われた(後略)」の如く、単に「ラン」

とあるだけである。また王妃エンマに強く勧められて、カンブレ司教フルベールによって譲渡されていた数個の荘園を修道院に返還している、977年のマルヴィル修道院のための同王の文書にも、「ラン」Laudunum-Clavatumとあるに過ぎない。最後に、ロテールが980年にランに滞在したことを、ニコラ・カミュザの『トロワ司教管区古物の聖なる箱』で刊行されている、同王の文書が証明している<sup>3)</sup>。

註

- 1) Laon (Aisne, ch.-l. ar).
- 2) 『ベルギー寄進文書集』, 147頁と『ベルギー教会便覧』, 59章参照。
- 3) 『トロワ司教管区古物の聖なる箱』参照。

### LXXVII. レーグの森とイヴリーヌの森<sup>1)</sup>

エンヌ川がコンピエーニュから分けている、Lisgaと表記されるリーグの森において、877年シャルル禿頭王は息子ルイに単に数等の豚または猪を与えているに過ぎない。ソワソン司教聖ドロザン（576年頃没）の文書数通が同じ森をリスカLiscaと呼んでいるが、これらの文書は同聖者がルトンドに修道院を創設したこととは無関係である。王フィリップ（1世）は1083年の文書、同じくフィリップの孫ルイ（7世）が1154年の自身の文書で大きく変形した綴り-Lesgam-で、この森に言及している。その後、より非情にも、この森のそれまでの名称が壊されてしまう。何故なら、ゴール語でLesgue、地元でLaigleと言われていることから、多くの人たちがAquilina（ラテン語で「鷲」の意）と呼んでいるからである。11世紀から既に、王ロベール（2世）の伝記の作者エルゴーがその仲間に加わっていて、同王ロベールによってイヴリーヌ-Aquilinaを語源とする-の森にサン・レジェ修道院が建立されたことを述べるために、彼はそうしている。もしこの修道院と国王フィリップが上記の年にラ・ソヴ・マジュール修道院に譲渡した、リーグLisgaの城と森の中にある、あのサン・レジェ教会とが同じであるとしたならば、筆者は喜んで彼らの意見に賛成したであろう。しかし、『モリニー修道院年代記』の中で筆者が読んだ、1129年の出来事の記述がその考えを拒んでいる。つまり、そこにはモリニーの修道士たちが、ローマ教皇インノケンティウス（2世）による彼らの修道院への不意の訪問に混乱し、イヴリーヌの森のサン・レジェ教会の更に奥の、数人の隠修士たちの居所にいた院長トマに、信じられないことに、使者を派遣して、副院長ガランと共に急いで戻ってくるようにと告げた。同院長はその後直ぐ、つまりその日のうちに、またはむしろその日の夜の暗闇の中で戻ったと。それ故、この森はダブルの書においてペパンが言及している、そしてモリニー修道院に非常に近く、(王)ロベールによって建立されたサン・レジェ修道院が含まれるイヴリーヌの森 (la Forest Iveline) であった。

ルイ若王（1137-1180年）の2通の命令文書が伝存する。1通はサン・ドゥニ修道院に宛てたもので、彼の統治の14年、他はラブが『年譜表』の中で公表している<sup>2)</sup>。しかし、両方ともAquilinaの森のサン・レジェで発給されている。筆者はこれをLisgaの森と解釈すべきはどうか迷っている。何故なら、後掲の文書において同じ王ルイがこの森を祖父の様式にならって、Lesgaと呼んでいるから。リスガLisgaの森、またはリシカLisicaの森に代わってイヴリーヌの森を最初に使用したのはギヨーム・ブルトンの『フィリポ』第1巻と思われ、そこでフィリップ尊厳王の幻視—これはサン・レジェ教会で王自身に起きていたことである—が次のような言葉で書き始められている。「周囲を取り囲み、聖レジェがその名を与えたAquilinaの森の城において（後略）」。

この幻視は、イヴリーヌ（の森）のサン・レジェ教会よりもリスガ（の森）の同名の教会で起きたと信じるためには、まず、諸事情をその当時、つまり1184年の状態に戻す必要がある。それはヴァロワ・ヴェルマンドワ勢力からコンピエーヌを防衛する方へとフィリップを向かわせていた。同王は王国の公的集會をそこで持った。これらにフィリップの少なくない文書が加わる。それらは同じ年の1184年に、同王によってコンピエーヌで発給された、コンピエーヌ近辺の諸集落「セルニー、シャムイユ、ボルヌ、シヴィー、コルトンヌ、ヴェルヌイユ（後略）」を「コミュニーヌに」昇格させるためのものであった。この時期以降、リスガの森のラテン語表記が現れてこないのはどうしてか。それは、13世紀、そして14世紀が進む過程で、国王文書と同様私的な文書とにおいても、フランス語でレーグ、レグまたはレーグル、他方ラテン語でAuilinamとAquilensem、またはAquilaeと言われている森を、筆者は史料の中で発見しているからである。

トラシー・ル・ヴァルの南の端と接する、この（レーグの）森の外れにおいて、王フィリップが—既に言った如く—1083年、国王の権利に属した教会をラ・ソーヴ・マジュール修道院に寄進しているが、そこには次のような言葉が見られる。「最近、ラ・ソーヴ・マジュールの中で修道生活を開始した高貴な人々の評判を聞き、余が慈愛の表示として与えていた、レスガの森にある聖レジェに捧げられた教会についての話が余の心を激しく動かした。そこで、余はこの教会を余の権利に属する祭壇、大小の十分の一税、ブドウ畑、すべての裁判権、この荘園に帰属するすべてのものと共に、前記の修道士たちとそこで神に仕える彼らの後継者たちに寄進した。加えて、同修道院とその付属物に余のレスガの森で所有する使用権をすべて寄進した（後略）」と。ルイ若王は祖父の寄進を「レスガにあるサン・レジェ教会を（中略）譲渡し、余の祖先たちによってなされ安堵された寄進を確認し、教会、祭壇をすべての十分の一税と共に、そして荘園をすべての裁判権と共に（中略）。これらはコンピエーヌにおいて1154年、余の統治の17年に行われた」のような言葉で確認している。次に、これらすべてはサン・レジェの荘園に城または国王安在所が付帯されたいことを示していて、それらの痕跡はラ・ソーヴ・マジュール修道院に今

でも帰属している分院の近くに、その時もまだ存在していると告げられている。

註

- 1) Saint-Léger aux Bois (Oise, ar. Compiègne, c. Ribécourt) : Saint-Léger-en-Yvelines (Yvelines, ar. Rambouillet, c. Rambouillet).
- 2) 『年譜表』, 2巻, 2頁参照。

### LXXVIII. ラングル<sup>1)</sup>

ローマ人に最も気に入られた都で、Lingonenseと表記されるラングルに、昔の作家たちや記録がしばしば言及している。読者諸賢はそこに宮殿があったことを、シャルル単純王の文書から知るであろう。それは921年「1月13日、インディクティオの9年に」発給されていて、「ラングルの宮殿で行われた」となっている。しかし、ラングルの宮殿に関して、昔の作家たちは、多くを語っていない。

註

- 1) Langres (Haute-Marne, ch.-l. ar).

### LXXIX. エスタンヌ<sup>1)</sup>

Liptinaまたは Leptinaと表記されるエスタンヌ（・オ・ヴァル）はカンブレ地方にある古い宮殿で、ルミルの書には、エモワンの言として、「その廢墟は、エノーの城塞都市バンシュから遠くない所に見られる」とある<sup>2)</sup>。フランク人の第1王朝の諸王が王国の境界をカンブレの向こうまで拡大するよりもその手前に置いたと言われている。フルカンは『ロップ修道院年代記』の中で、この王領地は諸王によって「狩猟のために頻繁に訪れられていた」と教えてくれている。また、初期の院長たちが司教の頭飾りを被せられていたのは、「この修道院が国王の寛大さによって建設され、国王宮殿、つまりレ・ゼスティーヌに隣接していて、他の誰にも任せられなかった」からだと伝えている。更に、司教ユルスマールは、「この地に追放されている間、エスタンヌに逗留する国王を頻繁に訪問していた」と追記している。743年、エスタンヌで王カルロマンの下に、司教の宗教会議が始まり、教会と修道院の諸問題が審議された。同年、ロップ修道院長テオデュアンに宛てた同カルロマンの文書がこれと一致している。それは「エスタンヌの公的莊園で、シルデリク（3世、743-751年）の統治の2年、2月6日」に下付されているが、この時期の記載はエスタンヌでの宗教会議の開催日と同様、743年を指している。

アंकマールがアキテーヌの司教ラウルとフロテールに宛てた書簡の中で、エスタンヌで開催され

た宗教会議で決議された規約に言及している。この規約は、彼の広く読まれている公会議録の中では読むことができない。858年のアッティニー公会議の教父たちはエスタンヌ宗教会議がペパンの命令で、アキテーヌ戦役の折に、つまり756年頃開催されたと言っていることが、少なくない人たちの心を動揺させている。そして別の宗教会議がエスタンヌでペパンによって開催されたとの意見が出されている。しかし、いと博学なシルモンとバリューズが『勅令集』に加えた註記で、彼らの見解から距離をおいている。マルロは『ランス史』の中で、シルデリク（3世）はエスタンヌでフランク人の高官を前にして王として現れたと判断している。しかし、それよりも宮宰たちは国王の名前を拝借して、統治に当たっていたと見たほうがよいのではなからうか。より確かなことは、シャルル禿頭王の870年の勅令の中にあること、つまりロレーヌ王国の分割がムーズ河畔のプロカスピデス<sup>3)</sup>で行われた。「8月10日、シャルルが妻にエスタンヌまで会いに来よう命じた」と。いまでも森に取り囲まれていることから、エスタンヌの宮殿、または森の境内は非常に広がったことを、筆者はその場所の立地から理解している。また、この宮殿はエスタンヌの語を含む2つの呼び方で表されているが、両方とも正しい。つまり、国王荘園に関しては、いつも使われているように、上エスタンヌと下エスタンヌがあるが、頸木2、3本分の距離しか離れていない。また、1つは聖マルタン、1つは聖レミに捧げられた、2つの教会が存在する。

註

- 1) Estinnes-au-Val (ベルギー, pr. Hainaut, ar. La Louvière).
- 2) 『フランク史』, 5巻, 25章参照。
- 3) Procaspideの立地は、今日に至っても確定していない。

LXXX. リトワ<sup>1)</sup>

シャルル単純王(893-923年)治下,ロレーヌ伯にして公ジスルベールが占有していた王宮荘園の中に、ウルスペルク修道院長コンラドの時代に活躍したフランク人の古い作家は、Littaと表記されるリトワを数え上げている。しかし、ジスルベールはこの荘園を妻ジェルベルジュに婚資として譲渡しているが、同妻は夫の死後ルイ海外王に嫁ぎ、サン・レミ修道院に同荘園を譲渡している。読者諸賢はル・ミルとマルロの書<sup>2)</sup>に掲載されている同王の文書でそれを読むことができるが、筆者はその原本をサン・レミ修道院の文書庫で閲覧した。リトワの名称と立地は地理学の図表では殆ど忘れ去られていて、それに関して確かなことは殆ど望めない。リトワをエスベイとブラバンの境界にある、サン・トロン(シント・トロイデン)の町に近い、ペパン1世のランデンの荘園—ここからランデンの名称がペパンにくっ付いている—に比定しようとする人たちがいる。筆者はそれに反論するよりも、それを笑い飛ばしたい。し

かし、上述のジェルベルジュの文書から、リトワがメーエルッセンMeerssenの町からそう遠く離れていなかったこと、その町に付属していたことを筆者は知っている。この地の真の名前、フランス語でリトワLitoyは、サン・レミ修道院のアスケテリウスの古い写本で見ることができる。そこにはジョフロワ・ブイヨンの文書原本が存在する。それによると、彼自身と共に、息子ジョフロワとアンリが「彼らが長い間横領し保有していた、既述の自有地をフランク人の使徒、聖レミに心からの献身の証として引き渡した。更に、信仰の証と誓約によって確認し、加えて皇帝陛下コンラドの御前でそれを放棄した」とのことである。リトワがメーエルッセンの付属地であったこと、そして続いて王領地に編入されたことは、この文書から明らかである。しかし、それが国王の宮殿として際立ったものであったことを、筆者は聞きしていない。

註

- 1) Lithoijen (ベルギー, pr. Noord-Brabant, ar. Limburg, c<sup>ne</sup> Lith).
- 2) 『ランス史』, 1巻, 606頁参照。

#### LXXX. ルールサン<sup>1)</sup>

Locus-Sanctusと表記されるルールサンに関する判断も同じであろう。パリ司教管区, ブリー副司教区, ヴィル・レヴェクの近くと同時に, モワシ・レヴェクの近く一嘗てその主任司教区内に含まれていた。今日旧コルベイユ主任司教区に加えられている一に立地する集落である。そこに王領地または王宮荘園があったことを, いと博学なアドリアン・ヴァロワが正しく教えてくれている。何故なら, フランクの古い王朝の2つの貨幣にLoco-Sanctoが刻まれているのを, クロード・ボテロの書<sup>2)</sup>で見ただであろうから。確かに, 公的荘園または王領地で貨幣が製造されていて, このことは他所でも一度ならず確認されている。

註

- 1) Loursain (Lieuxaint, Seine-et-Marne, ar. Melun, c. Brie-Comte-Robert).
- 2) 『フランス貨幣研究』参照。

#### LXXXII. ロングリエ

オストラジー王ダゴバール(1世, 623-639年)が負傷して, ザクセン公ベルトアルドに対する援軍

を要請したとき、クロテール2世はリエージュ司教管内、アルデンヌの森の中のLonglareまたはLongolariumと表記されるロングリエで客をもてなしていた。ペパン（3世）は同地に2度、つまり759年と763年に冬営したことを、古い編年記が教えてくれている。尊厳者ロテール（1世）の命令文書をル・ミルが公刊しているが<sup>2)</sup>、そこには「ロングリエの宮殿で行われた」とある。そして、879年の勅令において、「シャルル（禿頭王）の息子ルイ（2世）はアルデンヌを通して（中略）ロングリエにやって来て」、主の生誕を祝ったと言われている。リエージュ司教管内にはサン・チュベール修道院から遠くない所に、住民たちがグラールGlareという荘園があって、その集落の名称Longlariaは損傷を受けてはいるが、ロングリエの宮殿の古い所在地と考えられている。

註

1) Longlier (リュクサンブール, ar. Neufchâteau, c. Neufchâteau).

2) 『ベルギー教会便覧』, 53頁参照。

### LXXXIII. リヨン<sup>1)</sup>

Lugdunum-Segusianorumと表記されるリヨンの起源と昔の栄光は多くの賛辞でもって称賛されている。最高に博識のアドリアン・ヴァロワがそれらの殆どすべてを、『ガリア属州・都市総覧』の中で簡略に紹介している。それらからただ1つをここに引用すると、ヒエロニムスが年代記の中で、皇帝マグネンティウス（350-353年）がリヨンの宮殿において自害したことを証言しているとのことである。筆者はフランク諸王がリヨンで発給した文書数通を見てきたが、それらはここに場所を占めるよりも、すべてより新しい時代のものでしかない。また、ここで発給された諸皇帝の記録に関して、ここで述べるには余りにも多すぎる。

註

1) Lyon (Rhône, ch.-l. dép).

### LXXXIV. リュザルシュ<sup>1)</sup>

パリ郡、リュザルシュ Lusarcaの城所在地はサンリス地方とボーヴェ地方とに接し、国王宮殿で知られた公的荘園であったことを、最初にクローヴィス2世の息子、王ティエリー（3世、675-691年）が、彼の統治の7年、6月30日、そこで開いた裁判集会で教えてくれている。それはアキルディスとガエル

トラムヌスの息子、アマルガリウスとの間の、レ・パティニョール荘の所有権を巡ってであった。彼らの権利は、明らかに、確かなものではなかった。従って、ティエリー（3世）が言うには、「サン・マルタン礼拝堂の上手にある、別の宣誓が忙しく行われていた余の祈祷所にて、（アマルガリウスは）これを誓約しなければならなかった。彼はリュザルシュの余の宮殿で開かれていた法廷に出廷し、余の宮中伯の高貴な人ドロクトアルドが報告していた限りにおいて、合法的に宣誓を行ったようである（後略）」と。諸司教と俗人高官たちからなる別の法廷をティエリーの息子、クローヴィス（3世、691-695年）の統治の2年11月1日に、ルザルシュで開いている。そこで、サン・ドゥニ修道院長シェノンとアルガントルドとの間で争っていた、シャンブリー地方のノワジー・シュル・オワーズの荘園が、宮中伯マルソンが同意して、前者に引き渡された。読者諸賢は両方の法廷に関して、本書で原本から公刊されたものを閲覧するであろう。デュブレの書に収められている、統治の7年と1年に発給された、この荘園をサン・ドゥニ修道院に譲渡した、シャルルマーニュによる別の文書でも、リュザルシュへの言及がある。パリ司教座教会の文書集では、この地がLusarchiae, Lusarchiumと繰り返して呼ばれている。加えて、シュジェールが『ルイ肥満王伝』の中で、この名称を使用している<sup>2)</sup>。

註

- 1) Luzarches (Val-d'Oise, ar. Monmorency, ch.-l. c.).
- 2) 『ルイ肥満王伝』, 3章参照。

LXXXV. モンマク<sup>1)</sup>

Mamacas, Mamaccas, Mammacas, 更に時々質の良くない写本においてMamarctasと表記されているモンマクは、確かに、王宮荘園であったことを、多くの古い記録が証明している。エジナルは『シャルルマーニュ伝』の冒頭で、確かに、名前は明記されていないが、この荘園について記しているようである。他方、『メス編年記』は692年、テルトリー戦役後、王ティエリー（3世）の定められた居所を、型通りの言葉で「ペパンはその国王をモンマクの公的荘園に荣誉と敬意とをもって監視すべく送った」と記している。そこで、同ティエリー（3世）の治世に、人民集会が宮宰ペパンによって頻繁に開かれていたことを、上記の編年記は教えてくれている。サン・ドゥニ修道院の文書庫が提供しているのであるが、その集会で発給されているティエリー（3世）の息子、王シルドベール（3世、695-711年）の3通の文書がある。最初は既によく知られたもので、シルドベール（3世）が統治の12年、モンマクで修道院長シラルにファマール郡内のソレーム荘を譲渡している。そして、確かに、筆者がCorsintiscaの項（本巻、第43章参照）の中で既に予告していた如く、ドゥブレ、ル・ミル、その他がそ

れに言及している。2つ目は、王国の全体法廷が彼の統治の16年に開かれている。この法廷でシルドベール（3世）は、「余と余の高官たちの前で、余が滞在していたモンマクにやってきて、修道院長ダルニフスの代理人たちは有名な宮宰グリモアールの代理人たちに対して、次のように申し立てた。随分前に余の祖父、クローヴィス（中略）が、彼らの通行税に関する命令文書を通して、聖ドゥニの祝祭日にその市場にやって来るすべての商人たちに関する通行税のすべてをサン・ドゥニ教会にそっくり譲渡した。余の統治の16年、12月13日、モンマクにて発給された。幸あれ」と言っている。この判決には、知るに値する多くのことが含まれている。

翌日、同じ法廷で、争いが和解に至っている。それはヴェルンから遠くない、ブリー河畔のラニー（ラニー・ル・セク）の製粉所に関してで、宮宰グリオアールの代理人が修道院長ダルフィヌスに対して、自分たちの権利を主張している。この係争は確かに国王財産の一部使用を巡って起きていたようである。つまり、この件に関して、王シルドベール（3世）によって「統治の16年、12月14日に」作成された文書から、ヴェルンの宮殿の真なる立地のみならず、王宮荘園が一時宮宰の使用または権利に移っていたことを学ぶ。国王の祈祷所、またはサン・マルタン礼拝堂で誓約が習慣的に行われていた。宮宰の弁護人がAuditoresと呼ばれていたこと。同法廷には大勢の宮中伯がいたこと。ここではペロ、グリムベルクトゥス、そして－間違いでなければ－、アンジルブラド－もし彼が尚書でなかったならば－、とその他大勢で、それらはこの時代の古い慣習を教えてくれている。ダゴベール（3世、711-715年）は、もっと正しく言えば、彼の名において統治の2年この地に住み、ル・マン司教エルルモンにアルダンの所領を、彼の言によると、「余の統治の2年、モンマクにて。幸あれ」の如く、安堵している。

それ故、モンマクはフランク諸王の古い宮殿であった。しかし、この場所は一体どこに位置していたのか。ペロンヌから4里（16キロ）離れた、正確に言えば、アングル川から1里しか離れていない、アミアン司教管区の外れに位置する、今日でもマメと呼ばれている所に比定すべきだと、筆者は一時期考えていた。そこには、一部はフリクール、一部はモンマクと呼ばれる広大な森林が隣接している。この国王の森林には非常に多くの道路が四方から集まっていて、そこに国王の威厳の一部であったと思われる、古い城が残っていた。しかし、モンマクの真にして疑いようのない所在地はノワイヨン地方に、地図上にフランス語でモマクMaumaques、モンマルクMommarquesと書かれている土地に定められるべきである。同地はオワーズ川の左岸で、エンヌ川との合流地点からそう遠くない、レーグの森の外れ－フィリップ尊厳王の時代にMamacarumと言われていた－に位置し、筆者は自分でこの地を丹念に踏査した。しかし、筆者がこの地を調査したとするには、コンピエーニュのサン・コルネイユ修道院に付与された、シャルル禿頭王と彼の孫シャルル単純王の2通の文書を取り上げる必要がある。最初に、シャルル（禿頭王、843-877年）が、自らが建立した教会へ寄進した最も大きな所領の中に、ヴェネットの礼拝堂、

ヴェルブリーの礼拝堂、ナントイユ・ル・オドゥアンの礼拝堂、ベルトの死後におけるモンマクの礼拝堂、更には王領地、つまりシェーヌ、ヴェルブリー（中略）、そしてモンマクの10分の1等々を列挙している。これらの荘園はすべて国王所有で、コンピエーニュ周辺に位置している。シャルル単純王（893-923年）は「そしてノワイヨン郡、セネスキルス荘内、プレヴォのワニコが彼らに寄進した、余のマンズと、王ウードがサン・コルネイユ（修道院）に灯明代として寄進した、同郡内、モンマク荘に関して、余はまた毎年欠かすことなく、上記国王の周年記念日に祝われ、食事が出されることを望む」のような言葉でこの件をより明確に表現している。この寄進を含んだ、ウードの命令文書は火事で焼失したが、このことを証明するためには、シャルル（単純王）の文書で十分である。筆者はその原本を閲覧したし、他の人にも見せて回った。更に、筆者のコンピエーニュの（サン・コルネイユ修道院の）仲間たちがウードの祖父から獲得している、モンマクの平和的で平穏な所有が何よりの証拠となる。彼らの好意で、この荘園を知るに至ったことを、感謝の気持ちを表し、喜んで告白する。それ故、モンマクが実在しない国王の安在所と見なされるべきではなことは言を俟たない。何故なら、非常に広大な森林がその周囲を覆っていて、この地が隠棲に最適であったこと、そしてティエリー（3世）以後、第1王朝の非常に多くの諸王がそうであった如く、そこが青年期の諸王の逗留、勉強、娯楽、余暇、そして特に狩猟のために整えられていたからである。

ここまで記述した時、筆者はフィリップ尊厳王（1180-1223年）が統治の21年に発給した文書と出会った。そこには次のことが書かれてあった。「すべての者は以下のことを知るべし。ジャン・ド・トロタとソワソンのサン・メダール修道院長と修道士との間でレーグの森の一部を巡る紛争が長い間続いていた。結局、それは次のようにして決着した。上記の修道院が上記の森のエロワとよばれる部分を、そしてル・フォワレと呼ばれる部分のすべて、デルグルの道からシェーヌの道、山の先端部分に至るまでのすべての傾斜地、そしてグランモン修道会の修道士たちの森として最初に作られた森との交換、そしてショワジーの森からモンマクの森に至るまでの、アルネの森が中間に位置する残りの森全部（後略）」と。これらの最後の言葉は、筆者が上で記した通りのモンマクの立地を見事に確認している。

註

1) Montmacq (Oise, ar. Compiègne, c. Ribécourt-Dreslincourt).

LXXXVI. マンタイユ<sup>1)</sup>

ギヨーム・パラダンは『ブルゴーニュ編年記』の中でMantalaと表記される、マンタイユ-今日、こ

の集落はヴィエンヌ小郡内に位置し、嘗て国王ボゾンの昇進が23名の司教の集会において祝されたところでもある<sup>1)</sup>は、国王の宮殿で有名であったと伝えている<sup>2)</sup>。この地はヴィエンヌとヴァレンスのほぼ中間に位置し、今でも宮殿の基礎が確認される。そこにはMantulaと呼ばれている教会があったと考えられている。ピエール・ル・ヴェネラブル（1156年没）の時代から、既にクリュニー修道院の所有権下に入っていた<sup>3)</sup>。『クリュニー聖職録一覧』はマンタイユのサン・ピエール分院に言及している。

しかし、このマンタイユをフランス語では殆ど綴りは同じであるが、ラテン語では別物である、ノルマンディーとの境界にある、セーヌ河畔の城塞都市マント・ラ・ジョリMeduntaと混同しないように注意しよう。後者はアヴランシュ司教聖パテルヌの事績録の中で、ヴナン・フォルテユナによってMantela村と呼ばれている<sup>4)</sup>。そこには、クリュニー修道会の分院が今でも存在する。

註

1) Mantaille (Drôme, ar. Valence, c. Saint-Vallier, c<sup>ne</sup> Anneyron).

2) 『ブルゴーニュ編年記』, 104頁参照。

3) 『奇跡譚集』, 1巻, 13章, 1283欄参照。

4) 『聖者記録集 (ベ)』, 2巻, 1103頁参照。

LXXXVII. マールレンハイム<sup>1)</sup>

Mareleiaまたは Marlegiumと表記されるマールレンハイムは、トゥール司教グレゴワール、フレデゲール、『ルイ敬虔王伝』、『サン・バルタン修道院編年記』、『モワサク年代記』、『ロテール王事績録』、エモワン、そして修道院長聖デイコル（625年頃没）伝の作者によって頻繁に言及されているアルザスに位置し、オストラジー王国の有名な宮殿と同じくらい古い。これらは割愛するとして、筆者はただ次の記事に注目する。そこには、「この時期王ロテールはアルザスに滞在していた。この高貴な王領地は、見事な造りの高い囲壁がその威厳を証明しているが、残念ながら、旧敵の焼き鋺によって焼かれてしまった」とある。この数日前、同ロテールはピトゥーの書で報告されている、ミュンスター修道院のための命令文書を発給している。それは「3月29日、ロテールの統治の11年、インディクティオの9年に発給された。マールレンハイムにある公営宮殿で行われた(後略)」のように擧筆している。またこの地で、サン・ドゥニ修道院長フルダドの兄弟、伯クロドアルが王ペパンの承認を得て、「アレマン人の公領、ブレイスガウ郡内」にある多くの所領を同修道院に売却している。本書の後半で原本から公刊された文書にある如く、そこには「マールレンハイムと呼ばれる荘園にて、公開で行われた。栄光に満ちた王ペパン陛下の統治の13年、7月17日に発給された」とある。オブレクトの『アルザスの先人たちの事績<sup>2)</sup>』を参照せよ。

註

- 1) Marlenheim (Bas-Rhin, ar. Molsheim, c. Wasselonne).
- 2) Obrecht, U., *Prodromum rerum Alsaticarum, Strassbourg*, 1681, in-4.

### LXXXVIII. マリスカリウス<sup>1)</sup>

シャルル禿頭王は845年、司祭アंकマールに宛てた文書の中で、ポワシー小郡内にある1つの所領を彼に付与していたのであるが、それはオーヴェルニュ郡内のマリスカリウスと表記される荘園で、しかもそこは同王がその時滞在していた場所でもあった。これを王領地の中に数えていいのか、筆者は迷っている。しかし、本書の後半に掲載されるこの命令文書は、ドゥブレの書で別の版から出版されている文書からも力と確かさをもらっているうえ、ランス司教アंकマールのよく知られた行動からも導き出すことが可能である。

註

- 1) 最新の研究でも比定できていない。Voir Tessier, G., *Recueil des actes de Charles II le Chauve*, 3 vol., Paris, 1943-1955, 3, p. 347.

### LXXXIX. モルレイ<sup>1)</sup>

筆者はクロテール3世(656-675年)とティエリー兄弟の王宮荘園の中に数えられる、彼らの時代に有名であったMarlacum またはMorlacumと表記されるモルレイの荘園で起きていた一連の出来事が考察の対象になることを、管見の限りであるが、フランス史の作家の誰も公言していないし、これまで誰もこの荘園の立地について調査してこなかった。パリ郡内にある3つの荘園がMarliacum, Malliacum, Marleiumの名称を提案している。セーヌ川の左岸にあって、ヴィラ・ペトロサやノワジー・ル・セクからそう遠く離れていない、最初の2つは城やブルの名称から、他との違いを明らかにしている。3番目はサルセル主席司祭区内のシャテネイとピュイズーに近い。ドゥブレは『サン・ドゥニ修道院史』の中で、宮宰バパンの文書を引用していて、そこでマレイユMareilの荘園とパリ小郡内の別の所領が「王シルデリク(3世, 743-751年)の統治の5年」に取り戻されている<sup>2)</sup>。しかし、筆者はドゥブレの書で取り上げられている場所は、上掲のMarliacumの1つと同じではないかと疑っている。862年のソワソン宗教会議記録では、サン・ドゥニ修道院所有のMarogilumの荘園がモー郡内に含まれている。その結果、MarogilumがMarlacumの候補から外れていて、残りの2つがMalliacumまたはMarliacumを形成していたことになる。そこからこの王宮荘園がパリ郡内、Marliacumの城郭都市の中にあったとの推

論がそれなりの重みを持って来る。そして、それ故、兎に角この問題を先に進めることに、筆者は同意する。ティエリー3世(675-691年)の治世に発給された、母クロティルドの文書には「モルラカ Morlacasの公的村vicum publicum」の文言はないとしても、それでも筆者はMarlacumの国王宮殿で下付された、王ティエリー(3世)の別の2通の命令文書を発見している。それ故、名称がMarlacumと殆ど異ならない、Morlacumの立地を探求することは有益なことである。

モルレイMorlacumはトゥルとシャロン・シュル・マルヌの両司教管区の境界、サルトム川、つまり地元でソルト川と呼ばれる川に沿った、ダツマリーとモンティエ・シュル・ソルトの間に位置する。そしてそれには、今日でもMorlacumの名をとどめた(モルレイMorlayの)森が隣接している。この地の非常に近くにはシトー派のエキュレイ修道院があり、プレモントレ修道会に属するジョヴィリエ修道院もそこから遠くなかった。この定住地が国王の安在所として最適であったことは単にその立地の快適さのみならず、本書で刊行されている王ティエリー(3世)のシュラムラン-エンブラン司教Mieciusの息子-の件に関する命令文書が証明している。しかし、その前に、エタンブ郡の(オルジュ河畔の)ノートル・ダム・ドゥ・ブリュエール修道院の建立に関する、クロティルドの文書が考察されるべきである。彼女が夫シャリシャルの承認を得て基礎から建立し、孫娘ムモラのために財産を付け、彼女をその院長に据えていた。これらの文書に高貴な人物が下署していた。司教アジレベルトゥス、エルメリクス、ワニングス、ギスレマルス、ギスレベルトゥス、アドロアルドゥス、クラムニスス、ロドバルクトゥス、ガレラムヌス、ムモレヌス、ラグノイヌス、修道院長クロドカリウス、グネリグス、ウルシヌス、クロドマルドゥス、エカリクス、マウロレムス、ウルシマヌス、そして非常に多くの高位高官の名前。そこには、フランク人の名前があったと歴史家たちは教えている。しかし、まず、次のことが指摘されるべきである。これらの文書はクロテール3世(654-673年)の統治の16年の日付が付され、「マルレイの公的村において、3月10日に行われた。我が主人、いと栄光に満ちた王クロテールの統治の16年(後略)」のように終わっている。それ故、厳密には、クロテール3世の治世は14年間ではなくて、16年目に入っていたことになる。実際、これらの文書をクロテール2世(584-629年)に帰すことはできない。高位高官の下署からは、これらの文書はクロテール3世の時代に作成されたとするのが明白であるので。

モルレイで作成された他の2通の王、ティエリー(3世)の文書を持ち出す前に、シルドバール(3世、695-711)の命令文書をここで考察するのが有益であろう。それは、王ティエリー(3世)の文書に光を当てることができるからである。そこには、「余が神の名において滞在していたコンピエーニュの余の宮殿において、そこに余の役人である高貴な人アイゴバールが訪ねてきて、提案した。この年の前に、余の親で、嘗て王であったティエリーがオストラジー方面に遠征に出かけていたと思われた時、これまで参加したことのないイボという名の男が同じ場所に遠征で来ていた(後略)」とある。実際、これら

の言葉はヌストリーとブルゴーニュの王、ティエリー（3世）と、聖ウィルフリド（709年没）の助けによって、オストラジーに帰還したばかりのダゴバールとの間で起きていた戦争が終わっていたこと、更には、モルレイは3つの王国の境界にはほぼ位置していたことから、ティエリーはモルレイ付近に滞在することができたことを教えている。加えて、この事実をティエリーの文書2通が示唆している。その1通は「余の統治の5年、12月12日、モルレイで作成し発給された。神の名において、幸あれ」と終わっている。他の1つは、「余の統治の5年、9月中旬に、モルレイで（後略）」と、表現は異なるが、同じ時期を示している。

上記の後の文書で、ティエリー（3世）の統治の5年に国家の実情をよく知ること、司教に関係する教会儀式をはっきり区別することを除いて、何がなされていたかは筆者には分からない。これに関して、ティエリー（3世）自身が次のように打ち明けている。「余の王国、つまりヌストリーとブルゴーニュの諸司教が、教会の現状または平和の確認のために、モルレイにある余の宮殿に来るようにと、余が命令すると、彼らの中の、余に対する不実から姿を見せなかった数人は、彼ら自身の法規を通して裁かれた。それらの中には、エンブランという都の司教座を嘗て占めていたミエイキウスの息子、クラムリヌスがいた。彼が余の任命によらずして、傲慢または偽文書、または反逆の大胆さによって、司教の職を手に入れたことが発覚した。加えて、司教の法規に書かれていることに反して、彼は盛式の司教叙階式に出席しなかった。従って、大司教と思われたゲネシウス、カドネス、ブリドラムヌス、ランドベルクトゥス、テルニスコスと大司教管区に属する非常に多くの司教たちが裁判者となって、余の前で彼の体は引き裂かれ、そして前記の司教職を剥奪された（後略）」と。以上から、ティエリー（3世）の統治の5年、彼がヌストリーとブルゴーニュ王国の主権を握った年で、平和が結ばれたことは明らかである。しかし、この平和はティエリー（3世）の宮宰エプロアンが戦争を仕掛けたことがある、オストラジー国王ダゴバール（2世）との間で更新されることも可能であった。それ故、680年配下の者たちによって殺害されたのを聖ウィルフリド事績録の中で読むことができるダゴバール（2世）は、その時まだ死去してはいなかった。従って、ティエリー（3世）がヌストリーとブルゴーニュを統治すること5年、それはオストラジー王国の併合によってその国王になった680年よりも前であった。他方、偽司教クラムリヌスの災難、そして運命の悪化は上記の宗教会議の命令文書に現れていて、それに何も付け加える必要はないように思われる。この間、これまで殆ど知られていなかった、モルレイの王宮荘園でヌストリーとブルゴーニュの司教と俗人高官による全体的な宗教会議が開かれているのを、筆者は知っている。それに関する文書を、サン・ドゥニ修道院の原本から本書で初めて公開する。それがキリスト教国家の何かの役に立てばと思っている。

Marliacumの名称はMarlacum（Marly-le-Roi）とも密接に関係しており、それは今日でもパリ地方で

非常によく知られている。ヴェルサイユとサン・ジェルマン・アン・レイエとの間に位置し、ルイ大王（14世、1643-1715年）が頻繁に訪れた国王安在所、隠棲地として知られていて、加えて、そこにはあつと言わせる仕掛けがあった。それによって、セヌ川の近くの川床から最も近くて高い小山、昔の人の呼び方に倣えば、「城」の中へと水が汲み上げられ、そこから水が鉄の管を通してヴェルサイユへと導かれている。

註

1) Morlay (Meuse, ar. Bar-le-Duc, c. Montiers-sur-Saulx).

2) 『サン・ドゥニ修道院史』, 691頁参照。

**XC. メールセン<sup>1)</sup>**

Marsnaと表記されるメールセンは、レギノンの年代記ではMarsanaとなっているが、マーストリヒトから1乃至2里（8キロ）の所に位置する。嘗てはリエージュ司教管区、今日ではロエルモン司教管区に属しているが、国王宮殿を持っていた。そこでフランク諸王の集会在2回、つまり847年と851年に開かれている。856年にボノイルムの宗教会議に参加した教父たちは、そのどちらかで言及されている。王ロテールは2年後にサン・カンタン修道院において叔父シャルルとの間で締結された和平の中、858年のキエルジー集会に集まったランスとルアンの司教たちが、それぞれメルセンに言及している。翌年のメッスの宗教会議に出席した他の司教たちがその仲間に加わる。同じく、ドイツ王ルードヴィヒが862年にサブリエールで行った通告において、メールセンに触れている。その他は割愛するとして、コンラド・フォン・ウルスベルクの書に収められフランス人作家が、メールセンに言及している。そこから筆者はシャルル単純王（893-923年）が国王ハインリヒに促されて、公ジスルベールにメールセンを放棄したことを学ぶ。しかし、ジスルベールも彼の相続人たちもそれを長い間所有することはなかった。何故なら、彼の未亡人ゲルベルガはメールセンと他の幾つかの王宮莊園を婚資として受け取っていたのであるが、ジスルベールの死から間もなく、ルイ海外王（936-954年）と結婚する。その時、彼女はメールセンの莊園を彼の使用に供し、968年それをランスのサン・レミ修道院に引き渡している。これらに関して作成された文書が、ル・ミルとその他によって報告されている<sup>2)</sup>。同地に、やがて、サン・レミ修道院の修道士たちのために分院—cella, またはpraeposituraと呼ばれる—が建立される。この分院との関連で、サン・レミ修道院長ピエール・ドゥ・セル（1162年没）が多くの個所で、メールセンに言及している。実際、この莊園はしばしば戦火に見舞われ、ル・ミルが言うには、その後フランスにある所領との強制的交換によって、アルトワのバボム近郊のAquascurta、地元ではオークールと呼ばれてい

る修道院の律修参事会員の手に渡った。本書の図版の中に、12世紀中葉以降のこととして、「院長ユグによって」なされた「スマルナ修道院の宝物に関する」記述を掲載している。

註

- 1) Meerssen (オランダ, pr. Limburg).
- 2) 『寄進文書集成』, 135頁とMarlot 『ランス史』, 1巻参照。

### XCI. マレイ<sup>1)</sup>

MasolacumまたはMasolagumと表記されるマレイ（・ル・グラン）における王宮荘園の確たる起源を伝えるものに関して、古い書物からは何も見ることができていない。その地はブルゴーニュ王国の宮殿があったと思われるが、フレデゲールと彼の後、エモワンが言及しているクロテール2世（584-629年）の統治の34年より前の言及はない。この年、「同王は高官たちと一緒にマレイの荘園に滞在し、貴族 patriciusのアレテウスに対して、会いに来るよう命じた」、「彼が負わされた罪から潔白であることを証明できないと、剣で殺されるよう命じた」とある。同じ場所で、ダゴベール事績録に信を置くならば、ダゴベール（1世, 623-639年）自身の「死去の後、彼の息子ルイが、まだ若かったが、父の王国を相続し、ヌストリーとブルゴーニュのすべての侯たちが、彼をマレイにおいて王位へ推挙した」とのことである。ペラルの『ブルゴーニュ記念物』の中に、フランク人の王クロテールの命令文書が存在する。そこでは、サン・ベニーニュ修道院長ウルフェクラムヌスに「彼の父、ゴントランが行ったラレイ (Larrey, c<sup>ne</sup> Dijon) の寄進」を「統治の8年に」再度「確認させ」ている。ペラルはこの命令文書をクロテール2世（584-629年）に関係づけている。その他は、より正当に、クロテール3世（653-673年）に帰している。同クロテール3世の統治の3年、マレイの王宮荘園で司教の宗教会議が開かれ、参列した諸司教はサンスのサン・ピエール・ル・ヴィフ修道院のための、サンス司教エモンの特権文書、番号25に下署している<sup>2)</sup>。マレイの立地について、筆者は知らない。それに関して、深い沈黙が至る所で続いている。ヴァロワは、ブルゴーニュにそれが位置していたと主張するよりも、ヌストリーのパリ地方の都から遠くないところに比定する。

註

- 1) Malay-le-Grand (Yonne, arr. Sens, c. Sens-sud-est) . Folz, R. et Marilier, J., *Chartes et documents de Saint-Bénigne de Dijon*, 2 vol., Dijon, 1943-1986, p. 205 はMarly-le-Roi (Yvelines, ar. Saint-Germain-en-Laye, ch.-l. c.) に比定する。
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 3巻下, 614頁参照。

XCII. サン・メダール・ブレ・ソワソン<sup>1)</sup>

この地が、フランク人の王クロテールがノワイヨン司教メダール（558年頃没）のために墓と聖なる社殿を設けた、この上なく評判の地であったことを、修道院の古い記録が教えてくれている。フォルテュナは「Croiciacumの王宮荘園」と呼んでいる。10世紀の匿名作家は聖メダールの奇蹟譚の中で、「これらが行われたその場所は、Croiacusと呼ばれている王領地の支配下にあり、古代の邪教から偶像崇拜に染まっていた」と述べている。諸王と諸司教の私的な記録は、建立された修道院の地を「Croviacum」、または「Croviacumの王領地」と表現している。他方、文書集に収められた古い例は、時々間違っ、て「Croniacum」と名付けている。確かなこととして、ソワソンのこの流域空間は都の東入口の外に広がっていて、そばを流れるエンヌ川からクルーイの集落に近い丘に達していて、嘗てCroiciacensisの王領地区域の中に組み込まれていたと考えられる。そこにフランク諸王が彼らの宮殿を所有していたことは、あらゆる書物から確かである。加えて、宮殿は1つではなく複数あったことは、この地の古い地図以外にも、ノルマン人の事績に関する古い年代記が教えてくれている。そこには886年の出来事として、「これらの後、シジュフリドはいと壮麗なサン・メダール教会、いくつかの宮殿を火で焼き尽くした。そしてこの地の住民を殺すか捕虜にした」とある。主殿は南に向いていた－そこには今、女子のためのサント・ソフィー礼拝堂があり、修道院の囲壁の中に取り込まれていて、今でも12名の参事会員が奉仕している－、そしてそれはエンヌ川へと延びていた。他の1つ－他の1つがあったと仮定すれば－には、ラトリニテ教会が隣接したが、この宮殿は東を向いていて、近くにはルイ敬虔王（814-840年）の地下の牢獄が姿を見せていた建物があった。『聖セバスティアン遺骸奉遷記』の中で、ルイ自身が「公設の監禁所にして牢獄」と呼んでいる<sup>2)</sup>。この場所からそう遠くない所に、昔の人が「プロリウムBrolium」と言っていた森が横たわっていた。更に、ソワソン司教ロタード（2世、832-862年）がサン・メダール修道院のために、自らが確認した特権文書の中でこれを思い出させている。

これらの宮殿で、諸王や諸司教の多様な集会や公会議が開かれていた。それらはメダールの修道院の栄光に大いに寄与していることから、ここで簡単に触れておくのが有益であろう。そして実際、筆者は国王シジュベール（1世、535-575年）、ブランシルド、両者の息子シルドベール（2世）がメダールの宮殿で頻繁に行った懺悔については何も語らない。744年教皇ザカリアの名代で、マインツ司教ボニファスは宮宰ペパンをそこで迎えて宗教会議を開催しているし、751年この地でフランク人に対してペパンを国王に推挙している。また、ペパンの息子カルロマンが768年10月9日、同地に滞在している。シャルル禿頭王の妻、エルメントルードは866年、ルイ吃音王－もしいくつかの記録に信を置くならば－は878年、そして最後にラウールが923年に、王国の権標をそこで受け取っている。教皇レオ4世の治世、852年サン・メダール教会で別の公会議が開かれている。そこでアキテーヌ王ペパン2世は王国を剥奪

され、修道士の服に着替えさせられ、聖職者になっている。翌年3回目の公会議を、国王シャルル（禿頭王）を前にして、アंकマールがラ・トリニテ教会で開催している。そこで、失職したエボンによって叙階された者たちが審問にふされている。4番目の公会議は、858年ドイツ王ルードヴィヒの命令で、開かれたのを、フロドアールが記している。5番目の公会議は5年後、シャルル禿頭王の臨席で、同地で開かれ、そこでロトは宗教会議で繰り返される判決に困り果てていたが、結局司教の座を剥奪され、サン・メダール修道院に追いやられた。6番目の公会議は、そこで、同じ年、シャルル禿頭王が開催を決めた。彼の娘ジュディットは世俗法と教会法に反して、伯ボードワンを夫に迎えたため、そこで聖体拝領から除外されてしまった。アंकマールに対してローマ教皇庁に控訴したウルファドゥスの件で、教皇ニコラウス1世は公会議を866年にこの地で開催するよう命じた。8回目の公会議がソワソンで876年頃、同じく1066年に開かれているのを、筆者は読んだことがあるが、場所がサン・メダール教会であったかどうかは確信がない。シフレが『トゥールニュ史』の中で、原本から王フィリップ（1世、1060-1109年）の宗教会議での命令文書を公刊しているが、それは修道院長ピエールに宛てた、同修道院の権利を確認するためのものであった<sup>3)</sup>。この命令文書に、ランス大司教マナセスが他の司教9名と王国の高官たちと下署している。実際、それは「サン・メダールの城内、余の宮殿にて公開で付与された。ソワソンの町から遠くない、その東の郊外で、主の化肉の1075年、実際に余の統治の17年、パリ司教ジョフロワ、国王尚書が交付すべく読み、再度読み、誉めた」のように終わっている。フランスの司教たち、それも非常に多くがサン・メダール教会の会場に集まったと、教会内の記録が伝えている。彼らは1200年か翌年、フィリップ尊厳王とエンジェルベルガとの離婚に関する判決が、ソワソンで発表されることに同意した。以上に、サン・メダール教会の献堂式が1131年に、教皇インノケンティウス2世の手で行われたことを付記する<sup>4)</sup>。同教皇は数日前に同地の修道院長ウードを、ソワソン司教の反対を押し切って、オルレアン司教に推戴していた。

間もなくして、修道院と宮殿はノルマン人の放火-作家が言うのであるが-によって損傷を受け、フランク王ウード（888-898年）がそれをきれいな状態に戻したことは、古い文書集からここで初めて公刊される同王の文書が証明している。ウードの後、シャルル単純王の妾、オトギヴァ-その時は、伯エリバールの妻であった-がサン・メダールの宮殿または修道院で頻繁に夜を過ごしていたと、昔の作家が語っている。修道院の財産はヴェルマンドワ諸伯によってオトギヴァに渡り、その後数人の伯たちの妻に婚資として引き渡されたと推量される。従って、このオトギヴァがサン・メダール教会の地下墓所に埋葬されたことは驚くべきことではない。彼女の墓碑銘は『古事拾遺集』1巻にあるのでご覧あれ。11世紀の項、即ち、国王ロベールの治世にこの不幸が刻まれている。この時から我々の父の時代に至るまで、つまり1568年-この年、メダール修道院はカルヴァン派の人々によって略奪される-まで、国王

の安在所，または宮殿が存続していたと伝えられている。驚くほど巨大な残骸が地中に今なお埋まっていると考えられる。そして，そこから大理石の破片が，何の役にも立たないが，掘り出されている。メダール境界以外に，ソワソンのどこかに国王の安在所が存在していたことは後述されるであろう。

註

- 1) Saint-Médard près de Soissons (Aisne, ch.-l. ar. c<sup>m</sup> Soissons).
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 4 卷上, 407, 408 頁参照。
- 3) 『トゥールニュー史』, 326 頁参照。
- 4) 『拾遺集』, 2 卷, 787, 788 頁参照。

### XCIII. メス<sup>1)</sup>

フランク人によってオストラジー王国の首都とされる前に，Mettenseまたは Divodurum-Mediomatricorumと表記されるメスは非常に広い地域の首座であったこと，自身の円形劇場や宮殿を持っていたこと，ゲルマン民族の攻撃を押し返すことを意図して，ローマ皇帝が頻繁にそこに滞在していたことは明白である。クローヴィス1世の息子ティエリー（1世，511-534年）からダゴバール2世（634-657年）に至るオストラジーのフランク諸王は11名を数えるが，彼らはメスに国王安在所を置いていた。彼らの中のシルドバール2世（570-595年）はメスの都に宮殿を設置したと，トゥール司教グレゴワールは記している<sup>2)</sup>。ワラフリドスは『聖ガレン伝記』の中でこの宮殿に触れていて，更に，ロテール（1世，840-855年）とズエントボルト（895-900年）の両王もそこを使っていたことを誰も疑わない。諸王の集会や諸司教の宗教会議の多くがメスで開かれたことを，我々の歴史家たちは言及しているが，それらをここに列挙することを控えることに決めた。そうすることが，筆者にとって何の役にも立たないからである。

註

- 1) Metz (Moselle, ch.-l. dép.).
- 2) 『歴史十卷』, 5 卷, 36 章参照。

### XCIV. ムラン<sup>1)</sup>

Milidunum, Meledunum, Melodunumと表記されるムランは「セーナ川の中島に位置する，サンス族の城塞都市である」と，ジュリウス・カエサルは言う<sup>2)</sup>。今日，それはガティヌ地方に位置する。トゥー

ル司教グレゴワールの時代、彼が『歴史十卷』6巻、フォルテユナがパリ司教聖ジェルマンの伝記で「ムラン郡」として使っている如く、固有の郡の名称を享受していた。実際、シャルル禿頭王（843-877年）は勅令の中でムランをMilidunisum、他の人はMilidunensemと呼んでいる。既に古くから、メロヴィング諸王には「ムラン城castrum Milidunense」として知られた。更に、フランク人事績録においてはMalidunese、Miclito、Miclitanumの城、ニタールの書にはMiclidoとある。サンス司教レオンはシルドベール王（511-558年）に宛てた書簡で、ムランで司教が意に反して叙任されることはないと言言しているとき、彼はMecladoneの綴りに関して、ニタールを先導しているように見える。王ロベール（2世、996-1031年）は自身の装飾と宝物をそこに集めていたが、王妃コンスタンスはその城を自分のものにする、長男アンリに逆らって、暫くの間それを独り占めしたとのことである。更に、(王)フィリップ(1世、1060-1108年)が頻繁にここに滞在した。しかし、最後には、シュジェールが言っている如く、「彼はほぼ60歳に達していたので、国王の座を捨て、セーヌ河畔のムランMilidinumの城で、ルイの臨席の下、最後の日を閉じた」。ピエール・アベラル（1142年没）は『自叙伝』で、「ムラン城と国王安在所」と呼んでいる<sup>3)</sup>。サン・ペール・ドゥ・シャルトル修道院の文書集写本では伯マナセスの息子、伯ウードはサン・ペール・ドゥ・シャルトルのジュジエ分院に非自由人の男女1組を寄進したとある。同伯はこれに関する文書を、「8月9日、ムラン城の宮殿で、王アンリ（1世、1031-1060年）の臨席の下で」自身の名前を最初に置いて強めている。この文書には前記伯ウード、彼の兄弟伯ユグ、両伯の姉妹ユスタシュの署名が押されている。彼らに続いて、伯ゴティエ、ドゴコ・ド・コンスタンス、ガルラン・ド・パリ、そして国王の礼拝堂付き首席司祭ボードワン、そしてその他の貴族が証人として下署している。

#### 註

1) Melun (Seine-et-Marne, ch.-l. dép).

2) 『ガリア戦記』, 7巻参照。

3) 『不幸の記』, 4頁参照。

#### XCV. マインツ<sup>1)</sup>

Moguntinumと表記される司教座都市マインツをここに加えるが、それは作家たちの著作の至る所で言い触らされている同地の古い優美さを追跡したいのではなく、そこにフランク人の諸王の安在所、または宮殿が存在したことを立証しようとするためである。最初に、マルカルドス・フレヘルスが彼のラーデンプルクに関する論攷において、王ダゴベール（1世、623-638年）の命令文書を披露しているのである<sup>2)</sup>が、それは「ジョフロワが承認した。9月21日、余の統治の6年に発給された。マインツの宮殿

において行われた。幸あれ。アーメン」のような文言で終わっている。また、筆者は国王ベパン（3世、751-768年）の文書をル・ミルの書において閲覧している<sup>3)</sup>。それはサン・マキシミン修道院に「1月、余の統治の14年、マイントの公的宮殿にて発給された」とある。しかし、読者諸賢はこの個所から、もしこの文書の偽りの祝祭日によらないとしても、種々の改竄を理由に、確かに何も引き出すことはできないであろう。

註

1) Mainz (ドイツ, l. Rheinland-Pfalz).

2) Freher, Marquard, *De Lupoduno, antiquissimo Alemaniae oppido*, Heidelberg, s. d. in-fol.

3) 『ベルギー王文書集』, 14頁参照。

XCVI. モンリュユ<sup>1)</sup>

Monasteriolum またはMonsterolum in Pontivoと表記されるモンリュユはポンティユ郡とアミアン司教管区の中で最も堅牢な城塞都市であったと、サン・サルヴ修道院の（修道士）によって言われている。また、多分同地は、アンセギウスの証言によれば、それまではブラグム（ブレイ）と呼ばれていたであろう。しかし、筆者は、このブレイの本当の地は、sancti Salvii in Brago, sancti Salvatoris in Brago, Brigacoと表記されるサン・サルヴ修道院—この地は、サンス司教管内のセーヌ河畔に位置する—があるブレイに置き換えられるべきとの考えを持っている。それはともあれ、フランク人の王、ルイ8世（1223-1226年）の事績録は「海辺の修道院Monasteriolum supra mare」, 「フランク王の城castrum Regis Franciae」と記している。アリユルフは『サン・リキエ修道院年代記』の中で、フランドル伯アルヌルフが攻略した城を「国王の城castrum Regium」と呼んでいるが、この出来事はポンティユ郡全体が経験した不幸であり略奪であった。フィリップ1世（1060-1108年）は絶縁状を出して、妻ベルタをこの地に追いやった。この地で、カペー家の頭領ユグ（・カペ）は聖ワラリクと聖リシャールの聖遺物への従前からの敬意によって、王国の期待を背に王位に就くと、献身と信仰の周知の特典を持ち帰った。加えて、この地は、フロドアールが939年の出来事の中で想起されていることであるが、（騎士）エルリュアンがノルマン人から奪い取って、自身のために使っていた、「モンリュユと呼ばれるエルリュアンの海辺の城」であったと思われる。その後、モンリュユは諸伯—彼らは同時にポンティユ伯とも言われている—によって所有されていたが、この地—今日では立派で、軽視できない大きさの知名度を誇っている都市である—は、ずっと以前に彼らの手から王領地へと編入されている。

註

- 1) Montreuil-sur-Mer (Pas-de-Calais, ch.-l. ar.).
- 2) 『フランク史作家選集』, 5巻, 285頁参照。

XCVII. モンソー<sup>1)</sup>

862年に開催されたソワソン宗教会議の議事録は、Monticelliまたは Moncelliと表記されるモンソーをサン・ドゥニ修道院の財産の中に数えている。しかし、その地名の綴りは多様である。筆者は、ソワソン宗教会議に参加した教父たちによって引用されたこの地がパリ小郡内の、ジュアンヌ川とセーヌ川に挟まれ、エッソンとコルベイユから遠くない所（後者の南, 4キロ）に位置していた村であると信じたい。他の見解はモー郡内、Monticellosと表記されるモンソーの王宮荘園で、モーの都から東へ2里（8キロ）離れている。その後のこの地に関しては、ブリー郡内にあるSaucitho, Monticellis, Abnitiの荘園に住む領民数名をサン・ドゥニ修道院に譲渡している、クローヴィス2世の息子、王ティエリー（3世, 675-691年）の命令文書から読み解かねばならない。本書6巻, 文書番号9を参照せよ。そこに、フランス王アンリ4世（1589-1610年）は大きな安在所と囲壁を驚異的方法是で建設している。それは時の経過とともに、また諸王の長期の不在によっても、熱意は他に向けられたとしても、殆ど寂れることはなかった。それ故、「加えて、死は石垣や大理石にもやって来る」と記されている。

註

- 1) Montceaux (Essonne, ar. Evry, c. Mennecey, c<sup>ne</sup> Mennecey).

XCVIII. モンティニー<sup>1)</sup>

地図によると、Montiniacumと表記されるモンティニーはラングル司教管区内、オーブ河畔にある。もう1つのモンティニーはパリ小郡内の、コルメイユやアルジャントイユからそう遠くない所にある。どちらにも、「モンティニーと呼ばれる城castrum, nomine Montiniacum」はなかった。フロドアールが938年の出来事の中で伝えている如く、「ルイ（海外）王はセルルス某に対して強引にその城を奪い取り、それを破壊した」。同地を、同じ作者は965年の出来事の中で、「サンリス伯ベルナルとティボーがエリバルと共謀して復活祭の期間に攻撃して奪取、火を放ち破壊した、モンティニーにある国王の城」と呼んでいる<sup>2)</sup>。このモンティニーは、同じくフロドアールが944年の出来事の中で叙述している同名地と同じであったと考えられる。つまり、「サン・クレバン修道院の所有下にあった、ソワソン郡

内に位置するモンティニーと呼ばれる城」で、「同修道院はそれをずっと以前に受け取っていたが、エリベールの息子たちとラジュノールに返すべく、それを彼らに譲渡した」、「数名の市民たちの裏切りによって、国王の臣下が彼らを捕縛し、裏切り者はアンドレアによって殺害された」とある。それ故、苦難の時代にあって、相続権ではなくて、武力行使によって彼らの手に渡っていたことから、この城は王城と言われている。

註

1) Montigny-sur-Aube (Côte d'Or, ar. Montbard, ch.-l. c.).

2) 『ポワトゥ伯史』, 152頁参照。

### XCIX. ナントウイユ<sup>1)</sup>

NantogilumまたはNantoilumと表記されるナントウイユの宮殿は『フォントネル修道院年代記』の中で、ダゴベール（1世）の息子、王クローヴィス（2世, 635-656年）の統治の初年の出来事の中で言及されている。同王はロトマール某にフォントネルの所領を安堵しているが、そこには「この安堵（の文書）は前記王の統治の初年, 2月4日, ナントウイユの宮殿で発行された（後略）」とある<sup>2)</sup>。この場所は、筆者の考えでは、ヴァロワ郡内の、地元でナントウイユ・ル・オドワンNantogilum-Halduiniと呼ばれている所で、王宮荘園に数えられるべきであろう。何故なら、ルイ敬虔王（814-840年）はサン・ドゥニ修道院で国王権標を受け取ると、そこからナントウイユ、その後クレシー・アン・ポンティユに到着したと、天文史家の書にある。確かに、フランク諸王は頻繁に王領地、または神に捧げられた場所に宿泊することを慣習としていた。他方、一部の人たちはラ・フェルテ・ゴシェから遠くない所に位置する、マルヌ河畔のナントウイユを優先さそうとしている。そこには、王宮荘園も存在していたとする。そしてこの主張の中で、「マルヌ河畔のナントウイユで」発給された王シャルルの文書を引き合いに出している。その文書が真正とは認められてこなかったとしても、筆者はこの件に関する彼らの信に満ちた主張を喜んで受け入れたい。何故なら、その地がブリーの森の中のルベール聖ウアンまたはダドン（684年没）がここに、修道院長聖アジルの伝記の中で引用されている、自身の名を冠した修道院を創建している—がその付属物を構成していたナントウイユの王領地と別物とは決して思えないからである。その後、ナントウイユ・ル・オドワンは国王の手からエストレ・サン・ドゥニ公の所有権下に移り、同公は比較的高い丘の上に聳え立つ城と建物を、国王の時代に劣らない状態で所有し続けている。

註

- 1) Nanteuil-le-Haudouin (Oise, ar. Senlis, ch.-l. c.).
- 2) 『拾遺集』3巻, 194頁参照。

### C. ナルボンヌ<sup>1)</sup>

Narbonenseと表記されるナルボンヌの宮殿は、ガリアを征服したローマ人によって既に建てられていたが、トゥール司教グレゴワールは『殉教者の栄光』の中で、それがはっきりと高台と分かる場所に位置していなかったと示唆している。そこで、スペインのジェロナの殉教者フェリクス教会が、国王の宮殿から非常に魅力的な場所であったリヴィエールの平原が見られないように邪魔をしていた、と彼は記している。これらの建物以外に、ナルボンヌにはジュピターの神殿、円形劇場、その他のローマの威厳に相応しい記念物があつた。更に、ナルボンヌ郡内にあつた、しかし、カルカソンヌに近かつた、ミネルヴァの城がこれらに加えられるべきであろう。この城は、本書で公刊されているコーヌ修道院の文書で頻繁に言及されている。

註

- 1) Narbonne (Aude, ch.-l. dép).

### CI. シュパイヤー<sup>1)</sup>

Noviomagus-Nemetumまたは Spiraと表記されているシュパイヤーは、昔の作家たちによって頻繁に言及されている。フランク諸王はここに宮殿を持っていたことを、シャルルマーニュがブレーメン司教座教会に宛てた文書が教えている。その時期は788年と関係しているのであるが、そこに添えられているインディクティオの12年とは合致しない。その他多くの言及は、文書の最初と最後で見られるが、それらは原本からではなくて、その写しから転写されたもので、年代記述の中で、間違つた転記を示している。しかし、そうではあるが、その文書をブレーメン司教ウィルハドスに発給した時、シャルル（マーニュ）がSpirensiまたは Nemetensiと表記されているシュパイヤーの宮殿に滞在したことは明白なので、本書の目的としては、その1通で十分であつた。

註

- 1) Speyer (ドイツ, l. Rheinland-Pfalz).

## CII. ナンテール<sup>1)</sup>

人々はパリ小郡の、リュイユ・マルメゾンやセーヌ河畔から遠くない、Nemetodorumまたは Nemptodorumと表記されるナンテールの王宮荘園をフランク王、クロテール2世（584-622年）の洗礼地としてよりも、聖女ジュヌヴィエーヴ（500年没）の生誕地として称揚する。同王の後見人である叔父の王ゴントランは、上記の王がこの地で聖なる水に浸かって洗礼を受けることを望み、それまで名無しであった被後見人にクロテールの名前を付けた次第である。

### 註

1) Nanterre (Hauts-de-Seine, ch.-l. dép.).

## CIII. ノジャン<sup>1)</sup>

何と多くの荘園に、ノジャンNovigentumの名が付けられていることか。それらの中で最も古いのがパリ小郡内のセーヌ河畔に位置する、今日ではサン・クルと呼ばれるそれで、更に王国の初期から、西側の王領地に付属していた。オルレアン王クロドミル（524年没）の息子、クロドアルがこれを王領地から切り離し、そこに修道院を建立した。国王の建物が修道院のすぐ傍にあり、そこで王ティエリー（2世）の息子、クローヴィス（3世、691-695年）が統治の2年、裁判集会を開き、その記録が本書で公刊されている。それはサン・ドゥニ修道院長シェノンとこの地の修道院の院長エルマノアルドとの間の係争に関してで、そこから知るに値する多くのことが明らかになっている。クローヴィスの弟、シルドベール（3世、695-711年）も統治の2年に、ノジャンで発給された文書で、サン・ドゥニ修道院長シャルドリクがシャンブリー郡内に創建したチュソンヴァル修道院を自身の甥、マグノアールに与え、そして後者が同修道院の財産を妥当な範囲で所有していることを、同シルドベールの文書が教えてくれている。ノジャンの直ぐ傍に「ロヴェリトゥスの森（今日ではサン・クルーの森）がセーヌ川に沿って」あり、「余の統治の2年、余の宮宰にして貴顕のラガンフレドの求めに応じて、それをロベキヌスという名の森林役人と一緒に、サン・ドゥニ教会に譲渡した（後略）」と、「ダニエル」のあだ名をもつシルベリク（2世、670-721年）が述べている。

また、パリ小郡にはノジャン（・シュル・マルヌ）と呼ばれる別の王宮荘園が、マルヌ河畔のコンフルイエンの近くにあった。そこに王シルベリクが彼の子供たちと滞在したことを、トゥールのグレゴワールが『歴史十巻』5巻で伝えている。より新しい人たちはNogentumと呼び、エモワンは Novigentum villamと呼んでいる。862年にソワソンで開かれた集会の議事録はマウリペンシス—ノジャン・シュル・

セヌー郡内、セヌ河畔のノジャン荘をル・ユルポワと呼んでいるうえ、サン・ドゥニ修道院所有の荘園の中に数えている。ノルマン人の脅威から、サン・ドゥニ修道院の聖遺物はここに運び込まれたのであるが、それに関して、『サン・ベルタン修道院編年記』は「デー人への恐怖から、殉教者ドゥニ、リュスティク、エルテールの遺骨はマウリペンシス郡内の、同修道院の所有下にあったノジャンの荘園に運ばれ、そして9月21日聖遺物櫃に丁重に安置された」のように表現している。この地はパリから17里(68キロ)離れていて、ある時は国王の直領地、またある時はサン・ドゥニ修道院に帰属していた。アンジェ郡内のノジャンに関しては、王ダゴバール(1世、623-639年)の伝記で読むが、多分そこでシャルル禿頭王(843-877年)の特権文書が発給されている。それはグランフィユ修道院長エルプロワンと修士たちのためのもので、ベリーの書では「いと栄光に満ちた王シャルルの統治の6年、10月21日、インディクティオの9年に発給された。ノジャン荘で行われた(後略)<sup>2)</sup>」のように終わっている。

上掲のソワソン教会議の議事録では、もう1つ別のノジャンが言及されている。ポーヴェ郡内のオワーズ川沿いで、クレイユと向かい合っていて、地元ではノジャン・レ・ヴィエルジュ(・シュル・オワーズ)と呼ばれている。これ以外にも、ペルシュのノジャン・ル・ロトルー、ユール河畔のノジャン・ル・ロワ、ノジャン・ル・ベルナルとノジャン・レランバールがそれぞれの場所にある。そして最後に、ラン郡内にあるノジャン荘は、一部の人の意見に従えば、嘗て王宮荘園であったクシーの森の傍にあったことから、ノジャン・ス・クシーと呼ばれている。「エプロワンが突然の襲撃によって、オストラジー軍と共に近づいてきた時、ティエリーは王国を取り戻すと安全に」そこに「滞在していた」。その後、エプロワンは同王をそこからオワーズ川、やがてベティシーの宮殿、最後にクレシー・アン・ポンティユへと敗走させ、そこで命令を出すことを余儀なくさせた。その後、筆者の修道会に属するノジャン修道院が創建され、12世紀初期を通じて、著作で非常に有名な院長ギバールが生涯にわたってそこを監督していた。

#### 註

1) Saint-Cloud (Hauts-de-Seine, ar. Boulogne-Billancourt, ch.-l. c.).

2) 『ボワティエ司教』、24頁参照。

#### CIV. ナイメーヘン<sup>1)</sup>

Novioganus-Batavorum, そしてしばしば Neomagum ad Vahalimと表記されるナイメーヘンは司教座都市であったし、加えて古代ローマ人の間でも有名であった。テオドシウス帝(379-395年)の文書とその他の古い作家たち—もし多すぎれば、グロティウスの書を参照せよ—がこの都市に言及している。

ここは国王の荘園でもあって、シャルルマーニュはそれを宮殿に相応しいように飾り立てたと、エジナルが「帝は見事な出来栄で宮殿を建設したが、1つはマインツからそう遠くない所で、他の1つはバタヴィア族が住む島を南側に沿って流れるワール河畔のナイメーヘン」というような言葉で表現している。シャルル（マーニュ）は777年、まずこの地に向かい、そこで復活祭の儀式を祝った。「6月6日シャルル（マーニュ）は同地の公的宮殿に滞在していた」ことを、この日にユトレヒト司教座教会に宛てた文書が教えてくれている<sup>2)</sup>。同じく、「806年ティオンヴィルから船でナイメーヘンに向かい、そこで四旬節の聖なる断食を祝った」とある。その時、いと著名なエティエンヌ・バリューズが公表している<sup>3)</sup>、勅令第9と第10が作成されている。皇帝ルイは817年、「ナイメーヘンに急行し、狩猟に興じた」。そして、821年彼の命令によって、「再びナイメーヘンで5月に集会が持たれることが同意された」とある。実際、830年にルイは非常に有名な裁判集会をナイメーヘンで開催している。そこには、皇帝に「援助を提供するために」、単にフランスの高官のみならず、「ゲルマニアからすべての高官が集まっていた」。そこで「修道院長イルドワンが宮殿を出るよう命じられた。そして修道院長ワラクはコルビー修道院に戻り、そこで正しく規則を守るよう命じられた」とある。パスカシウスはこの事をワラの墓碑銘の中でより詳しく伝えている。『メス編年史』は「巨大で見事な出来栄のナイメーヘンの宮殿」と讃えている。加えて、レジノンの『年代記』に収められた『ノルマン人事績録（公ロン以前）』はその宮殿の威容を見つけたあと、881年、デーン人の放火によって消滅したと伝えている。しかし、それはデーン人によって完全に破壊されてはいなかったか、明らかにその後、この宮殿は再建されていた。これに関しては、もし宜しければ、アシャッフエンブルクのランベールによる1046年の出来事に関する叙述、エダのウィリアムの書、その他を参照せよ。

註

- 1) Nijmegen (オランダ, pr. Gelderland).
- 2) 『ベルギー教会便覧』, 36頁参照。
- 3) 『勅令集』, 1巻, 451欄参照。
- 4) 『ユトレヒト司教座教会史』, 216, 244頁参照。

## CV. ノワイヨン<sup>1)</sup>

Noviomagus-Veromanduorumと表記されるノワイヨンは、より新しい時代の人たちによっては、Noviomum やNoviodunumと書かれている。しかし、その名前の最も新しい使用はこれと一致していないし、古い人々はNoviomumの語を使用していない。この都はジュリウス・カエサルが『内乱記』2巻

で、ソワソンの都Noviodunumと呼んでいるものとは全く別である。ノワイヨンはソワソン地方ではなくて、ヴェルマンドワ地方にあり、今日でも後者の司教座都市で、常にこの地方と関係づけられてきた。ノワイヨンの立地はこの都市の司教ラトボが550年以前に、聖メダールの伝記の中で、「ノワイヨンは2つの川の間に位置する。東側にはゴル川、西側にはマルグリ川が沿って流れている。この両川をヴェルセルという第3の川が受け入れている。そしてこうして同じく、その都の囲壁からそう遠くない所で合流し、偉大な名前のオワーズ川に流れ込んでいる」のように記している。『聖女ゴドベルト伝』の作者はノワイヨン司教エロワ（660年没）が「アヌア荘にて、国王クロテールの御前で」、ゴドベルトを「自身の指輪を使って主と婚約させた」と言及している。続いて、そこからノワイヨンの都に到着すると、国王は彼に自身の宮殿を殉教者聖ジョルジュの小礼拝堂、2つの荘園をその修道院で勤勉に奉仕していた12名の女性と共に与えた。こういった具合で、ノワイヨンの宮殿は王クロテール3世（654-673年）に帰せられてきた。それはともあれ、768年にシャルルマーニュが同地で王位に就いたことは、歴史家たちが口を揃えてそのように伝えていることから、確かなようである。更に、確かなことは、デュシェーヌの書に収められた、同時代人の作家が「主の化肉の987年、フランス人が彼を選び、ノジャンにおいて国王の座に据えた<sup>2)</sup>」と言及している通り、カペー家の創始者ユグに関しても、同じである。それから間もなくして、この宮殿はノワイヨン歴代司教に委ねられたようである。ほぼ500年以前から、彼らの文書で使用していた伯という称号の下に、単に国王都市ノワイヨンのみならず、ノワイヨン郡、同郡内のキエルジーの王宮荘園、その他の所有権も彼らに移っていたようである。

#### 註

1) Noyon (Oise, ar. Compiègne, ch.-l. c.).

2) 『フランク史作家選集』, 3巻, 344頁参照。

#### CVI. ノワジー<sup>1)</sup>

パリ郡内、マルヌ河畔のNucetum majusと表記されるノワジーは、トゥールのグレゴワールの書において、シルペリク（1世）とオドヴェールとの間の子、王クローヴィスの非道な殺害との関係で知られている。そこには「王自身—シルペリク（1世）—はパリ都市管区のシェル荘に到着した。王妃—フレデゴンド—は拘束された者—クローヴィス—にマルヌ川を渡らせ、ノワジーと言われる荘園に匿われるよう命じた。クローヴィスは拘禁中に殴打されて死亡し、その地の小礼拝堂の軒下に埋葬された」と記されている。同名の荘園に関しては、有名なアドリアン・ヴァロワの書で調べたし。

註

- 1) Noisy-le-Grand (Seine-Saint-Denis, ar.Le Raincy, ch.-l. c.).
- 2) 『歴史十卷』, 5巻, 40章参照。
- 3) 『ガリア属州・都市総覧』, 388, 426頁参照。

## CVII. オルヴィル<sup>1)</sup>

著名なシルモンは勅令に関する書の注記で, Audriaca-villaと表記されるオルヴィルを, シャルル禿頭王によって言及されているOdreia-villaと同一であると考えている。後者の立地をアミアンとアラスの間に位置すると, エモワンの言に基づいて, 正しく定めている。しかし, その土地に関しては, 決して明瞭には示しておらず, それだけでは不十分かもしれない。何故なら, この地はデーン人による破壊または時の災難によって建物がなくなっていて, 急速な復興が阻害されたかもしれないので。ペトルス・ベルティウスはシャルルマーニュ治下の西ローマ帝国の地図の中で, Audriaca-villaをオティ川の源に定めている。実際には, 水源からは5, 6マイル離れているが。確かに, Odreia-villa-同名の森林と共に, 今日でもオルヴィルと地元では呼ばれている-はオティ川の右岸にあって, 西方のドゥーレン, 東方のオティー-その名前を川から取っている-の集落から等距離で, 2マイルの所に位置する。

一部の人たちは間違って, この土地とAriaまたはAriacoの宮殿-これに関して, 奇妙で, また誰からも受け入れられていないことを, ジャック・マルブランクがモリニー地方の書で伝えている-を混同している。しかし, その起源はメロヴィング時代に関係していると思われるのであるが, 筆者はそれをカロリング時代に引き下げたい。何故なら, それに関して, シャルルマーニュの命令文書より古いものから, 如何なる支援も得られないので。同王はコルビー修道院長アドンまたはシャドンにこの文書を, 「統治を始めて1年, 3月16日に」発給している。そこには「オルヴィルの荘園にて行われた。神の名において, 幸福に」とある。筆者が依拠するエジナルは, シャルル, ルイまたは尊厳者ロテールが妻と一緒に長い間そこに滞在した時, 彼らに挨拶している<sup>2)</sup>。『サン・ベルタン修道院編年記』は4個所でこの王宮荘園に言及している。それは王シャルル(2世, 禿頭王)が865年「9月中旬に狩りのためにオルヴィルにやって来た」と伝えている。同じく, 867年同王は「秋季の狩猟と遠征のため, サン・ヴァアスト修道院とオルヴィルの荘園, そしてそれらの周辺に滞在することを決めた」と。更に, エモワンはオルヴィルにおけるシャルルの隠遁に触れている<sup>3)</sup>。次の年, 『サン・ベルタン修道院編年記』が伝えるには, 同じ理由で, 同シャルルはデーン人と対決する息子カルロマンを残して, 「再びオルヴィルに狩猟のために」向かっている。最後に, イタリアに出発するに際して, 877年, 息子ルイに対して, 「オルヴィルで豚を受け取らないこと, 通過するときを除き, 狩猟をしてはならない」と命じている。ルイ吃音王

(877-879年)はシャルル(禿頭王)の指示に従って、『サン・ベルタン修道院編年記』が言うには、「オルヴルで父の死の知らせを受け取ると、キエルジーとコンピエーニュを通過してヴェルノンまで行き、サン・ドゥニ修道院での父の埋葬に間に合った」とのことである。これらすべては、シャルル(禿頭王)とルイ(吃音王)がこの荘園にいる時に心がけていたこと、そしてそこで秋の楽しい時を過ごしていたことを明言している。土地は肥え、眺望も申し分なく、この地には固有の魅力が欠けてはいなかった。つまり、王道、オティエ川に架かった橋、嘗て動物と鳥が豊かに棲み、その他の多くが溢れる広大な森。しかし、オルヴィルの荘園はずっと以前に個人の手に移っていた。そして、今はアルトワの貴族、サン・ポール伯に帰属している。

註

- 1) Orville (Pas-de-Calais, arr. Arras, c. Pas-en-Artois).
- 2) 『書簡集』, 52番参照。
- 3) 『フランク史』, 5巻, 31章参照。

### CVIII. パレゾー<sup>1)</sup>

パリ郡のシャトーフォル主任司祭区内に位置し、ロンジュモーから程近い、Palatiolumと表記されるパレゾーの王宮荘園は、その名称の威厳よりも古さにおいて有名であった。フォントネルの匿名修道士は、修道院長ヴァンドリュ(668年没)が王ロテール3世の統治の7年、同王に接見し、上記修道院の建設地に関する国王安堵の特権文書を、カストリンセの領域、同パレゾー通称、「小宮殿」と呼ばれている-において拝受している。従って、クロテール3世の時代、パレゾーは、ペパンによって公明正大に、パリのサン・ジェルマン修道院に寄進された王宮荘園であったことを、シャルルマーニュの時代に書かれた、パリ司教聖ジェルマンの遺骸奉遷記が教えてくれている。これらに、811年にシャルルマーニュの遺言状に下署しているイルミノンの土地台帳の写本が補足を加えている。この土地台帳には、「パレゾーには領主直領地と家と建物が十分ある。ここには6つの耕圃があり、面積は287ポニエで、小麦の種を1300ミュイ播くことができる。ブドウ畑は127アルバンで、800ミュイの収穫が可能である」と書かれている。そしてその終わりには、「パレゾーには108の自由マンスがあり、毎年軍役として荷車6台、3年に1度ライ麦108ミュイ、2年に1度雄羊と子羊108頭、豚の放牧税として葡萄酒を240ミュイ、材木代として銀35スー、豚を250頭、卵を1,250個、人頭税として9スー」とある。これ以外に、筆者のサン・ジェルマン教会には赤い十字架が彫られた四角形の石が見られる。それを四方から非常に古くもつれ合った文字からなる次の碑文が取り巻いている。ジャック・デュ・ブレイユの書には銅板に

印刻されたものが確認される<sup>2)</sup>。しかし、碑文には、「聖ジェルマンは遺骸奉遷の際にここで休憩し、国王ペパンは彼にパレゾーをすべての付属物と共に寄進した」とある。

一方において、聖ジェルマンの遺骸奉遷記の権威が存在しているし、他方において、ペパンは彼の父シャルルが埋葬されているサン・ドゥニ修道院にこの荘園を譲渡したとあることから、パレゾーがペパンによってサン・ジェルマン修道院に寄進されたことを少し疑っている人たちの見解により適切に対応するために、これに関しては更に詳しく考察するのが適切であろう。確かに、サン・ドゥニ修道院が所有する荘園の中にパレゾーを数えあげている、同修道院が所有する新旧の記録はどこにもない。ペパンの文書数通—しかし、そこには多くの真正文書が存在する—も、イルドワンの財産分割文書も、862年に開かれたソワソン宗教会議での院長ルイの文書もない。加えて、サン・ドゥニ修道院はパレゾーにおいて、何も所有していない。その寄進の話に少しでも信が置けるとする場合にはあるが、プレジールPlaciumの代わりにパレゾーPlatiolumが容易に使用されたと、筆者は考える。何故なら、この後に掲載される文書から筆者が学んでいることであるが、ペパンの息子、シャルルマーニュはボワシー小郡のプレジール修道院が自身の教会に譲渡されていたと主張していたパリ司教エルシャンラドに対して、その地の所有をサン・ドゥニ修道院に認めている。従って、王ペパンの文書はプレジールがフランク人の高官によってサン・ドゥニ修道院に遺贈されていたことを、同修道院に確認したものになる。この文書において、この地は後世の写字生によってパレゾーの名称に、確かに大きく異なることはないが、変更されたことになる。但し、この個所に関して、検討されるべきと筆者が判断した、古さに対する先入観がなかったとは言い切れない。更に、その所領が如何なる運命によってサン・ジェルマン修道院の所有から引き離されたのか、そして、一時的ではあるが、パレゾー大公の名称で有名な主人を持つようになったのかについては、筆者は理解していない。

#### 註

1) Palaiseau (Essonne. ch-l. ar.).

2) 『パリ古事図鑑』(1640年版), 191頁参照。

## CIX. パンディアクム

パンディアクムPandiacumの偽りの宮殿の起源に関して、ル・ミルが既にそれらについて公表している<sup>1)</sup>ことを除くならば、本書でそれについて考察することを不快に感じる人がいるかもしれない。要するに、この著者はシャルル禿頭王の、877年に彼の妹ジゼールの勧めに応じて、ドナンDenain修道院に発給された文書を持ち出している。それは「ベルナールのサイン。(不明)書記の私がパンディアク

ムの宮殿で作成した。アーメン」と摺筆している。この文書の馴染みのない摺筆文は、文書のその他の汚点を看過するとしても、信頼のおける作家たちには全く知られていなかった、このパンディアタムの宮殿を「病人の島」に追放するのに恰好の材料になる。しかし、これと関係するある思い出をここで挿入することが賢明であろう。何故なら、この国王文書が、捏造されたものからではなくて、消失する運命の真正文書の考えに沿って作成されたものを入り込ませた、擬古の微かな特徴が、非常に多くの改竄の間から漏れ出している、そういった史料に加えられるためである。それ故、その種の質の悪い地名がここにある。カニシウスの書に出てくるRegiaticinaの宗教会議は、この語は1語で地名を表示しているとして、なんと多くの人たちを欺いてきたことか。しかし、それが2語からなっているとすると、宗教会議はRegia Ticina、つまりTicinensis（イタリアの都市、パヴィアの古名）の宮殿で開催されたことを意味する。この宮殿において公会議が876年に開かれていて、そこでポンシオン集会の議事録が「ローマ教皇ヨハネス陛下の使者と共に、その他多くの地方からの司教たちと一緒に」確認されている。

註

1) 『ベルギー王文書集』, 262頁参照。

## CX. パリ<sup>1)</sup>

Lutecia-Parisiorumと表記されるパリは比較的狭い区域に囲まれてはいるが、古代ローマ皇帝ジュリアヌス（361-363年）とヴァレンティニアヌス1世（364-375年）－古代の作家たちは、彼らがそこで冬営していたと伝えている－の時代に、皇帝宮殿以外に、公共浴場、円形劇場またはアリーナ、その他の公共施設があったことに疑う余地はない。これらがどこに配置されていたのかを考察することは有益であろう。ソルボンヌ・コレッジの古い文書類は「カエサルの浴場」Locum thermarum Caesarisに言及している。一部の人たちはこれらの浴場よりも、「宮殿または浴場」という言い方を好んでいる。更に、そこで、尊厳者ジュリアヌスが住んでいたこと、1544年都市の囲壁の一部が撤去されたとき、嘗てアルクリオ荘から地下を通った水を上記の浴場まで引いていた、非常に古い水路が確認されたと、(ジャック・) デュ・ブルイユは記している。それらはローマ教皇大使たちまたはオラトリオ会の修道士たちが住み続けていた、クリュニー修道院の建物、「オテル・ドゥ・クリュニー」が今でも見られその場所にあった。そして、囲壁の外のココには、確かに、「カエサルの浴場」、「ジュリウスの浴場」と呼ばれる建物－加えて、それらの古い遺跡が、ローマ人の作品であることを進んで筆者は認める、非常に古い神殿または寺院と共に、今日でも残存する－が存在していた。しかし、宮殿に関しては、少なくとも人たちが

懐疑的である。これらの問題と、古代ローマ皇帝や地方長官たちにとって、彼ら自身が滞在する如何なる公的な建物も都市内部には存在していなかったことは決して同一でないと思われる。諸法は人民にそう告げていたが、彼らは役職内に不穏な集団を抱え込んでいたのである。この問題は一層徹底して調べ必要がある。

フランク人がガリアに到着し、クローヴィス（465-511年）が王国の首都をパリに定めると、彼自身と彼の後継者たちは頻繁にパリに滞在するようになった。更に、彼の息子シルドベールは、（トゥール司教）グレゴワールによって、「パリ族の王Parisiorum Rex」と呼ばれている。クローヴィスがパリLuteciaに国王の都を定めたことは、フォルテユナの書からも明らかである。フォルテユナは王シルドベール（1世、511-558年）が庭園を通してサン・ヴァンサン教会—今も彼が眠っている—に入っていた道順について、「そこから、彼は天国へと旅立って行った。彼は、その功績からして、聖なる館の主人でなければならない」と歌っている<sup>2)</sup>。そしてこの歌はシルドベール（1世）の庭園、そして、同様に宮殿が、確かに、我々の教会の直ぐ近くにあったことを十分に証明している。しかし、これらの庭園はどの場所に位置していたのか。その全体または一部がシルドベール（1世）の宮殿であったのか。一個所、それとも複数個所に分散していたのか。また市壁の中、それともその外に。一部の人たちはフォルテユナが歌ったシルドベール（1世）の庭園に比定するし、一部の人たちは国王の浴場に隣接していたとする。そこから「フランシスコ会修道士通り」を通してサン・ジェルマン門に至り、ここから修道院までは直線道路が走っている。そしてこのことを（トゥール司教）グレゴワールの書7巻32章の文章が確認していて、そこにはシルベリク（1世、539-584年）—そこに居宅があったのであるが、シルドベール（1世）にとっても同じであった—が、パリの教会から道路と橋（即ち、小さな橋）を通して宮殿に着いていたとある。実際、もし古い記念物を何か参照するならば、イシーの王領地の西側部分、セヌ川に沿って囲壁の外側になるが、王シルドベール（1世）の居宅が位置していたとすれば、そこから道が真っすぐ新しい修道院と教会の門に延びていたことになる。従って、道路は都市の東方でも、（今日そうである如く）南方でもなく、西方に延びていた。それ故、上記のグレゴワールの引用文には、確かに、「王シルベリク（1世）が王妃と共に聖なる教会を出ると、トゥール伯ルダストは（2人を）広場まで追いかけてきた。そして、何が自分の身に降りかかろうとしているかも気づかずに、商人の家を巡り歩いていると、突然王妃の従者たちが来て、彼を鎖で縛ろうとした。彼は都市の橋を渡って逃げようとした時、橋を組み立てていた2枚の板の間に足を踏み外し、脛骨を折って」捕まったとある。しかし、シルベリク（1世）は聖なる教会から橋を通して宮殿に戻ったという事実を、そこでも、またグレゴワールの書のその他の個所でも筆者は読んでいない。なぜ広場の横に、都市の中に、シルベリク（1世）の宮殿は存在しえなかったのか。都市壁の外にあった浴場敷地内の宮殿—多分、これは存在してなかった

であろう-を前提に、読者諸賢は、慌てたルダストによる橋を通過の逃走から、率直なところ、何を引き出すのだろうか。

しかし、ある時代に、ジュリアヌスの浴場敷地内に国王の宮殿-しかも、シルドベール1世がそれを使用していた-が存在したことを、最大で3つの証拠によって証明することができる。最初は、シャルトル司教聖リュバン(556年頃)の伝記から引き出される。そこには、「聖リュバンが王シルドベール(1世)によってパリに招かれた時、サン・ロラン教会の方から、夜建物を食い尽くすような火が燃え上がり、橋の上に建てられていた、垂れ下がったような家が燃え始めた。これに対して、国王は人々の叫び声で目を覚ますと、眠りの麻痺が取り去られ、騒ぎの原因を悟ると、直ぐに出発して、都を救うために、直ちに使者をサン・リュバン教会に向わせた<sup>3)</sup>」とある。その後の少なくない作家たちは、これらの文章を、浴場敷地内の宮殿のために利用しようとして、サン・ロラン教会と隣接する修道院とを説明する。しかし、それが南に面した囲壁外のどこにあったかは筆者には分からないが、サン・ロラン小教区教会が今でも眺められる北側ではない。

しかし、問題が全く別の方向に進んでいるし、浴場敷地内のシルドベール(1世)の宮殿と見なされるようなものはそこから出てこないことを、第1に、シルドベール2世(570-595年)のサン・ドゥニの週市または年市のために発給された文書が教えてくれている。その中で、単にサン・ロラン教会の古くからの本当の立地のみならず、広くロランの年市(la Foire de saint Laurens)と言われていた年市の状況、または起源がはっきりと記されている。公刊が予定されている法廷文書の原本で、王シルドベール(2世)は、「そして、過去に災難が起こった時、サン・ドゥニ通りの市場は免税下に置かれ、パリ市内のサン・マルタン教会とサン・ロラン教会の間の市場も不輸不入権下に置かれていた。そして、祝祭日に彼らの交渉や取引を行うために、その場所またはどこにいたとしても、上記のサン・ドゥニ教会が通過税をすべて受け取るために、彼らはそれらに関する、上記の君侯たちの命令文書を受け取っていた。そしてもし災難または何らかの理由によって開催の禁止が出された場合、他のどこでも治外法権下で市場を開くことができ、サン・ドゥニ修道院の灯明代として、同聖なる場所への尊敬の印として、上記の通過税を全て神の家に現在および将来においても、譲渡され承認されたものとしてあり続ける」と言っている。シルドベール2世の時代よりずっと前に、つまり7世紀末以前から、サン・ロラン教会と修道院とが、今日同殉教者の小教区教会が見られるその場所に間違いなく存在していたことが、ここからはっきりと結論づけられる。聖リュバン伝の作者が、橋のその部分に配置された、パリの建物に言及しているとき、彼が思ったその場所と異ならなかったのである。

この匿名の作家を、トゥール司教グレゴワールが支持している。彼は『歴史十巻』の中で、「セヌ川とマルヌ川がパリの近くで大規模な氾濫を起こし、都市とサン・ロラン教会の間で沢山の船が難破し

たほどであった<sup>4)</sup>」と書いている。確かに、グレゴワールのこのような言葉は、郊外の南側－他所より高くなっている－に適合していることはあり得ない。しかし、土地が他よりも低く下っている北側では、特段低くなっている。今日でも、河川の頻繁な氾濫によって水が溢れ出ている。一部の人たちは、今もそうであるが、この北側の平面は異常な洪水によってのみセーナ川の波をもろに被ったのではないことを主張したいようである。何故なら、彼らが言うには、セーナ川の川床の土はここから運ばれていった。川床は今日の兵器庫と接合した市壁の近くで、他の流れと分かれ、直ぐ近くの沼沢地で交じり合っていた。その際に、その地の湿気と近くの丘から集まった雨水によって勢いを増し、サン・マルタン教会とサン・ロラン教会の間を水が渦巻いて流れた。そして、そこから半円形を描くようにして大きな川床の流れと合体したと。この痕跡は今日でも、ほぼ同じ場所または距離で流れている汚れた小川の中に残されている。実際、筆者はそのことは古代の作家によって証明されていると言いたい。それはともあれ、ないに越したことはないが、夜間に発生した火事で目を覚ましたシルドバール（2世）は、市壁の外の浴場敷地内の宮殿で就寝していたと見なされるべきであるよりも、市壁内の建物に留まっていたと思われる。そこで迫る危険に立ち向かおうとする住民たちの叫び声が、同王の気持ちを更に高ぶらせたに違いない。

サン・ロラン教会の立地について、シルドバール2世の命令文書が教えていることに、博士でソルボンヌ大学同窓で、サン・ロラン教会の司祭の、いと著名なニコラ・ゴビォンの話から支援が加わる。彼の証言によって、筆者は、彼の教会と隣接する墓地の廃墟の中で、それまではなかったことであるが、石膏の棺が大量に発見されたことを知った。そしてそれらは確かに900年ほど前に造られている。それらの蓋を開けると、黒い衣装またはまるで聖職者の衣装を纏った修道士のような像が現れた。それらは間もなく新しくきれいな空気に晒された後、古さを理由に直ちに粉碎され、火で焼かれて灰になった。そこから、サン・ロランの古い修道院が生まれ、その中に初期のフランク諸王の時代にドムノルスが院長の職を担って、この修道院にいたことが確かなことと見なされねばならない。宮殿に戻ろう。

浴場敷地内の宮殿に関して、別の証拠が集められる。まず、モー司教ジョフロワの1210年に発給された文書がある。その中には「サン・セヴラン小教区の境界の外に（中略）国王の囲壁」を建設したとある。次に、パリ司教ギヨームの数通の文書がある。1230年に作成された文書には、「国王陛下の囲壁の中の、サン・コスマとサン・ダミアン（教会）の小教区内に位置する土地を家屋と共に、ジラル門の傍、サン・ジェルマン修道院とその境内をフランシスコ会修道士に、そこで彼らが恰も主人として留まるために貸し与えた」とある。さらに、この「国王陛下の囲壁」と言われているのは、それが宮殿や屋敷または庭園を囲っていたからではなくて、国王によって新しく建てられたからである。それがあった元の状態を十分に調べた人であれば、その後でこのことを認めるであろう。実際にも、そうであったの

である。1190年フィリップ尊厳王が敵に対してパリを強固にするため、濠と柵を備えた新しい囲壁をアカデミアの向かい側から着手した。そのために、サン・ジェルマン修道院が土地を提供し、王自身が残りの工事の費用を賄った。この事実は、双方で作成された記録から明らかである。その時まで、フィリップ（尊厳王）が新しい囲壁の中に取り込んだ空間のすべては「ラアス地区」と呼ばれていて、至る所にブドウ畑あったことは、いろいろな時代の記録が教えてくれている。教皇インノケンティス3世（1198-1216年）の文書をここに提出するだけで十分であろう。その中で同教皇は、「サン・シュルピス小教区—あなた方の修道院に十全の権利において属していた—内のあなた方のブドウ畑の真ん中を通して、パリの街を守るために、新しく市壁が建設されることに関して、朕はあなた方の仄めかしから察していた。あなた方は、これに関して、教皇の権威が用意されるのを要望してきた。それ故、このような囲壁に関して、あなた方の修道院の不利にならないよう、小教区権利が縮小されないことを条件に、朕はそれを許可した」のように述べている。加えて、新しい囲壁の外に張り出している「ラアス地区」と、堡塁、周壁の新築部分に関して、前記のモー司教ジョフロワ、サン・マルセル教会の助祭ミシェル、兄弟ガランはそれぞれの史料の中で、同じことを確認している。従って、上記のものが「国王陛下の囲壁」と言われているのは、明らかに、より新しく国王によってそれらが建設されていたためであり、我々は国王庭園、国王通り、国王の建築物と言っているのも、同じ理由からである。但し、諸王の古い宮殿や庭園の残骸は残ってはいなかったであろうが。

最後に、浴場敷地内の宮殿に関して、より強力な証拠が修道士ユグの『ヴェズレイ年代記』から引き出される。そこには、「それ故、ルイ7世（1137-1180年）の国王宮殿からヴェズレイの修道士たちが出てきて、人々がその後から付いて来ると、サン・ジェルマン・デ・プレ修道院の修道士たちが古い宮殿まで彼らを出迎えに行き、重苦しい泣き声と呻き声を伴って彼らを迎えた」とある。これらの言葉は、明らかに、浴場敷地内に国王の宮殿を立地させる、彼らの見解に重要性を付すことを否定していない。ヴェズレイの一团に会うためにやって来たサン・ジェルマンの修道士たちがその場所の近くに来ていたことになる。更に、ルイ7世は、ルーヴルの宮殿—それについては、すぐ後で述べる—に既に着手しており、そして多分、その中に同王は滞在していて、ヴェズレイの修道士たちもそこに到着していたのであろう。また、確かなこととして、同王はサン・マルタン教会に近い、王ロバールの宮殿に住んでいた。市内の中央に位置する「古い宮殿」付近で、サン・ジェルマンの修道士たちはヴェズレイの修道士たちと会っていたであろうし、彼らを宿舎まで案内したであろう。それはともあれ、この宮殿はルイ7世には「古い」と言われたが、パリの古い囲壁の外、浴場施設内に立地していたであろう。パリ小郡内には、古い諸王にとって、ガルジュ・レ・ゴネス、ボノギスス、シェル、カプトナクム、クリシー・ラ・ガレンヌ、エソンヌ、ジャンティイ、リュザルシュ、ナンテール、ノジャン、パレソー、ポワシー、リュイ

ユ・マルメゾン、エピネイ・シュル・クレール、ヴァンセンヌなど、非常に多くの、そして豪華な王宮荘園が立地していた。それに対して、シルドベールもシルペリクもまたその他の国王も彼らの都に宮殿を有していなかったと言うのだろうか。一部の人たちはサント・ジュヌヴィエーヴ教会近くのロクティキウム（ルクティキウム）の丘を宮殿があったところと考え、「シャルルマーニュの宮殿」と呼んでいる。彼らは若きシャルル（マーニュ）がそこで勉学に耽ったと考える。事実、この場所は市壁の外に位置し、そこに近頃諸王は少ない費用で国王の安在所を建てている。ともあれ、これらは宮殿が「ジュリアヌスの浴場」に隣接していたことを証明する、軽視できない証拠であることを認めねばならない。もしサン・ロラン教会がその区域に昔存在していたことが立証されうるならば、（トゥール司教）グレゴワールの文章がそのことを完全に証明することになる。いずれにせよ、浴場敷地内の宮殿に関するヴァロワの見解が無傷であることを筆者は願っている。

パリの市壁内にある、我々の諸王のための安在所を探し求める人にとって、その確かな言及はカロリング家最後の王ロテールが息子ルイを伴って、ジ（ジャック）・デュ・ブレイユの書に収められている、サン・バルテルミー＝サン・マグロワール修道院の建立に関する文書の中に挿入されている、「フランク公ユグの時代」以前には現れない。国王アンリ（1世）が自身の文書の中で言っていることによると、上記の文書には、「余の宮殿の建物の近くで、余の祖父で聖なる思い出のユグが建立した」とある。同じ場所を、ユグ・カベと共同統治者であるロベール（2世）が、共同統治の8年に発給されたJ.ペリールが話している文書の中で言及している<sup>5)</sup>。従って、多分クローヴィス1世やその後多くの諸王によってフィリップ美男王（1285-1314年）に至るまで愛され居住された古い諸王の宮殿は市域の中央にあったことになる。同王フィリップ（美男王）はこの宮殿をパリの高等法院の、彼によって選ばれ定席化された最高の法務官たちに譲り渡した。

これらの建物以外に、筆者が既に触れていた如く、フランス王ロベール（2世）はサン・マルタン・デ・シャン教会の脇に他の建物を持っていて、修道士エルゴアの証言によると、つまり、「パリに彼の命令で彼の役人たちが建設した見事な宮殿」がそれである。王ロベール（2世）は「宮殿の、司教聖ニコラのための教会」をそれに隣接させた。この宮殿がいつまであったかは、殆ど明らかではない。一部の人はそれが国王アンリ（1世）またはフィリップ（1世、1060-1108年）によってサン・マルタン修道院に譲渡されたと考えているが、このフィリップ（1世）の文書は「彼の統治の7年、パリの宮殿で」サン・ドゥニ修道院に付与されたとある<sup>6)</sup>。他の人たちはフィリップ尊厳王まで遅らせることを望んでいる。別の宮殿ールパラと呼ばれている－は市壁の外に、フィリップ尊厳王が1224年に完成させている。そしてそこに鉄塔を建て、その中にブーヴィーヌの戦いで捕らえられたフランドル伯フェランが同じ年に投獄されている。これらの建物が老朽化すると、1364年シャルル5世賢王は修復し、続いてフランソワ1世、アン

リ2世、アンリ4世、ルイ13世、そして特にルイ大王（14世）がそれに選り抜きの装飾と設備を施した。加えて、前出のシャルル5世は沢山の小塔をもった「トゥールネルの宮殿」をサン・ポール教会の傍に建設した。小塔のある囲い地、「トゥールネル公園」と呼ばれていた小さな森がこれに隣接していた。実際、そこで、1559年、王アンリ2世は戦争ゴッコをして過ごし、カトリーヌ・メディシスは1565年8月、これらの気味の悪い宮殿、庭園と森を破壊した。これらはその後、アンリ4世とルイ13世の時代に、弓型の豪華な屋敷が立ち並ぶ「ラ・プラス・ロワイヤル」と呼ばれる国王広場に生まれ変わった。また、チュイルリー宮殿の建設をカトリーヌ・メディシスは1564年に開始し、その後アンリ4世大王がそれを推進し、アンリの孫で、最も偉大なルイ（14世）が多くの飾り、非常に魅力的な庭園で大きくした。

#### 註

- 1) Paris (Paris, ch.-l. dép).
- 2) 『詩歌集』, 6巻, 8歌参照。
- 3) 『聖者記録集 (ベ)』, 1巻, 126頁参照。
- 4) 『歴史十巻』, 6巻, 15章参照。
- 5) 『ボワトゥ伯史』, 278頁参照。
- 6) 『サン・ドゥニ修道院史』, 835頁参照。

#### CXI. ペロンヌ<sup>1)</sup>

フランク諸王の昔の宮殿に関して、彼らがガリア北部に流れ込んで定住した地方に位置した宮殿は殆どがより古いか、王国の誕生とほぼ同時代であったことを指摘するのが適切であろう。これらの中で、ソナム河畔のPeronenseと表記されるペロンヌの宮殿はクローヴィス1世（481-511年）よりも前ではないにしても、同時代に存在していたことは明らかである。つまり、クロテール1世（511-561年）の時代にそれが王宮荘園の中に組み込まれていたことは、まずフォルテユナが『聖ラドゴンド伝』の中で、「これに加えて更に、ペロンヌの荘園（中略）、俗人の宮殿において、庭園を散歩していると、大声で叫ぶ罪人たちを獄舎から解放した」と、教えてくれている。ペロンヌのこの場所はラドゴンド（587年没）が愛したことで有名で、昔郊外の教会が彼女の名前に捧げられていた。昔の諸王が同荘園に住んでいたことは王グントクラムの法令、つまり日曜日とその他の曜日に守るべきことに関して、司教と裁判官に宛てた、同王の統治の24年11月10日—これは言葉の化肉の585年に照合している—ペロンヌで発給された命令文書によって立証されているように思われる。しかし、このペロンヌ—地元ではPeronneと綴られているが—は、マコン地方にも存在する。ヴィエンヌ・マコン伯ギヨームが1216年、トゥールニユで発給された文書でそれに言及している<sup>2)</sup>。そこには「ペロンヌの助祭ユグ・ドゥ・アジエ」とある。

クローヴィス2世(635-656年)がフランク人を統治していた時、国王の宮宰エルシノアールがペロンヌの王宮荘園を自身の使用に付している。そしてそれは彼の死後、国王直領地に編入されている。エルシノアールによるこのようなペロンヌの所有は少なくない人々を動揺させ、それを王宮荘園から排除しようとしている。しかし、その他は欠けているとして、上記のことだけでもペロンヌを国王直領地に帰せしめるに十分である。何故なら、ペロンヌはその当時宮宰の権利に移されていたに過ぎなかったのだ。つまり、王宮荘園の中から—加えて、人々は王宮荘園であったと言っていた—、彼の職と権威に相応しい費用と支援に合致していたからである。こう言うことから、エルシノアールは彼自身に相応しかったラニーの王宮荘園内に修道院を建立したと、『聖フルシー伝』の最古の版の中で伝えられている。加えて、王ティエリー(3世, 675-691年)が言うには、エルシノアールの死後、「モー郡内にあった」その荘園は、「余の宮宰を嘗て務めた、有名な人エブロワン、ワラツン、ギスレマルの手に移っていた。ワラツンの死後、それは余の直領地に戻された。余は余のいと高みの妃、クロティルドまたは余の宮宰にして高貴なベルシャルの提案によって、同荘園を余の直領地からサン・ドゥニ修道院に譲渡した」とのことである。しかし、ダゴバール王(1世, 623-638年)の事績録はそれが国王の直領地から流出していたことを想起させている。更に、同様のことは、ティレリー(3世)の息子、シルドバール(3世, 695-711年)の治世でも起きている。「リヨン司教で使徒的な人、ゴデュアンがブルジュ郡内、ナシニー村を交換文書の中で王領地に編入させたように思われる。その後、同村は王領地から高貴な人、パニキウスに譲渡され、そして前記パニキウスの死後は、余の王領地に戻され、それを修道院長シェノンに譲渡した」と、後で掲載される同王の文書の中で書かれている。そして、この問題を要約するために、シルドバール(3世)自身が統治の16年にモンマクで開かれた裁判集会において、ヴェルンの宮殿—他の何よりも国王宮殿であったことを否定する人はいないであろう—を「宮宰にして高貴な人、グリモアールの荘園」、更に「宮宰エブロワンが在職中に所有していた」と言っている事実を挙げておこう。従って、ベータがペロンヌの荘園を「貴族エルシノアールの荘園」と言及していることは、何の障害にもならないし、この前もまた後も、それは国王のものであったことは言うまでもない。確かに、ベータは「彼の荘園」と言っているが、それは王クローヴィスからそれが彼に譲渡されるか遺贈されたためである。ベータが『アングル人の歴史』3巻で引用している、そして時々文章をそのまま引用している上述の修道院長フルシーの伝記は、「ペロンヌ村の宮殿」を思い出させている。エルシノアールは、死去したフルシーの遺体を引き取った、スコットランド出身の修道士たちの修道院と共に、自身が建立したばかりの諸使徒の教会において、自分の子供が神聖な水で清められるのを望んだ。公刊されている著書はその教会がin Monte Cygnopum、より一層曖昧になるが、in Monte Cygnophii—この文言はin Monte Cygnorum、つまりle Mont des Cygnes(「白鳥の山」の意)によって置き換えらえるべきであろう—

に立地していたことを伝えている。そうでないとすれば、サクソン語で書かれた非常に古い写本の中で解決されるべきであろう。と言うのも、間違いなく、書体の形が既に何世紀もの間サクソン書体を知らない非常に多くの写字生たちを欺いてきた。何故なら、サクソン語の文字 r がラテン語または双方の文字 p に極めて近いことを知らなかったため、彼らはCygnorumの代わりにCygnopumを押し込んでしまったのである。それに関しては、別の機会に述べることになる。

エルシノアールが死ぬと、その後のロバールを宮宰エプロワンが継ぐと、「彼の勧めに従って、オドリクの命令で、ヴェルマンドワ郡内にある国王の都であったペロンヌに連れてこられた」シオン（マビヨンはサンス司教と誤っている）司教エメ（669-680年）は、彼の伝記作者が伝えている如く、「同地で尊敬に値する修道院長ウルタヌスの下、監禁状態から解放され、ペロンヌ修道院による父親の如き世話に委ねられた」。そこにおいて、「聖なる司教は短くない期間追放されていた」とのことである。ペロンヌから連れ出された後、女子修道院長リクトルドの伝記とデュシェーニュ版のエメ伝の抜粋によると、ある高官のマウロントゥスがブロリウム（荘）をエメに譲渡したようである。それから程なくして、「テルトリエの戦いから逃げ延びた王ティエリーの騎士たちが、自分たちと教会と修道院を自分たちで守護しなければと考え、彼らの大多数は殉教者聖カンタンの教会、一部は聖フルシーが遺体で横たわっている、ペロンヌのスコットランド人の修道院に逃げ込んだ。上記の修道院の院長たちの仲介で、ペパンは「彼らに命と健康を与えた」と、『メス編年記』は述べている。デュシェーヌの書にある『フォントネル修道院年代記』の素晴らしい抜粋-841年から856年にかけてフランク諸王の事績を略述している—には、849年の出来事として、「同年1月、ロテール（1世、840-855年）と王シャルル陛下がペロンヌ宮殿にやって来て、そこで友情の誓いで互いを縛り、相互に贈り物を交換し、各人がそれぞれの王国に戻って行った」とある。このように、ペロンヌはカロリング王国の一部、そしてヴェルマンドワ郡内に入っている。しかし、結局、925年、フロドアールの言及によると、同地は王ラウールからヴェルマンドワ伯エリバールの手に渡り、同伯はシャルル禿頭王の孫、シャルル3世を、全く嫌悪すべき悪行によって、その地に死ぬまで幽閉し続けた。このため、巷ではこの非道なエリバールは「ペロンヌ伯」とも言われている。加えて、ヴェルマンドワの多くの伯がこの称号を、ルイ7世（1137-1180年）の時代に、セネシャルであった、そしてユグ・ドクレリスが「ペロンヌ伯」と呼んでいるラウールに至るまで享受することになる。その他の人物も、この後に掲載される古い文書が、ペロンヌの君侯と呼んでいる。

881年に起きたルイ吃音王の突然死の後、異教徒たちはペロンヌの宮殿を汚したが、匿名の作家が殉教者カンタンの墓での古い説教の中で書いているところによると、彼らは「クールトレに侵入し、国王と諸侯のいないフランスを発見すると、スコットランド人が住むペロンヌまで来て、それを火で燃やした」。このため、修道士たちはペロンヌを脱出、彼らが放棄して荒らされた宮殿を、やがて在俗の聖職

者たちが占拠することになる。しかし、実際には、そこには宮宰エルシノアールの時代に宮殿は最初から置かれていなかったのであって、サン・フルシー修道院の参事会員デスマイウスが間違っそう主張しているに過ぎない。彼のこのような主張は、この問題に関する諸家の研究に取り入れられており、古人の疑問の余地のない証言と相容れないことは明らかである。

ペロンヌがヴェルマンドワの諸伯に委ねられると、それは喜び繁栄する後継者たちを持った。その中で、1091年「ロベールの息子でキリスト教の信仰が篤く、ペロンヌ領主の地位に見事に応えていたワード」に、後で掲載されるコンピエーニュの真正文書が触れているが、そこには「ペロンヌ領主ワードとその妻リュシー」の下署が確認される。ワードの父、ロベールはカップピーの領主であったロベール・ドゥ・ペロンヌのことで、ルイ肥満王の伝記の中で、英知の称賛に与っている。サン・レミ修道院の匿名修道士は、1101年にペロンヌであった聖マルクの奇蹟を記しているが、「いと高貴な女領主、つまり同城の主の妻」、アデリードを特別に褒め上げている<sup>3)</sup>。後述される「城の主Princeps opidi」は、明らかに、シジューバルがエルサレムに旅立ったと語っているヴェルマンドワ伯ユグ以外の誰でもない。12世紀初期に引用されることになる作家がペロンヌに関する叙述で言っていることに耳を傾けよう。「確かに、その地には非常に堅牢な城があり、住民の数も非常に多く、建物の群を抜く多さで有名で、各種の豊かな調度品と古い威厳の榮譽において、ヴェルマンドワ地方の他の城下町を凌駕していた。そこには少なくない数の巧みな構造を持つ、聖フルシーの功績と遺骸によって盛大に飾られ、同聖者の崇高さを広めるためにそこで奉仕するいと尊敬すべき聖職者の、恰もある傑出した元老院議員家系の高貴さによって飾られた寺院があり（後略）」、と彼は言う。

既述のヴェルマンドワ・ペロンヌ伯ラウールは王国のセネシャルでもあったが、宮殿の役職にも就いていた。彼の後も、何人かはそうであった。ペロンヌ城の管理を城代に任せていたため、城代たちはペロンヌの名称を僭取し、自身－他でも見られたことであるが－を領主と名乗っていた。そのため、ペロンヌ城代の中から有名な家系が生まれ、従って、聖ベルナールが手紙を書いている非常に高貴な若者、ジョフロワ・ドゥ・ペロンヌも同家の出身であった。同じ家系に、ユグ・ドゥ・ペロンヌ、またはドゥ・マルヴィキノがいる。彼はまずコルビーの修道士で、その後サン・カンタン・ド・モン修道院の院長になり、1172年コルビー修道院の監督として呼び戻される。1184年フランドル・ヴェルマンドワ伯は、国王フィリップ（2世）の軍勢より劣ると判断すると、ヴェルマンドワ伯領を放棄し、国王に「サン・カンタン城とペロンヌと呼ばれる城を、国王からの贈り物として、生存中に限って、自身に譲渡されるよう」哀願する<sup>4)</sup>。これとほぼ同じ頃、ペロンヌの荘園または城でコンユヌ運動が勃発した。その法規に関しては、筆者の知る限りではまだ公刊されておらず、写本で閲覧したことを覚えている。1215年フィリップ（2世）は聖マリア・マグダレナの祝日の次の日、ペロンヌと呼ばれる城から出て、フランドル伯フェランの領地を強引に侵略し

た<sup>5)</sup>。別のフィリップ（4世）美麗王（1285-1314年）は「ヴェルマンドワの町、ペロンヌとその周辺に遠征軍と大勢の兵士を集結させた」が、ギヨーム・ナンジスの後継者が言うには、まったく不運な結末に終わったとのことである。その後、ペロンヌの町はソンム河畔の諸都市と共に抵当としてブルゴーニュ公に奪い取られてしまうが、1468年ルイ11世が公シャルルと一緒に偶然この町に侵入した時、もう少しでシャルル単純王と同様の運命を経験するところであった。ペロンヌ攻囲での幸運で有名な記憶が長く生き続けることになるが、1536年神聖ローマ皇帝カール5世は輩下の多くを失ったうえ、この町の攻囲を解くことを強いられる。そのため、この町の名誉ある名称「乙女」、つまり触られない、傷つけられない都市を意味するペロンヌ・ラ・ピュセル（「乙女」の意）が生まれ、多くの装飾と、諸王からの特権が加わった。そして、同名の村は、年代記の中でボドリー、そしてル・ミルとその他の作家たちが述べている如く、カンブレ司教管区内、サン・タン Dre 修道院が近くにあるバンシュからそう遠くないところに位置する<sup>6)</sup>。

註

- 1) Péronne (Somme, ch.-l. ar.).
- 2) 『セブシアナ図書』, 152頁参照。
- 3) 『聖者記録集（ベ）』, 4巻下, 522頁続参照。
- 4) 『フィリップ尊厳王事績録』, 13頁参照。
- 5) 同上, 58頁参照。
- 6) Péronnes (ベルギー, pr. Hainaut, ar. Tournai-Mouscron, c<sup>ne</sup> Péronnes-lez-Antoine).

## CXII ピエールフィト<sup>1)</sup>

Petra-fictaと表記されるピエールフィトの宮殿に、我々の注意を向けさせる記録は2つある。1つはアキテーヌ王、ペパン2世（843-848年）がサン・フィリベール修道院長イルボドに宛てた文書で、そこには「助祭サクソボブスが承認し下署した。いと清澄なる尊厳者ルイ陛下の統治の13年5月18日、国王としての統治の12年に発給された。ピエールフィトの宮殿において行われた（後略）<sup>1)</sup>」とある。他の1つはルイ吃音王の息子、王カルロマン（2世, 879-884年）がオルレアン在、サント・クロワ修道院のために、司教ガルテーに発給した文書で、そこには「いと栄光に満ちた王カルロマンの統治の3年, 5月, インディクティオの14年, ピエールフィトの荘園で（後略）<sup>2)</sup>」と、バリューズの『勅令集』補遺にある。これらから、我々の国王がピエールフィトに宮殿を所有していたことが確実であったとしても、その場所の立地が曖昧なものとして残されている。何故なら、筆者は地図上にこの名称をもつ複数の土地を発見するからである。最も知られているのがパリ小郡のピエールフィト荘で、古い土地台帳にはゴネス主任司教区内の、今日のモンモランシーに立地し、既に800年以上も前からサン・ドゥ

ニ修道院に帰属している。同修道院所有の荘園の中に、862年のソワソン宗教会議の記録が、ピエールフィトを挙げている。この荘園がルイ尊厳王の時代に王領地に属していたとする見解を、この地がアキテータヌに立地されるべきと示唆しているアキテータヌ王ペパンのものと筆者が考える文書は拒否している。実際、筆者は当該荘園がどの郡に属しているかをまだ確定できていなかった。しかし、歴史家たちはペパンが親族のルイの伯領にしばしばいたことを伝えていて、いつもアキテータヌにいたわけではなかった。同じ頃、彼は王文書を統治領域外のノワルムーティエの修道院長に発給している。この宮殿の立地を、ラングル司教管内、バッシニー郡内に立地させることに筆者の気持ちは傾いている。つまり、そこにはピエールフィト村があり、主任司祭区をもち、古くからの城によって有名で、アマンス川とエール川からもそう遠くないところに立地する<sup>3)</sup>。近くには、国王の狩猟地に十分匹敵する森林がある。この地の近くには、シトー派のポーリュ修道院、騎士修道会の男女共住分院、町と城、プレシニー、ラ・フェルテ・シュル・アマンスがあり、また修道院でも有名であった。

註

1) 『トゥールニュ史』, 191頁参照。

2) 最近の研究では、Pierrefitte-ès-Bois (Loiret, arr. Montargis, c. Châtillon-sur-Loire) と Pierrefitte-sur-Loire (Allier, arr. Moulins, c. Dompierre-sur-Besbre) の2つが挙げられている。Voir *Recueil des actes de Louis II le Bègue, Louis II et Carloman II*, éd. par Grat, F. et als, Paris, 1978, p.129.

3) Pierrefaites (Haute-Marne, ar. Langres, c. La Ferté-sur-Amance).

### CXIII. ピエールフォン<sup>1)</sup>

Petraefonsと表記されるピエールフォンはレーの森とコンピエーニュの森の間であって、その土地の石の多いことと水が溢れ出ていることから、名前を得ている。嘗ては非常に長い城壁によって囲まれていたが、今では遥かに狭くなっている。栗の木の生えた小荘園、または王国の高官たちが877年にそこに参集した国王の屋敷は、今ではピエールフォンから分かれているが、嘗てはそれに隣接していた。従って、ピエールフォンは王領地の一部であった。11世紀中葉になって初めて、それから切り離された。確かに、それは1060年以前には独自の領主を持っていたし、周辺に存在した教会に発給された、それらに関する多様な文書があちこちに伝存する。ピエールフォンに、領主によって非常に堅牢な城が建てられた。他方、1183年にレーの森にあるサン・ジャン（・オ・ボワ）女子修道院のために発給した文書で、フィリップ尊厳王は「彼自身の屋敷」を「余はキューイズの女子修道士たちにパンと葡萄酒の十分の一税を譲渡するが、それは余がそこに赴いた際、余のピエールフォンの屋敷において消費するためである」のような言葉で表現している。また、ルイ・ル・ユタン（10世、1314-1316年）は、「余がコンピエーニュ、ヴェ

ルブリー、ベティシー、ショワジー、ピエールフォンに滞在する度毎に（中略）。主の年の1315年、11月、ヴィレール・コトレにおいて行われた」のようにして、ピエールフォンを他の国王荘園と一緒にしている。ここにはサン・シュルピス分院があって、古い土地台帳がそれをソワソン司教聖堂参事会員の聖職禄の中に算入していた。

註

1) Pierrefonds (Oise, ar. Compiègne, c. Attichy).

#### CXIV. ポワティエ<sup>1)</sup>

古代ローマ時代にAugustoritum-Pictonumと表記されていたポワティエを非常に大きな部族の中心と、昔の作家たちと古い記録—それらを、ここで筆記する気にはならない—が記述している。フランク諸王とアキテーヌ諸公はそこに宮殿を所有していたことを、ペラルグがブルゴーニュの記念物の中で言及しているルイ敬虔王（814-840年）の文書が最初にそれを証明している。それによって、同王は伯エカールにペルシーの荘園とその他の領地を贈与しているが、そこには「いと清澄な皇帝ルイ陛下の在位の27年、インディクティオの3年、慈悲深きキリストの年の12月29日、ポワティエの都の宮殿で行われた（後略）」とある。ポワティエの都、伯、司教に関しては、非常に多くがJ.ベリーの『ポワトゥ伯史』にあるので、参照あれ。

註

1) Poitiers (Vienne, ch.-l. dép.).

#### CXV. ポワシー<sup>1)</sup>

Pinciicumと表記されるセーヌ河畔のポワシーはシャルトル司教管区の外れ、レイの森、今日のサン・ジェルマン・アン・レイの近くに位置するが、ジョルジュ・コルヴネール、ドゥブレ及びより後世の人たちによって、ピートルと混同されている。しかし、両者は少なくとも異なっていることは明らかである。つまり、シャルルマーニュの勅令にあるPinciensisはシャルトル司教管区に帰属しているのに対して、シャルル禿頭王の勅令におけるピートルPincisusはアルパジョンとメレイの間に置かれている。他方、ピートルはルアン郡内にあることを、この後直ぐに見ることになる。非常に多くの場合、ポワシーはPissiacumと誤記されている。シャルル禿頭王とシャルル単純王のどちらかは分からないが、「統治の

20年にフルーリ修道院に、ピートル村にあるノートル・ダム教会と幾つかの所領」を寄進したとある。エルゴーは『王ロベール伝』の中で、「セーヌ河畔にあるポワシー Pisciacusと言われた国王の安在所は、フランク諸王にとって十分に快適であった。そこには、3つの修道院が昔の人々によって建立されたと聞いている。1つは聖母マリアのため、1つは聖ジャンのため、他は聖証者マルタンのために捧げられている」と述べている。ポワシーの国王安在所を快適だと感じていた国王の名前に関しては、エルゴーや彼以前の歴史家たちはそれを伏せている。1030年に王ロベール（1世）がこの地に滞在したことは、サン・ジェルマン修道院長アルラルドに宛てた、彼の文書が証明している。その中で、同王は伯ドロゴンのダンマルタンと筆者の修道院が所有するいくつかの荘園における不正な課税を廃止しているが、そこには「言葉の化肉の1030年、他方王ロベール（1世）の統治の30年と9年、ポワシーの宮殿にて公開で行われた。ボードワンが書き下署した」とある。加えて、筆者はこの文書の銅版に彫られたものを本書で、原本から採られたものとしては初めて公刊するであろう。

デュシェーヌによって報告されている王アンリ（1世, 1031-1060年）の伝記の断片が伝えている如く、ポワシーは、王妃コンスタンスが夫の死後自身の支配下に強引に組み込んだ、王ロベール（1世）の諸宮殿の中に算入されている。筆者は本書で、修道院所領の侵略者で、「スタヴェルス」とあだ名されるユグと対立するサン・ジェルマン修道院の院長イザンバルのために発給された、王フィリップの別の命令文書を公刊する。その命令文書では、18名の聖俗高位高官の下署に続いて、「言葉の化肉の1082年、王フィリップ（1世）の統治の23年、ポワシーの城で行われた。パリ司教ジョフロワ・（ドゥ・ブローニユ）、更に尚書官の命令で、聖職者ジスルベールが下署した。1月6日、インディクティオの5年に発給された」とある。サン・マルタン教会の献堂式のための同王フィリップ（1世）の文書には、パリのプレヴォ、エティエンヌ、オルレアン・プレヴォ、ワルベール、ポワシーのプレヴォ、ウアルテールが下署している。ここから、この地の威厳と特権的地位とが少なからず湧き出ている。最後に、ラブの『図書』で、同じく王フィリップ（1世）の「ポワシーで、主の化肉の1106年、余の統治の47年に」発給された文書が掲載されている<sup>2)</sup>。

上記とほぼ同じ頃、シャルトル司教イヴはポワシーを、崩れた言葉でPixiacumと呼んでいる。シュジュールはルイ肥満王の伝記第2巻の中で、モンモランシー領主ブシャルの件で、少しまじにポワシーをPinciacusと呼んでいる。フィリップ尊厳王は1186年にポワシーに滞在していた時、「在位の8年、主の化肉の1186年にポワシーで」発給された文書の中で、サン・ドゥニ修道院がショーモンで所有するサン・ピエール分院に週3回市場を開くことを許可している。しかし、いと敬虔なる国王ルイ9世（1226-1270年）の生誕と聖なる泉での洗礼式以上に、ポワシーにおける国王の品格を高めるものはない。ギヨーム・ナーンジの証言によると、それらにより、この地は王家の威厳と誇示によってより一層敬虔に自慢する

ことを常としていた。他方、同王ルイ（9世）は自身がこの世に生まれてきたこの地に、これまで聖ドミニクスの戒律と慣習を遵守する乙女に捧げられた修道院と一緒に、人目に付く教会を建立した。

註

1) Poissy (Yvelines, ar. Saint-Germain-en-Laye, ch-l. de c.).

2) 『図書』, 2巻, 585頁参照。

### CXVI. ピートル<sup>1)</sup>

広くPistaeと表記されるセーヌ河畔のピートルがPatremamulum, 少し良い方として Petromantalum –これに関しては, アエティクスの『旅程表』を参照–と呼ばれていたことを, デュシェーヌの書に収められた『フォントネル修道院年代記』抜粋が伝えている。しかし, この個所で, 年代記作者自身がアエティクスに欺かれていることは明らかである。何故なら, Petromantulusはルアンから17マイル, パリから29マイル, ボーヴェから17マイル, ポントワーズから14マイル離れているとあるが, これらはすべてピートルからではなくて, マント・ラ・ジョリからの起算に最も合致しているから。『聖コンデ伝』を書いた古い作家はピートルの名称と立地を, より正しく記している。そこで彼は「満潮と干潮の時海の波が非常に激しい躍動によって揺れ動かされるため, 水はベルシナクの中島から東へ60マイル以上, 激流個所を通って逆流して進み, ピートルと呼ばれる土地まで達しているが, 海からこの激流個所までは, ほぼ30マイルと算定される」と伝えている。『ベルタン修道院編年史』はこの地の立地を862年の事績の中で, 「一方においてアンデール川, 他方においてウール川がセーヌ川と合流する」地点と確かに定めている。従って, Pistaeと表記されるピートルはIndellaeまたは Andellaeとも書かれるアンデール川とウール川の合流地点に位置し, ポン・ドゥ・ラルシュ-デュシェーヌは時々この地とピートルとを混同している –に近い。従って, ルアンの南に位置するセーヌ川の中島, オワセルでの立地はありえない。同地でのノルマン人の集結, ウェニロンに宛てたシャルル(禿頭王)の声明, フロドアールのヌイイの荘園に関する小著から, シルモンが推論したことも同じである。『フォントネル修道院年代記』によると, 865年デーン人の大艦隊がシルドクの指揮下でセーヌ川を占拠し, ピートルの城まで遡行することを企てた。そこからノルマン人は追い返されると, シャルル(禿頭王)は驚くほど堅牢な橋を, 彼らの攻撃に対処すべくセーヌ川に架けることを決定した。兩岸に最高の技術を使って築かれた砦が置かれた。これに関して, ランス司教アンクマルが, フロドアールに依拠しながら, 国王が自身と他の少なくない臣下と協力してセーヌ川の中島, ピートルで実行していた架橋工事に関する書簡を国王に送っている。その間, シャルル(禿頭王)は, 『サン・ベルタン修道院編年史』が伝えるには, 王国の高官

たちをピートルと呼ばれる場所に、6月頃大勢の工人与荷車と一緒に集合させた。その間王自身は息子シャルルと一緒にマン（Meung）に集合すべく急行した。国王が不在の時、ルアン司教ウェニロが工事を差配したのであるが、ランス司教アंकマールは同司教に、彼がセヌ川の中島、ピートルで行っていた工事と工人たちに関して尋ねている。シャルル（禿頭王）はル・マンとエヴルーの町を歩いてアキテヌから戻ると、ピートルの新しい城に沿ってアミアンに到着した。やがて再びピートルに急行し、そこで裁判集会と同時に宗教会議を開くことを前に通知していたのであるが、聖なる教会と王国の諸問題を臣下と共に審議した。以上のことを真剣に考えた人であれば、国王シャルル（禿頭王）と諸司教がここに長く滞在したことは容易に想像される。しかし、王国のこの集会は862年—これまで広く考えられていたことである—ではなくて、その前年に始まっていたことは、ドゥブレが既に出版していたピートル宗教会議に関する真正の記録が明確に示している。しかし、本書では原本を参考に校訂された、より良い版が仕上がっている。そして、それは、各自が下署している諸司教の威厳のために、銅板に刻まれて公刊されている。同文書は、実際、「主の化肉の861年、インディクティオの9年、6月25日、実際にいと栄光に輝く国王シャルル（禿頭王）の統治の22年、上記のピートルにて発給された」と掲筆されている。同地に参集した教父たちが翌年もそのようにしたこと、更にその時はより一層多くの教父たちが集まったことを、多くの真正な記録が証明している。その中の1つは、トゥールのサン・マルタン修道院に862年8月20日に発給されたレレ荘に関するもので、そこには非常に大勢の司教たちが下署している。別のものは、『拾遺集』6巻を参照あれ。また、ドゥブレは聡明にも結語部分を提供してくれていて、それは「主の化肉の862年、インディクティオの10年、いと栄光に満ちた我が国王シャルルの統治の23年、我々の下に諸司教が召集され（中略）。そしてずっと以前から教会関係の諸問題の審議に没頭する。ピートルと言われる場所で、そして国王の権威によって再びソワソンの都に移動し（後略）」のように始まっている。それ故、教会と王国の損傷を軽くするために、ずっと以前から、諸司教は国王によるピートルの宗教会議に参列していた。しかし、彼らは異教徒の侵攻に疲弊し、ソワソンに退くことを余儀なくされた。それでも、862年ピートルにおいて多くのことが制定され、公会議記録と勅令が何回か公布されている。

しかし、再び、864年諸司教が国王と一緒にピートルに集まったことを、単に「我が主イエス・キリストの化肉の864年、即ち慈悲深きキリストの下、余の統治の25年、インディクティオの12年、6月25日、ピートルと言われる場所で行われたシャルルの公布」のみならず、更に『サン・ベルタン修道院編年記』における、「シャルルは、6月1日、ピートルと言われる所で、全体裁判集会を持った。そこで毎年贈り物とブルターニュからの貢租として50リブラの銀を受け取った」との文章が伝えている。その時、諸司教はオーセルのサン・ジェルマン修道院に特権文書を付与しているが、その内容は我が同志ダシェ

リーが刊行している通りである。本書で、銅板に刻まれたその一部をこの先数世紀にわたって伝存させるために公表する。諸教父は、ピートルで再開された集会の理由を公表している。つまり、「ノルマン人に対して防備を設けることの全体的必要性が彼らを引き寄せ、王国の状態を確かなものにすべく、国王の命令によって彼らを召集した」と。5年後、別の公会議がピートルで開催されたが、そこで13の条項と王シャルルの4回の公布が定められている。更に、そこでは、前記のダシェリーの書に収められた彼らの宗教会議記録が教えてくれている如く、サンス司教エジルがオクソン荘の寄進を自身がサン・ピエール・ル・ヴィフ修道院に譲渡していたのであるが、宗教会議に集まった司教たちによって安堵されるよう配慮している。この集会で王シャルルはサン・ベニーニュの修道士たちに所領を譲渡しているが、そこには。「統治の30年、7月21日（中略）、ピートルで行われた（後略）」とある。

以上すべてから、シャルル禿頭王の治世を通じて、ピートルは国家行事によって名を知られていたことは明白である。しかし、ピートルが彼の時代以前から国王の支配下または王領地として存在していたとは、筆者は考えない。この地はシャルルの時代から国庫の一部と見なされていて、橋、城または国王の館が設けられるか備えられていたが、何らかの理由で宮殿または王領地が荘園に貶められたのであろう。そのことが、シャルル単純王（893-929年）によって、ここで初めて公刊されている彼自身の文書の中で、「それ故、尊敬に値する司教ラウルと伯オディラールは余の高処の御前にやって来て、助祭にして余の尚書エルヌストスにある非自由人を譲渡するようにと懇願した。ルアン郡内、セーヌ河畔のピートルの王領地から、この非自由人を所有権において彼に譲渡した（中略）。助祭エルヌストスが司教アスケリクに代わって印をつけて下署した（中略）。ランで行われた（後略）」のように承認されている。その後、ピートルの城はノルマン人の手に渡り、しばしば破壊と再建を繰り返したあと、最後には、セーヌ川左岸を保持する者たちに対して設けられた、地元でポセスと言われる、右岸の取るに足りない名前の集落ボシスに成り下がった。ピートルと呼ばれる土地は、タルー郡（Talou, Seine-Maritime）内にもある。それはサン・ドゥニ修道院によって所有されていて、王ペパンがドゥブレの書で公刊されている文書で、その名を挙げている。しかし、その箇所では、他でもよくあることであるが、写字生の間違いで、Pistisに代わってPistusが入り込んでいる。

註

- 1) Pitres (Eure, ar. Les Andelys, c. Pont-de-l'Arche).
- 2) 『ランス史』, 8巻, 18章参照。
- 3) 同上, 21章参照。
- 4) 『サン・ドゥニ修道院史』, 457頁参照。
- 5) 同上, 792頁参照。

- 6) 『拾遺集』2巻, 588頁参照。  
 7) 同上, 712頁参照。  
 8) 『雑録』, 741頁参照。  
 9) 『サン・ドゥニ修道院史』, 693頁参照。

## CXVII. ポンティオン<sup>1)</sup>

属州のいと高貴な都, (地中海沿岸の) ナルボンヌは隣にPoncianumと表記されるポンティオンの宮殿を持っていた。そこで, ゴティー伯/侯ベルナルはシャルル禿頭王(843-877年)の統治の20年, サン・ティベリールまたはサン・セザリオン修道院所有の幾つかの所領を巡って発生した係争を終わらせているが, その裁判記録にある如く, その記録はこの後に追加するのが適切であろう。ポンティオンの宮殿の立地と起源は, 告白するが, 筆者には分かっていない。

### 註

- 1) Poncianum (不詳)。

## CXVIII. ポンティオン<sup>1)</sup>

PonticoまたはPontigoと表記されるポンティオンの王宮荘園の立地を示す際, 多くの人たちによってさまざまな間違いが犯されている。間違いを犯している人として, 最初に来るのがマソンで, 彼はPonticoまたはPontigoをpons Icaunaeまたはpons Iguonae, つまり「ヨンヌ川の橋」Pont-sur-Yonneを意味すると理解している。ヨンヌ川に架かる3つの橋は属州の都サンスから3マイルかそれに近い距離に離れている。昔の古い記録を丹念に読んだ人であれば, そこにポンティオンの宮殿を比定することはなかろう。彼に劣らないのがセヴェリン・ビニウスで, 彼は876年のポンティオン公会議に付した記述の中で, 「ポンティオン公会議はPontigononに由来する。しかし, PontigonumまたはPontigedunumと表記されるポンティオンは, シャルトル司教座都市のサン・ジャン・アン・ヴァレ修道院の暦にある如く, シャルトル司教管区内の, 地元でポン・ジョワと言われている, ガリア・ケルティカ郡の1つである」のように述べている。Pontigoについて, それをペルトワ郡内のオルヌ河畔に比定するダヴィド・ブロンデルの罪はより軽い。つまり, 本当の所, この地はペルトワ地方, ソー川の流がマルヌ川に流れ落ちるヴィトリー・ル・フランソワの北2里(8キロ)のヴィトリー・ル・ブリュレ(今日のヴィトリー・アン・ペルトワ)から遠くない所に立地する。筆者の考えでは, ポンティオンは, その領域が今日存在する通りに延びていたのであれば, ソー川沿いに位置する。しかし, もし宮殿の古い囲い地が考慮され

るとすれば、それは一度ならず刊行されているシャルル単純王（893-923年）の文書が教えている如く、筆者が自らコンピエーニュの文書館でその原本から訂正しておいた「ソー川とブリュソン川に沿って」立地していた。確かに、ブリュソン村—そばを流れる同名の小川から、そのように呼ばれる—はこれまで、ポンティオン小教区に属していた。他方、オルヌ川はソー川と、地図がはっきりと示している如く、ポンティオンの北約2里、パルニー・シュル・ソー村で合流している。

ポンティオン荘の起源は非常に古い。トゥール司教グレゴワールの証言によると、オストラジー王シジュベール（1世、561-575年）は兄シルペリク（1世）の息子、テオドベールをそこに1年間幽閉するよう命令したし、サン・プリヴァ（Mende）修道院長ルペンティウスは王妃ブルニシルドに呼び出され、伯イノサンによってポンティオン荘に連れてこられ、多くの拷問を受けている。ドゥブレガティエリー王の命令文書を公刊しているが、その結尾句は原本に依拠して、「3月3日、余の統治の6年、余のポンティオンの宮殿において行われ発給された（後略）」と訂正されねばならない。特に、アナスタシウスの言によると、フランク王ペパン（3世）は君主シャルル（マーニュ）が先に迎えに出ていた教皇ステファヌス3世（752-757年）を同地において歓迎している。この時、フレデゲールの後継者はこの場所を、『メス編年記』が753年の出来事でそうしている如く、ポンティオンPons-Hugonisと呼んでいる。より正しくは、シャルル禿頭王の、ジェロヌ司教管区、サン・テメテール=サン・ジュネース修道院に宛てた文書と、非常に高名なバリューズの『勅令集』の中に掲載されている、同じくウルヘル司教座教会に宛てた文書に「11月19日、インディクティオの9年、いと栄光に満ちた王シャルルの統治の21年に発給された。ポンティオンの国王宮殿において行われた」とある。3番目は、同様に、サン・マルタン修道院に宛てた文書で、シルモンが『勅令』の記述の中でそれに言及している。858年7月、もし『サン・ベルタン修道院編年記』、そして特に『フルダ修道院編年記』に従うならば、王シャルル（2世）が弟ルドヴィヒに「ポンティオン—Ponticona またはPontionae—と呼ばれる王宮荘園で」出会い、そして同王はローマで帝国権標を受け取ると、876年イタリアから戻り、ポンティオンに集まった教父たちにパヴィア宗教会議での決定を承認している。この公会議の議事録は公刊されているが、それらの非常に多くについて、修道士オドラン、オルデリク（・ヴィタリス）、エモワンの書の補遺が想起させている。同じ頃、「皇帝シャルルのポンティオンにおける宮廷」が開かれている。同じ名称で、フィリップ尊厳王がこの地を、1180年に作成された文書の中で寄進している<sup>2)</sup>。皇帝シャルルが同地でいろいろな教会に付与した、少なくない特権文書がこれを確認している。その1つがリモージュのボーリュ修道院に宛てたもので、クリストフ・ジュステルが『テュレンヌ史』史料編<sup>3)</sup>、2番目はラブが『雑録』<sup>4)</sup>、3番目はバリューズが『勅令集』補遺の中で、それぞれ報告している。これらのすべての中で、同じ様式で、そして「皇帝の宮殿」の名称が一致している。皇帝シャルル（875-877年）は、ポンティオンに

滞在していた時、病気に罹っている。従って、「7月28日ポンティオンを出て、30日シャロン・シュル・マルヌに到着した」と、『サン・ベルタン修道院編年記』は記している。更に、同編年記に依拠して、エモワンは、同王は人生の最後の年に当たったのであるが、キエルジーからコンピエーニュへ、そこからソワソンを経由してランスへ、そしてシャロン・シュル・マルヌを経由してポンティオンとラングルを通過して、イタリアに向かったと記している。しかし、同王はポンティオンに暫く滞在していて、その時ニヴェールとマルシエンヌのノートル・ダム教会に所領を安堵していて、文書には「7月7日」と「7月9日、インディクティオの10年、フランキアにおける統治の38年、帝位の2年、王ロテール（1世）を継承して7年、ポンティオンの宮殿にて行われた」とある。そしてこれが、確かに、シャルル禿頭王による最後の寄進であった。カルロマンの不慮の死の後、「肥満」のあだ名を持つ皇帝シャルルは、『ノルマン人事績年代記』によると、「ポンティオンまで来た。そしてそこでフランク人は彼の許を訪れ、彼の帝権に臣従した」とのことである。最後に、シャルル単純王（893-923年）は、既に引用された文書において、コルビー修道院宛ての文書などは除くが、妻フレデルナに婚資として、「ペルトワ郡内、ソー川とブリュッソン川に沿うポンティオン荘を、統治の15年、復位の10年」に譲与している。同妻はシャルルが同意し、その婚資をコンピエーニュのサン・コルネイユ修道院に「7月26日、インディクティオの5年、いと栄光に満ちた王シャルルの統治の25年、復位の20年、非常に多くの相続財産を獲得した6年」に寄進している。しかし、この文章は「彼の兄弟で、シャロン・シュル・マルヌ司教ボーヴォ（784-804年）が存命であった時、2月10日に当たっていた余の妻の周年記念日に、毎年銀1リブラを上記の兄弟たちに支払うべく、彼はベネフィキウムの権利として上記の荘園を保持していた（後略）」と読むべし。ヴェルマンドワ伯エリベールは、上記のコンピエーニュの修道士たちがこの荘園を平穩に所有することを妨害し、フロドアールが952年の出来事として伝えている如く、ポンティオンの王領地に闖入した。その際、同伯はシャルルの息子、王ルイ（4世、936-954年）によってそこから追い出され後、王ルイはこの王領地とヴェイトリーの向かい側に築いた城塞を自身に忠実な騎士たちに委ねた。

註

- 1) Ponthion (Marne, ar. Vitry-le-François, c. Thiéblemont-Farémont).
- 2) 『セブシアナ図書』, 223頁参照。
- 3) Justel, Christophe, *Histoire généalogique de la maison de Turenne...*, Paris, 1645. in-fol.
- 4) 『雑録』, 108, 479頁参照。

### CXIX. ポンタイエ<sup>1)</sup>

Pontiliacumと表記されるポンタイエの宮殿は、ペラルールが『ブルゴーニュ記念物』の中で伝えている、シャルル禿頭王の文書によって唯一言及されている<sup>2)</sup>。その中で、ラングル司教イザアク（859-880年）がディジョンにあるサン・ミシェル教会とサン・テティエヌ教会のために、それまで両者が所有することのなかった造幣権を獲得している。この文書を「ゴズランに代わって、書記アウダケルが承認し下署した。8月21日、インディクティオの2年、いと栄光に満ちた国王シャルルの統治の34年に発給された。ポンタイエの宮殿にて行われた（後略）」とある。筆者はポンタイエの立地を敢えて確定しようとは思わない。ディジョンの上院議員のいと高貴なド・マラが筆者に示したそれ以上に勝るものはないと理解している。つまり、Pontiliacumはソヌ河畔の、今日までフランス語でポンタイエと呼ばれている所と思われる。しかし、数通の文書でPonsscissusとある場所がPontiliacumと呼ばれることは一度もない。反対に、筆者はPontisscissusの名称は後世においてフランス語のポンタイエから派生したと考えている。

#### 註

1) Folz, R. et Marilier, J., *Chartes et documents de Saint-Bénigne de Dijon*, I, Dijon, 1986, p. 207はPontailleur-sur-Saône (Côte-d'Or, ar. Dijon, ch.-l. de c.) を採る。

2) 『ブルゴーニュ記念物』, 48頁参照。

### CXX. ロワイヤルリュ<sup>1)</sup>

Regalis-locusと表記されるコンピエーニュ近郊のロワイヤルリュは、コンピエーニュから1里（4キロ）も離れていない、コンピエーニュの森の外れに位置する。808年には「コンピエーニュに近い森にあるヴィルヌーヴ（「新しい荘園」の意）」と呼ばれていた。同地の宮殿の起源に関しては、これまで誰も公表してこなかった。このヴィルヌーヴをコンピエーニュの宮殿のよりよい運命から生まれたと推測する人は、間違った推測をしていないであろう。フィリップ美男王は、自身の文書の中で、「余が常にヴァル・デ・ゼコリエ修道会に対して抱いてきたし今も抱いている特別な献身に促されて、その修道会の20名の兄弟たちの集団を、常にすべてが秩序正しく行われるために、分院長の指導下に監督すべく、コンピエーニュ近郊の森にあるヴィルヌーヴの余の館の礼拝堂に配し、活動を始めさせた。こうして、上記の兄弟たちは、恰も余に直属の礼拝堂付き司祭の如く、上記の館の境内に宿舎を有した（中略）。パリにて、1303年6月に行われた」のように記している。同フィリップは1308年に作成された文書において、同分院をロワイヤルリュの名称で表現している。これに関しては、同王によって公布された政令を、彼の息子フィリップ長身王が1317年の命令文書の中で教えてくれている。その中では「いと親愛なる主人に

して余の父はヴァル・デ・ゼコリエ修道会の館または分院を、そこがロワイヤルリュと呼ばれるように定め、コンピエーニュ近郊の森にあるヴィルヌーヴと言われる荘園に建設した」と書かれている。更に、このことから、同王はヴィルヌーヴの宮殿が、非常に多くの国王文書が証言している如く、ロワイヤルリュそのものであることを聞いていた。何よりも、フィリップ美男王の1311年、ルイ・ル・ユッタンの1315年、フィリップ長身王の1319年と翌年の文書、これらすべては「ロワイヤルリュにおいて行われた（後略）」のように終わっている。シャルル5世（1364-1380年）によるコンピエーヌ宮殿の創設の後、ロワイヤルリュはヴァル・デ・ゼコリエの参事会員へすべて譲渡された。それから間もなくして、彼らはそれをコンピエーニュの森の中にあるベネディクト派のサン・ジャン修道院の修道女たちとの間で、既に筆者によって指摘されている如く、彼女たちの最高の有益さにおいて、交換を行なっている。

註

1) Royallieu (Oise, ar. Compiègne, c. Compiègne-sud).

CXXI. ランス<sup>1)</sup>

ストラボはRemenseと表記されるレミ族の都ランスを、「非常に大勢の人々が住み、古代ローマの長官たちに宿所を提供していた」ことから、ドゥロコルトムDurocortorumと呼んでいる。彼らが公的宿舎に住み、そこで国の法律と人民の法が公布されていたことは間違いない。以前、発掘された廃墟が証明している如く、レミ族は彼らの起源をローマの建国者レムスとロムルスに帰していたのみならず、神聖化していた。このことから、間違いなく、カエサルと彼の後の諸皇帝が何度も熱心に触れている、あのような非常に緊密な相互の親密さが派生している。ローマ人がそこから追い出されると、フランク人の王クローヴィス（1世、465-511年）はランスのサン・ピエール礼拝堂の傍に「国王の館domum Regiam」を有していたことは、アークマルが司教レミの伝記の中で証言している通りである。彼は「そこから国王の寝室の入り口をノックするために近づいていたが、それは夜の深い静けさの中で、他の心配から解放された国王に、より自由に言葉の聖なる秘密を体験してもらうためであった。国王の寝室の扉が開けられ、彼は恭しく迎え入れ、それなりの敬意をもって国王の奥所まで案内された」と記している。同クローヴィス（1世）は息子ティエリー（1世）にレミ族の都、王国の頭を委ねていた。そしてクロテール1世（497-561）の死後、シジュベール（1世）がティエリー（1世）の王国を手に入れ、その都ランスを獲得したと、トゥール（司教）のグレゴワールは記している。フランク諸王事績録とロリクも同じことを伝えている。ウルバヌス2世（1088-1099年）はランスを「王国の頭caput regni」と呼んでいる<sup>2)</sup>。その宮殿がクレルヴォの聖ベルナルの時代ま

で存続していたかは、筆者は知らない。同聖者の伝記の中で、「司教座都市ランスの宮殿で、ソワソン司教ジョステンの横に座った」と書いているのを筆者は見た。その時ランスは（ランス）大司教の所有権下にあったと、筆者は考えている。何故なら、既に以前に、つまり960年、フロドアールが年代記の中で記している如く、ルイ海外王は司教座都市ランスの造幣権を永遠の権利として所有すべく、更にランス伯領のすべてを大司教に譲渡していたからである。このことから、ランス大司教が教会の高官の間で第一の公にして、フランキアの大貴族と呼ばれるのを聞いているし、王国の諸伯の中で、そしてパリの最高会議における首席を獲得している。大司教の宮殿はトー Tauと呼ばれていて、そこで1147年のランス公会議が教皇エウゲニウス（3世）主宰の下に開かれ、その際（神学者の）ジルベール・ドゥ・ラ・ポレが有罪の判決を受けている。ランスの宮殿で作成されたすべての文書を列挙すると長くなる。その中の1通として、読者諸賢は本書において、統治の12年にランスの宮殿で発給されたルイ海外王の文書を見るであろう<sup>3)</sup>。他の2通はスペイン辺境領内に所在し、「司教座都市ランスで」発給されている<sup>4)</sup>。その他は割愛する。

註

- 1) Reims (Marne, ch.-l. dép.).
- 2) 『雑録』, 5巻, 290頁参照。
- 3) 本書掲載文書, 417頁参照。
- 4) 『スペイン辺境伯領』, 860, 864頁参照。

## CXXII. リュフェイ

ガリアの多くの属州はRofiacumまたは Rufiacumと表記される荘園を抱えている。ペラルルの『ブルゴーニュ記念物』<sup>1)</sup>において、「神に身を捧げた」エルメノアラが「フランス王国のアトゥール郡内にあるRufiacum荘」を想起させている<sup>2)</sup>。即ち、『サン・ベルタン修道院編年記』によると、同荘園はラングル地方またはシャロン・シュル・マルヌとラングル伯領の間にあり、彼女はそれをサン・ベニーニュ修道院に寄進している。文書には「リュフェイにて公開で行われた。4月30日、ティエリー（4世）陛下が亡くなり、シャルルが宮宰に選ばれた」とある。エルメノアラよりも王ゴントラン（593年没）が先行していて、シャロン・シュル・マルヌのサン・マルスラン修道院に宛てた文書の中で、リュフェイの荘園に住む領民をサン・ピエール修道院の回廊建設に従事させている。もう1つのそれは、リモージュ地方に位置すると、エランバールが『聖ヴァンサンティアン伝』の中で伝えている。そして彼の後、ボーリュの史料が続く。別のRufiacumをアダマール・ドゥ・シャバンヌが年代記の中で、アングレーム伯領内、モンティニャク近郊のリュフェク<sup>3)</sup>、サン・テパルク修道院の古い文書はそれをペトリアケ

ンセ郡内に定めている。また、ナルボンヌ司教管区はロフィアクRofiacumを抱えている。教皇レオ6世(928年)、ベネディクトゥス5世または6世(973-974年)はオルレアン司教座教会の財産にブルジュ郡内のRofiacumを加えている。これら以外にも、ブザンソン司教座都市から5,6里離れた、セーヌ河畔にリュフェクRofiacumと呼ばれる城下町が見いだされる。最後に、上アルザスのライン川から遠くない所にRofiacumが位置する。

しかし、以上すべてと、シャルル禿頭王が855年、コンピエーニュから「ここにやって来て、そしてノルマン人に対する防備を委ねたアグラルドスから封土を取り上げ、それらをいろいろな人に分配した」との、『サン・ベルタン修道院編年記』の記述に出てくるルーイRofiacum<sup>4)</sup>の王宮荘園は別であったと思われる。何故なら、王シャルル(禿頭王)が王国を防衛するために防壁で強固にすべきと判断し、ノルマン人の侵攻を受けたヌストリーのルーイにこれを比定するのが適切であろうから。同王が858年ここに滞在していたことは、非自由人インゲルウィヌスに関して開かれた裁判集会が証明している。この報告をドゥブレが行っているが、そこには「サン・ドゥニ修道院の俗権代行者エレクトラドゥスがルーイ荘Rufiaco-villa—ドブレが間違っ書いているRuffiaco-villaではない—に滞在する王ルーイの前にやって来て、そこである人物を尋問するか召喚することが如何に正しいか(中略)。我々の主人で、いと栄光に満ちた王シャルルの統5治の28年、4月11日<sup>5)</sup>」とある。更に、867年ラン伯領内、セーヌ河畔のシャウルス村とその他をサン・ドゥニ修道院に譲渡しているが、文書には「在位の38年、インディクティオの15年、8月29日(中略)。ルーイRufiacoの荘園で行われた」とある。筆者は、このルーイはノルマン人の略奪を受けたと考えるが、その痕跡を記録の中に探しても見当たらなかった。そしてリュファクの集落は、筆者が述べた如く、上アルザス地方に立地し<sup>6)</sup>、プトロマエウスの書にRufianaとある。ここは、ヴァロワが考えている如く、分院の所在地として知られていて、マルヌ河畔のシェジー修道院に従属し、今日ではイエズス会の修道士たちが住んでいる。

#### 註

- 1) 『ブルゴーニュ史料集』, 9頁参照。
- 2) Folz, R. et Marilier, J., *Chartes et documents de Saint-Bénigne de Dijon*, 1, Dijon, 1986, p. 208はRuffey-lès-Echirey (Côte-d'Or, ar. Dijon, c. Dijon 1<sup>er</sup>) に比定する。
- 3) Adémar de Chabannes, *Chronique*, éd. par Chavanon, J., Paris, 1897, p. 165はRouffiac (Charente, ar. Barbezieux, c. Aubeterre) に比定する。
- 4) Rouy (Aisne, ar. Laon, c. Chauny, cne Amigny-Rouy)。
- 5) 『サン・ドゥニ修道院史』, 417頁参照。
- 6) 不詳。

### CXXIII. ルミルモン<sup>1)</sup>

アベンHabend城に、ヴォージュの山岳地帯にあるRomaricenseと表記されるルミルモンの二重修道院—1つは男子、1つは女子のため—と森が付帯していた。そこはサラベルジュ（665年頃没）が世俗を離れることを考えた場所で、司教アルヌールが前の年から埋葬されていた。彼女は望まなかったが、親族と国王がまずこれに反対した。シャルルマーニュは、エジナルが805年の出来事の中で伝えているのであるが、「軍隊を返した後、ルミルモン城に急行し、そこに暫く滞在した」とのことである。ここから、読者諸賢はルミルモンの山がその時既に国王の手中にあったと推測するであろう。フランク諸王は公的荘園に滞在することを習慣としていた。諸王の中で、ルイ敬虔王は825年「ヴォージュのルミルモンに狩猟のために旅立ち、同地で息子ロテールを出迎えた」とある。同皇帝は「ヴォージュを經由してルミルモン方面に行った。そしてそこで釣りと狩猟を思う存分に楽しんだ」と、天文史家が彼の伝記の831年の出来事の中で、それから4年後、ルイ自身が「四旬節の祝祭日の後、ルミルモン周辺で釣りと狩猟に興じた」と伝えている。同じ荘園で、皇帝ロテールは西暦849年、ミュンスター修道院を著名な伯リユタールに安堵した文書には、ダシェリーの書によると、「ルミルモンの国王宮殿において行われた（後略）<sup>2)</sup>」とある。しかし、ロレーヌ王国の分割によって、同荘園はルドヴィヒ（1世、ドイツ王、843-876年）の手に移った。ムーズ河畔の細長い土地で、弟シャルル（禿頭王）と分け合って獲得したものである。9世紀が終わるころ、ルミルモンの城はハンガリー人によって破壊され、そして皇帝アルヌルフの息子ルイは、それまで聳えていた頂においてではなく、山の麓に修道院を建立した。更に、ルミルモンの女子修道士たちは、それまでは聖ベネディクトゥス戒律に身を捧げていたが、以後は在俗参事会員に転籍し、如何なる誓願や戒律にも束縛されない状態に移った。

#### 註

1) Remiremont (Vosges, ar. Épinal, ch.-l. c.).

2) 『拾遺集』, 7巻, 184頁参照。

### CXXIV. ルイイ<sup>1)</sup>

パリに隣接するRomiliacumと表記されるルイイは都の東側に位置し、王妃ゴマトルドの結婚と死の場所として広く知られていた。作家フレデゲールはダゴバール1世（623-638年）の統治の7年に関する記述の中で、同王は「サンスの町を通過してパリにやって来たが、その時、結婚に際して王妃ゴマトルドを迎え入れた場所であるルイイの荘園に不妊であったことから彼女を残し、ナンティルドを王妃の地位に高めた」と記している。ルイイに関して、多くのことは伝存していない。

## 註

1) Reuilly-lès-Paris (12<sup>ème</sup> ar. de Paris).

CXXV. リュエル<sup>1)</sup>

Rotoialum または Riogilum, Riolium, Rodolium と表記されるリュエルが初めて王宮荘園に加わるのは、王シルドベール（2世, 570-595年）の老年期においてである。彼はここで司教レオビヌスを待っていた。亡くなった王シルペリクの子、グントランが同王を、ナンテールで聖なる洗礼の水で浄められるために、少しの間リュエルに呼び出していたと、トゥール司教グレゴワールが教えてくれている<sup>2)</sup>。ルイ敬虔王（814-840年）はこのリュエルの荘園を、『聖者記録集（ベ）』で公刊されている筆者の（サン・ジェルマン・デ・プレ）修道院の院長イルミノンに宛てた文書において、ポワシー郡内に比定している<sup>3)</sup>。他方、リュエルは昔の作家によって『聖ドゥニ奇跡譚』の中で一、二度「王領地」*fiscus Regius*と言われているが<sup>4)</sup>、シャルル禿頭王（843-877年）は勅令の中でそれをパリ郡とポワシー郡に帰属させているし、ドゥブレの書においては、自身の権利下にある荘園として、セーヴル川からカンブレに至る水路と共に、サン・ドゥニ修道院に譲渡している。従って、サン・ドゥニ教会にある同シャルルの墓碑銘には「多くのものを奪い取られたが、この人は我々にとってセーヌ川を与えてくれた人であり、リュエルを贈ってくれた人でもある」と刻まれている。シュジェールがこの時の事情を1187年の出来事の中で説明していて、そこには「皇帝シャルル3世は聖なる祭壇の前で夜も昼も絶え間なく燃え続けていた7つの燭台と、彼自身の周年記念日と神の下僕たちの食料の費用として、リュエユと呼ばれる彼の領地を付属物と共に寄進することを金印勅書によって確認した」とある。我々のサン・ドゥニ修道院の修道士たちは、その領地を今日まで所有してきたが、その一部、つまり小さな城塞、菜園、噴水は枢機卿リシュリユーの手に移っていた。ルアン司教管内にある、別のリュエ-Rotoialum または Riolium - がグレゴワールによって言及されているが、この地はフレデゴンドの死によってよく知られている。これらに、サン・ジェルマンの教会が存在したことを同聖者の奇跡譚2巻が教えてくれている、3番目のリュエユを付け加えるとすれば、多分読者諸賢はそれを許してくれるであろう。

## 註

1) Ruel (Hauts-de-Seine, ar. Nanterre, c. Rueil-Malmaison, c<sup>ne</sup> Rueil-Malmaison).

2) 『歴史十卷』, 10巻, 28章参照。

3) 『聖者記録集（ベ）』, 3巻下, 118頁参照。

4) 同上, 354, 357頁参照。

## CXXVI. サムシー<sup>1)</sup>

Salmonciacumと表記されるサムシーはランに近く、オストラジー王国の一部で宮殿があり、そこで王ペパン（3世）は766年クリスマスを祝っている。ペパンの息子カルロマンにとって、ここはお気に入りの場所であったと思われる。そこで、彼はその後ソワソンでフランク人によって王に推戴されることを承諾している。同王の2通の見事な文書がそのことを証言している。それらは本書で初めて公刊されているが、その1通ではサン・ドゥニ修道院の荘園と大所領、他の1通では諸特権と通行税からの免除が扱われている。同王の弟、シャルル（マーニュ）も全く類似の文書を発行している。両文書には、「余の統治の初年」「サムシーの宮殿にて行われた。神の名において祝福する。アーメン」とある。771年、特にル・ティエ版『フランク王国編年記』は「王カルロマンは12月4日、サムシーにて死去」と伝えている。彼の遺体はランスのサン・レミ教会に運ばれている。『キリスト教時代のフランス』2巻において、ルイ敬虔王のアンジェ司教座教会に宛てた文書が、「サムシーで」交付されたのを、筆者は確認している。それは確かに、日付を欠いている。しかし、共同統治していた息子ロテールと一緒に、シャルル修道院に交付された別の文書では、ルイの（統治の）17年、ロテールの（統治の）8年、「サムシーの宮殿にて行われた（後略）」となっている<sup>2)</sup>。ニタールは842年、シャルル禿頭王が彼の部下アデルガリウスと一緒に（ランの）町からサムシーに退いたと伝えている。また、868年にロテールの王国への侵入後に、同王はこの荘園を手に入れている。弟ルードヴィヒとの間で870年に始まった同王国の分割に際して、存命中に限って、彼はそれを保持することを望んだと思われる。同シャルル（禿頭王）はランス司教アंकマールとその他の諸司教を伴って、「5月20日、インディクティオの15年」、ラン小教区内にあるサムシーの宮殿を既に訪れていたが、それは、アंकマールが教皇（聖）ニコラウス（1世、858-867年）に宛てた書簡の中で言及している如く、「彼の兄弟でいと栄光に満ちた国王ルードヴィヒとの会談のために、メスの都に向かった」、867年のことである。加えて、サムシーでシャルル（禿頭王）によって、876年に開かれた裁判集会については、エモワンが報告している<sup>3)</sup>。そして、最後に、翌年のキエルジーの勅令の中で、同王の息子ルイに対して、サムシーでの狩猟が禁止されている。その後、サムシーに関して至る所で深い沈黙が見られる。この地はランの東側の近くに位置し、リシーの神の母修道会の手に渡り、その後ランのプレモントレ修道会に属するサン・マルタン教会の参事会員の所有となるが、その経緯に関しては分かっていない。

### 註

1) Samoussy (Aisne, ar.Laon, c. Laon-sud).

2) 『雑録』, 457頁参照。

3) 『フランク史』, 5巻, 34章参照。

### CXXVII. サヴォニエール<sup>1)</sup>

筆者がSaponariasと表記されるサヴォニエールを王宮荘園に加えるのは、859年に同地で開かれた宗教会議のために、今日でも同地と結びついているこの地の昔日の名声のためである。この地はトゥルから1里強離れていて、トゥルからコメルシーに伸びる山脈の麓にある。上記の年に大司教管区の12名の司教たちが「インディクティオの7年、教皇（聖）ニコラウス（1世）の在位の2年、国王シャルル（禿頭王）の在位の19年、6月に」この地に集まっていた。まず、彼らは国家に有益と思われることに関する、12の法規を公布した。国王シャルルによるサンス大司教ウァニロの糾弾、同大司教に関する宗教会議の議事録がそれに続き、最後に、ブルターニュの司教たちに宛てた書簡、同じくブルターニュ公サロモンへの短簡、ブルターニュの高官に宛てた召喚状、種々の犯罪の関係者、彼らが健全な考えに戻るために提出された記録が配置されている。しかし、そこには集落の痕跡も、国王館の痕跡も残されていない。厳密に言うと、聖ミシェルに奉じられた小さな教会しかなく、この土地はサン・テーヴル修道院に帰属している。

註

1) Savonnières (Meuse, ar. Bar-le-Dic. c. Bar-le-Duc-sud.).

### CXXVIII. ストネイ<sup>1)</sup>

SatanacumまたはAstenidumと表記されるストネイは、今日トリーア司教管区、イヴォワ主任司祭区、ヴウエーヴル郡内のムーズ河畔にある、囲壁をもつ町である。識者の一部はシャルル禿頭王（843-877年）の勅令の中で、王宮荘園の中に数えられているアストネと同じであると認定する。ヴウエーヴルの広大な森—地元の人がムーズ川に因んで、ムゾンの荘園と呼んでいる—と、果てしなく広がる非常に快適な放牧地に隣接しているこの場所の立地が彼らに支持を与えている。シャルル（禿頭王）以降の作家たちは、ストネイと呼んでいる。彼らの中の1人、（オリヤックの）ジェルバール（1003年没）は書簡103でSatanacam villam, 書簡120でvillam Satanicumと記している。1088年ゴドフロワ・ブイヨンは、ヴェルダンの統治を巡って、ヴェルダンのティエリーとの間で激しい戦いが勃発した時、この地を壁で囲ませている。『拾遺集』10巻で刊行されている『ヴェルダン司教の衛兵』補遺の中で、リエージュのジャンがこれに関して語り尽くしているが、そのジャンの抜粋を聖ダゴバール事績録に付された注記の中で、ウルテミウスが公刊にしている。同地の教会とシャルル禿頭王によって建立された参事会修道院についても、上記のウルテミウスが伝えている。加えて、同作家はロレーヌのゴドフロワ髭面公とその妻ベア

トリスが参事会員に代えて修道士をそこに住ませること、最後に、1605年ロレーヌ公シャルルによって、1124年からゴルツ修道院に従属していたストネイ分院がナンシーの聖職者団体に帰属させられたと付言している。この地のサン・レミ教会にはまず聖ダゴベールが埋葬され、700年前の12月23日に、フランク王妃エマの詩編入り典礼書、または絵暦の原本の中に国王ダゴベールが現れているが、それはオストラージ王シジュベールの息子、ダゴベール（2世、652-678年）と同一人物であったことが、『聖者記録集（ベ）』4巻の序文の中で示されている。

一部の人はStadinisum またはStadinensemやStadonensemの郡名はAstenidoから派生していて、Satanacensemと同じであると認識する。しかし、筆者には別の考えがより説得的と考える。確かに、フロドアールの証言によると、Stadonensisの郡名はシャンパーニュに含まれ、そこで司教職に就く前、国王按察使であったウルフアリウスがシャンパーニュ全域、つまりドルモワ、ヴォンVoncq, シャトー・ティエリ、ストネイ、シャロンの諸郡に配属されたと言われている。そして、ストネイはトリーア地方に所属し、その立地はムーズ川の彼岸で、シャンパーニュから完全に隔たっており、それ故ヴウエーヴル郡内に求められる。となると、ストネイ郡はどこか。筆者には、次のように考える以外にはないようと思われる。つまり、カストリケス地方に至るまでは、ムーズ川とエンヌ川に挟まれて、ドルモワ地方—Dolomensi またはDulcomensi—に隣接する。カストリケス地方は、エンヌ川とバル川に挟まれたメジエールの諸集落を内包して、今日レーテル地方という名称で表現されている。しかし、Stadonensis郡は、むしろ（ローマ教皇聖）レオ9世（1049-1054年）の真正文書の中で見られる如く、同都市からリュクサンブール方面に約5里離れた、ヴェルダンのノートル・ダム教会に帰属したStadon—今日のエストン—の集落から派生しているように思われる。但し、それまで筆者はムゾン郡内の、今日ストーン—それはモン・ディウのシャルトルーズ修道会の重要な記録の中に、ラテン語でStunaとして出てくる—と呼ばれている集落と考えていたのであるが。

スタドン郡にラルゴンヌ郡が隣接していた。後者にはムーズ川左岸、ストネイの北に、嘗てはヌーヴェルヴィルと呼ばれていたボーモン・タン・アルゴンヌの町があるし、ヴィルフランシュ、クレルモン（・タン・アルゴンヌ）、城定住地のサント・ムヌーに近いボーリュ修道院も同様に立地する。この郡は同地の修道院長にして創建者である聖ルーアン（690年頃没）の事績録の中で、修道院長リシャルルによって言及されている。同聖者は「アルゴンヌの森の中の誰も住まない草地」に到着し、そして「昔の人たちがウァスロワ（Waslogoim）という地名を付けていた」場所に着いたと、報じられている。ボーリュ修道院から1里離れた所にウァスロワ（Wasly）という集落がある。筆者はそこがワスロワ Waslogiensis修道院の名称が派生しているワスロワ（Waslogium）そのものと信じている。以上の如く、ムーズ川に沿ったアルゴンヌ郡はボーモンから始まり、ボーリュ修道院で終わっているが、これから問

題にするストネイはその近くに位置する。

ヴウエーヴル郡はアルゴンヌのそれよりも遥かに広く、ムーズ川とシエール川の間でモゼル川に達している。シエール川はドウジーの直ぐ南を通してムーズ川に流れ込んでいるが、ヴウエーヴル郡をリュクサンプールから分けている。確かに、ヴウエーヴル郡は—ウィルテミウスの言から理解する限り—少なくとも3つの伯領、即ちヴェルダン、シャルペーニュ、カステレイエンシスを擁していたが、このうちの2つしかロレーヌ王国内には見いだせない。シャルペーニュはシャルペーニュ城から派生し、地元ではシャルペーニュまたはサルペーニュと呼ばれている。その城の残骸はボン・タ・ムソンから南1里半、デュドゥアールの小さな町の近くの、モーゼル川の中島で確認されている。カステレイエンシスに関しては、アトン・シャテルとの関連を除けば、何も知られていない。最後に、ヴウエーヴルはその起源をヴウエーヴル城から引いているが、メスとヴェルダンの間に位置するトゥリス・ヴァブレンシス（「ヴォワヴルの塔」の意）、つまりラ・トゥール・ドゥ・ヴォワヴルと呼ばれている小さな町との関連については何も知られていない。ヴェルダン郡には、今日では大分狭くなっているが、マド河畔にエセイ・アン・ヴォワヴルとフレーヌ・アン・ヴォワヴルが立地し、両者の間にアトン・シャテルが位置している。

註

- 1) Stenay (Meuse, ar. Verdun, ch.-l. c.).
- 2) 『ダゴバール王事績録』, 62頁続参照。

**CXXIX. セレスタ<sup>1)</sup>**

上アルザスのScladistadenseと表記されるセレスタはイル川が傍を流れていて、プッツガアーの地図や昔の地理学者によって旧ヘレルム、エレエブム、ヘルヴェトゥムだと伝えられていると、ヨハン・ラインラントとヨシア・シムラーは認識している。フランク人の古い編年記においてはScladistatと記されているが、776年シャルルマーニュが「セレスタの荘園で主の誕生日を祝った」と伝えている。そこに宮殿があったことは、まず、シャルル肥満帝の命令文書3通が教えてくれている。886年にラングル司教ジロンに付与されたそれらの1通を、ラブが真正文書から言及していて、そこには「セレスタの宮殿で適切に行われた。アーメン」とある。次の年に、同じくジロに発給された別の文書を、ペラールが刊行している。最後の3番目の文書は、ラングルの歴代司教が扱われている『キリスト教ガリア』2巻において発見されるが、それは「セレスタの宮殿にて行われた（後略）」のように終わっている。今日でも、この地はキリスト教の信仰に非常に篤いルイ大王（14世）によって非常に強固な城壁で防備された状態

で残っている。

註

- 1) Sélestat (Bas-Rhin, chef-l. ar. Sélestat-Erestein).
- 2) 『雑録』, 490頁参照。
- 3) 『ブルゴーニュ史料集』, 50頁参照。

### CXXX. サンス<sup>1)</sup>

嘗て古代ローマ人の凱旋門によって計り知れない程の恐怖心を起こさせていた非常に大きな部族の拠点で、古代ローマ時代にはAgedincum-Senonum、その後はSenonenseと表記されるサンスをブルグント族に帰す研究者がいる一方、彼らとの関連を否定する者もいるが、筆者は後者に属す。何故なら、ブルグント族の諸王または諸公がそれを一時期自由にしていたとしても、クロドミル(495-524年)が支配する王国の都で、ブルグント人の諸王が彼らの4つの小王国の中の最も高貴な部分として所有していたジュネーヴと同様、ブルグントの領土内には含まれていなかった。カロリング諸王の文書の中で、筆者は「サンスで行われた」、「サンスの都で行われた」との文言を一度ならず目にしている。しかし、カペー朝以前において、宮殿の表現を筆者は発見していない。兎も角、彼らによってサンスに宮殿が建設されたと筆者は考える。カミュザの書にある<sup>2)</sup> 如く、王アンリ(1世)は1048年、統治の18年、プロヴァンのサン・テギルフ修道院に発給された文書において最初に、続いて彼の息子フィリップ(1世)が1071年、統治の12年にシェル修道院に付与された文書で、その宮殿に言及している。これら2つの発給された命令文書は場所を「サンスの宮殿にて公開で行われた(後略)」のように表現している。

註

- 1) Sens (Yonne, ch.l. ar.).
- 2) 『トロワ司教管区古物の聖なる箱』, 23, 24欄参照。

### CXXXI. ジンツィッヒ<sup>1)</sup>

モーゼル川からほぼ8マイル離れた所に建てられたSentiacumまたはHisentiacumと表記される、ジンツィッヒの宮殿に関しては、『サン・バルタン修道院編年史』の842年の出来事の中で、ロテールの兄弟であるルードヴィヒとシャルル(禿頭王)の両王が確たる目的もなく会談を持ちかけ、コブレンツに到着した話の中で語られている。しかし、この地名が刊本の中で明らかに改竄されていることを、後で

参照するニタール、『フルダ修道院編年史』、『メス編年史』が教えてくれている。それらのすべてにおいて、ジンツィッヒの荘園はSentiacaまたは Sinciacumや Sincichaと記されている。それ故、『サン・ベルタン修道院編年記』で言及されているHisentiaco Palatioは、アンデルナハからそう遠くない、ドイツ語でジンツィッヒと今日でも呼ばれている、ライン川此岸に置かれたSentiacomの荘園と読み替えられるべきである。厳密に言う、『フルダ修道院編年史』は842年の出来事の中で、これを荘園villaと表記しているが、ニタールは同じ年の出来事の中で安在所sedesまたは宮殿と呼んでいる。加えて、それは『メス編年史』の885年の出来事に関する記述の中では、皇帝の親切さによって譲与された王領地の中に加えられている。筆者はジンツィッヒの宮殿の創建者または創建日をまだ確定できていない。多くの人たちはこの地を間違っ上で取り上げたイゼンブルクに同定している。

註

1) Sinzig (ドイツ, l. Rheinland-Pfalz, r. Ahrweiler).

CXXXII. セルヴェ<sup>1)</sup>

Silvacusまたは非常に多くの原本でSilviacumと表記されているセルヴェは第2ベルギカ内の王宮荘園で、シャルル禿頭王に特に気に入られていたことは確かである。パピール・ル・マソンの間違いは大きい。何故なら、彼は、ネモシウスと同様に、フェリエール修道院長ルーの書簡の中で言及されているSilviacumと同じと考えているので<sup>2)</sup>。一部の人たちはこの王宮荘園をサルヴァトリウムとよばれる土地、つまりル・ソヴォワに比定する。また他の人たちは地元でヴィル・エン・セルヴ (ヴィルセルヴ) と呼ばれるヴィラ・イン・シルヴァ Villa-in-silvaであると理解する。ここで両者が考察に付される必要がある。

サルヴァトリウムには、ラン地方の山の麓に位置するシトー派の女子修道院がある。この地名はシトー派修道会よりも古くはない。それよりも古いとした場合でも、セルヴェと同地であることはない。実際、サルヴァトリウムは、カロリング時代において非常に有名であったセルヴェとは全くの別物である。何故なら、その言及はラン司教アंकマールが同名のランス司教に宛てた書簡<sup>3)</sup>、ランス司教アंकマールの数々の書簡、フェリエール修道院長ルーの書簡2通<sup>4)</sup>、シャルル禿頭王の勅令—その12番目はセリヴェで公布されている—において確認される。もしサルヴァトリウムがシトー派の女子修道院の建立以前には広く知られていなかったとすれば—確かに、筆者はそう認識している—、この地がセルヴェに同定されることは全く正しくない。次に、セルヴェには狩猟に最適の国王の森林が隣接していたが、サルヴァトリウムはその一部が沼沢によって囲まれていた。その反対側には山岳とランの都があり、サムシー

の宮殿に帰属していた、半里離れたリーシーの森を除けば、隣接する森林を持っていなかった。

ヴィラ・イン・シルヴァもセルヴェの名称と立地に合致することはない。確かに、この地はノワイヨンとアンの間であって、ベヌの森に隣接しているが、ラン郡の外に立地する。シャルル禿頭王の877年に公布された勅令が立証している如く、セルヴェは確かにこの郡内に含まれている。そこでは、「セルヴェがラン地方全域と共に」シャルルの息子ルイの狩猟地から除外されている。しかし、一方、ヴィラ・イン・シリヴァはノワイヨン郡内に立地している。従って、セルヴェの場所と立地は別の所、しかも、上述された如く、ラン郡内に探し求められねばならない。

筆者は、ラン郡内、オワーズ河畔のラ・フェールの定住地から半里離れている、地元でセルヴェと呼ばれているSelviacusの集落以上に一致するものはないと考える。何故なら、第一に、ServaisとSilvacumの間にある名称の一致がこれを支持している。後者はほぼ間違いなくSelvaisから変形している。確かに、我々フランス人にとってSilvaがSelveに変化すること、そしてacumで終わる名詞がaisまたはayに変化することはありふれたことである。両方とも、多くの事例によって立証することができる。それ故、こうして、SilvacumがSelvais、lがrに転換して、Servaisが派生したのである。

ラン司教エリナンによって、サン・ヴァンサン修道院のために交付された文書の中で使用されているラテン語も、また上記の説を支持している。それらの中でセルヴェ Selviacusの村が次のように表現されている。「しかし、聖ゴバンの祭壇がヴォアの森の中に設置された。それが委託されていた我々の参事会員イザンベールが死んだので、我々の手に戻った。セルヴェの村と、その祭壇に帰属するすべてのものと共に、その中で、その後、修道士たちによって神と聖者自身に奉仕されるとの条件で、既述のサン・ヴァンサン修道院とそこで奉仕する人々に、教会権を除いて、永遠に所有されるよう、我々の参事会員全員と信徒の同意を得て、すべてにおいて譲渡する。(中略)。主の化肉の1068年」と。これらはランのサン・ヴァンサン修道院の文書集から引用されたものである。そこで、エリナンはSilviacumをSelviacumと表現している。つまり、一般的に使用されていたServaisが考慮されている。確かに、古い記録ではSilvacumはしばしばSilviacum、時々 SilvaicumまたはSilvagiumなどと記されている。我々は手元にルイ敬虔王の真正文書を持っているが、それは帝位の7年に行われた、サン・ドゥニ修道院長イルドワンとハイラルドゥス某との間の所領交換に関するもので、「Silviacumの宮殿で発給された」とある。加えて、この村にはヴォアVecosiaca - または一部の人たちはVedogiensisやsilva Vedogiiと表記している。広く普及していた名称を使えば、Vooas - の森が隣接していて、今はクーシーの森の一部となっている。この森は非常に広大で、国王の狩猟に最も適していて、セルヴェに隣接している森であったことは間違いない。一部の人たちは、これまで古い城の残骸がセルヴェに隣接するサン・ゴバン村の近くで確認されていることを付言している。しかし、それが古い宮殿の残骸であると言い切ることはできな

い。

要するに、セルヴェはクーシーからそう離れてはいなかった。確かに、ランス大司教アंकマールはシャルル（禿頭王）によってセルヴェに呼び出され、まずクーシーに行くことを申し出る。そして「次の日、あなたがいる所で話を聞きましょう」と言っている。しかし、セルヴェ村はクーシーからは4里（16キロ）も離れていない。従って、この地をラン郡の外に求めることは間違っている。また、トゥル地方に求めるのも間違っている。

セルヴェで行われた非常に有名な出来事を考察する仕事が、筆者に残されている。ここでそれを説明するのが適切であろう。そしてまず、シャルル禿頭王は、ルイ敬虔王の後で、すべての中で特にこの地を好んだ。セルヴェにおいて、修道院院長イルドワンに交付された本書で公開されている同王（ルイ敬虔王）の文書は、直ぐ上で言及されている。同シャルルの別の命令文書をムーズ河畔のサン・ミエル修道院の写字室が提供してくれている。そこには5月31日、つまり6月1日の前日、「彼の統治の6年、インディクティオの9年に発給された。セルヴェの宮殿にて行われた」とある。

871年、皇帝ルードヴィヒ（2世、855-875年）の崩御の噂が嘘であったことを知ると、シャルル（禿頭王）はボンションを経由してブザンソンに戻り、そしてそこからアティニーを経由してセルヴェまでやってきた。そこで彼は彼の顧問たちと一緒に裁判集会を開いた。顧問たちの助言によって、彼は再びカルロマンをサンリスでの幽閉に委ねた。この裁判集会に、セルヴェを追い出されたラン司教アंकマールが召喚されていたと思われる。それは彼が自身について証言しているからである。

875年同シャルル（禿頭王）はアルデンヌの森に近い、ドゥージーで皇帝ルードヴィヒの知らせを受け取ると、やがてボンションに移動し、そこからラングルに至る。他方、彼の妻リシルドをランスの都を経由してセルヴェに退かせている。

最後に、876年、シャルル（禿頭王）は帝冠を受け取った後、ローマの都から戻り、8月14日ランスに到着している。そしてそこからセルヴェに直行し、間を置かずにキエルジーに向かい、そこでドイツ王ルードヴィヒの崩御の通知を受け取る。以上は、『サン・バルタン修道院編年記』に依拠した。これらに、同シャルルのパリ司教アンジェルヴァンに宛てた、「セルヴェの宮殿で行われた」とある命令文書を加えておこう。

#### 註

- 1) Servais (Aisne, ar. Laon, c. La Fère).
- 2) 『フランスの河川』, 191頁参照。
- 3) 『公会議集成』, 3巻, 1789欄続参照。
- 4) 『書簡集』, 書簡55, 57参照。

### CXXXIII. サンリス<sup>1)</sup>

Augustomagum Silvanectum またはSilvanectumと表記されるサンリスの地名の起源がローマ人であったのかケルト人であったのかは、如何なる書においても定かでない。勿論、サンリスが広大な森林で囲まれていたことは、誰も否定できない。ここでカロリング諸王が堅牢な城または宮殿を持っていたことは、まずアド、レジノ、エモワン、シャルル禿頭王の事績録が証明している。同王は甥のペパン、息子のカルロマン、そして娘のジュディトを同地に引き留めていた。筆者はドゥブレの書に収められた、そして「サンリスの都にて」交付されたと、『サン・リキエ修道院年代記』にある、彼の2通の命令文書を読んだ。同都がノルマン人の狂気の犠牲になっていたことを、筆者は知った。しかしその後、912年、ルイ海外王の治下、ノルマン人事績録が頻繁に言及しているデーン人のエルベールがシャルル単純王から伯の称号を手に入れている。エルベールの息子または相続人サンリス伯ベルナルはよく知られている。しかし、サンリスが王領地から奪い取られた期間は、1世紀も続かなかった。何故なら、遅くとも991年フランク人の王ユグ（・カペ）がオルレアン司教座教会に「サンリスの宮殿にて、11月、インディクティオの4年、王ユグの統治の4年に（後略）」交付した命令文書は、再度それが王領地に復帰したことを証明している。王ロベール（2世）の別の文書が同じ理由で同じ教会に、同じ年の同じ日付で交付されている。これと一致しているのが、同王のフェカンの修道院に交付された「言葉の化肉の1005年に」、「サンリスの宮殿において、主の御公現の日に行われた（後略）」とある文書である<sup>2)</sup>。ドゥブレはこれと違った所のない、サン・ドゥニ修道院に交付された王フィリップ（1世）の命令文書を引用して<sup>3)</sup>、そこには「主の化肉の1068年、インディクティオの6年に交付された。サンリスの宮殿にて行われた」とある。ペラールが『ブルゴーニュ記念物』の中で公開している<sup>4)</sup> 如く、フィリップ（1世）の息子ルイ（6世）は1112年ヴェズレイ修道院の特権文書を「サンリスにて、余の統治の11年、王妃アデライードの5年（中略）」に交付している。最後に、1261年フランス王聖ルイはサンリスの王宮の傍に新しい教会または礼拝堂を建立することを決め、サン・モリス修道院長ギヨームを介してテーベ軍団の殉教者の聖遺物を送らせている。宮殿の脇でそれらを受け取ると、同王はこのことに関して、1264年に作成された文書の中で、「余は教会か礼拝堂を建立すべきと考えた（中略）。6月1日余が出席するなか、余の愛すべき忠臣サンリス司教ロベールによって盛式に献堂された<sup>5)</sup>」と語っている。やがてこの礼拝堂はサン・モリス分院と呼ばれるようになり、聖アウグスティヌス修道会の律修参事会員が最初から所有することになる。

註

1) Senlis (Oise, ch.-l. ar.).

- 2) 『雑録』, 153頁参照。
- 3) 『サン・ドゥニ修道院史』, 838頁参照。
- 4) 『ブルゴーニュ史料集』, 212頁参照。
- 5) 『キリスト教ガリア』, 3巻, 1020頁と4巻, 16頁参照。

#### CXXXIV. スピネイ<sup>1)</sup>

古い土地台帳はパリ郡内のSpinolium またはSpinoilumと表記される, 3つのスピネイに言及している。即ち, リニエール主席司祭区, 今日のモンテリ主席司祭区内, オルジュ河畔のスピネイSpinolium。同じくブリー内またはモワシー・クラマイエル主席司祭区内のスピネイSpinoliumで, その教会はサント・ジュヌヴィエーヴ修道院に従属している。遥かに高貴なのがダゴベール1世(623-639年)の王宮荘園のスピネイで, フレデゲールが「ダゴベールは彼の統治の16年, 腹の下痢で, パリからそう遠くないセーヌ河畔のスピネイの荘園で体の調子が悪くなり始めた。そしてそこからサン・ドゥニ教会へ配下の者たちによって運ばれた。数日後, 息が絶えると, 彼が以前その境内に建立することを命じていたサン・ドゥニ教会に埋葬された」のような言葉で触れている。862年のソワソン宗教会議の議事録で, サン・ドゥニ修道院所有の荘園の中に, スピネイの名前が上がっている。確かに, 同荘園は以前ゴネス主席司祭区内にあったが, 今日ではモンモランシー主席司祭区内に含まれている。

#### 註

- 1) Epinay-Champlatreux (Val d'Oise, ar. Montmorency, c. Luzarches).

#### CXXXV. エスポワス<sup>1)</sup>

Spissiaまたは Spinsiaと表記されるエスポワスの王宮荘園には, 国王ティエリー(2世)が滞在していた。聖コロンバン(615年没)の伝記の中でジョナスが伝えている所によれば, その時同聖者は国王に抗議すべくこの地にやって来ていたとのことである。この地はスミュール・アン・オクソロワとモンレアルの間, オーセル郡に発し, ヨンヌ川に合流しているスレン川から遠く離れていないところに位置する。

#### 註

- 1) Epoisses (Côte d'Or, ar. Montbard, c. Semur-en-Oxois).

## CXXXVI. エタンブ<sup>1)</sup>

Stampenseと表記されるエタンブ郡はグレゴワールの『歴史十卷』の中で、一度ならず言及されている<sup>2)</sup>。このグレゴワールに続いて、フレデゲールがクロテール2世(584-629年)の統治の44年、尚も無敵を続ける同王は「主の生誕の日に軍隊を連れてルエ河畔のエタンブ」の王ティエリー(2世)の許に到着し、そしてそこで王クロテールの息子、メロヴェと戦いを交えたと記している<sup>3)</sup>。この個所で、デュシェヌは参照すべきとして欄外に、「ルエ川を渡ってper fluvium」と注記している。そして、多くの写本がこれに賛同しているが、シルモンの非常に古い写本などがそれを拒否している。確かに、新旧のエタンブはルエ川の本流と同様、支流から大きくなったジュアンヌ川沿いに立地されるべきである。しかし、サムソンの地図はこれに反対して、エタンブをルエ川支流に比定し、ジュアンヌ川をそこから2、3里離している。他方、それから約600年後旧エタンブが新エタンブから分かれたと、『モリニー年代記』<sup>4)</sup>のみならず、本書で公刊されたフィリップ1世(1060-1108年)とその息子ルイの文書が教えてくれている。そこでは「旧エタンブのサン・マルタン教会(中略)が新エタンブの修道院(中略)とモリニーと呼ばれる同修道院の院長ルノー」に譲渡されている。しかし、この分離の理由は次の事実に求められるべきであろう。つまり、嘗ては参事会員に、そして今ではモリニー修道院の分院に従属しているサン・マルタン修道院が大昔から今日に至るまで立地していた旧エタンブに、囲壁によって古い集落から分離された「新エタンブ」と言われる新しい施設が加わり、恰も新しい定住地を形成することになった。そこに、ノートル・ダムに捧げられた参事会形式の小教区教会が国王宮殿と共に立地した。急な傾斜地に位置する新エタンブにはほぼ連なるように配置されているモリニー修道院は、貫流する川が部分的に流れ込む牧草地の中に位置している。そのため、嘗て新エタンブの名称は、そこから1里程標しか離れていないと思われる場所に付されていた。上で言及されたグレゴワールやフレデゲール以外にも、勅令がしばしばエタンブ郡に言及している。しかし、その地の宮殿または城については、エルゴー以前においては、誰も触れていない<sup>5)</sup>。この作家から我々は王ロベール(2世, 996-1031年)の妻コンスタンスが「エタンブの気品に満ちた宮殿」を建設したことを知る。そこでロベール(2世)は「エタンブ城内にノートル・ダム修道院」, 宮殿内に教会を建てた。ノートル・ダムの聖なる場所—モリニー修道院に代わって使用されているとすれば—は、同地の年代記<sup>6)</sup>の中でエタンブのノートル・ダムの参事会員たちとモリニー修道院長トマとの対立と結びつけられていることと相容れなくなるが、1030年王ロベール(2世)はエタンブの宮殿に滞在していた。その時彼はアントニー村で騎士ウァランが乱暴かつ不正に使用していたヴィカリアまたは俗権代行権に関して、国王の命令文書をパリの都の郊外にあるサン・ヴァンサン=サン・ジェルマン修道院の院長アドローに交付しているが、そこには「言葉の化肉の1030年、いと栄光に満ちた王ロベールの統治の38年、エタンブの宮殿にて公開で行われた」とある。エ

タンブの所有権は国王の手から伯と副伯－彼らの一部を『モリニー年代記』が拾ってくれている－の手に移った。

註

- 1) Etampes (Essonne, ch.-l. ar.).
- 2) 『フランク史作家選集』, 3巻, 420, 449頁参照。
- 3) 同上, 747頁参照。
- 4) 同上, 4巻, 360, 364頁参照。
- 5) 同上, 64, 67頁参照。
- 6) 同上, 368頁参照。

**CXXXVII. エトルパニー<sup>1)</sup>**

王ダゴベールのSterpiniacumまたは Stirpiniacumと表記されるエトルパニーの宮殿に関して、これまで誰も同王ダゴベール（1世, 623-638年）の尚書長官オドワン以上にうまく述べることはできなかった。聖エロワの伝記1巻の中で、同王に関して、「また別の機会に、彼は俗人の衣装を着けて、子供たちと一緒に、エトルパニーと呼ばれる荘園を出発した」のような言葉が使われている。この地においてダゴベールの孫、クロテール3世は、「12月23日余の統治の5年、エトルパニーにて」発給された文書において、統治の5年、母親のバルデシルドの指示で、コルビーの新しい修道士たちを通過税のすべての義務から解放している<sup>2)</sup>。王ダゴベール（1世）の事績録とドゥブレの書に掲載された同王の文書が、エトルパニーに言及している。それらは、この荘園が国王からの贈り物として、サン・ドゥニ修道院に譲渡されたことを証言している。これらに、エトルパニーがサン・ドゥニ修道院所有の荘園の中に加えられている、862年に開催されたソワソン宗教会議の記録が支援を送っている。匿名作家は年代記の第3巻の中でこれに賛同し、そしてルイ肥満王伝はノルマンディーのヴェクサン地方、つまりジソールからそう遠くない所にエトルパニーとガマシュを立地させている。もう1つのエトルパニー<sup>3)</sup>はジュアンヌ河畔、シャマランドとエタンブの間にあって、モリニー修道院に帰属し、同修道院の年代記と古い文書がそれを証言している。

註

- 1) Étrepagny (Eure, ar. Les Andelys, ch.-l. c.).
- 2) 『ガリア公会議録』, 1巻, 502頁参照。
- 3) Etréchy (Essonne, ar. Etampes, ch.-l. c.).

### CXXXVIII. スティルピアクム<sup>1)</sup>

シャルル肥満帝（876-887年）は本書で初めて刊行された文書において、トゥルのサン・テーヴル修道院への修道士の復帰のために発給された、スティルピアクムStirpiacumの公設荘園の名前を挙げてい  
る。この荘園は、恐らく、オストラジー王国に含まれていたと思われる。筆者が探すこの土地は、地名  
の専門家たちからも殆ど隠れてしまっている。忘れ去られたか、改名によって変化を迫られたかのどち  
からだと、筆者は考えたい。

#### 註

1) Stirpiacum (不詳).

### CXXXIX. クレミュ<sup>1)</sup>

ルイ敬虔王が集会を開くために、リヨン郡内のStramiacumまたは Stramiacumと表記されるクレミ  
ユの荘園を指名したのは、同荘園が王領地または宮殿所在地として存在していたこと以外に理由はない。  
天文史家はルイの伝記の中で、「836年の夏季、皇帝はリヨン郡内、クレミュと呼ばれる土地で、息子ペ  
パンとルイと共に集会を持った」と語っている。そこで同帝はリヨン司教アゴバルとヴィエンヌ司教  
バルナールのために涼風を吹き込ませ始めた。ヴァロワはこの荘園がリヨンの東4,5里(16乃至20キロ)、  
ローヌ川左岸から約1里のクレミュであると主張する。しかし、この荘園がリヨン郡内ではなくて、ヴィ  
エンヌ郡内に含まれていることから、一部の人たちはこれに同意しない。彼らはローヌ川から1里離れ  
ているが、ピュジェ地方の、地元でトラモワと呼ばれる方を優先させる<sup>2)</sup>。しかし、上記の集会が開か  
れた年に、ル・マン司教アルドリクが自身の教会のために獲得したルイ敬虔王の文書には、「6月24日」  
に交付され、「ローヌ河畔のクレミュで行われた」とある<sup>3)</sup>。クレミュがローヌ河畔に位置したとあれば、  
1里（4キロ）は離れてはいなかったであろう。

#### 註

1) Crémieu (Isère, ar. La Tour-du-Pin, ch.-l. c.).

2) Ménestrier, P.-C.-Fr., *Abrégé méthodique des principes héraldiques, ou du Véritable art du blason*, Lyon, 1661 (引  
用不備).

3) 『雑録』, 3巻参照。

## CXL. ソワソン<sup>1)</sup>

Suessionenseと表記される古代都市ソワソンに沿って、これまでに指摘しておいた如く、クルーイあるいはメダールの宮殿があったが、中世に入って都市囲壁内にもフランス諸王に愛された宮殿が存在していたことを納得させる—もちろん、筆者の考えではあるが—史料が多く伝存する。そこで、ソワソンに王国の主座を持ったことが明らかなガリアの大昔の諸王ディヴィティアクスやガルバ、ローマ人の諸侯または長官、アエギディウスやシアグリウスといった総督、更にはクロヴィス（1世）やクロテール（1世）に関して、筆者は何も語らないとして、これらの人たちと似た存在のシルペリク（1世、クロテール1世の長男、561-584年）が宮殿のない都で生活していたと言うのだろうか。特に、クルーイの王領地—ソワソンの都にどんなに近かったとしても—、そして何よりもメダールの宮殿がオストラジー王シジュベール（1世、クロテール1世の次男、561-575年）の運命または王国に直結していた時、エンヌ川の向岸または右岸までクロテール（1世）の息子たちの4分国が恐らく伸びていたとして、サン・メダール教会の建立者王クロテール（1世）はシジュベール（1世）にオストラジー王国を残し、更に建設が始まっていた修道院の面倒すべてを彼に委ねた。しかし、もしその地がシルペリク（1世）の王国に含まれていたとしたならば、彼はこのようなことを決してしなかつただろう。すべての人たちがオストラジー王国に常に帰属していたと認識している、メダールの宮殿から7、8里しか離れていないサムシーの宮殿を追加しておこう。シジュベール（1世）の時代、オストラジーの首都であったランスの宮殿は、13里しか離れていなかった。

従って、ソワソンの宮殿は都市壁の内部に、それも筆者の判断では、数か所に分散して位置していた。比較的古い記録に信を置くならば、都市の西側、地元で「パリ門」と呼ばれる所から遠くない場所に、ソワソンの旧宮殿は建てられていた。それほど昔にはなく発掘された遺構の中から大理石の断片、非常に多くの金貨、非常に多くの古い銀貨が発見された。しかし、宮殿の建物はその東側には張り出していなかった。それでも、宮殿はかなり北側に反れていて、庭園はエンヌ川に届きそうであった。これらに円形闘技場—昔の人々は「窪地」と言っていた—が隣接していて、そこには今では「窪地の」サン・クレパン修道院がある。そして、戦車競走場もあり、古代ローマの威光が感じられる記念物があちこちにあった。メルシヨール・レグノーは『ソワソン史』の縮約版で、ソワソンで宮殿と言われている別の古い方を「伯の塔」と言っている。そこに参事会員または聖職者たちのサン・プランシブ教会が入っているのであるが、ずっと以前に破壊されると、彼らの一部はサン・レジェ騎士修道会に併合されている。他方、この出来事の記憶のために、より新しい城の中には今もなお神に捧げられた小さな場所、つまり聖プランシブに捧げられた礼拝堂が存在する。もしここに国王宮殿があったとすれば、諸王のお気に入りとして、また都市の守りとしてこれに匹敵するものは他にないと筆者は信じたい。この両方の宮殿に

向かい合って、上記の闘技場または「窪地」が付設された戦車競走場が立地していたのであるが、後者は2つの宮殿と正確に対応する形をとってはいなかった。加えて、多分これが原因で、シルベリクまたは彼の後継者たちの宮殿がソワソンのその場所に設置され、その後宮宰エプロワンによってノートル・ダム修道院に改造されたのであろう。そしてそこにエプロワン自身の住居と宮殿とが建っていた、と地元の人々が伝えている。加えて、修道院の囲壁の近くに、「エプロワン通り」または「エプロワン十字路」が思い出として残されている。多分彼の名前で、後世の人々によって呼ばれていたのがあって、筆者はエプロワンの住宅が宮殿と別物であったとは考えていない。何故なら、エプロワンは祖国愛からその住宅に非常に頻繁に滞在することで、それが殆ど宮殿の役割を果たしていたから。

有名なクリサとアラバステルの城または宮殿に関して言い触らされていることを、筆者は受け入れるつもりはない。これらの建造物は架空のものではなかったのか。実際、それらは歴史に如何なる光も、古いソワソンに如何なる名称または栄光も残していない。一部の人たちはこれら2つの城は直ぐ上で筆者が述べたものとは異ならない、そして、明らかに、クリサ城に相当するものはパリ門の脇、アラバステル城に相当するものはサン・プランシプ教会の横に位置していたと考えようとしている。これ以上質の悪い見解が提出されないために、その通りであったと、筆者は認めることにする。次に、アラバステル（「白色」と「大理石」の意味を含む）の宮殿—もしどこかにあったとすれば—は、ソワソンにおいて有名な石の白さによってそう呼ばれていたのがあって、大量の大理石によってではなかった。ドゥブレは王ペパンの命令文書を公刊しているが、そこには「ソワソンの宮殿で、インディクティオの4年、4月3日、我々の主人ペパン王の統治の6年に行われた<sup>2)</sup>」とある。しかし、これは偽文書か重大な改竄によって改変されているため、筆者はソワソンの宮殿を称賛するものの中にこれを加えたくない。皇帝ロテール（1世、840-855年）の真正性の高い文書が同じドゥブレの書に収められている<sup>3)</sup>。これによって、ロテール（1世）はヴェルトランに住むサン・ドゥニ修道院の領民をすべての通過税の支払いから免除しているのであるが、そこには「ソワソンの都にて行われた（後略）」とある。そしてこの文言は、確かに、メダールの宮殿とソワソンの宮殿に関係している。

#### 註

- 1) Soissons (Aisne, ch.-l. ar.).
- 2) 『サン・ドゥニ修道院史』、697頁参照。
- 3) 同上、741頁参照。

CXLI. ティオンヴィル<sup>1)</sup>

Theodonis-villaと表記されるティオンヴィルの荘園はメロヴィング諸王の時代において、フランク人のテオドからその名称を受け取り、同じくフランク人の諸王によって王領地に加えられたと考えられる。つまり、カロリング家の創始者ペパンの統治の2年、キリストの年の753年、「モーゼル河畔のティオンヴィルの公設荘園にて」と、フレデゲールの後継者によって記されている。続いて、他の人たちも確かにそれを「ティオンヴィルの宮殿」とより正しく呼んでいた。こうして、その他は割愛するとして、ル・ティエ版とロワゼル版の『フランク王国編年史』とエジナルは一度ならず、テガンは831年の出来事に関する記述の中、ルイ敬虔王の事績録、『サン・ベルタン修道院編年記』がそれに言及している。フランク諸王の勅令や公会議記録がティオンヴィルでの集会を思い出させている。これらに、筆者はシャルルマーニュとその後継者たちのこの地で交付された少なくない文書を加える。それらの中にはシャルルマーニュのフラヴィニー修道院のために発給された統治の7年の文書<sup>2)</sup>と『ゲルマニア諸事』1巻で報告されている別の文書<sup>3)</sup>、ドゥブレとラブの書に収められたサン・マルタン修道院とサン・ドゥニ修道院に「統治の8年」と「統治の2年」に発給された文書2通がある。これらに、筆者はドゥブレによって引用されているサン・ドゥニ修道院所蔵の写本が添えられている年代記を加えておくが、そこには「主の化肉の783年、王妃イルドガルドは4月30日、主の御昇天の大祝日の前日、ティオンヴィルと言われる荘園で死去した」の言で、ティオンヴィルが言及されている。シャルル（マーニュ）は亡くなる王妃の傍にいて、彼はそこで命令文書をメスのサン・タルヌール修道院のために発給している。同文書は確かにマダウスの書にあるが、原本からの修正で明らかな如く、いくつかの書き誤りで損なわれている。また、ルイ尊厳者の文書を一部本書で刊行しているが、それはサン・ドゥニ修道院長イルドワンとリクボトンとの間のヴェクサン郡内にある所領の交換に関してで、彼の帝位の8年、「ティオンヴィルの宮殿にて」発給されている。これに続くのが、同地でサン・マルタン修道院にルイの統治の18年に発給された別の文書、3番目の統治の22年に発給された文書はシフレによって報告されていて<sup>4)</sup>、ここでマステケスの荘園の所有を巡って、ドンゼール修道院長イルディギスに勝訴させている。ダシェリーはオータン司教ジョナスのために、「イタリアにおける帝位の34年、フランスにおける統治の14年、インディクティオの1年、ティオンヴィルの宮殿にて行われた」とあるロテール帝の命令文書に言及している<sup>5)</sup>。これらに加えて、シャルル単純王（893-923年）がしばらくの間この荘園を所有していたことを、我々は命令文書2通から知っている。それらの1通はヴェルダン地方のサン・ミエル修道院の原本から筆者が抜き書きしたもので、そこには「統治の23年、復位の18年、広大な相続財産を獲得して5年、ティオンヴィルにて行われた」とある。他の1通はル・ミルが刊行している<sup>6)</sup>。最後に、皇帝オットー2世は977年、ティオンヴィルで作成された文書でサン・タルヌール修道院の諸特権を安堵している。その

原本は今日でも伝存する。ティオンヴィルの荘園はやがてリュクサンブール公に委ねられた後、ルイ・ブールボンが1643年、フランス王国に返還した。

註

- 1) Thionville (Moselle, ch.-l. ar.).
- 2) 『ヴェルダン編年記』(*Chron. Viridun*と誤記されている), 270頁参照。
- 3) 『ゲルマニア記念物』, 1巻, 60頁参照。
- 4) 『トゥールニュ史』, 262頁参照。
- 5) 『拾遺集』, 8巻, 141頁参照。
- 6) 『ベルギー国王文書集』, 272頁参照。

CXLII. ドゥエ<sup>1)</sup>

Theodwadumまたは Theodadumと表記されるドゥエは嘗てアキテーヌ王国の荘園の中に数えられていたが、アンジュー郡とアンジュー司教管区の中に含まれることは明らかである。何故なら、モンルイユ・ベレイとフォントブロー修道院から遠く離れてはいないが、ロワール川からは15マイルも離れている。ル・ティエ版『フランク王国編年記』は、王ベパンの760年のアキテーヌ遠征に言及した際、テドアドTeadoadと呼んでいる。ロワゼル版『フランク王国編年記』とエジナルはTheodoadと表記している。ここでアキテーヌ王ルイのために、父シャルル(マーニュ)によって、796年に冬を過ごすための館が建設されている。814年ルイがそこにいた時、「非常に多くの人々がやって来て」、父親の死を聞かされた。「父の死から30日後、同王はそこからアーヘンを訪れた」ことを天文史家に続いて、ルイ吃音王への書簡の中でアंकマールは証言している。832年ルイ帝の息子ベパンは、テガンが語っているのだが、「父の帝位について聞くと、ティオンヴィル宮殿まで行くことを開始した」。そこで、更に、ルイは帝位の22年、王位の21年、マラステンシスまたはモントリユ修道院の特権文書を安堵した。本書で原本に基づいて、銅板に刻まれて図版XXIXにおいて刊行されている彼の命令文書がこのことを教えてくれている。アンジェ司教のジョフロワとユルジャーはDoadum castellumまたは Doadumと表記し、ローマ教皇カリストゥス2世(1119-1124年)とその他は、確かに不完全な形ではあるが、既に触れている如く、フランス語のドゥエDoueに近づいている。加えて、今でもこの宮殿がそのままの形で残っているとされている。ユストス・リプシウスはそれを古代ローマの円形闘技場の残骸と見なしていた。更に、Theodwado Palatioの名称はトゥエToedus川から派生していると見られている。同川は今Le Toé、一部の文書では変形してLe Touと表現されているのを目にする。同地にダゴバール1世(623-638年)は司教にして殉教者聖ドゥニのための教会を建立したと言われているが、同教会は今では、トゥー

ルニュ修道院に従属する分院を伴った参事会形式の教会に変わっている。

註

1) Doué-la-Fontaine (Maine-et-Loire, ar. Saumur, ch.-l. c.).

### CXLIII. トゥールーズ<sup>1)</sup>

ヴォルク部族に属するテクトサージュ支族を征服したローマ人にとって非常に有名なTolosanumと表記されるトゥールーズには、ローマ風に建造された神殿、円形闘技場、その他の公共施設があった。次に、西ゴート族に従属させられると、彼らの宮殿になり、トゥールーズ王国の首都になった。それから、クローヴィス1世(481-511年)によってフランク領に編入され、その後ダゴベール1世の兄、シャリベールの手に委ねられるが、続いてアキテーヌ王国の中心にして大都市、特にルイ敬虔王と彼の後継者たちの時代に広く知られた。更に、諸王によって選ばれた諸公や諸伯はこの町を最高の褒美として保持していたであろう。トゥールーズは人々のすべての記憶の中で、誉れ高き栄光において周辺諸都市を凌駕していた。また、ここにおいて、ローマ人によって建設された宮殿の噂を聞くが、ピエール・ル・ヴェネラブル(1156年没)の時代に多くの階段でそこまで昇っていた神殿にそれが付設されていたことを除いて、その痕跡は今日どこにも残っていない。遍歴説教者ピエール・ドゥ・ブリュイの弟子たちに宛てた書簡の中に、「常に執政官または国王の法廷の演説口調であなた方に伝達されて、あなた方は元老院の議事堂Capitoliumにいつも集合しているのであるが、突如それが性急な話し方で叫ばれる<sup>2)</sup>」といった、ピエールの言葉がある。別の土地では広くコンシュールまたはスカピノと呼ばれているのであるが、トゥールーズでは、上記の理由から、公的役職の行政官はCapitousと言われている。フランク諸王の事績録や勅令集において、トゥールーズが頻繁に言及されている。シャルル禿頭王(843-877年)は王ペパンの息子ペパン2世と、後者によって呼び寄せられていたノルマン人からその町を奪い取るために、急いでアキテーヌに向かい、そしてそこでキリストの名の敵を打ち倒した。シャルル(禿頭王)がトゥールーズを攻囲し、そしてその首都を奪取すると、教会と修道院に幾つの特権文書を交付した。その1通を著名なバリューズが『勅令集』1巻補遺で刊行している。他の1通は、秀でたシルモンが勅令集に付された註で言及している。

註

1) Toulouse (Haute-Garonne, ch.-l. dép.).

2) *Contra Petrobrusianos hereticos*, 116, Migne PL, 774.

#### CXLIV. マーストリヒト<sup>1)</sup>

ウルスペルク修道院長コンラドの書において、ロレーヌ公ジスルベールからシャルル単純王（893-923年）によって奪取された王宮莊園を列記したフランスの作家は、それらの中にTrajectum ad Mosamと表記されるマーストリヒトを数え上げている。それが王領地であったことを否定することはできないであろう。この事実の非常に古くからある推測は、フランク諸王のTriectoまたは Trajectoと刻印された古い貨幣から発している。それらの一部をクロード・ブートルーが刊行しているが、Triecto sitという刻印を見せてくれている。嘗てマーストリヒトは自身の郡、自身の司教管区を有していたことから、昔の人々はこの名称に村vicus, 城, 小都市, そして時には都市を当てていた。筆者もマーストリヒトのヴィクスと言ったことがあるが、いと博識のヴァロワは、それは今もヴィクスWicusまたはヴィクWicと呼ばれている、橋の向こう側の郊外が都市に加わったことに由来すると、うまく指摘している。

註

1) Maastricht (オランダ, p. Limburg, Maastricht).

2) 『フランス貨幣研究』参照。

#### CXLV. トリーア<sup>1)</sup>

Augusta Trevirorumと表記されるトリーアは単に植民都市（コロニア）であったのみならず、ガリアにおけるローマ皇帝の安在所で、ローマに匹敵する巨大な戦車競走場、円形闘技場、モーゼル河畔の神殿、穀倉、公共施設全般を持っていた。そこには宮殿が新旧2つもあったと噂されている。新宮殿は「ダゴベールの穀倉Horreum」または「ダゴベールの宮殿」とも呼ばれている。それはそれとして、宮殿は実際には2つではなくて、最低3つあったと言うべきであろう。つまり、最初に、穀物を貯蔵するためのホレエンセで、諸侯やローマ人の省長官を迎えるために充てたのを誰が否定するであろうか。他方、古い宮殿は囲壁内ではなくて郊外にあったと、トリーア司教事績録の史実を伝える抜粋が教えてくれている。それ故、これら2つの宮殿よりも古いのがトリーアの囲壁内にあった安在所で、人々が頻繁に目にしてきたそれである。フランク諸王によって宮殿に変身させられた古代ローマ人の古い穀倉、ホレエンシスという名称が残っているが、結局そこにトリーア司教モドアルドゥスが王家の2人の子女、イルミナとモデスタのために高貴な教会を建立したのである。同司教は「郊外に位置する古い宮殿の中に別の子女の集団を配置し、彼女たちの母としてバシリッサを据えて監督させた」とのことである。ゴドフロイド・ヘンスケンスの『3名の王ダゴベールに関するディアトリバ<sup>2)</sup>』とトリーアの出来事の作家たちを参照せよ。

## 註

1) Trier (ドイツ, l. Rheinland-Pfalz).

2) Henskens, Godefroid, *Diatriba de tribus Dagobertis Francorum regibus*, Anvers, 1655, in-4°.

## CXLVI. トロリー

宗教会議録の中で、ソワソン郡内のTrosleiumと表記されるトロリーの王宮荘園は有名であったが、その地の真にして間違いのない立地は曖昧なままであった。ソワソン郡には、実際、2つのトロリーが存在する。1つはエンヌ河畔の、ソワソンとコンピエーニュの間の、後者寄りにある。筆者は自分の目でこれを丹念に探査した。しかし、ここには王宮荘園の、また集会を開催するに適した建物の痕跡は何もなかった。ソワソンにあるノートル・ダム修道院の最近刊行された古い文書2通がこれか、またはもう1つ別のものに言及しているのか分からない。これらから、ここで問題になっているトロリーの立地を探り当てることはまったくできない。別のトロリーは、ソワソンから約3里離れている。ラン郡内のノジャン修道院に向かっていくと、プレランクールという土地に出会う。ここには国王安在所があって、そこで4回公会議が開かれている。つまり、いと聡明なシルモンが909年、921年、924年、927年に挿入しているが、『フランスの公会議』の注記の中で、「トロリーは今でも集落の名前であって、ソワソンの町から2,3マイル離れている」と述べている。つまり、もしシルモンがこの地にエンヌ河畔のトロリーを比定しているとすれば、ソワソンよりもコンピエーニュ—正確に言えば、ここに近い—に言及すべきであった。兎も角、そうであったとすれば、それを確実に納得させるものが沢山ある。まず、ヴェルダ郡内にあるサン・ミエル修道院の原本から今回初めて刊行されたズエンティボル（ロレーヌ王、871-900年）の命令文書が教えてくれていて、それは「主の年の895年8月24日、インディクティオの13年、王ズエンティボルド陛下の統治の元年に発給された。司教座都市ノワイヨン近郊のトロリー村において行われた。神の名において、幸あれ。アーメン」のように終わっている。たとえこの村をソワソン司教管区内に数え上げているとしても、その場所は、筆者が上で提示した場所である。厳密には、ソワソンよりもノワイヨンから1マイルしか離れていない。多分、ソワソンからズエンティボルは出て行ったように思われ、そこからノワイヨンは少なくない険しい山々によって隔てられている。しかし、ここからは真つすぐでなだらかな道がノワイヨンまで延びている。この地には2つのトロリー、つまり上トロニーと下トロリーが確認される。両者は近接している。それは王宮荘園では頻繁に起きていることでもあり、これに関して筆者は何度も注意を喚起してきた。ここには教会も2つ、1つは聖ペテロ、1つは聖マルタンに捧げられている。2つの教会の間には小さな城がある。それは嘗て国王所有であったと、地元の人々は伝えている。そしてこの地が持つ位の高さは広い王道、隣接する森、周辺にある集落の所有を十

分証明している。同地にはいくつかの小さな城または騎士たちの家々—人々がfeudaと呼んでいる—と、同じ司教管区の多くの集落におけるよりも多くの住民たちの家々がある。シルモンによって『フランスの公会議』の中で挙げられているトロリーでの宗教会議に加えて、同地では更に955年王ロテールが裁判集会を開いていた。それへの言及はシフレによって報告された同王の文書で行われているが、そこには「いと栄光に満ちたフランク人の国王ロテールのサイン、王妃エマのサイン、彼らの息子で王のルイのサイン、尚書ギイが大司教にして尚書長であるアルトの代わりに承認した。トロリーでの裁判集会において行われた。11月9日、インディクティオの14年、いと栄光に満ちた王ロテールの統治の2年」のようにある。その箇所で、ロテールの特権文書を確認すべく、大昔によく使用されていた様式に従って、955年より後に、別の手で、より薄められたインクで、エマとルイの下署が付け加えられたことを、シフレは抜かりなく注意させている。

註

- 1) Trosly-Breuil (Oise, ar. Compiègne, c. Attichy).
- 2) 『ノートル・ダム・ドゥ・ソワソン修道院史』, 429, 438頁参照。
- 3) 『トゥールニュ史』, 280頁参照。

## CXLVII. テュセイ<sup>1)</sup>

一部の人たちは間違っ、トゥル郡内のTusiicumと表記されるテュセイと既述のドゥジーとを混同している。この地は、フロドアールの広く知られた年代記の中で、文字DとTとの容易な転換または写字生の間違いによってか、943年の出来事の記述の中で、「ムーズ河畔のテュセイ」Tusciicum super Mosamと表記されている。つまり、—筆者が直ぐ上で言った如く—、トゥル小郡内のテュセイはヴォクルールに近い、ムーズ河畔のありふれた小さな集落に過ぎず、同じ郡内の、トゥルから2里離れた、ムーズ川とモーゼル川の間位置するTulliacumと表記されているテュレイまたは広くテュル・オ・グロセイユと呼ばれている集落とは区別されねばならない。嘗てテュセイの荘園は有名であった。何故なら、860年に開催された、14名の司教たちが参加した公会議がそこで開催され、同地でシャルル禿頭王はオータン司教ジョナースに特権文書を下付している。また、ガウスレヌスを介してブルゴーニュで公布されたシャルル禿頭王の勅令、主の化肉の865年テュセイから公布された勅令、またはテュセイの人々に通告された勅令、更には伯ボソンの妻、アンジェルトルドに関する話からも明らかである。最後の件に関しては、教皇ニコラウス（1世、858-867年）のシャルル禿頭王に宛てた書簡が伝存し、アंकマールは王ロテールの離婚に関する書物でそれを問題にしている。しかし、テュセイに関しては、余り多くは

伝存していない。

本書の補遺で、筆者は第2ベルジカのトゥール・シュル・マルヌの王宮莊園<sup>2)</sup>に言及している。そこでシャルル単純王（893-923年）は少なくとも滞在していた。筆者の推量ではあるが、このトゥール莊はシャトー・ポリシアン<sup>1)</sup>の西に位置し、エンヌ川の右岸から余り遠くない、地元でル・トゥールと言われている同名の貴族家系の拠点であった。この推論の確かな証拠として、取り合えず、自伝3巻3章で「ポリシアンにあるトゥールの城」と呼んでいるノジャン修道院長ギベールを挙げておこう。

註

1) Tusey-sur-Meuse (Meuse, ar. Commercy, c. Vaucouleurs, c<sup>ne</sup> Vaucouleurs).

2) Tours-sur-Marne (Marne, ar. Reims, c. Ay).

CXLVIII. ヴァランシエンヌ<sup>1)</sup>

Valentianaeと表記されるヴァランシエンヌが、皇帝ヴァレンスによってこう呼ばれていることに、当然のことに、識者たちは一致している。彼らの見解を、まず、「アルカディウスとホノリウス（393-433年）両帝以前に編纂された」、帝国のガリアにおける官職録が支持している。その中で、「ガリア騎兵隊の長官である高貴な人と共に」、ヴァランシエンヌの人々はアンブシヴァリイ族とバターヴ族の丁度中間に陣取り、そして人数と高貴さにおいて突出していた。フランク諸王の時代においても、ヴァランシエンヌは重要であった。クローヴィス3世（691-695年）は統治の3年、「ヴァランシエンヌの人々と一緒に、キリストにおいて使徒的な人々、余の教父、アオンソアルドゥス（中略）、司教、または高貴な方々、ゴディヌス（中略）、万人の訴えを聞くべく、または正しい判決で終わらせるべく着席した」とある。同じ場所で、「シュルの人」と綽名されるティエリー（4世、720-737年）は統治の3年、3月初日、これまでヴァランシエンヌでサン・ドゥニ修道院に発給された諸王と諸司教の特権文書を安堵した。シャルルマーニュは、古い『フランク王国編年記』がエジナルと共に言及している如く、別の宗教会議を771年、ヴァランシエンヌで開催している。他方、フォントネイの戦いの後、ニタールの証言によれば、シャルル禿頭王（843-877年）は妻エルメンガルドを伴って、「彼の封臣たちの中で、ヴァランシエンヌの者たちに対して、見張りのためにムーズ川とセヌ川の間に留まらねばならないと命令した」とあるが、この時彼の封臣ニヴェロングスに、ペラルが語っている命令文書を交付している<sup>2)</sup>。そこには「統治の3年、1月13日、インディクティオの6年、ヴァランシエンヌの宮殿で行われた（後略）」とある。シャルル（禿頭王）は10年後同じ場所で弟ロテールと会談し、協約を交わして平和を確認している。『サン・リキエ修道院年代記』の中で、同シャルル（禿頭王）はヴァランシエンヌで裁判集会を開いたと伝えら

れているが<sup>3)</sup>、そのことはよく調べる必要があるように見える。何故なら、その際ヴァランシエンヌはロテールの王国に属していて、ロテール（1世、840-855年）が死んだ後でないと、シャルル（禿頭王）はそれを手に入れることはなかった。エジナールはヴァランシエンヌをファマルス郡内の村vicusと呼んでいるが<sup>4)</sup>、他の人たちはそれを正当な理由によって、大都市、王領地、小都市、非常に強固な城と呼んでいる。ドゥブレの書にあるロテールの文書—その見本を、本書で銅板に刻んで提供している—を参照すべきであろう<sup>5)</sup>。「ファマルス郡内、エスコーと呼ばれる川沿いの、ヴァランシエンヌの王領地にある1マンス」を譲渡しているが、そこには「統治の5年、インディクティオの8年、ヴァランシエンヌの宮殿にて行われた（後略）」とある。その後、この地はフランドル伯領、その後再びエノー伯領に帰属するが、モンスと共に伯領内において主要な地位を獲得する。但し、連勝の軍隊によって最後にあつと言う間に、大王ルイ（14世、1643-1715年）の手に帰すまでのことではあるが。

#### 註

- 1) Valenciennes (Nord, ch.-l. ar.).
- 2) 『ブルゴーニュ史料集』, 143頁参照。
- 3) 『サン・リキエ修道院年代記』, 3巻, 12章参照。
- 4) 『聖マルスランと聖ピエールの遺骸奉遷記』, 1巻, 4章参照。
- 5) 『サン・ドゥニ修道院史』, 786頁参照。

### CXLIX. ヴァンデーヴル<sup>1)</sup>

ラングル地方に位置するVendoperaと表記されるヴァンデーヴルは、「皇帝ルイがサン・ピエール修道院にそれを譲渡した」時、王領地に属していた。『サン・ベルタン修道院編年記』は865年の出来事として、「ある姦夫と一緒にロテール（1世）の王国に逃げ込んでいた」ボソンの妻アンジェルトルドを「シャルルの庇護下にこの地に迎え入れた」と伝えているが、この荘園がオストラジー王国とブルグンド王国のどちらに属していたかについては、疑問が残されている。この荘園は両国の境界に位置しているが、それがブルグンド王国の領域内に位置していたと、筆者は考えている。但し、ロテールが彼の王国内への逃避をこの尻軽女に許したことは、ランス司教アंकマールが教皇聖ニコラウス（1世、858-867年）に宛てた書簡から明らかである。加えて、この女の名前は、テュセイに参集した教父たちの間で評判が悪かった。878年にトロワで開催された宗教会議の記録の中にある如く、トロワ司教オテュルフはイザアクに反対して、この荘園が自身の司教管区に帰属していることを執拗に主張した。結局、ローマ教皇ヨハネス8世（872-882年）は伯ボソンに宛てた書簡で、同荘園がポティエールのサン・ピエール修道院に返還されるよう要請する。彼は使徒の命令に従ったと思われる。つまり、その後、同地はル

イ7世（1137-1180年）治下，クリュニー修道院に従属する修道院の中に加えられる。また，ヴァンデーヴルはル・マン地方にもあり，いと敬虔なレオナルがそこに修道院を建立している。また，ゴルズ修道院の匿名の修道士によって，聖ゴルゴンの遺骸奉遷譚の中で言及されているが，「ある時はメス地域，またある時はトゥル地域に位置する王宮莊園」としてのVenderaまたは Venderiaが存在する<sup>2)</sup>。

註

1) Vendevre (Aube, ar. Bar-sur-Aube, chef-l. c.).

2) 『聖者記録集 (ベ)』, 3巻下, 215頁参照。

CL. ヴネット<sup>1)</sup>

VenittaまたはVenitaと表記されるヴネットはコンピエーニュの宮殿に最も近い王宮莊園の中で，ボーヴェ郡内のオワーズ川右岸域，コンピエーニュから西に厳密に1里（4キロ）離れたところに位置する。修道士エグラは『聖アンスペール伝』の中で，「尊敬すべき修道院長アデュルフは同伴者たちと共に，一聖アンスペール（700年頃没）の遺骸を運んで，ボーヴェ郡内，オワーズ河畔に位置するヴネットの王宮莊園まで大なる畏敬の念をもってやって来た」のような言葉で言及している。そして続けて，「それ故，上記のヴネット荘に到着すると，ルアンの町の属司教たちが聖なる司教の遺骸と対面するためにそこにいた（後略）」とある。シャルル禿頭王は877年，同地の国王礼拝堂をその創建文書の中で，コンピエーニュ修道院に委ねている。この文書は本書で図版として公刊されているが，ここでは「ヴネットの礼拝堂，ヴェルブリーの礼拝堂，ナントウイユの礼拝堂，モンマクの礼拝堂（後略）」と，王宮莊園の礼拝堂のみが列挙されている。同じく，同シャルルは別の文書で同コンピエーニュ修道院に「ヴネットの自由市場」を譲渡している。そして，シャルル単純王（893-923年）は「12名の非自由人と共に教会」をそれに追加し，同じく「リユルフが国王から手に入れていたものとして与えていた2マンススの土地」，そして最後に「ランドがサン・コルネイユ修道院に寄進していたヴネット荘内の畑」と「礼拝堂付き司祭ハディゲルスに委ねていた12ボニエの自有地」を安堵している。次に，同王と同王の息子ルイがオワーズ川に架かるヴネットの橋に至るまで，ヴネットにおける船の渡河税の9分の1と10分の1，またコンピエーニュとヴネットから運ばれる葡萄酒に課せられた税の9分の1を譲渡している。これらすべてから，読者諸賢はヴネットが豊かであったことを想像するであろう。そこから王領地にすべての税と収穫物がいつも運び込まれていた。周辺地域のブドウ畑から，ヴネットの由来や名称を引き出そうとする人たちがいる。筆者には予言する暇はない。この地のブドウ畑が何かがどこで生まれたのかを予言しているとしても，ギヨーム・ドゥ・ナーンジの継承者は1358年，この年ヴネットはイギリス人の放火によっ

て灰燼に帰したことを報告している<sup>3)</sup>。

註

- 1) Venette (Oise, ar. Compiègne, c. Compiègne-sud).
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 2巻, 106頁参照。
- 3) 『拾遺集』, 11巻, 861頁参照。

### CLI. ヴェルブリー<sup>1)</sup>

Vermeria, 少し崩れてVerimbriaと表記されるヴェルブリーはコンピエーニュからサンリスに向かう人々が出会う、小さなオトネット川が流れ込むオワーズ川に沿ってあり、従って、すでにメロヴィング諸王の時代から王宮荘園であった。そのことをフレデゲールの書の補遺が教えてくれているが、そこには宮宰シャルル（・マルテル）が739年フランク人の地域に戻ったが、オワーズ河畔—ここではsuper Issara fluvioとあるが、エモワンはsuper fluvium Isaramと訂正している—のヴェルブリーの荘園で病に倒れたとある。更に、その時、『ヒルデスハイム年代記』では、彼は741年ウレンピリアの公設荘園で死去したと間違って伝えられている。実際には、この出来事は同川沿いのキエルジーで起きたことを、記述の確かな編年史が首尾一貫して教えてくれている。シャルル（・マルテル）の息子ペパン（3世）は752年、ヴェルブリーの宮殿で諸司教が集まる宗教会議を招集しているが、そこにはブシャル、イヴ、グラティアンが参列していたと言われている<sup>2)</sup>。そのことを「3月1日、統治の1年、ヴェルブリーで平穩に発給された」命令文書が証明している。それに続く別の文書では、「高貴な人で、いと栄光に満ちた王ペパン陛下のサイン。余の統治の3年、ヴェルブリーの宮殿で交付された」とある<sup>3)</sup>。3番目は王ペパンの命令文書で、『キリスト教ガリア』の編者がユトレヒト大司教管区に関する史料の中で公表している<sup>4)</sup>。同王はボニファキウスの要請に応じて、統治の2年にそれを交付している。4番目は、同年、『フォントネル修道院年代記』が公表している。同様に、サン・カレ修道院の文書には、「余の統治の10年、6月10日に発給された」とある。以上すべてが、ヴェルブリー宮殿で作成されている。

父ペパン（3世）と同程度に、シャルルマーニュはヴェルブリーを気に入っていた。そこで統治の8年初頭、サン・ドゥニ修道院の諸権利に慎重に対応することを望んだ。加えて、「ヴェルブリーにおける宮殿工事に関する勅令」がヴェルブリーで始まった新しい工事について少し教えてくれている。しかし彼の孫、シャルル禿頭王（843-877年）にとってこの地は遥かに馴染み深いものであった。実際、『フォントネル修道院年代記』抜粋が証言している通り、「シャルルは6月、ヴェルブリーの宮殿で裁判集会を開いていた」。しかし、その集会が6月より前に始まっていたことを、フロドアールは「栄光に

満ちた王シャルルの統治の10年，5月26日，インディクティオの13年，ヴェルブリーの宮殿で行われた」と記されているランス司教座教会に交付された文書を公表して教えてくれている<sup>5)</sup>。この集会で同王は命令文書を交付して，ヴィルロワン修道院をコルメリー修道院に委ねている。この文書はシャルルが6月より前にヴェルブリーに到着していたことを証明している。ヴェルブリーでは別の宗教会議が「栄光に満ちた君主シャルルの命令によって，主の化肉の853年，インディクティオの初年，8月27日に」開かれ，そこでヌヴェール司教エリマノンに自身の教会の監督が返還されたことを，会議の記録が伝えている。これらの記録には，統治の13年ヴェルブリーにおいて，同エリマノンに交付されたシャルルの命令文書が付加されている。本書では，ヌヴェール司教座教会の文書集から作成したものを公刊している。同様に，プレカリア契約として伯コンラドに譲渡されていたことを，宗教会議文書で諸教父が否認していた，リエプヴァル在，サン・ドニ修道院のサン・ティボルト分院に関する決議。最後に，そこで報告されているソワソン公会議の勅令。シャルルは統治の15年にもトゥールネオ司教イモンに，統治の「15年，インディクティオの4年，7月25日」に特権文書を付与した時，ヴェルブリーに滞在していた。この「インディクティオの4年」は，刊行されている通り<sup>6)</sup>，誤記の被害にあっている。しかし，同シャルルの文書がそれを訂正してくれている。ソワソンのサン・クレパン・ル・グラン修道院の文書庫で筆者が原本を閲覧したのであるが，それはブリー郡内，ウルク川沿いに位置する（中略），いくつかの交換された財産のために，「主任司祭にして余の聖なる宮殿の先唱歌者フェルベールに」発給されたものである。「ルイの代わりに書記のアエネア」の下署の後，手書きのサインの下に，「先唱歌者レウトボドゥス」の2語を読むが，多分「命令を伝達したambasciavit」を表現していると考えられる，ティロ式速記を伴うものであった。そして最後に，「いと栄光に満ちた王シャルルの統治の15年，インディクティオの3年，6月27日に発給された。ヴェルブリーの宮殿で行われた（後略）」と記されている。キエルジーの宗教会議は856年7月7日に開催されているが，7月12日に開催されることになっているヴェルブリーの全体集会に関して，シャルルの統治の16年ではなくて，17年初頭に結び付けられるべきである。以上のことは，同王の命令文書2通—これらはともに重要なもので，筆者も閲覧している—が教えてくれている。つまり，1通は，交換されたいくつかの所領と非自由人のために，シャルルの統治の17年，7月12日にサン・ドゥニ修道院長ルイに付与されたもの，他の1通はコルビー修道院のためのもので，「いと栄光に満ちた王シャルルの統治の17年，インディクティオの（空白），10月3日に発給された。ヴェルブリーの宮殿で行われた」とある。「西アングリア王エディルフスがローマから戻る途中，結婚の約束をした，王シャルルの娘，ジュディトを10月1日ヴェルブリーの宮殿で妻として迎え入れた」と、『サン・ベルタン修道院編年記』は伝えている。また，869年にヴェルブリーで開かれた別の宗教会議にシルモンは言及しているが，同会議の記録には「ラン司教アंकマールは告発されると，ローマ教皇庁に

助けを求めた」とある。これは、疑いなく、ル・ミルが870年に誤って措定した宗教会議のことで<sup>7)</sup>、ここでヴェルブリーに集まったランス司教アंकマルとその他の司教たちによる文書はサン・ヴァースト修道院の自由と所領に言及している<sup>8)</sup>。筆者は、ごく最近、サン・トドワン修道院の文書庫でシャルル禿頭王のルアン司教座教会のための別の重要な真正文書を閲覧した。それは本書新版の補遺において公開されているが、そこには「ヴェルブリーの宮殿で行われた。我々の主人、いと栄光に満ちた王シャルルの統治の24年、11月4日に交付された」とある。最後に、人生の最晩年、877年にシャルル禿頭王は自身が建立したコンピエーニュ修道院に「ヴェルブリーの礼拝堂とヴェルブリーの住宅の十分の一税」を刊行されている文書で譲渡している。筆者はその見事な陰刻を本書で刊行している。

ルイ吃音王（877-879年）の息子、カルロマンは戦争の緊張の合間にソワソンのサン・クレパン・ル・グラン修道院に寄進を行っているが、文書には「前記エリフォンの求めに応じて、ヴェルブリーの2マンススを、統治の6年、12月10日、インディクティオの3年、レ・ザンドリス修道院で行われた」とある。アラスの古事の中で、王ウード（888-898年）の文書—その一部が刊行されている—が「12月21日、統治の6年、ヴェルブリーの宮殿で」下付されている。同じく、モンティエラメイ（Montieramey）修道院にコース・シュル・ロワールで下付された同ウードの文書には、「それ故、ヴェルブリーの法廷にやって来たとき、そこにはフルク（中略）がいた。ウード陛下の統治の5年、主の化肉の892年、インディクティオの2年、9月21日に下付された」のようにある<sup>9)</sup>。シャルル単純王の統治の8年、インディクティオの3年、キリストの（化肉の）900年—この年、同シャルルがオートン司教ワロンに、『キリスト教ガリア』2巻で刊行されている文書を発給している—、この宮殿はノルマン人によってまだ荒らされてはなかった。更に、918年、シャルルの統治の26年、インディクティオの7年も同じ状況で、この年彼の妻フレデルナがコンピエーニュで建立した「サン・クレマン礼拝堂に」「ヴェルブリーに広がる2つのマンススを非自由人たちと共に（中略）」、つまり「ヴェルブリー橋の近くで、宮殿の向かい側に位置する耕圃1つ、そして王領地の共同耕作地の取り分（中略）」を寄進している。この文書は同王の真正文書から本書で公刊されている。しかし、シャルルがペロンヌに留まっているとき、ヴェルブリーはノルマン人の侵略を受けるが、完全に破壊されるまでには至っていなかった。つまり、シャルル（単純王）の孫、王ロテールが969年、統治の13年に同地に滞在していたことは、フルーリ修道院長リシャルルに宛てて、「6月5日、インディクティオの10年、ヴェルブリーの宮殿で交付された」文書から明らかである。同年の6月13日に、ボンヌヴァル修道院に発給されたこれらと殆ど同じ内容の文書を、ラブが引用している<sup>10)</sup>。最後に、ロベール（2世）は1028年に「ヴェルブリーの余の宮殿に隣接したブレティシーの所領」について、別の個所で引用した文書で言及している。更に、ルイ7世（1137-1180年）とフィリップ尊厳王（1180-1223年）はコンピエーニュの森の中に位置するサン・ジャン・バティスト修道院の

創設・寄進のための命令文書の中で、この国王安在所に言及している。加えて、オワーズ川左岸にヴェルブリーの古い宮殿の残骸が今でも残されている。この地は決してみすぼらしくはない所領に転換され、今はパリのショレ学院（枢機卿ジャン・ショレの創建）の所有になっている。

註

- 1) Verberie (Oise, ar. Senlis, c. Pont-Sainte-Maxence).
- 2) 『サン・ドゥニ修道院史』, 693頁参照。
- 3) 同上参照。
- 4) 『ユトレヒト司教座教会史』, 初版, 222頁と『ベルギー記念物』3巻, 12章参照。
- 5) 『ランス史』, 3巻, 4章参照。
- 6) 『勅令集』, 2巻, 75頁参照。
- 7) 『ベルギー王文書集』, 22頁参照。
- 8) 『ボワトゥ伯史』, 152頁参照。
- 9) 『キリスト教ガリア』, 4巻, 80頁参照。
- 10) 『雑録』, 140頁参照。

CLII. ヴェルヌイユ<sup>1)</sup> とラーニュヴィル<sup>2)</sup>

Vernumと表記されるヴェルヌイユの宮殿の名称、立地、起源は謎に満ちている。従って、より一層注意して究明されねばならない。王ティエリー（2世, 612-613年）の息子、シルドベール（2世）は本書で原本から筆者が抜き出している裁判集会の記録の中で、この地をAd Vernoと言い、またはペパンは、同王の命令文書のドゥブル版が間違っていないとすれば、ad Vernum, そして infra terminum Verninsemと言っている。しかし、ルイ敬虔王（814-840年）の2通の貴重な文書とロテール（1世840-855年、）のシフレによって報告されている別の文書、同じくシャルル禿頭王（843-877年）の別の真正文書がこれと対立している。それらはVernumではなくて、Vernの4文字を無変換のまま表示している。この荘園の古い名称—ゴール語またはフランス語であったと考えられる—はラテン語で時々 Vernis, より頻繁にはVerbumと、公会議の記録の中で表現されていたと、筆者は判断する。

一部の研究者はVernumをセーヌ河畔のVernonの町に比定するが、『サン・ベルタン修道院編年記』が2か所で、彼らの主張を正当にも否定している。一部の研究者たちはVernumをオートヌ河畔の、クレピー・アン・ヴァロワとレーの森との間に位置するVezまたはVer—これに関しては、アンゲラン・ドゥ・モントルレに拠る—と呼ばれる場所に比定する。以上2つは軽率な推論から主張されたものではない。加えて筆者は、その土地の特徴に促されて、Vernumをフランスの作家たちによく知られた、宮殿があるヴェルブリー Vermeriaに比定することを熱心に考えている一部の人たちを見てきた。しかし、

遙かに多くの人々は－あちこちで見られるNantoからNantoilumまたはNantoliumへの如く－，古い Vern またはVernoから，森の只中に位置し，嘗ては辺境伯，今日では公の称号で有名なオワーズ河畔のヴェルヌイユVernoliumに比定されることを教えてくれている。そして，確かに，この地はコンピエーニュを発ってサン・ドゥニ修道院に向かう人々が出会う場所で，『サン・バルタン修道院編年記』に拠ると，ルイ吃音王（877-879年）によって定められた道順にも合致している。更に，ヴェルヌイユが至る所非常に広大な森によって覆われていることから，Vernumが周囲を森に取り巻かれていたことを幾つかの同名の場所から，いと明晰なアドリアン・ヴァロワは鋭い眼識で推論している。上記諸論の間で躊躇らっている人には，サン・ドゥニ修道院に宛てた王シルドバール（2世）の既出の文書が救いの手を差し伸べるであろう。この場所を特定するために，非常に確かな論拠がここから引き出される。同文書は次のように述べている。「サン・ドゥニ修道院の権利代行者たちはモンマクの余の宮殿を訪れ，ヴェルヌイユ地方のシャイイと呼ばれる土地にある件の製粉所はラニー・ル・セクの荘園で彼らの前任者たちが大昔から常に所有していたものと通告した。他方，上記の権利代行者たちは高貴な人，余の宮宰のグリモアールにそれは彼らのヴェルヌイユVernumの荘園に帰属していたと言っていた。その後，サン・ドゥニ修道院の権利代行者たちは，非常に多くの年月の間ヴェルヌイユの同上製粉所は同修道院のラニー・ル・セクの荘園以外には帰属していなかったと言っていた。宮宰エブロワンは同修道院がこの荘園を所有していたこと，同製粉所がこの荘園に帰属していたことを知っていた」と。以上から明らかかなことは，シャイイの荘園とヴェルヌイユ領地にある製粉所はラニー・ル・セクからそう遠くないところにあったこと，そしてもし一方がVernoだとすれば，両方の荘園はサン・ドゥニ修道院によって所有されていてことである。従って，その荘園はヴェルヌイユに非常に近かったことになる。すぐ後で，この宮殿の真の立地に関する確かな証拠を示すであろう。

この問題に関しては，地名の専門家たちに相談した－これ以外に考えられなかった－結果，Vernoの宮殿の古くからの場所は，今日新しいヴェルヌイユの城が占めている場所と同一ではないことを伝えてきた。そうではなくて，それはより下流の谷間－そこには，今日でもなお「旧城」という名称が付されている建物の一部が残っている－に立地していた。この古い宮殿の領地または－王シルドバール（2世）が述べている如く－，ヴェルヌイユの領地は，今日もそうである如く，オワーズ川で終わってはいなかった。そうではなくて，オワーズ川を越えて，ボーヴェ郡内の幾つかの集落の上に乗って，つまりヴェルヌイユの対岸でオワーズ川に合流しているプレシュ川からそう遠くないところまで伸びていた。プレシュ川との合流点からほぼ2マイルの，今日ラニーヴィルまたはラーニュヴィルと呼ばれている所に，上記のシャイイの荘園と製粉所が立地していた。今日でも往時の規模の片鱗を見せている。それはプレシュ川の右岸に位置し，下流にある6基の製粉所により豊富な水が蓄えられるために，そこで2つの川床に

分かれている。それらのどちらが古いシャイイであったかははっきりしていないが、やがてモンティエと呼ばれることになる集落に近い集落がシャイイとして使用されるようになったと思われる。しかし、次のことが、これに対立している。ラニー・ル・セク荘のマンズスー人々はこれをAntiliacum, またはCantilicumの封地と呼んでいるが、その名前から王シルドベール（2世）の文書のシャイイに非常に近い。これらに加えて、ラニーヴィルの北側、プレシュ河畔にサクヴィルまたはサシュヴィルと言われる別の小集落が同名の水車を伴って立地する。それは更にラニーに従属しているが、シャイイの荘園と全く相いれないとも思えない。それはそれとして、上記のシルドベール（2世）の命令文書で言及されたラニーがヴェルヌイユの宮殿に隣接していたこと、それ故、今日ラーニュヴィルと呼ばれている場所と異ならなかったことは明らかである。そこにはその後、マルタ騎士団の高貴な支庁舎—一般にcommendatoriaと言われている—が創設される。その庁舎の長または総監は単にその土地の住人たち、そして聖レミに捧げられた聖なる教会の小教区民に対して長として振る舞うのみならず、近隣の一部とブリー地方やフランドル地方に点在する多くの所領—それらはマルタ騎士団員の間にこのような豊穡で羽振りの良い特性を与えている—からの利益を享有する。

ラニーヴィルの周辺には、豊かな泉が湧き出ている。それらは特にこの土地から甘い水をプレシュ川に運び込み、サクヴィルまたはサシュヴィルと呼ばれる小集落が橋によってラニーヴィルと繋がっている。ここから明らかに、読者諸賢はプレシュ Briga河畔のラニー Latiniacumの荘園がLitanobrigamまたは—非常に有名な写本にある如く—Latinobrigam, これらとほぼ同様の Latiniobriga やLatinium-brigae, または『旅程表』の中でアエティクスによって言及されている一方、シルドベール（2世）が自身の文書の中で、briga（ケルト語で「橋」の意）の名称は省略してはいるが、実際にラニーの荘園 Latiniacum villaと言っているプレシュ河畔のラニー Latiniacum ad Brigamと全く異ならなかったと言われていると推論するであろう。より新しい研究者はこの地にLatiniacensi-villa, フランス語でラーニュヴィルLagnevilleの名称を当てている。更に、読者諸賢はプレシュの名称によって、スペルマンの書における古人たちの如く、橋または一部の人たちが優先している泉、そして最後にプレシュ川を理解するであろう。ラニーヴィルにおいては、その他はこれ以上に適合することはあり得ないことから、これら3つが一致している。この土地がヴェルヌイユの宮殿に近接していることから、フィリップ・クリューファーと地理学における彼の優秀な後継者たちはこの古いラニーヴィルに全く触れていない。アエティクスによって決められたマイルに依拠すると、アミアンからソワソンまでは「(ここから) カミリアカまで11ローマ・マイル, (ここから) ボーヴェまで13ローマ・マイル, (ここから) Latinobrigaまで18ローマ・マイル, (ここから) サンリスまで3ローマ・マイル, (ここから) ソワソンまで12ローマ・マイル」のようにになっている。Latanobriga またはLatinobrigaがVerno またはVernolioに代わって使用されてい

る。結局、それは昔の場所に戻され、ヴェルヌイユの宮殿の真の場所がシャイイの製粉所とラニーの莊園との関係で明るみに出され、それを知って人々は一安心するだろうと、筆者は思っている。

アエティクスの書に登場するLatinobrigaをVernoに比定した人々は、その地の起源を古代ローマ時代にまで遡及させねばならなくなった。王クロテール（3世、656-670年）の「ヴェルヌイユの国王宮殿で作成された」文書が掲載されている聖バボレンの伝記から、実際、ヴェルヌイユの宮殿はより後で創建されていて、クロテール3世の治世に国王莊園の仲間入りを果たしているに過ぎない。やがて、宮宰エブロワンはこの地を私用に当てている。シルドベール（2世）の上記の文書はそのことに触れていないので、それはクロテール（3世）の存命中に起きているか、ティエリー（3世、675-691年）の許可と得て、私用に当てたのであろう。サラセン人の許から勝利者として戻ってきたシャルル・マルテルは同地に寄っている。オルレアン司教ユシェール（718-738年）は、自身の相手を非難する文書が伝えている如く、ヴェルヌイユの王領地まで同マルテルを追いかけている。シルデリク（3世、743-751年）の統治の5年、同じく宮宰ペパンは万人の訴えを聞くために、ヴェルヌイユの公的宮殿に留まっていたと、サン・ドゥニ修道院の史書は伝えている。ペパンは国王になると、「教会の秩序を少しの間で回復さそうとして、ガリアの殆どすべての司教たちをヴェルヌイユの宮殿で開かれる公会議に参集させた」とある。即ち、この会議は755年-パロニウスが記しているような次の年ではない。彼は如何なる理由かは知らないが、15条の規約をこの公会議に帰している。公刊された規約では30条となっている-、7月に開かれている。このヴェルヌイユの集会に、同ペパンの治世に開かれた別の宗教会議の10条の規約が続いている。ある人はそれが再びヴェルヌイユで、またある人はメスで開かれたと考えている。ヴェルヌイユの公会議については、「3月1日、レスティーンヌで開かれた別の宗教会議」が伝えている。そこでペパンまたはむしろカルロマンは、「ヴェルヌイユにおいて彼らに十全に命令した如く、修道院に十全に与えられねばならない、十分の一税または九分の一税」について話している。

802年アキテーヌ王ルイ敬虔王はフランキアのトゥールに戻った皇帝シャルル（マーニュ）をヴェルヌイユまで同伴したと、天文史家がルイ敬虔王の伝記で言及している。その後、同王は息子ロテールを伴って、サン・ドゥニ修道院を200ミュイの葡萄酒の非常に厳しい負担から解放する。一度サン・ドゥニ修道院のある院長が葡萄酒の欠乏に際して、ヴェルヌイユの宮殿を自発的に訪れた時、国王の役人たちからかくの如き負担を次々と押し付けられていたのである。命令文書の文章は「イルドワンは余の高処に次のことを知らせた。彼らの先任者たちのある者がその職にあったとき、葡萄酒の不足が発生したため、その時国家を治めていた人-エブロワンまたはギスルマール-によって、欠乏と不足のため、サン・ドゥニ修道院から、我々のヴェルヌイユの莊園に葡萄酒が供出された。そこでその時期同聖なる教会を監督していた同院長は200ミュイの葡萄酒を、上述の求めに応じて提供した。そして、彼の後同修

道院の院長であった他の者たちも同様に実行し、そしてその荘園内におけるこの…、賦課租と義務としての貢租の形で国王の役人たちによって保持されたとと思われる（後略）」のようにになっている。同じく、ルイ（敬虔王）はミトリの荘園をサン・ドゥニ修道院に寄進している。本書で公刊された命令文書には、「慈悲深いキリストの年の1月14日、いと敬虔な尊厳者ルイ陛下の帝位の19年、インディクティオの11年、ヴェルヌイユの宮殿にて行われた。神の名において、幸あれ」とある。最後に、838年「シャルル（後の禿頭王）はコンピエーニュに向かい、自身はヴェルヌイユで宿泊した」とある。間もなくして、父（ルイ敬虔王）の死によって、尊厳者ロテールはドンゼール修道院長イルディジスに「ヴェルヌイユの王宮にて」不輸入の特権を付与する<sup>3)</sup>。この他は割愛する。

フェリエール修道院長ルーがアंकマールに宛てた書簡42は、特に有名である。ヴェルヌイユの公会議決議には、「ポワティエ司教エプロワン」が他の司教たちと「主宰した、皇帝ルイの息子にして我々の主人であるシャルル（禿頭王）の王位の5年、12月、インディクティオの7年」とある。一般的には845年となっているが、その前年に戻されるべきと、そこに記されたインディクティオが教えてくれている。これらの規約に関しては、856年にボヌイユに参集した諸教父が論じていると思われる。同所では栄光に満ちた王シャルル（禿頭王）の統治の7年、8月7日、インディクティオの9年、司教エルボワンが動くことで、シャルルは我々のサン・ジェルマン・デ・プレ修道院の、「セヌ川または同川に合流するその他の河川、つまりマルヌ川、ヨンス川、オワーズ川、アンヌ川を航行する船舶に通過税を免れた自由航行権」を付与した。同行為は「ヴェルヌイユの宮殿にて行われた（後略）」とある。このように、ラブが書き損じなしとは言い難いが、公刊しているシャルル（禿頭王）自身の原本には、以上のようにある<sup>4)</sup>。ヘメラエウスはサン・カンタンで、王シャルル（禿頭王）の別の文書を、彼の王位の13年に作成している。そこには「ヴェルヌイユの宮殿にて行われた」とある。加えて「インディクティオの9年、王位の21年」に下付された自身の命令文書から判断して、同シャルル（禿頭王）は861年にここに戻ってきている。本書で刊行されているものに従えば、「855年、王位の15年、インディクティオの3年」とあり、王妃イルマントルードとサン・モール・デ・フォセ修道院長エナールとの間で行われた所領交換から、それより前に行われたと言われている。加えて、865年「ヴェルヌイユ荘にやって来て、司教たちとアキテーヌのその他の有力者たちを同地で迎えたが、彼らの多くの嘆願により、彼の息子シャルル（866年没）がまだ回復していないことから、アキテーヌに戻ることを許可した」とある。最後に、867年の勅令の中で息子ルイ（2世、吃音王）に、「ヴェルヌイユで、言われた数の豚を受け取る」よう命じている<sup>5)</sup>。ルイは同年キエルジーとコンピエーニュを経由してヴェルヌイユまで旅しているが、それは「サン・ドゥニ修道院にある彼（シャルル禿頭王）の父の墓所に参拝するため」と、『サン・ベルタン修道院編年史』は伝えている。ルイ（吃音王）の息子、カルロマンは「主の化肉の884年、王位

の5年、インディクティオの2年3月忠臣たちと共にヴェルヌイユに集まった」とのことである。そして、そこで14条の勅令が作成されている。そして、王位の6年、ボワティエにあるサント・クロワ修道院の院長アダルガルドに諸権利と不輸不入権からなる庇護を約束している。今日では、Vernum 乃至 Vernoliumと表記されるヴェルヌイユはブルボン家のいと清澄なアンリに帰属している。私たちにとって特別な恩人であるこの君侯を神が無病息災にお守りくださるよう。

註

- 1) Verneuil-en-Halatte (Oise, ar. Senlis, c. Pont-Saint-Maxence).
- 2) Lagny-le-Sec (Oise, ar. Senlis, c. Nanteuil-le-Haudouin).
- 3) 『トゥールニュ史』, 264頁参照。
- 4) 『雑録』, 462頁参照。
- 5) 『勅令集』, 2巻, 1404欄参照。

CLIII. ヴェルナント<sup>1)</sup>

もしVernimptaと表記されるヴェルナントへの言及を含んだシャルル禿頭王(843-877年)の大切な文書が手元になかったならば、この場所は架空の荘園の名前だと筆者は信じたであろう。従って、そこには次のようにある。ヴェクサン郡内にあるコルメイユ・アン・パリシの王領地—後にサン・ドゥニ修道院所有の荘園の中に加えられる—は、以前は伯レジノーによって保持されていたが、ベネフィス資格としてゲイリヌスまたはガイリヌス某の所有に移る。この出来事は、「いと栄光に満ちた王シャルルの治世の3年—西暦842年に一致する—、インディクティオの5年、2月18日、ヴェルナントの荘園で行われた(後略)」となっている。ヴェルナントの立地は筆者には分からない。しかし、同荘園はパリ小郡から遠く隔たつてはいなかったと考えたい。

註

- 1) Vernantes (Maine-et-Loire, ar. Saumur, c. Longué) Giry, A. et als, *Recueil des actes de Charles II le Chauve*, 3 vol., Paris, 1943-1955, 3, p.415では、この説が採られている。

CLIV. ヴェルサイユ<sup>1)</sup>

パリ小郡のヴォークレソンから遠くない所に位置するVersaliaと表記されるヴェルサイユの荘園は筆者が生きている時代(17世紀)まで、土地台帳やパリ司教座教会の古い文書を除けば、殆ど誰にも知られていなかった。フランス王ルイ13世(1610-1643年)は夏季の国王狩猟地として用意していて、そこ

には豪華な館だけが建てられていたに過ぎなかった。他方、名実ともに偉大であったルイ大王（14世）は父祖の館をこの上なく豪華に造り変え、広い庭園を付けたし、その地の自然条件を越えて、考えられないような費用と労働によって流れを変えて水を引き込んだ。そしてこれらを王宮として最高に卓越した技巧で装飾し、1日も休まず完成させた。パリ司教管区内の修道院・分院総覧はヴェルサイユ分院をマシー主任司教区内に立地させている。今日、この地はシャトーフォル主任司教区に登録されている。

註

1) Versailles (Yvelines, ch.-l. dép.).

CLV. ヴァンセンヌ<sup>1)</sup>

アドリアン・ヴァロワは、VicenaまたはVicennaeと表記される周知のヴァンセンヌについて、次のように述べている。首都パリの近くで、20スタディウム、つまり2,500フィート（4キロ弱）も離れていない。リゴールの書において、「1183年、フィリップ尊厳王は彼の前王たちの時代を通じて隔離されていたヴァンセンヌの森を、誰もが入って通過できないように、最高の壁で取り囲んだ」。そして、ギヨーム・ル・ブルトンは証言しているが、「彼はそこに考えられない程の山羊、小鹿、大鹿を閉じ込めた」。「フィリップ及び前任者たちの時代を通じて自由に通過することができていた」とあることから、読者諸賢はずっと以前からこの王領地にこの森が付帯されていたと推論するであろう。フィリップ（尊厳王）はグランモン修道会の修道士のために、修道院を建立していた。その後、アンリ3世はこの地をパウラのフランシスコが創設したミニモ鉢修道会に引き渡し、グランモン修道会にはパリの都にある学校—ここでは、今日でも彼らは勉学に専念している—を付与した。伝えられている所によると、ヴァンセンヌの森の中の国王安在所は同上フィリップ（尊厳王）によって建設され始め、そこでは1250年、フィリップの孫、聖ルイ王が、ピエール・ドゥ・カズヌーヴによって報告されている格調高い命令文書を発給している。それによって、同王は「カルカソンヌ、ボーケール、トゥールーズ、カオール、ルエルグのセネシャルの報酬と職務」についての規則を定めている。また、同王は1269年、彼の息子フィリップ豪胆王は1277年と1279年、ドゥブレによって語られているサン・ドゥニ修道院のための諸文書をヴァンセンヌで作成している。彼らに倣って、シャルル美麗王は1324年、そしてフィリップ・ヴァロワは1338年にそうしている。彼らはラーニュヴィルの領地に対して注意を怠らないことを望んでいた。ルイ10世は1316年同地で誕生し、同じく彼の弟、シャルル4世美麗王が1327年、そしてシャルル9世は1574年にそうであったことを歴史家たちは異口同音に伝えている。パリ司教エティエンヌは1270年の手紙の中で、ヴァンセンヌを「王

宮銅桶Manerium regale」と呼んでいる。この手紙の中で「ヌヴェール伯夫人ジョランドからモンジェの城と城管区に関して、そこで臣従礼を受け、金の指輪を介してそれらを彼女に授与した」と語られている。彼女の城は、今日見ることができる通りであるが、その最初の主要な建設者はフィリップ・ヴァロワであったと思われ、その礎石は1327年に敷かれ、父によって始められた工事をジャンが3階まで完成させた。そしてそれにシャルル5世が最上階を乗せた。更に、同王は1379年そこに参事会員の学校を設立した。しかし、それから長い時を経て、格段に偉大な王ルイ14世はヴァンセンヌ宮殿を東西両方向に2つの新しい建物で拡張した。1332年末、司教、修道院長、フランス聖界の有力者たちと王国の君侯たちからなる有名な宗教会議がヴァンセンヌの古い城で開かれている。そこで、肉体から離れた靈魂の状態に関する、長い間何回も議論された問題を、教皇ヨハネス22世の見解が公表されたのを機に、教会が議論している。そして、ついに、同じ年の主の生誕の第4日曜日に「靈魂は神の本質と父と子と聖靈のいと聖なる三位一体の明らかで至福を与える、直観的で、何にも覆われない外観を呈している」と決議されている。

註

- 1) Vincennes (Val-de-Marne, ar. Nogent-sur-Marne, ch.-l. c.).
- 2) Caseneuve, P.-d, *Instructions pour le franc-alleu de la province de Languedoc*, p. 291.
- 3) 『年代記』, 続編, 1333年の項参照。

CLVI. ヴィトリー<sup>1)</sup>

Victoriacumと表記されるエスコー河畔のヴィトリーはアラス郡の中で最も古い荘園で、ドゥエから2里(8キロ)離れたところにある。フォルテユナが証言する如く、クロテール1世(511-561年)が幼い娘、ラドゴンドをそこで婚姻の床に迎え入れようとしていた。(トゥール司教)グレゴワールの書では、1度ならず、この荘園が言及されているほか、聖コロンバンの伝記の中でジョナスが、そして彼に続いてアリユルフが「公営荘園」と呼んでいる。そこでシジュベール(1世, 535-575年)はヌストリーの人々によって国王に推戴され、そして間もなくしてフレデグンドの刺客たちによって刺殺される。更に、グレゴワールの言によると、王シルドベール(2世, 575-595年)は幼いクロテールを同地で育てよう命じているが、それは「公衆の前に現れた時、彼に不幸が起きないように、また彼が死なないように」とのことである。グレゴワールは書の第3巻で、ヴィトリーの城に言及しており、国王の親戚と名乗っていたマンドリクがそこに逃げ込んでいる。エモワンは書の2巻で、この地をオーヴェルニュに比定しているが、多分、ルイ敬虔王(814-840年)がブリウード修道院に下付した命令文書の中

で言及しているヴィクトリーと多分混同したのであろう<sup>2)</sup>。このことの証拠は、エモワンの書から来ている。ペルトワ郡とシャロン・シュル・マルヌ司教管区にVictoriacumまたはVicturiacumと表記される、2つのヴィクトリー、つまり「炎上したヴィクトリー」と「フランス人のヴィクトリー」が存在する。前者はソー河畔に位置し、ポンションの王領地に非常に近く、ロテールが王位の9年、インディクティオの6年、つまり963年ここを攻囲したと考えられる。そのことはJ. ベリーの書に掲載されている、ポワトゥー伯ギヨームに発給された同王の文書から明らかで<sup>3)</sup>、同文書は「ヴィクトリー城の傍で行われた」で終わっている。フロドアールの『年代記』から十分に理解される如く、ヴェルマンドワ伯エリベールはその時この土地を「ボゾンの城」と共に突破したのであろう。更に、「炎上したヴィクトリー」と呼ばれるのは、ルイ（7世、若王、1137-1180年）の軍隊によって焼き尽くされたからである。この地の教会には、嘗て「主キリストの」釘の1つが保管されていた。マルヌ川とソー川の合流点に位置する「フランス人のヴィクトリー」は最初にフランス人によって創設されたことから、「フランス人」の名称が付けられた。同名のその他の場所に関しては、喜んで割愛することにする。

註

1) Vitry-en-Artois (Pas-de-Calais, ar. Arras, ch.-l. c.).

2) 『勅令集』, 2巻, 1426欄参照。

3) 『ポワトゥー伯史』, 253, 259頁参照。

CLVII. ヴィクトリー<sup>1)</sup>

オルレアンの森の中にはVictriacum または Vitriacumと表記される、2つのヴィクトリーが立地する。1つはラガン河畔のそれで、他の1つには付属語はない。前者は後者に従属していたと考えられる。エルゴーによる王ロベール（2世、996-1031年）の伝記の中で、「ヴィクトリー城の中にサン・メダール修道院が彼によって建立された」とある。更に、同王はオルレアンを非常に気に入っていたことは明らかではあるが、ヴィクトリーの宮殿を建設したかは定かでない。フェリエール修道院長ルーに関するバリュエズの書の補遺に、オーヴェルニュのシェーズ・ディユ修道院のための、王アンリの命令文書がある。それは「ヴィクトリーの宮殿において公開で、9月、太陰月の11日、インディクティオの2年-5年と読むベレー、主の化肉の1052年、不敗のアンリ陛下の王位の21年」に下付されている。この命令文書を、フルーリの修道士トルタールは「ジスルベールがヴィクトリーを訪れた。この地は我々の時代-つまり11世紀-において宮殿の榮譽によって飾られていた」との言葉で援護している<sup>2)</sup>。ヴィクトリーはピティヴィエ副司教区内に位置し、分院とフルーリ修道院に従属するサン・メダール洗礼教会とを持っていた。

ビエールにあるヴィトリーの城<sup>3)</sup>に関しては、フォントヴローの所で述べたことを参照せよ。

註

- 1) Vitry-aux-Loges (Loiret, ar. Orléans, c. Châteauneuf-sur-Loire).
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 4 卷下, 409 頁参照。
- 3) Vitry-en-Bière (Seine-et-Marne, ar. Melun, c. Fontainebleau, c<sup>ne</sup> Bois-le-Roi).

### CLVIII. ヴィエンヌ<sup>1)</sup>

Viennenseと表記される司教座都市ヴィエンヌの古代の装飾を追い求めようとの気持ちは起こらない。ただ筆者は古代ローマ諸皇帝とフランク諸王がこの地に公営宮殿を他の建物と共に持っていたことに注意を向ける。この事実の信頼すべき証人はシュルピキウス・アレクサンデル（4世紀後半の歴史家）で、彼の『歴史』の中には「ヴィエンヌにおいて宮殿の建物によって取り囲まれた元首ヴァレンティニアヌス」について語られている。更に、トゥール司教グレゴワールは一度ならず何度もヴィエンヌの国王安在所に触れている。「囲壁内の国王宮殿が神の炎によって突如燃え上がった」と伝えている<sup>2)</sup>。もしそのものが囲壁外にあって、炎の犠牲にならなかったことを知っていたとすれば、この宮殿が囲壁内にあったと言っているのはどうしてだろうか。フランク族のブルグント諸王にとって、王国の主要な拠点の中に常にヴィエンヌがあり、彼らはそこに屢々滞在し、あちこちで公刊されている多くの文書もここで作成している。

註

- 1) Vienne (Isère, ch.-l. ar.).
- 2) 『歴史十卷』, 2 卷, 9 章参照。

### CLIX. ヴィレ・コトレ<sup>1)</sup>

ヴァロワ郡の非常に広大なレーの森は、フランス諸王の王宮荘園が含まれる森の中で最も狩猟に適している。そこでは、春季と秋季の狩猟に際しての苦勞が、時々ではあるが軽減されることもあった。このために、Villa Colli-Restiと表記されるヴィレ・コトレの荘園は開発され、その中には立派な城がヴァロワ公領の中心として聳え立ち、国王の唯一の兄弟、オルレアン公フィリップに格別愛された。この宮殿の創設者は多分ルイ頑固王（10世）で、彼の命令文書は彼が「1315年11月、ヴィレ・コトレ荘」に滞在していたことを証明している。この文書には、「サン・ジャン・ド・キューイズ修道院の既婚の修道女

たちに、余がコンピエーニュ、ヴェルブリー、ベティシー、ショワジー、ピエールフォンに滞在する時、余のパンと葡萄酒の十分の一税すべて（後略）」を譲渡したとある。

註

1) Villers-Cotterêts (Aisne, ar. Soissons, ch.-l. c.).

### CLX. ヴィルヌーヴ・ロ・ロワ

パリ小郡トリニエールまたはモンテリー主任司祭区内に、Villa-nova Regisまたは Villa Regisと表記されるヴィルヌーヴ・ロ・ロワの村vicusがある。この村はブートルーが貨幣学の書で、Novo-vicoと刻印された貨幣から言及していることから、Novum-vicumでないかと一部の人々は考えている。しかし、フォルテユナの『聖ジェルマン伝』の中で、「それ故、善良な牧者は信者の許を訪れるといういつもの配慮から、ノジャンの集落を出てVicus-novusに到着した時（後略）」のように報告されているVicus-novusの方が、それに当てはまるのではなかろうか。国王の新開地Villa-novaが王領地に帰属していたことは、名称自身が十分に示している。この名称から、本書においてもその場所を占めるに至っている。

ポン・シュル・ヨヌの近くに位置するヴィル・ロワ、モンテリー主任司祭区内に立地する別のヴィル・ロワに関しても、同様である。それらが王領地の一部であったことを認めない人は誰もいない。

註

1) Villeneuve-le-Roi (Val-de-Marne, ar. Créteil, ch.-l. c.).

### CLXI. ウォルムス<sup>1)</sup>

古い史料やローマ帝国の属州・官職の記録の中でWarmatiaまたはWormatiaと表現される、部族の拠点である、第1ゲルマニアの都市ウォルムスはよく知られている。フランク諸王は1000年以上も前から、公的な出来事でこの地を頻繁に飾り立てている。本書でそれらに触れることは有益であろう。ティエリー（2世、587-613年）が死去すると、王クロテール（2世、584-629年）はオストラジー王国を手に入れるべく急行した時、「ブリュニシルドはティエリー（2世）の子供たちとウォルムスにいた。そこから彼女はクロテール（2世）に使者を送った」と、フレデゲールとエモワンが証言している。この地で王ペパンは764年、ル・ティエ版『フランク王国編年記』と修道院長レジノンが回想している如く、「臣民の全体集会を開き」、そこでアキテーヌ戦役とバイエルン戦役の2つの戦役の準備をした。シャルルマー

ニュは公的な集會に適している同地を獲得すると、770年自身主宰の宗教會議をウォルムスで開催したと、ロオワゼル版『フランク王国編年記』と自身の2つの伝記で伝えられている。2年後、同王が別の宗教會議を開催したことを、「王シャルルは宗教會議をウォルムスで開き、そしてそこから最初にザクセンに侵攻した」として、『フルダ修道院編年記』は伝えている。同ザクセン人の裏切りは776年のウォルムスでの第3回公會議の口実を与え、シャルルマーニュの伝記は「ウォルムスで国王陛下シャルルがこれを耳にすると、同地で宗教會議と公的裁判集會を開き、公會議が終わると、神の御加護を得て、全速力でザクセンに進攻した」と伝えている。またシャルル（マーニュ）は781年ウォルムスで宗教會議を持ち、そこで「公タシロはウォルムスのいと敬虔な国王の前で誓いを更新し、選ばれた12名の人質を差し出した」と、まずシャルルマーニュの伝記の匿名の作者が教えてくれている一方、シャルル（マーニュ）は2年後、「ウォルムスに到着すると、王妃ファストラダと結婚して一緒になった。787年再びウォルムスの彼女の許にやって来て、そこで互いに喜びい神の慈悲を褒め称えた。次に、同都市で宗教會議を開き、タシロの策略が責められ、忠誠を維持するための使者が彼の許に派遣されることが決議された」と、アングレームの修道士がこのことに触れている。しかし、タシロがその強情さの中で決意を強くしていたが、翌年ウォルムスにおいて彼は仲間たちと一緒に元の状態に戻された。これら2つの裁判集會に先立って1つの宗教會議が786年に開かれ、そこでシャルル（マーニュ）はブルターニュの反抗する一部の伯たちと「オストラジーの一部の貴族に対して自分の許に来よう命じた。次に、8月ウォルムスで司教たちの宗教會議と大集會を開かせ」、そこで被告たちに判決が下され、悪意のなかった者たちは「慈悲をもって赦免された」。このように、レギノと共に、何度も引用されている『フランク王国編年記』が伝えている。上記の集會でシャルル（マーニュ）はマロール・シュル・セヌの莊園を我がサン・ジェルマン・デ・プレ修道院に文書を発給して付与しているが、その文書原本は「11月5日、余の王位の19年と13年、ウォルムスの宮殿で行われた。神の名において、幸あれ」との文章で終わっている。『メス編年記』が790年に置いているウォルムスで開かれた別の裁判集會で、シャルル（マーニュ）が「有益と思われたことを自身の王国内に実行させた」とある。その時、翌年と同様、ウォルムスでクリスマスと四旬節を祝ったと、ル・ティエ版『フランク王国編年記』が記している。加えて、同皇帝の最も新しい勅令が述べていることであるが、803年頃、臣民の全体集會において諸司教と聖職者たちは膝をついて、皇帝シャルル（マーニュ）に遠征や戦争に参加することがないように、彼らすべてに如何なる危険も及ばせないようにと嘆願したとのことである。

821年、テガンの言に耳を傾けると、ロテール（1世、840-855年）が妻エルマンガルドを伴ってウォルムスにやって来た。5年後、同じルイ（1世、敬虔）帝はウォルムスを訪れ、そこで息子シャルル（2世、禿頭王）にアラマニア、レティア、ブルゴーニュの一部を彼の息子たち、ロテール（1世）と彼の

同名のルイ（ルードヴィヒ、ドイツ王）を前にして委ねた。このため、ルイ（1世）はアーヘンを離れ、829年臣民の全体集会を開催すべくウォルムスに向かうことを決めた。そこで、審議されるべきことに関して熱心に議論した。そこで勅令が公布されたが、アंकマールはロテールとテルベルガの離婚に関する小論の中でその一部を公表している。最後に、帝妃ジュディトの勧めで、838年同ルイ（敬虔王）はウォルムスでの裁判集会に同意しているが、この集会には四旬節の後ではあるがロテールもやって来ている。ロテール（1世）自身は、死去した父の後、少しウォルムスで活動していたが、「エボは自身が托身していた修道院長ボソンを伴って彼の許を訪れた」と、866年に開かれたトロワ公会議の議事録が語っている。ルイ（敬虔）王の心からの改悛は称賛に値する。それによって同王は犯した罪の赦しを6月4日ウォルムスにおいて、教会財産を奪取される被害を負わせていたランス司教アंकマールに求めたいたのである。ピトゥー版『フランク王国編年記』はこの出来事を859年に早めていて、そこでは「ルイ（敬虔）王は春の季節が始まるや、ガリアから戻りウォルムスにやって来た」となっている。これらすべての情報から、読者諸賢は791年ウォルムスの宮殿が火災で焼き尽くされたと嘘をついている、広く読まれている一部の編年記にどのような信が置かれるかと考えるであろう。以上が、ウォルムスで起きた諸王の出来事である。

註

1) Worms (ドイツ, l. Rheinland-Pfalz).

CLXII. ヴェーゼル<sup>1)</sup>

ライン河畔にはWasali またはWasalicumと表記される2つのヴェーゼル、つまり上ヴェーゼルと下ヴェーゼルとがある。下ヴェーゼルは同川のドイツ領側の岸沿いにあり、今日パッサウの統治下に置かれている。上ヴェーゼルは時々ドイツ人がオーバーヴェーゼル、つまり上ヴェーゼル、しかしより頻繁には何も付けずにヴェーゼルと呼んでいる。テオドシアヌスの地図でボパールトとビンゲンの間に位置するヴォサヴィアは、この地を指している。この地の位置をラバヌスは『殉教者名簿』の中で、「7月4日、司祭にして証聖者、聖ゴアールの埋葬の日。彼はガリアの辺境に位置し、ライン川に沿った、フリゴリアと呼ばれる地域にあって、トリリア司教管区に帰属したヴェーゼル郡にやって来た」と記している。従って、フリゴリウス郡はライン川に沿っていて、ヴェーゼルと近くのザンクト・ゴヴァーと呼ばれている聖ゴアールの修道院を内包していた。プリュムの主任司祭ワンデルベルトが『聖ゴアール奇跡譚』の中で、これについて詳しく記している。この作者からヴェーゼルがトリリア司教管区内の王宮荘園に

算入されていたことを、筆者は知った。こうして、「同アスエルスープリウム修道院の初代院長—の時代、ヴェーゼルーサン・ゴアール修道院から遠くない—と言われる王営荘園のある荘官」。それに続いて「同じ頃、ライン川の水が厳寒によって凍ることが起きた（中略）。他方、上ヴェーゼルと呼ばれると我々が言った王営荘園にあるコロヌスがいた。彼のブドウ畑は修道院から離れておらず、聖ゴアールのブドウ畑と接していた」とある。この王営荘園でフランク諸王が何をしていたかについては、全く不明であると認めざるを得ない。

註

- 1) Wesel (ドイツ, 1. Nordrhein-Westfalen, r. Düsseldorf).
- 2) 『聖者記録集 (ベ)』, 2巻, 290, 292頁参照。

### CLXIII. ウエイモドス<sup>1)</sup> とその他

筆者がこの王営荘園の存在を知ったのは、ル・ミルの書に収められたロディングスとその妻ベレナの文書からである。その中で彼らはアンヴェール司教ウィルプロールに教会と通過税の3分の1を譲渡しているが、そこには「ここ、ウエイモドスWeimodusの王営荘園にて公開で行われた<sup>2)</sup>。10月20日、王ティエリーの統治の6年」とある。このティエリーはティエリー（4世）・ドゥ・シエルのことで、彼の統治の6年は西暦725年、または翌年の初めに一致する。

以上すべての宮殿に、オルレアン<sup>3)</sup>の森から遠くない、ガティーヌ郡に位置するロリーの宮殿が加えられるべきであろう。実際、初版のページ数が乱されないために、補遺で取り上げるのが適していると思われる。本書の補遺において、筆者は別の幾つかの宮殿、即ちガルディナ、テュイノ、そしてルアン小郡のヴィユ・マノワール—その立地と状況について、土地の人たちから学ぶことができなかった—について論じている<sup>3)</sup>。間違いなく、これらの他に我々の諸王の非常に多くの宮殿があったであろうが、明確なものだけについて述べたことで満足している。

註

- 1) Weimodus (不詳). Pardessus, J.-M., *Diplomta chartae, epistolae, leges*, 2, Paris, 1849, p. 348でも、未確定のままである。
- 2) 『寄進文書集成』, 27頁参照。
- 3) 第2版, 「新しい追加」, VI: ロリーと同地の宮殿に関して。